

第Ⅱ部

被災地方言の記録に向けて

—三陸地方南部の方言調査報告—

研究の概要

小 林 隆

1 調査の目的

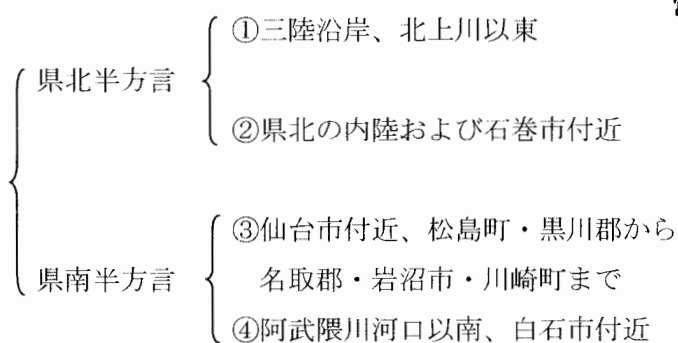
本書は、東北大学国語学研究室が 2005 年度から 2007 年度にかけて、宮城県北部の沿岸地域に位置する気仙沼市と、宮城・岩手両県にまたがる三陸地方南部地域で行った方言調査の報告である。

東北大学国語学研究室では、これまで東北地方各地の方言調査を続けてきた。特に 1995 年度以降は宮城県内にフィールドを定め、調査を進めてきた（末尾の「文献」にその報告書を載せた）。このうち、小林隆編（2003）で取り上げた宮城県石巻市の北方に位置する地域として、気仙沼市を選んだ。また、その気仙沼市を中心に対象地域を南北に拡大し、宮城・岩手にまたがる三陸地方南部地域についても調査を行った。

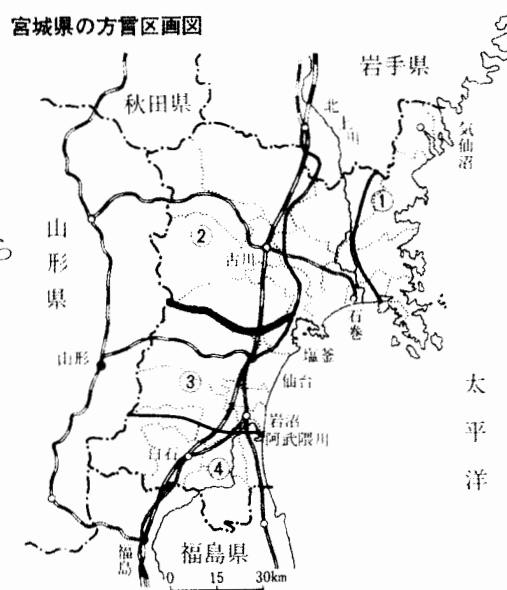
本調査の目的は、大きく次の 3 点である。

- (1) 気仙沼市方言における伝統方言の記述を行う。
- (2) 気仙沼市方言における方言の動態を明らかにする。
- (3) 宮城・岩手にまたがる三陸地方南部地域の方言の分布と動態を把握する。

(1) は気仙沼市における伝統的な方言を、記述方言学的方法により解明しようとするものである。気仙沼市の方言は、下に示す加藤正信（1992）の分類では、県北半方言の①に分類される。この地域は、比較的均質的と言われる宮城県方言の中で、岩手県沿岸部の方言とも通じるやや独特な位置を占めており、どのような方言が話されているのか、調査によって明らかにしたいと考えた。共通語化による伝統方言の崩壊が著しい今日、気仙沼市方言を正確に記録しておくことは緊急の課題で



あるとも考えた。また、(2) は同じく気仙沼市方言を対象とし、その世代別変化を追おうとするものである。この調査により、伝統的方言の維持と衰退、新しい方言の出現の様子などが明らかになると予想した。そして、(3) は



三陸地方南部地域の方言について知るとともに、その中での気仙沼市方言の位置を把握しようと意図したものである。

なお、今回の調査地域は、佐藤喜代治・加藤正信（1972）で対象とした範囲と多く重なる部分があり、加藤正信ほか（1982）の報告と接する地域でもある。それらの過去の調査との比較も興味深いと考えた。

2 調査の方法

調査は3年間にわたって行った。小林が担当する授業「方言調査法」の中で準備を進め、夏休みを利用して調査を実施した。そのねらいと方法は次のとおりである。

【2005年度】 2005年7月30日～8月1日

1年目にあたる2005年度は、気仙沼市方言の記述調査を行った。主として高年層を対象に方言のしくみについて詳しく調べると同時に、年齢差や使用状況についても大まかな傾向を把握し、次年度の多人数調査の準備とした。話者は気仙沼市出身で、調査当時同市在住の話者45名。世代別の内訳は以下の通りである。

高年層（60歳以上） 30名

中年層（40・50歳代） 5名

若年層（20・30歳代） 10名

調査項目は、音韻、アクセント、語彙、文法、言語行動などさまざまな分野に及び、企画担当者が設定したテーマごとに比較的詳細な調査票を用意した。調査は現地に赴き話者から聞き取りを行う臨地面接調査法を採用した。

【2006年度】 2006年7月30日～8月1日

2年目にあたる2006年度は、前年度の結果をもとに、気仙沼市方言の世代別多人数調査を行った。話者は気仙沼市出身で、調査当時同市在住の話者74名。世代別の内訳は以下の通りである。

高年層（60歳以上） 22名

中年層（40・50歳代） 17名

若年層（20・30歳代） 15名

少年層（高校生） 20名

調査項目は、前年度同様に多岐にわたるが、本年度は1テーマ2ページ程度の割り当てにより、統一調査票を作成した。ただし、調査方法は面接調査とアンケート調査の両方を用いたので、使用した調査票は2種類となる（それらの調査票は、この報告書末尾に付録として収めた）。

【2007年度】 2007年8月1日～8月3日

3年目にあたる2007年度は、前年度までの気仙沼市の南北に調査地域を拡大し、宮城・岩手両県にまたがる南三陸地方の方言の分布状況を明らかにすることをねらいとした。具体的な調査地点は図の26地点である。

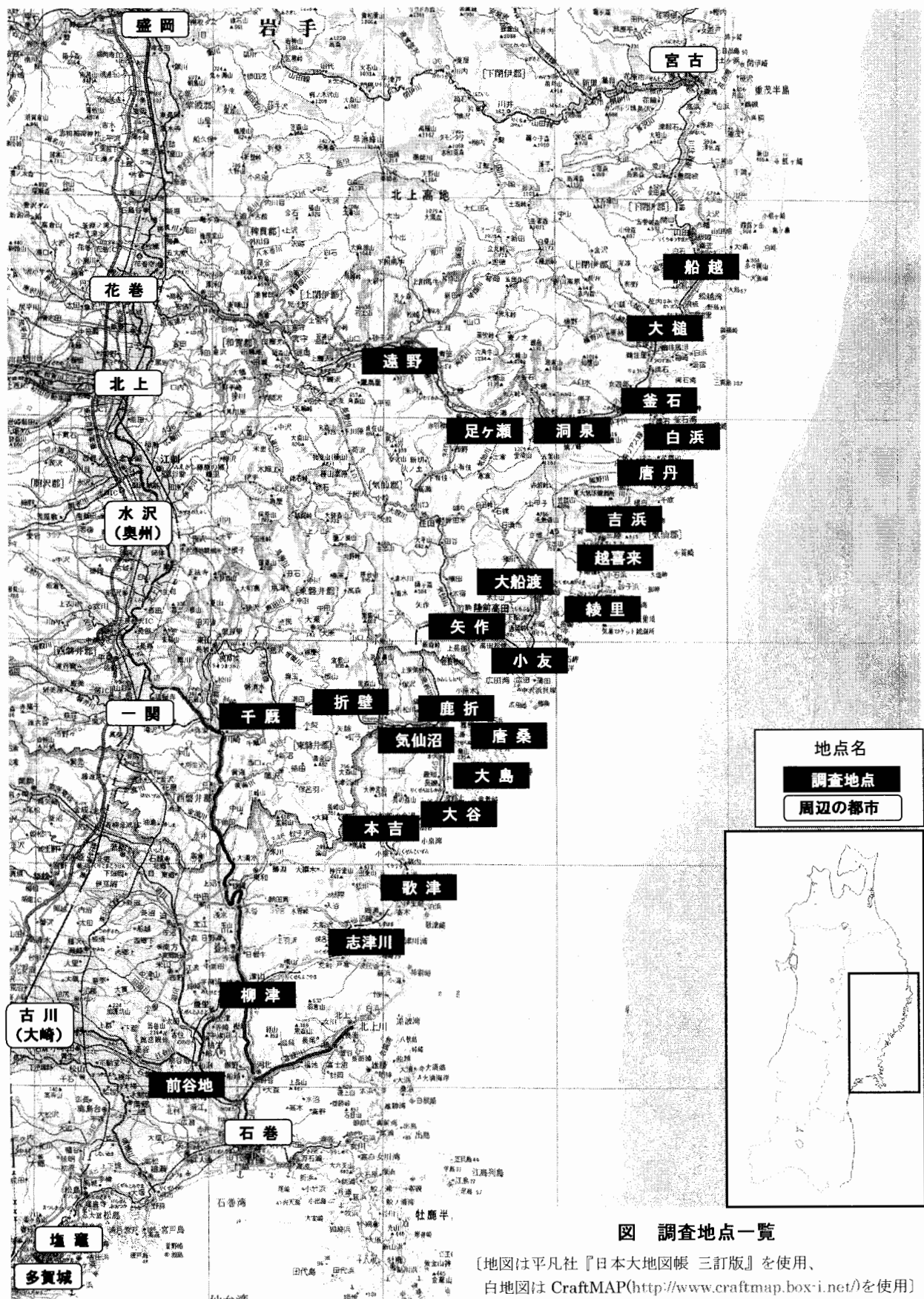


図 調査地点一覧

〔地図は平凡社『日本大地図帳 三訂版』を使用、
 白地図は CraftMAP(<http://www.craftmap.box-i.net/>)を使用〕

岩手県 下閉伊郡山田町船越
上閉伊郡大槌町大槌
釜石市釜石
釜石市白浜（平田）
釜石市唐丹
釜石市洞泉
遠野市足ヶ瀬
遠野市遠野
大船渡市吉浜
大船渡市越喜来
大船渡市綾里
○大船渡市大船渡
○陸前高田市小友
○陸前高田市矢作
○一関市折壁
○一関市千厩

宮城県 ○気仙沼市唐桑
○気仙沼市鹿折
○気仙沼市気仙沼
気仙沼市大島
○本吉郡本吉町大谷
○本吉郡本吉町本吉
○本吉郡南三陸町歌津
○本吉郡南三陸町志津川
○登米市柳津
石巻市前谷地

話者はすべての地点で高年層（60・70 歳代）を対象としたが、上記の一覧で○印を付けた地点については若年層（20・30 歳代）も調査し、世代的な変化をも把握しようと考えた。

調査内容はさまざまな分野にわたるが、調査票は各テーマ 2 ページという割り当てのもとで統一調査票を作成した（本報告書の末尾に付録として掲げる）。調査は現地面接法によって行った。

3 協力機関

調査の実施にあたっては、話者の推薦から調査会場の準備に至るまで、次の機関から多大な協力を得た。

【2005 年度】

気仙沼市教育委員会生涯学習課、気仙沼市松岩公民館

【2006 年度】

気仙沼市教育委員会生涯学習課、気仙沼市松岩公民館、気仙沼高等学校

【2007 年度】

山田町教育委員会社会教育チーム、大槌町教育委員会社会教育課、釜石市教育委員会生涯学習スポーツ課、遠野市立博物館、大船渡市立博物館、陸前高田市教育委員会生涯学習課、一関市教育委員会室根支所教育文化課、気仙沼市教育委員会生涯学習課、本吉町教育委員会生涯学習班、南三陸町教育委員会生涯学習課、登米市教育委員会生涯学習課、石巻市教育委員会生涯学習課

4 調査組織

調査は東北大学国語学研究室で方言学を専攻する大学院生たちが中心になって企画・運営した。特に幹事・副幹事が全体を統括し、調査を導いた。また、この調査は授業の実習指導も兼ねているため、学部生や研究生・聴講生たちも準備から実施に至るまで作業を行った。さらに、企画段階から外部の研究者にも参加してもらい、共同研究として計画を進めた。3年間の調査の参加者を以下に掲げる(教員等の肩書は最初の参加年度に示し、次年度以降は変更のあった場合のみ記す。また、*は調査の幹事を、**は副幹事を示す)。

【2005年度】

教員等：小林隆（東北大学教授）、佐藤亮一（東京女子大学教授）、齋藤孝滋（フェリス女学院大学教授）、竹田晃子（盛岡大学非常勤講師）、櫻井真美（山形大学非常勤講師）

大学院学生：玉懸元（研究助手）、作田将三郎、王秀芳、**椎名渉子、*田附敏尚、梁敏鎬、川越めぐみ、中西太郎、アクセノフ・ユージン、大久保拓磨、佐藤志帆子、刀禰累佳、三浦佑子

学部学生：小寺紘子、堀岡大介、相川美保、小田成紘、木村雄人、島谷夏美、鈴木彩子、須田小百合、須藤淳美、橘しおり、野末奈緒美、若見直樹、脇田夏実

【2006年度】

教員等：小林隆、佐藤亮一、齋藤孝滋、武田拓（仙台電波工業高等専門学校助教授）、半沢康（福島大学助教授）、大橋純一（いわき明星大学助教授）、竹田晃子（奥羽大学非常勤講師）、櫻井真美

大学院生：玉懸元、作田将三郎、王秀芳、*椎名渉子、田附敏尚、梁敏鎬、川越めぐみ、**中西太郎、吉田雅昭、内間早俊、澤村美幸、安本真弓、王其莉、加藤典子、小松さと子、楊雅銀

学部学生他：井口泰志、今仲鹿島、関根あゆみ、中島大、半田由仁葉、朴黄珍、山口香苗、岡貴和子、古川夕紀、魏ふく子（東京女子大学）（以上、学部学生）、金賢貞（特別聴講生）

【2007年度】

教員等：小林隆、田中宣廣（岩手県立大学宮古短期大学部准教授）、大橋純一、竹田晃子、櫻井真美

大学院生：櫛引祐希子、椎名渉子、田附敏尚、梁敏鎬、**川越めぐみ、*中西太郎、内間早俊、澤村美幸（日本学術振興会特別研究員）、小松さと子、吉田智子、魏ふく子、久田悠子、プラカーイキエート・ヤオワパー、韓燕傑、鄭嘉玫、ジスク・マシュー、チラクルウィワット・ピヤナット

学部学生他：李青（派遣研究員）、黄孝善、加藤綾子、金崎えり、菅美里、小林翔、佐藤奈緒、須藤京子、木暮恵、瀧澤佳子、田中千景、徳宿道子、溝口真、森山望、吉川芳（以上、学部学生）、レムケ・サビネ（特別聴講生）

5 報告書の作成

この報告書は、各企画者が自ら担当したテーマについて執筆を行ったものである。ただし、調査内容のすべてを報告できたわけではない。テーマ自体が取り上げられなかった場合もあるし、執筆

者によって、南三陸地方全体を視野に入れたものもあれば、気仙沼市に焦点を当てたものもある。未報告の内容については、今後、個別の論文等のかたちで公表していきたい。

なお、報告書の編集にあたっては、以上の調査の幹事であった田附敏尚、椎名渉子、中西太郎、および、2011年度の調査幹事である津田智史の協力を得た。

文 献

加藤正信（1992）「各地方言の解説－宮城県方言」平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』1、明治書院

加藤正信・遠藤仁編（1998）『宮城県中新田町方言の研究』科学研究費成果報告書

加藤正信・小林隆・大橋純一・竹田晃子（1997）「宮城県中新田町方言の記述的調査報告」『東北文化研究室紀要』38

佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『東北文化研究室紀要』12・13（井上史雄他編 1994『日本列島方言叢書 3 東北方言考 2』ゆまに書房に再録）

加藤正信・佐藤和之・小林隆（1982）「宮城県北地方の方言調査報告」『東北文化研究室紀要』23（井上史雄他編 1994『日本列島方言叢書 3 東北方言考 2』ゆまに書房に再録）

小林隆編（2000）『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

小林隆編（2003）『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

小林隆編（2011）『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

小林隆・李範錫・竹田晃子・瀧川美穂（1999）「宮城県仙台市方言の記述的調査報告」『東北文化研究室紀要』40

小林隆・竹田晃子・玉懸元・佐藤祐希子（2002）「宮城県石巻市方言の記述的調査報告」『東北文化研究室紀要』43

【謝辞】

末尾になりましたが、調査に当たりお世話になりました話者のみなさま、および、協力機関の方々に、心よりお礼申し上げます。個人情報保護の観点からお名前を挙げることは控えますが、みなさまのご協力なくしては、この調査は実現しませんでした。ここにあらためてお礼を申し上げ、感謝の意を表します。

音 韻

大橋 純一

1 はじめに

ここでは2006年に行った気仙沼市方言調査のうち、筆者が担当した音韻調査項目の結果について報告する。対象とするのは、

- 1) /i/ /e/の実相 (「息」/iki/・「駅」/eki/)
- 2) /si/ /su/の実相 (「梨」/nasi/・「茄子」/nasu/)
- 3) /-ai/ /-oi/連母音の実相 (「高い」/takai/・「細い」/hosoi/)
- 4) 語中/k-/ /g-/の実相 (「開ける」/akeru/・「挙げる」/ageru/)
- 5) 語中/t-/ /d-/の実相 (「旗」/hata/・「肌」/hada/)

の5項目である。いずれも実相上の混同や融合、弁別の有無などを見るための基礎的なものであるが、当該方言の音韻特徴を捉える上では、またその特徴を東北諸方言のそれと対比的に見る上では、欠くことができない項目でもある。以下には、これらの世代的な実態を音響分析結果を踏まえながら明らかにする。なおそれに際しては、隣接地域を対象に行ってきた既調査（東北大学国語学研究室調査）などの実態も適宜参照し、当該方言の現状がそれらとの対照の中でどのような位置を占めるかについても言及していく。

2 調査・分析法

調査対象者は高年層 22 (男性 12・女性 10)、中年層 16 (男性 9・女性 7)、若年層 14 (男性 6・女性 8)、少年層 20 (男性 10・女性 10) の計 72 名。^{注1} 調査は“くつろいだ場での発音”であることを条件に、上記の1)～5)に掲げる調査語を謎々形式で尋ね、注目する音節箇所を発音を抽出する形をとった。いずれも1語につき2回以上の発音を求めているが、3)～5)に関しては各音の融合や弁別の有無などを確認することを必須とし、当初の発音と異なる内省が得られた場合には再度それによっても2回以上の発音を求めている。また1)と2)についても当人の回答状況に応じて音の印象などを聞き、異なる内省が得られた場合には同様の対処をとることとした。

以上により、本調査では1人1語につき複数の音声採取されたことになるが、上記のような事情からも、その各々は必ずしも対等に扱えるものとは見なされない。各語2回以上の発音を求めているのも基本的には録音の不備を補うためのものであって、各発音の差や平均値を求めることを積極的に意図しているわけではない。よって本報告では、上記の1)～5)の実態を抽出された実相をもとに論じていくが、その際に取り上げるのは最終的に得られた発音（その中でも特に録音状態のよいもの）のそれである。

得られた発音は主として筆者の聴覚判断に基づいて分類していく。ただし実相の判断が難しいも

の、あるいは各実相の特徴を代表的に表していると思われるものについては「音声録聞見 for Windows」(DATEL)を用いて音響分析を施す。具体的には母音の調音点と子音の調音法を特定するために、前者ではフォルマント値を、後者ではスペクトログラムを抽出するものである。なお、フォルマント分析では該当する母音区間の2か所以上を計測し、それぞれの数値の平均をもって当該音のフォルマント値と定めることにした。

3 調査結果

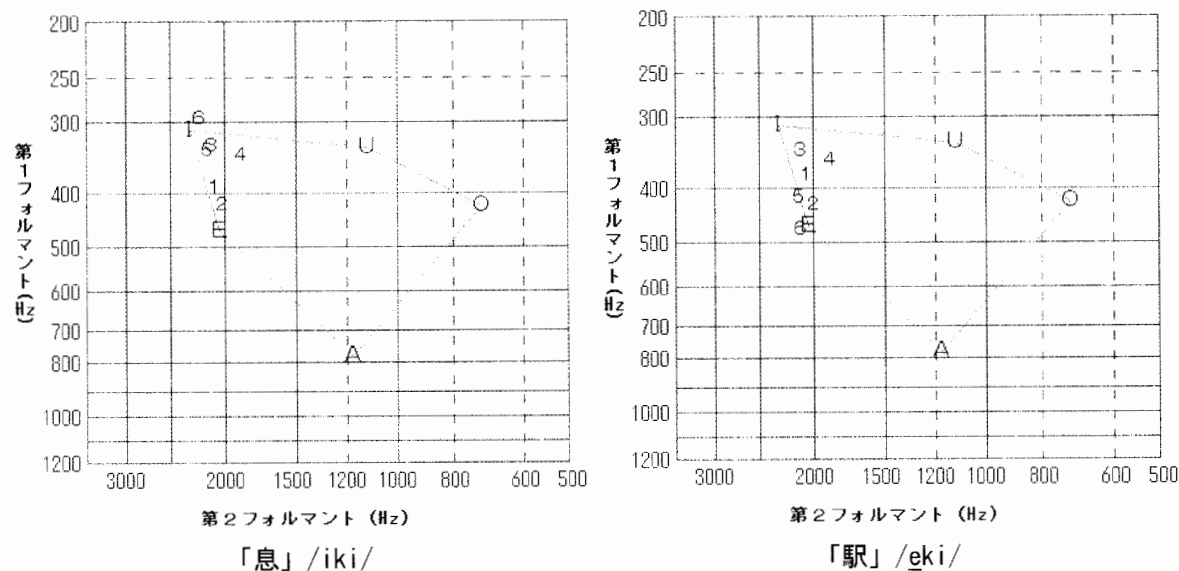
3.1 /i/ /e/

/i/と/e/が混同・合一化する事態は、東北方言が全域的にそうであるように、当該方言においてもきわめて顕著である。特に高年層では両音に区別が存しないか、さもなければ相当に近似した相に現れることが一般的である。ただし、合一化の方向や近似する度合いは同じ高年層においても多様であり、その特徴を一律に単純化して捉えることは難しい。図1は、そうした多様性について、各パターンを象徴する高年層男性6話者の実態を例に、F1-F2図上で視覚的に見比べたものである。

図1 高年層6話者「息」/iki/・「駅」/eki/の実相

F1-F2図 凡例

- ・ I E A O U : NHK男性アナウンサー10名の5母音フォルマント各平均値
- ・ 1~6 : 高年層6話者各個人の「息」/iki/・「駅」/eki/フォルマント値



図は縦軸に第1フォルマント、横軸に第2フォルマントの値をとり、その交点から各母音の調音位置が求められるように作られている。また、各交点を結んでできた五角形はおおむね人の口腔内を左側面から捉えた断面図に相当しており、これによって舌の高低(縦軸)や前後(横軸)の様相

が視覚的に把握できる仕組みになっている。図は、凡例にあるとおり、NHK男性アナウンサー10名の母音平均値（I～U）^{注2} に対し、高年層6話者の「息」/iki/・「駅」/eki/（各1～6）がそれぞれどのような位置を占めるかを見たものである。

それによれば、高年層の/i/と/e/には次のような実相パターンが併存することがわかる。

a. /i/と/e/の区別なし

a-1. /i/と/e/の中間相で区別なし（図上の1）

a-2. /e/寄りの相で区別なし（同2）

a-3. /i/寄りの相で区別なし（同3）

a-4. /u/寄りの相で区別なし（同4）

b. /i/と/e/の区別あり

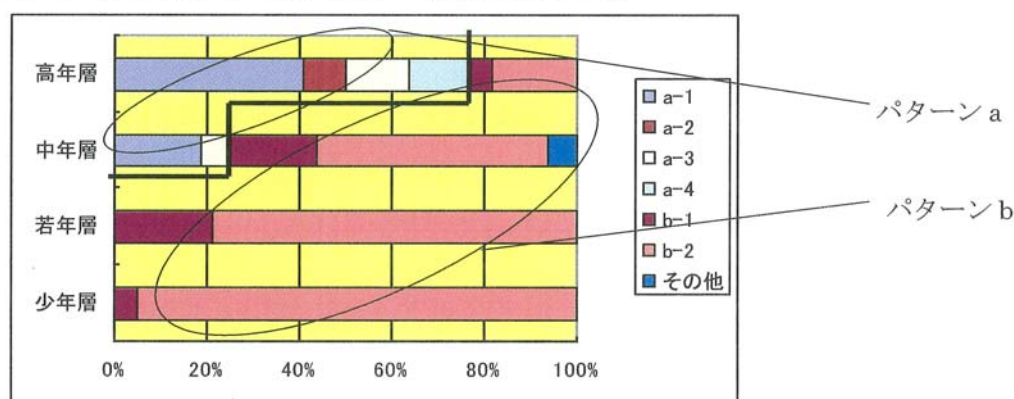
b-1. /i/と/e/が相互に寄り合った相で区別あり（同5）

b-2. /i/と/e/がともにアナウンサー平均値にほぼ重なる相で区別あり（同6）

すなわち高年層においては、/i/と/e/を区別しないaの状況を主体としながらも、実際には/i/と/e/との間（a-1～a-3）と/u/との間（a-4）とを縦横自在に行き交いつつ、多様なバリエーションが許容される中で、各個人が思い思いに合一化の様相を呈していることがうかがえる。^{注3} bの状況も含めたその複雑な様相は、たとえば近隣の石巻市方言（大橋純・2003）などと比較してもかなり特徴的であるといえる。ただし、実相パターンがこのような多岐にわたるにも関わらず、それらに対する当人たちの音意識はむしろ稀薄であり、「区別がない」、「ほとんど同じ発音になる」といった内省が得られる他は、その実際音が「エに近い」のか「イに近いのか」といった点でのこだわりはほとんど示さない。その意味では、高年層の場合、近接する母音どうしが広狭・前後の関係で混同をきたし、自身の合一化音さえ特定しがたいほどに区別が曖昧化している現状こそを重視すべきもののようと思われる。

しかし一方、上記の状況を世代を降って順に見てみると、高年層で主体であったaの状況が中年層の過渡的状況を経て、bへと一変していく様が明瞭である（参照、図2）。^{注4}

図2 各世代における「息」/iki/・「駅」/eki/の実相



これによれば、高年層段階で許容された多様な合一化の在り方が、次段階の中年層で早くもa-

1 か a-3 かに集約されるに至り、全体的な割合の面のみならず、そのバリエーションにおいても急速に高年層的な特徴を落としつつあることをうかがわせる。ただし、中年層にはその高年層でさえバリエーションのない「その他」(/i/が/u/寄り、/e/がアナウンサー平均値にほぼ重なる相で区別あり)の状況を示すものがある。おそらくは a-4 ~ b-1・2 にかけての過渡的な様相を示すものと思われる。また、当年層の話者からは「自分は紛れない(区別する)と思う」としながらも、「そのような(紛れた)発音は同年配でもよく聞く」といった内省が得られる場合が多く、その点においても過渡的であるといえる。他方、若・少年層では/i/と/e/の発音が自方言で特徴的である(混同ないしは区別されない傾向がある)ことについての自覚は示しながらも、当人たちの発音にそれらの要素を感じさせるものはほとんどない。おおよそこの世代が当該方言の音韻特徴を二分する境目といえそうである。

このようであり、/i/と/e/の混同・合一化に関しては、当該方言の場合、高年層においてこそ複雑・多様な現状にありながらも、実質的には図2における左上部の小域にその痕跡を確認できる程度に過ぎない。見方を変えるならば、図上のbの領域が高~中年層にかけてaの領域を急速に浸食しつつあり、それらが若年層以降においてbへと一変していく姿と受け止めることができる。今後、図上のaの領域は、さらに左上部へと押しやられていくことが必至である。

3.2 /si/ /su/

/si/と/su/の区別が曖昧となり、双方いずれかの音節に合一化する事態は、先の/i/と/e/の場合と同様、東北方言を象徴する音韻現象のひとつとされてきた。当方言が「ズーズー弁」と代称されるのも、直接的にはこの現象によっている。しかし近年、その実相が同一地域であっても/si/(/su/)に合一化するもの、その中間相で合一化するものなど、複雑な様相を呈することに加え、両音を中舌音として、さらには共通語音としても区別するものが見られつつあることが報告されている(大橋純一 2000a・2007b ほか)。図3は、そうした東北方言の全体的な動きの中で、当該方言がどのような現状にあるかを、パターンとして分別できる高年層男性6話者の実態を例に、F1-F2図上で視覚的に見たものである。図は、既見の図1と同様、NHK男性アナウンサー10名の母音平均値(I~U)を基準に、高年層6話者の「梨」/nasi/・「茄子」/nasu/ (各1~6)のフォルマント値をプロットして見比べている。

それによれば、高年層の/si/と/su/には次のような実相パターンが併存することがわかる。

a. /si/と/su/の区別なし

a-1. /su/寄りの相で区別なし(図上の1・2)

b. /si/と/su/の区別あり

b-1. /si/と/su/が相互に寄り合った相で区別あり(同3・4)

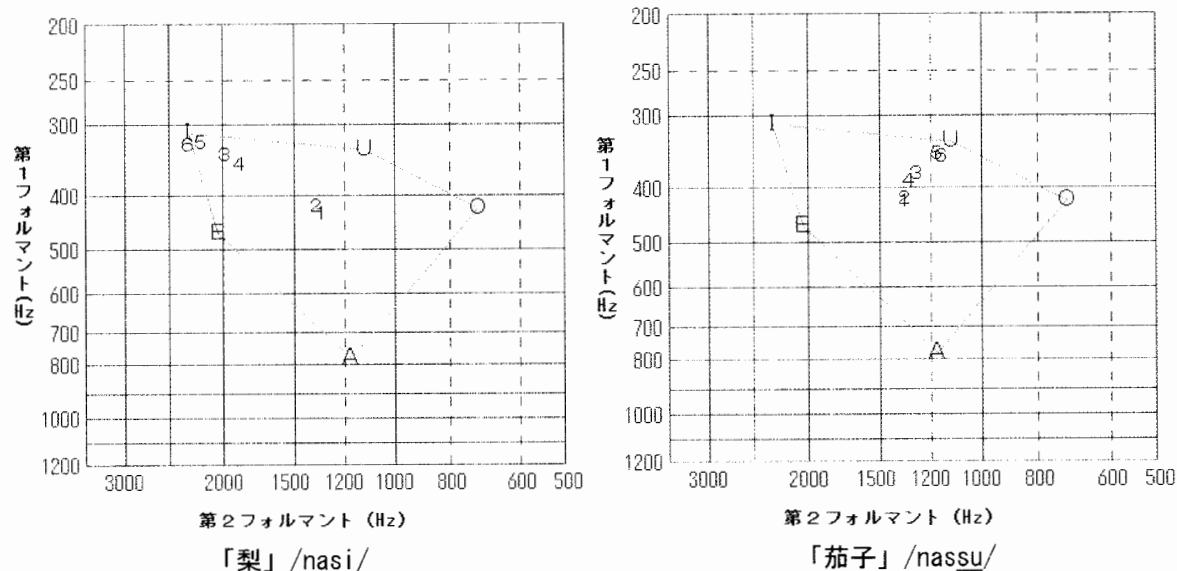
b-2. /si/と/su/がともにアナウンサー平均値にほぼ重なる相で区別あり(同5・6)

つまり当年層の場合、/si/と/su/を区別しないaの状況は結論的にはa-1(/su/寄りで一致)のみであり、たとえば大橋純一(2000a)(2007b)の岩手県中北部、新潟県北部などに多見されたような

図3 高年層6話者「梨」/nasi/・「茄子」/nassu/の実相

F1-F2図 凡例

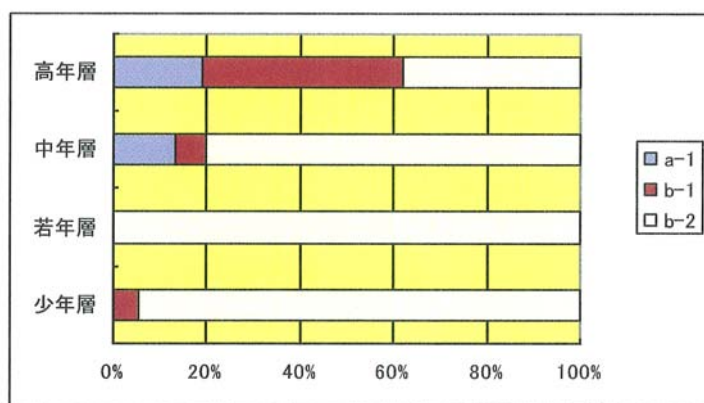
- ・ I E A O U : NHK男性アナウンサー10名の5母音フォルマント各平均値
- ・ 1～6 : 高年層6話者各個人の「梨」/nasi/・「茄子」/nassu/フォルマント値



複雑な合一化の様相はみとめられない。^{注5} そればかりか、両音に紛れのないb-1に加え、^{注6} アナウンサー平均値にほぼ重なるb-2をも同程度に同居させているという状況である。

また一方、以上を世代を降って順に見ると、^{注7} 高年層段階で狭まりつつあったa-1（およびb-1）の割合は中年層段階でいよいよ限定的となり、若・少年層にかけてはさらにb-1～b-2への流れが急速である（参照、図4）。

図4 各世代における「梨」/nasi/・「茄子」/nassu/の実相



これらの世代的な動きとも関わることであるが、当該方言では、/si/と/su/の混同に関するこの手の問いに対しては一貫して否定的な立場がとられることが多く、まずその点において既見の/i/と/e/の場合とは大きく傾向を異にしている。話者によっては「そこまで自分は訛っていない」、「そ

れは大昔の話」といった反論が思いがけずに強い口調で聞かれることもあり、/si/と/su/の混同という事態が、当該方言話者にとってはいかにも方言的な訛りを意識させる要素のひとつとなっている(したがって自身の発音として安易にはみとめたくない対象となっている)ことをうかがわせる。また、最終的に a-1 を回答する話者の中にも b-1 や b-2 との使い分けの段階を示すものがあり、その点においても/i/と/e/の場合のようないわゆる生理的現象としての混同の事態とは性格が異なるということがいえる。

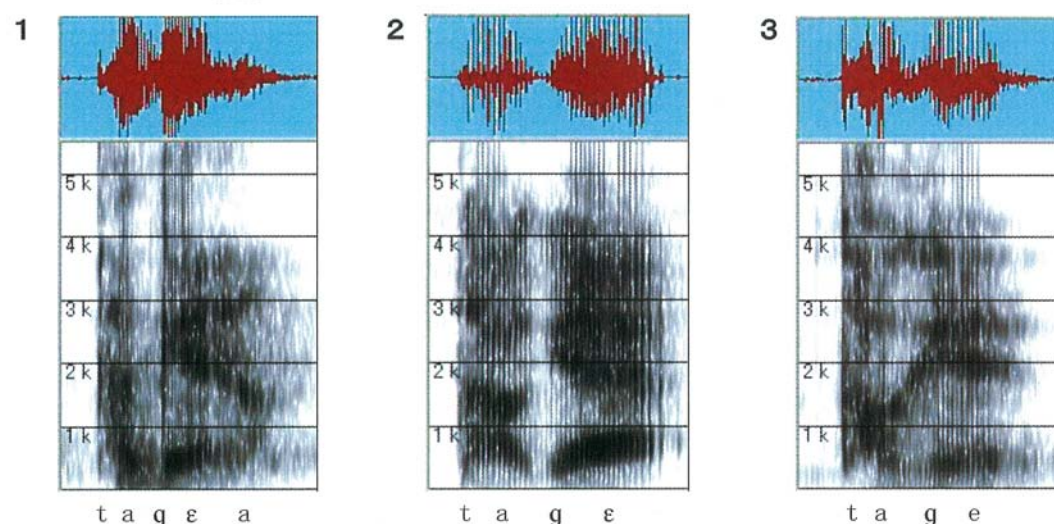
もともとこれらの事態は、近隣の石巻市方言や鳴子町方言(大橋純一 2003、同 2011) など、これまで南奥方言的なズーズー弁を呈してきた地域に共通してみとめられる傾向でもあり、気仙沼市方言の上記のような実態をもってその傾向はなお一層明確化したともいえる。北奥方言と南奥方言とが接する境界地域(岩手県中北部、新潟県北部)での複雑な様相を尻目に、当該方言をはじめとする南奥方言域では、今後、b-1 や b-2 といったいわゆる非ズーズー弁化の動きをさらに加速させていくことが予測される。

3.3 /-ai/ /-oi/連母音

3.3.1 /-ai/

まず結論的なこととして、当該方言では世代を問わず、「高い」/takai/の連母音部はほぼ例外なく融合化する。しかしここでそれ以上に特筆されるのが、各融合結果音に世代・個人による大きな差が存することである。図5は、それらの差を象徴的に表していると思われるスペクトログラムに基づき、それぞれの音響的な特徴を見比べたものである(1・2:高年層男性、3:若年層男性)。

図5 「高い」/takai/のスペクトログラム



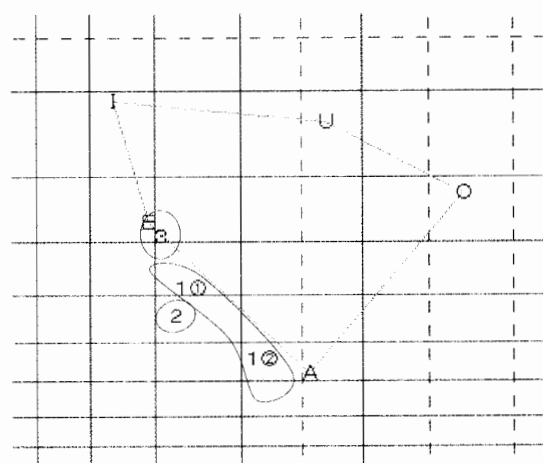
これらによれば、まず1において連母音内部でのフォルマント変動が著しい。⁷¹⁸つまり発音の経過に伴い第1フォルマントと第2フォルマントとが横V字型に接近していく様子がうかがえ、当該の発音が少なからず二重母音的な性質のものであることがわかる。また2と3では、フォルマント

自体は安定的であるが、その分布幅が大きく相違し、当二者間においても決して小さくはない実相差の存することがわかる。図6は、以上のスペクトログラムをもとにF1値とF2値とを抽出し、1～3それぞれの調音位置をF1-F2図上に拡大して捉え直したものである。

図6 「高い」/takai/の実相

F1-F2図 凡例

- ・ I E A O U : NHK男性アナウンサー10名の5母音フォルマント各平均値
- ・ 1①・②、2、3 : 高年層・若年層3話者各個人の「高い」/takai/フォルマント値



注) 1①と1②はそれぞれ1における発音初動部と終結部

これによれば、1の発音がその初動部から終結部にかけておよそエ〜アへの調音移動を呈していること、2がエとアの中間相を呈していること、3がほぼアナウンサー平均値に重なるエを呈していることがうかがえる。つまり等しく融合音を志向しながらも、これらの三様のものが世代・個人により複雑に錯綜しているのが気仙沼市方言の現状なのである。さらに非融合音のものも含めてその全体像を捉えれば、当該方言の/-ai/連母音には、大きくは次のような実相パターンが併存していることがわかる。

a. 融合音

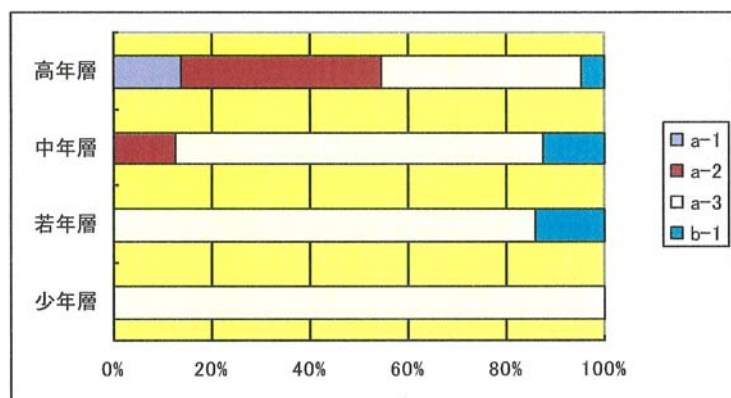
- a-1. 二重母音的な[-ea]
- a-2. アナウンサー平均値より広口の[-e:]
- a-3. アナウンサー平均値にほぼ重なる[-e:]

b. 非融合音

- b-1. アナウンサー平均値にほぼ重なる[-ai]〜それよりもやや広口の[-ae:]

さて、これらのうち、特にaにおける実相差を融合原理の面から見てみると、a-1とa-2が元来の[ai]に由来してその中間相を呈していると考えられるのにひきかえ、a-3ではそのような連母音の名残はなく、[ai]が単純に独立した別音の[e:]にとって代わられていることを思わせる。前2者がまさに融合音と呼ぶにふさわしいならば、後者はむしろ代替音とでもいうべきか。なおこのことは、実相の世代別状況を見た以下の図7によって、さらにその意味が明確化する(参照、図7)。

図7 各世代における「高い」/takai/の実相

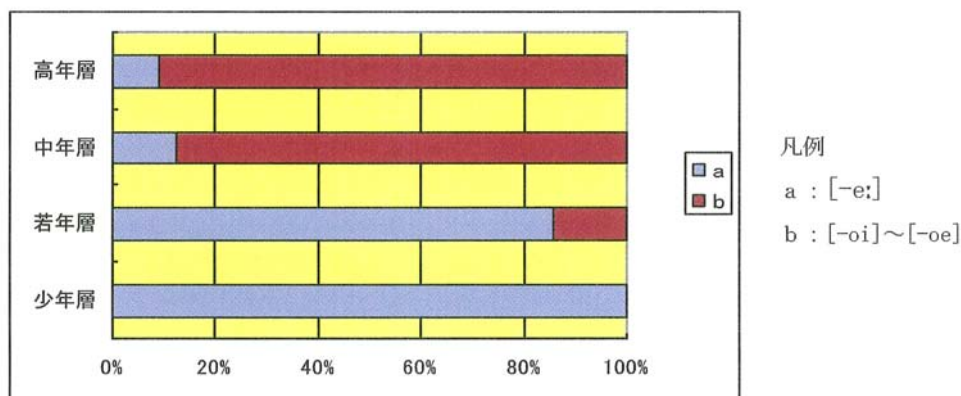


つまり、「高い」/takai/の連母音部は各世代ほぼ例外なく融合化するが、こと実相面に関していえば、a-1やa-2を主体とする高年層に対し、その痕跡をわずかにとどめる中年層を介しつつ、若～少年層へと一律にa-3へと刷新していく動きと読みとれる。これは、既調査の石巻市方言その他でもそうであったように、発音の上では等しく融合形をとりながらも、大きくは中・若年層を境に実相の対立が生じつつあること、具体的には大橋純一(2003)でいうところの「高年層の母音干渉（前後のaとiが相互に干渉し合った結果としての[-e:]）に対する下位年層の一律[-e:]化（連母音部にもともと本人が体系として有している[e]をあてただけの[-e:]）の差異」（11頁）を示唆していると考えられる。なお以上のことは、次の/-oi/連母音に見られる世代差の実態がさらに大きな傍証となる。

3.3.2 /-oi/

先の「高い」/takai/が多様な実相差こそ示しながらも融合の有無の点では世代差がなかった（ほぼ全世代が融合音を呈する実態にあった）のに対し、以下の「細い」/hosoi/においては一転、融合音には実相差が存しない一方、むしろ融合の有無の点で上位年層と下位年層とによる明確な対立がある（参照、図8）。^{注9}

図8 各世代における「細い」/hosoi/の実相

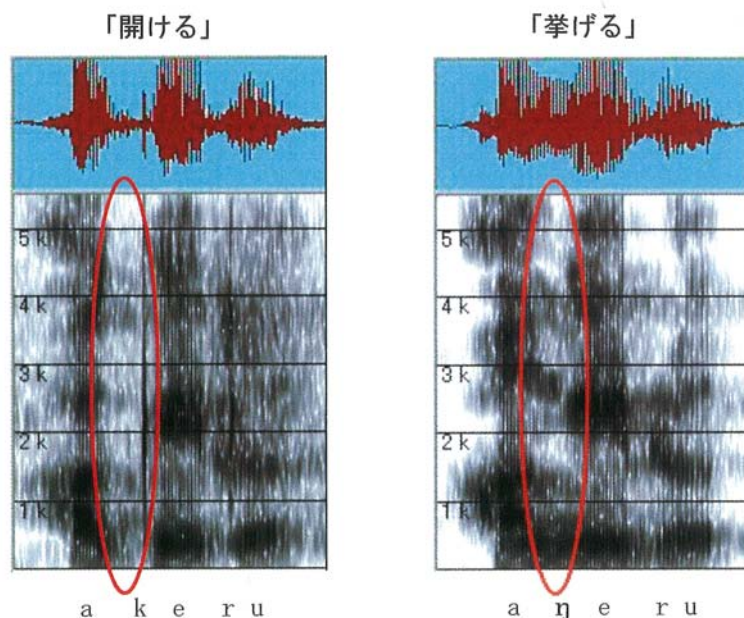


つまりは、“高・中年層：b（非融合音）” 対 “若・少年層：a（融合音）” の対立が単純・明白なわけであるが、ここで注目されることは、方言的な a（融合音）の出現がむしろ下位年層の側に特立すること、しかもその実相が同年層の /-ai/ 連母音にみとめられたのと同様、共通語音相当の [-e:] であるという点である。このことは、上位年層が元来の連母音構造に即して融合の可否を峻別し、融合音を結果させている（よって /-oi/ はその構造上、融合の必然性に欠けるために融合化しない）こと、対して下位年層は連母音構造の如何に関わらず、一律 [e] 化の原理に従って融合化している（よって /-oi/ にも /-ai/ 同様の [-e:] が現れる）ことを逆説的に物語っている。要するに当該方言の場合、連母音の融合化という事態は、その原理をより機械的に単純化しながら上位年層～下位年層へと展開し、またある意味では徹底さえしつつあることがうかがえるのである。

3.4 語中 /k-/ /g-/

ここでは語中の /k-/ /g-/ についてとりあげ、それらが当該方言でどのような弁別の実態にあるかを「開ける」/akeru/ と「挙げる」/ageru/ のミニマルペアに基づいて検討する。その際、特に大きな関心事となるのが近年全国的に衰退の傾向にあるといわれる /g-/ の鼻濁音化に関してであるが、以下のスペクトログラムによっても検証されるように、その存在は当該方言において确实かつ顕著である（参照、図9）。

図9 「開ける」/akeru/・「挙げる」/ageru/ のスペクトログラム

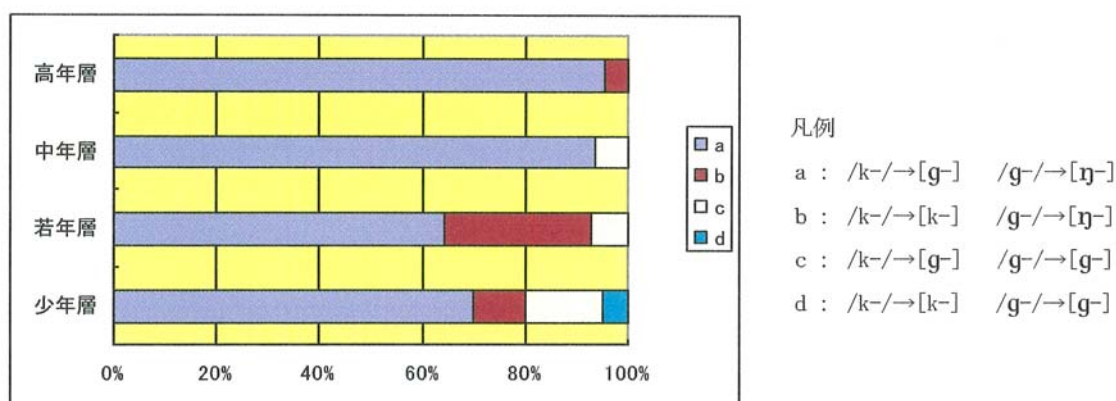


以上は、高年層男性1話者の「開ける」/akeru/ と「挙げる」/ageru/ のスペクトログラムを左右に対照して見たものである。これによれば、各囲い部分の対比からもわかるとおり、第一音節 (/a/) 直後に閉鎖を表す空白模様が見える「開ける」/akeru/ と、それが見えない「挙げる」/ageru/ との間に、まずは大きな実相差のあることが確認される。また同時に、「挙げる」/ageru/ には低帯域と

中帯域付近に周波数の黒いかたまりが色濃く見え、当該の箇所には鼻音要素が介在することが確認される。つまりこれらのことにより、左図「開ける」/akeru/が破裂音の[ageru]を、右図「挙げる」/ageru/が鼻濁音の[aneru]を実現させていること、よって両音に紛れはなく、[g-]と[ŋ-]とによる弁別の実態があることが客観的に見てとれるのである。

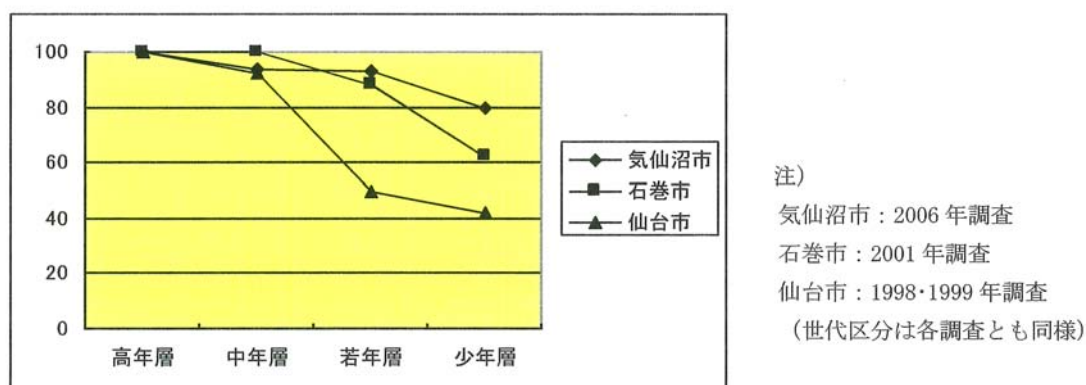
さて、以上のような弁別のものが当該方言でどの程度勢力を維持し、特に若い世代に向けてどう展開しつつあるかを見たものが以下の図 10 である。

図 10 各世代における「開ける」/akeru/・「挙げる」/ageru/の実相



これによれば、当該方言においては、語中の/k-/ /g-/が各々有声化・鼻音化して a に現れること、つまりは図 9 の各スペクトログラムのように明確な実相差を伴って現れることが、特に高・中年層の場合において圧倒的である。若～少年層にかけてはややその勢力に陰りが見える感もあるが、なお上位年層的な a は 60% 強を占め、それに準じる b や c も加味するならば、当該方言ではほぼ全世代・全話者において何らかの方言要素が内在していることになる。とりわけ語中の/g-/に着目すると、その[ŋ-]としての出現は、高年層：100%、中年層：94%、若年層：93%、少年層：80%（各 a・b の総計）といった内訳となっている。下図は、その世代的な実態をさらに近隣方言と対比させて見たものであるが、この比較からも、当該方言が近隣の 2 都市などよりもかなり高い割合で[ŋ-]を保持しつつあることがうかがえる（参照、図 11）。

図 11 宮城県諸方言におけるガ行鼻濁音の世代別実態

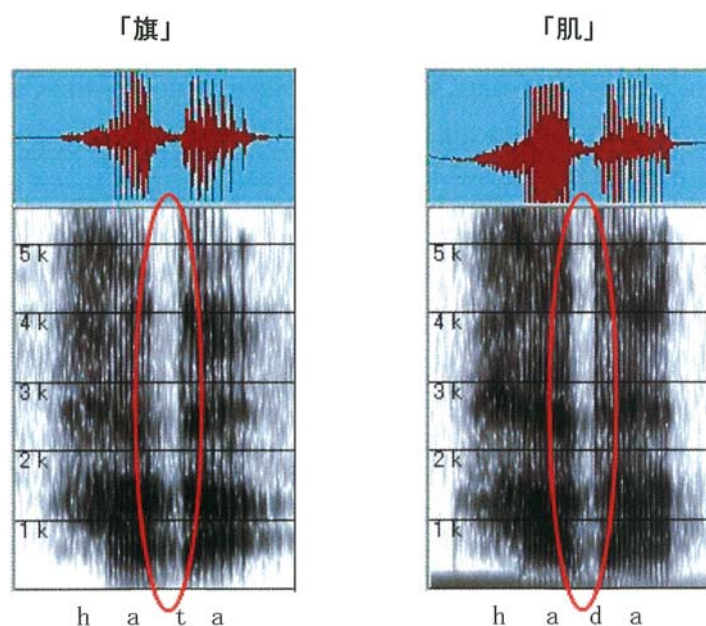


既述のとおり、鼻濁音の消失は全国的な趨勢としてもはや待ったなしの状況であることが指摘されて久しい（馬瀬良雄ほか 2004）。東北はそうした動向に超然として[ŋ-]を保持している唯一の方言であるが、その東北方言についても、大橋純一（2007a）では、図 11 における仙台市方言などの実態を根拠に、「一度その（筆者注：[g-]化の）兆しがみとめられるとなれば、それ以降の変遷もかなり迅速であることが予測される」（210 頁）とした。しかし、気仙沼市方言の上記のような実態に即するならば、当該方言は必ずしもそれに当たらず、今しばらくは[ŋ-]保持の状況が下位年層に向けて継続していくことが予測される。

3.5 語中/t-/ /d-/

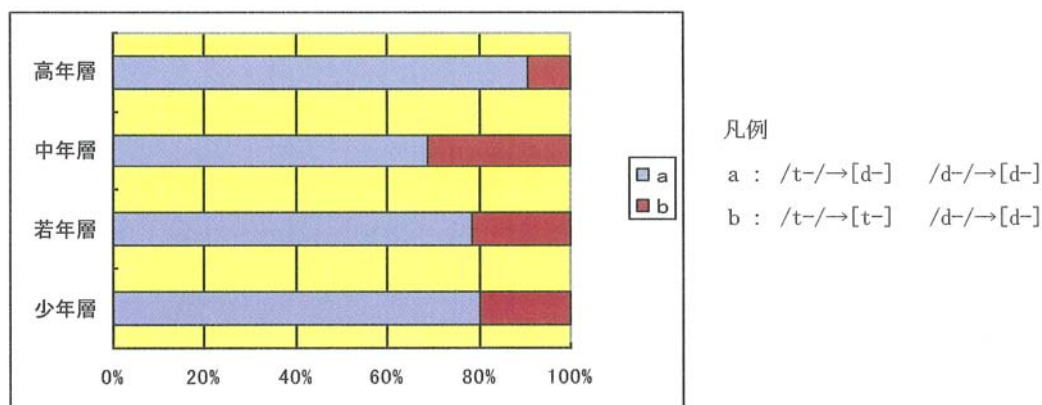
先の語中/k-/ /g-/が a（/k-/→[g-] /g-/→[ŋ-]）を中心に今なお方言要素を色濃く示す状況にあったのに対し、当ミニマルペアにおいては、特に/d-/の場合において方言要素の欠落が大きく、以下のスペクトログラムに見てとれるように、/t-/と/d-/とがほぼ同音に現れることが一般的である（参照、図 12）。

図 12 「旗」/hata/・「肌」/hada/のスペクトログラム



以上は、高年層男性 1 話者の「旗」/hata/と「肌」/hada/のスペクトログラムを左右に対照して見たものである。これによれば、発音過程の諸処において音響上の目立った相違はなく、とりわけ/t-/ /d-/の囲い部分は酷似していることがうかがえる。すなわち、図 9 の「開ける」/akeru/の場合と同様、第一音節（/ha/）直後に閉鎖を表す空白模様が介在しており、これによって両音が破裂音を呈していること、具体的には「旗」/hata/が有声化し、「肌」/hada/が非鼻音化して[hada]を実現させていることが客観的に見てとれるのである。なお、これらが世代を降ってどのような弁別の実態にあるかを見たものが以下の図 13 である。

図 13 各世代における「旗」/hata/・「肌」/hada/の実相



このようであり、当該方言では語中/d-/の鼻音化が全世代を通じて皆無であること、それにひきかえ、語中/t-/の有声化が世代を降ってもなお優勢であること、その結果、各世代が大差なく a の状況下にあることが明らかである。これらのことからすると、既見のガ行鼻濁音が近隣方言にも増して保持の傾向を鮮明にしていたのとは対照的に、語中/d-/の鼻音化は逆に近隣方言に先行していち早く衰微・消失したことをうかがわせる。^{71, 10} 当人たちの内省からも、/d-/が[^hd-]のように発音される（かつてされていた）ことの意識は上位年層においてさえ明確ではなく、むしろその[d-]としての一貫した応答ぶりは、当該方言がかつて鼻音化地域であったことさえ疑わせるほどである。また、逆に語中/t-/の有声化が上記のように保持される現状に鑑みるならば、当該方言の語中/t-/ /d-/の実相は、今しばらくは a の状況を主体として、/t-/と/d-/とが区別されない非弁別的な段階が継続していくことが予測される。

4 まとめ

以上の調査結果を踏まえ、気仙沼市方言の音韻特徴を改めて項目ごとに整理すれば、おおよそ次のようにまとめられる。

- 1) /i/と/e/が混同・合一化する事態は、特に高年層の場合において著しい。その実相も/i/と/e/との間と/u/との間とを縦横自在に行き交いつつ、同一世代にあっても多様なバリエーションを呈する状況下にある。しかし、そうした事態も中年層段階での落ち込みが著しく、さらに若・少年層にかけては共通語音への変化が著しい。
- 2) /si/と/su/が混同・合一化する事態は、1) の場合とは対照的に、現象の有無の面においても、実相上のバリエーションの面においても、方言的な要素をみとめしむるものがあまりない。特に中年層以降は中舌音～共通語音への推移が急速である。加えて話者の内省などからも、この合一化の事態を自方言の特徴として受け止める姿勢が積極的にはうかがえない。以上のことからすれば、当該方言における非ブーズー弁化の動きは、今後さらに加速・徹底していくこと

が予測される。

- 3) /-ai/連母音は全世代でほぼ例外なく融合化する。しかし[-ɛa]や[-ɛ:]を主体とする上位年層に対し、下位年層では一律的に[-e:]が現れ、融合結果音という点において明確な世代差が存する。一方、/-oi/連母音では融合化しない上位年層とほぼ例外なく融合化する（[-e:]に現れる）下位年層とに対立があり、むしろ融合の有無という点で明確な世代差が存する。これらは、上位年層の融合化と下位年層のそれとが各々別原理に基づいて生じていることを示唆するものと考えられる。
- 4) 語中の/k-/ /g-/は、/k-/が有声化して[g-]に、/g-/が鼻濁音化して[ŋ-]に現れることが一般的である。若～少年層にかけてはさすがにその勢力に陰りが見える感もあるが、それでも/g-/の鼻濁音化は近隣方言などと比べると割合も高く持続的である。これらの現状を踏まえるならば、語中/g-/については、当該方言において今しばらくは [ŋ-]保持の状況が継続していくことが予測される。
- 5) 語中の/t-/ /d-/は、/t-/が有声化して[d-]に、/d-/が鼻音化せずに[d-]に現れる（よって2音が同音となり区別されない）ことが一般的である。中でも、/d-/が[ʔd-]となることの意識は話者当人の内省などからしてもきわめて稀薄であり、/d-/の鼻音化は、当該方言では比較的早い段階で消失したことがうかがえる。

注

1. ここでの世代区分は以下のとおりとする。
高年層：60歳以上、中年層：40～50歳代、若年層：20～30歳代、少年層：高校生
2. 今石元久(1997)、今石元久ほか(1984)による。
3. ただし、同一個人内で複数の実相パターンが許容されることはなく、その点においては安定的である。
4. 各世代で話者数にばらつきがあるため、以下、実相パターンの割合を世代比で見える場合、いずれもパーセンテージに換算して表すことにする。
5. 岩手県中北部と新潟県北部は、いずれも北奥方言的なズーズー弁と南奥方言的なズーズー弁とが接する境界地域であるが、これらの地域では、/si/に合一化するものと/su/に合一化するものとが地点・個人により複雑に交錯するほか、北奥方言的とも南奥方言的ともしがたい曖昧な中間音が多見されている。
6. ただし、図3の右図からもうかがえるように、b-1の2話者の「茄子」/nasu/（図上の3・4）は全般に下方向への退縮が大きく、/su/の調音点が下がり気味であること、よって共通語音などよりは舌の緊張が伴いにくい発音状況であることが指摘される。
7. 「梨」/nasi/と「茄子」/nasu/に関しては、各世代で一部無声化して現れるものがある。図4ではそれが著しく、合一化音を特定できない2例（高年層1、若年層1）を除いてパーセンテージを出している。

8. スペクトログラムの横軸と並行して現れる帯状の縞模様のうち、下方から順に第1フォルマント、第2フォルマントと数える。
9. 話者によってはホセーやホソイ(エ)を回答した後に、別語形としてのホソコイ(エ)の存在を内省する場合があるが、ここではそれを取りあげず、融合の有無(つまりはホセーかホソイ(エ)か)のみを問題にする。
10. たとえば下記文献の大橋純一(1998)(2003)などでは、程度の差はあっても、少なからず/d-/が鼻音化して[~d-]となる現象は上位年層を中心に確実にみとめられた。

文 献

- 今石元久ほか(1984)『日本語方言音声のスペクトル分析資料』文部科学省研究費特定研究「言語の標準化」資料集
- 今石元久(1997)『日本語音声の実験的研究』和泉書院
- 大橋純一(1998)「子音の有声化と鼻音化」『文部省科学研究費補助金基盤研究(8) 宮城県中新田町方言の研究』宮城教育大学国語教育講座
- 大橋純一(2000a)「北奥方言・南奥方言接触地域における/si/ /su/・/ci/ /cu/・/zi/ /zu/」『国語学研究』第39集
- 大橋純一(2000b)「ガ行鼻音」『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 大橋純一(2001)「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文芸研究』第151集
- 大橋純一(2003)「音韻」『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 大橋純一(2004a)「福島県相馬市方言における語中ガ行入り渡り鼻音」『国語学研究』第43集
- 大橋純一(2004b)「新潟県阿賀北地域における語中・尾ガ行音」『社会言語科学』第7巻第1号
- 大橋純一(2007a)「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」『国語論究 第13集 昭和前期日本語の問題点』明治書院
- 大橋純一(2007b)「言語接触地域における/-i/ /-u/の実相と分布ー新潟県北部方言の場合ー」『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
- 大橋純一(2011)「音韻」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 金田一春彦(1954)「音韻」東條操編『日本方言学』吉川弘文館
- 柴田武(1962)「音韻」国語学会編『方言学概説』武蔵野書院
- 馬瀬良雄ほか(2004)「現代日本語におけるガ行鼻音の実態と共通語としての地位」『ことばと文化』第2号

アクセント ―気仙沼市―

佐藤 亮一

1. はじめに

1. 1 話者・調査項目

本稿では、2006 年に宮城県気仙沼市で実施した言語調査のうち、アクセント項目の調査結果を記す。

話者（調査対象者）は、高年層（60 歳以上）22 名、中年層（40 歳～ 59 歳）16 名、若年層（20 歳～ 39 歳）14 名、少年層（高校生）20 名、合計 72 名で、いずれも言語形成期（5 歳～ 15 歳）の大部分を気仙沼市で過ごした方々である。

調査項目は類別語彙（金田一 1974）中から次の単語（名詞）を選んだ。

1 拍名詞：血・戸＝第 1 類、木・手＝第 3 類

2 拍名詞：風・酒＝第 1 類、石・胸＝第 2 類、足・犬＝第 3 類、糸・稲・海・数・肩＝第 4 類、秋・汗・窓・猿＝第 5 類

3 拍名詞：桜・煙＝「形」類、頭・鏡・刀・仏・男・団扇・鋏＝「頭」類、朝日・胡瓜・心・姿・涙・枕・油・柱・紅葉＝「命」類、兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓＝「兎」類、苺・薬・鯨・便り・後ろ・卵＝「兜」類

1. 2 調査方法

調査は次の 2 種類の方法を用いた。

＜方法 1＞（本稿では「方言的発話」と呼ぶことにする）

調査員による以下の指示・説明のもとに、調査語を冒頭においた短文（助詞なし）を発音してもらう。

＜これから気仙沼のことばの調子についておたずねします。次のことばを気仙沼の発音で読んでください。たとえば、「肩 痛い」は「カダ イデ」のように。（「そのようには発音しない」と言われたら、「ふだん地元の友達と話すときの発音をお願いします」＞

例：「血 出た」「手 洗う」「風 吹く」「桜 咲いた」など。

＜方法 2＞（本稿では「共通語的発話」と呼ぶことにする）

調査員による＜次の文を自然な調子で読んでみてください＞という指示のもとに、調査語を冒頭においた短文（助詞つき）を読んでもらう。

例：「血が出た」「手を洗う」「風が吹く」「桜が咲いた」など。

東北地方の方言では格助詞の「が」や「を」は使用しない。そのため、「が」「を」をつけた短文を読んでもらうと、アクセントの使い分け能力がある世代（中年層以下に多い）では、ふだ

ん話している方言アクセントではなく、共通語アクセントが現れる傾向がある（佐藤 2005）。そこで、ふだん話している方言アクセントを得ると同時に、アクセントの使い分けの程度をも調査する目的で、この2種類の方法を用いた。

調査員は主として東北大学の大学院生および学部学生であるが、東北大学大学院を修了した研究者数名（筆者を含む）も調査員として調査に参加した。調査結果はすべて録音し、後日筆者が聴き取りを行った。

2. 調査結果

以下に高年層・中年層・若年層・少年層の年層別に、1拍名詞・2拍名詞・3拍名詞の調査結果を記す。

以下の表で、数字は発話総数に対する各型に発音した割合（％）であり、点線の左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」の結果である。なお、％は小数点以下を四捨五入したものであり、そのため、場合によっては合計が100％をわずかに（1％の範囲内で）増減する場合がある。

また、それぞれの語について、最も多く発音した型の％を太字で示した。

2. 1 高年層の調査結果

最初に高年層の調査結果を記す。表1は1拍名詞の結果である。

0型は、「方言的発話」では「チーデ^ーダ」（血 出た）、「トーシメ^ール」（戸 閉める）のように、また、「共通語的発話」では「チガデ^ータ」、「トーシメ^ール」のように、調査語を低い音調（○）で発音したものである。

1型は、「方言的発話」では「キー^ーキ^ール」（または「キー^ーキ^ール」）（木 切る）、「デー^ーアラウ」（または「デー^ーアラウ」）（手 洗う）のように、「共通語的発話」では「キオ^ーキ^ール」「デオ^ーアラウ」のように、調査語を高い音調（●）で発音したものである。

表1 高年層・1拍名詞

	0 型		1 型	
血	95	95	5	5
戸	95	90	5	10
木	9	0	91	100
手	9	5	91	95

「血」「戸」は大部分が0型であり、「木」「手」は大部分が1型である。「方言的発話」（点線の左側）と「共通語的発話」（点線の右側）の間に差はほとんど見られない。

この結果は、宮城県北西部（陸羽東線沿線）の調査結果（佐藤 2011）とやや異なる（宮城県北西部では0型と1型の対立が見られない話者が多数認められた）。

表2は2拍名詞の結果である。

0型は、「方言的発話」では「サゲノム」(酒 飲む)のように、「共通語的発話」では「サケオノム」のように、調査語を低い音調(〇〇)で発音したものである。

1型は、「方言的発話」「共通語的発話」とも調査語の第1拍目を[●〇]のように高い音調で発音したものである。

2型は、「方言的発話」では「イネミフル」(稲 実る)のように、調査語の第2拍目を[〇●]のように高い音調で発音し、共通語的発話では「イネガミフル」のように、調査語を含む文節を[〇●▽](低高低)と発音したものである。

表2 高年層・2拍名詞

	0型		1型		2型	
風	91	90	9	5	0	5
酒	86	90	14	5	0	5
石	86	86	14	5	0	10
胸	86	71	14	14	0	14
足	9	10	9	5	82	86
犬	9	0	9	0	82	100
糸	9	0	18	5	73	95
稲	5	0	14	0	82	100
海	5	0	14	0	82	100
数	5	10	14	0	82	90
肩	5	5	14	0	82	95
秋	5	0	14	10	82	90
汗	5	0	14	0	82	100
窓	5	5	14	0	82	95
猿	5	0	14	10	82	90

「風」「酒」(第1類)と「石」「胸」(第2類)は大部分が0型であり、「足」「犬」(第3類)、「糸」「稲」「海」「数」「肩」(第4類)、「秋」「汗」「窓」「猿」(第5類)は大部分が2型である。「方言的発話」と「共通語的発話」の間の差は小さいが、「石」「胸」「犬」「糸」「稲」「海」「数」「肩」「秋」「汗」「窓」「猿」については、「共通語的発話」で2型がやや多くなる。

第1類と第2類が統合している点は、東北地方北部の方言アクセントに共通に見られる現象である。一方、第4類・第5類の語が、第2拍の母音の広狭によって1型(第2拍目が狭母音の「海」「数」「秋」「猿」と2型(第2拍目が広母音の「糸」「稲」「肩」「汗」「窓」)に分かれていない点は、北奥式アクセントと異なる(北奥方言アクセントにも地域差があるが、本稿では、平山 1957 による新庄市のアクセントを「北奥式アクセント」と呼ぶことにする)。

以上の結果は、宮城県北西部(陸羽東線沿線)の調査結果(佐藤 2011)と類似している。

表3は3拍名詞の結果である。

0型は方言的発話では「サクラサイダ」のように、共通語的発話では「サクラガサイダ」のように、調査語を低い音調(〇〇〇)で発音したものである。2型は「方言的発話」「共通語的発話」とも、調査語を[〇●〇](低高低)と発音したものである。3型は、「方言的発話」では調査語を[〇〇●]、「共通語的発話」では調査語を含む文節を[〇〇●▽](稀に[〇●●▽])と発音したものである。1型は「方言的発話」「共通語的発話」とも調査語を[●〇〇]と発音したも

のである。

表 3 高年層・3拍名詞

	0 型		1 型		2 型		3 型	
桜	95	86	0	0	5	0	0	14
煙	95	90	0	0	0	5	5	5
頭	14	5	0	0	14	10	73	86
鏡	14	0	0	0	9	14	77	86
刀	9	0	0	0	14	14	77	86
仏	9	5	0	0	14	10	77	86
男	9	0	0	0	9	10	82	90
団扇	9	5	0	0	5	14	86	81
鋏	14	5	0	0	9	14	77	81
朝日	9	5	0	0	77	76	14	19
胡瓜	0	0	0	0	100	100	0	0
心	14	5	0	0	27	14	59	81
姿	14	5	0	0	9	33	77	62
涙	9	0	0	0	9	38	82	62
枕	23	10	0	0	9	14	68	76
油	18	5	0	0	9	14	73	81
柱	3	10	0	0	14	14	73	76
紅葉	5	0	0	0	95	100	0	0
兎	5	14	0	0	95	81	0	5
狐	5	10	0	5	91	71	5	14
雀	5	0	0	0	95	100	0	0
背中	14	0	0	0	86	100	0	0
鼠	5	0	0	0	95	100	0	0
蚯蚓	5	10	0	0	95	90	0	0
苺	9	0	0	0	91	100	0	0
薬	5	5	0	0	95	95	0	0
鯨	5	10	0	0	95	86	0	5
便り	24	14	0	0	76	82	0	5
後ろ	19	5	0	0	10	27	71	68
卵	0	5	0	0	100	95	0	0

「桜」「煙」は大部分が 0 型、「朝日」「胡瓜」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」

「蚯蚓」「苺」「薬」「鯨」「便り」「卵」は大部分が 2 型、「頭」「鏡」「刀」「仏」「男」「団扇」「鋏」「心」「姿」「涙」「枕」「油」「柱」「後ろ」は大部分が 3 型であり、1 型は皆無である。それぞれの語のアクセント型は、この地域における伝統的な方言アクセント型を示していると考えられる。

また、以上の結果は、宮城県北西部（陸羽東線沿線）の調査結果（佐藤 2011）と類似している。

「方言的発話」と「共通語的発話」の差は小さいが、「姿」と「涙」では「共通語的発話」で 3 型がやや減少し、2 型が増加している。また、「心」では「共通語的発話」で 3 型が増加し、0 型と 2 型が減少している。

なお、22 名の高年層話者のうち、かなり無型アクセント（無アクセント）的な話者が 3 名見られた。以下に、その内容を記す。

話者 A（1942 年生まれ、調査時 64 歳、女性。15 歳～17 歳に鳴子、それ以外は気仙沼。父は気仙沼、母は鳴子出身）は、「方言的発話」「共通語的発話」とも、1 拍名詞は 0 型と 1 型の対立が明瞭であった。しかし、2 拍名詞は、「方言的発話」では「足」の 2 型以外はすべて 1 型（●○）であり、「共通語的発話」では「秋」の 1 型以外はすべて 2 型（○●▽）であった。また、3 拍名詞は、「方言的発話」ではすべて 2 型（○●○）、「共通語的発話」でも「桜」の 0 型以外はすべて 2 型（○●○▽）であった。

話者 B（1938 年生まれ、調査時 68 歳、女性。外住歴なし、両親とも気仙沼出身）は、1 拍名詞は「方言的発話」「共通語的発話」ともすべて 1 型であった。2 拍名詞は、「方言的発話」ではすべて 1 型（●○）であったが、「共通語的発話」では 0 型（「風」「酒」）と 2 型（それ以外の語）の対立が認められた。3 拍名詞は、「方言的発話」では、一部の語に 0 型（「煙」「油」「便り」「後ろ」）と 3 型（「団扇」「鋏」）が見られたが、それ以外の語はすべて 2 型（○●○）であった。しかし、「共通語的発話」では、多くの語を伝統的な方言アクセント型で発音した。すなわち、この話者は、「共通語的発話」の方が「方言的発話」より方言アクセント型を発音したことになる。

話者 C（1940 年生まれ、調査時 65 歳、男性。18 歳～20 歳・東京、20 歳～24 歳・福島、両親とも気仙沼出身）は、1 拍名詞は「方言的発話」「共通語的発話」とも 0 型と 1 型の対立が明瞭であった。2 拍名詞は、「方言的発話」では、0 型（「風」「酒」「犬」「汗」）と 1 型（それ以外の語）の対立が認められたが、伝統的な方言アクセント型から逸脱している語が多かった。しかし、「共通語的発話」では大部分の語を方言アクセント型で発音した。3 拍名詞は、「方言的発話」では伝統的な方言アクセント型から逸脱した語が多かったが、「共通語的発話」では、大部分の語を方言アクセント型で発音した。すなわち、この話者も話者 B と同様に、「共通語的発話」の方が「方言的発話」より方言アクセント型を発音したことになる。

2. 2 中年層の調査結果

表 4 中年層・1 拍名詞

	0 型		1 型	
血	100	94	0	6
戸	100	94	0	6
木	19	13	81	88
手	13	0	88	100

高年層と同様、「血」「戸」は大部分が 0 型であり、「木」「手」は大部分が 1 型である。「方言的発話」（点線の左側）と「共通語的発話」（点線の右側）の差は小さい。

表5 中年層・2拍名詞

	0 型		1 型		2 型	
風	100	94	0	0	0	6
酒	100	94	0	0	0	6
石	75	75	6	0	19	25
胸	88	44	0	0	13	56
足	18	13	6	0	76	88
犬	6	0	0	0	94	100
糸	6	0	18	6	76	94
稲	6	0	18	0	76	100
海	13	0	19	13	69	88
数	28	0	22	7	50	93
肩	13	6	19	13	69	81
秋	6	0	19	31	75	69
汗	13	0	0	6	88	94
窓	6	0	13	13	81	88
猿	6	0	13	25	81	75

「風」「酒」「石」は大部分が 0 型、「足」「犬」「糸」「稲」「海」「肩」「秋」「汗」「窓」「猿」は大部分が 2 型である点は高年層と同様である。しかし、「胸」は、高年層と比較すると、「共通語的発話」で 0 型が減少し（71 %＝高・44 %＝中）、2 型が増加している（14 %＝高・56 %＝中）。この現象は共通語化であると考えられる（「胸」の共通語アクセントは 2 型である）。また、「数」の「方言的発話」では、高年層と比較すると 2 型の割合が減少し（82 %＝高・50 %＝中）、0 型と 1 型が増加している（0 型→5 %＝高・28 %＝中、1 型→14 %＝高・22 %＝中）。

表6 中年層・3拍名詞

	0 型		1 型		2 型		3 型	
桜	100	100	0	0	0	0	0	0
煙	100	100	0	0	0	0	0	0
頭	25	25	0	0	6	0	69	75
鏡	19	6	0	0	0	6	81	88
刀	19	6	0	0	0	0	81	94
仏	13	13	0	0	6	0	81	88
男	6	6	0	0	0	0	94	94
団扇	19	13	0	0	0	0	81	88
鋏	13	0	0	0	6	19	81	81
朝日	0	0	6	13	88	88	6	0
胡瓜	0	0	6	6	94	94	0	0
心	19	13	0	0	19	6	63	81
姿	6	0	6	13	56	81	31	6
涙	19	19	6	6	25	31	50	44
枕	25	19	0	0	13	19	63	63
油	25	38	0	0	13	13	63	50
柱	25	38	0	0	0	6	75	56
紅葉	6	0	6	19	88	75	0	6
兎	19	25	0	0	81	69	0	6
狐	13	19	0	0	88	69	0	13
雀	25	19	0	0	75	69	0	13
背中	19	25	0	0	81	75	0	0
鼠	6	13	0	0	94	81	0	6
蚯蚓	6	6	0	0	94	94	0	0
苺	19	31	0	0	81	63	0	6
薬	6	13	0	0	94	88	0	0
鯨	44	31	0	0	50	44	6	25
便り	6	13	6	13	81	69	6	6
後ろ	25	25	0	0	6	6	69	69
卵	6	19	0	0	94	81	0	0

「桜」「煙」はすべて 0 型、「朝日」「胡瓜」「紅葉」「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」

「蚯蚓」「苺」「薬」「便り」「卵」は大部分が 2 型、「頭」「鏡」「刀」「仏」「男」「団扇」「鋏」「心」「枕」「後ろ」は大部分が 3 型である点は高年層と同様、ないし類似する。

「姿」「涙」「油」「柱」は、以下に示すように、高年層と比較すると 3 型の割合が減少している（左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」）。

姿：77 %・62 %＝高 31 %・6 %＝中

涙：82 %・62 %＝高 50 %・44 %＝中

油：73 %・81 %＝高 63 %・50 %＝中

柱：73 %・76 %＝高 75 %・56 %＝中

上記の語がどの型にシフトするかは語によって異なるが、「姿」は 2 型の割合が増加している（2 型の割合→9 %・33 %＝高 56 %・81 %＝中）

「油」「柱」は 0 型の割合が増加している（「油」の 0 型→18 %・5 %＝高 25 %・38 %＝中。「柱」の 0 型→3 %・10 %＝高 25 %・38 %＝中）

一方、「鯨」は 2 型が減少し、0 型が増加している（鯨の 2 型→95 %・86 %＝高 50 %・44 %＝中。鯨の 0 型→5 %・10 %＝高 44 %・31 %＝中）。

以上のうち、「鯨」の 2 型→0 型の変化（世代差）は共通語化であると考えられる（表 12 参照）。

なお、16名の中年層のうち、かなり無型アクセント（無アクセント）的な話者が1名見られた。話者の生年・年齢・居住歴など、および、アクセントの内容は以下のとおりである。

1950年生まれ、調査時55歳、外住歴なし。両親とも気仙沼出身。

「方言的発話」では、1拍名詞・2拍名詞はすべて0型、3拍名詞は、大部分の語が0型（「朝日」「胡瓜」「鼠」「便り」「卵」は2型）。「共通語的発話」では、1拍名詞・2拍名詞は方言アクセント型（型の対立あり）、3拍名詞は0型が多いものの、「方言的発話」よりは方言アクセント的。すなわち、この話者は（高年層話者の中で無型アクセント的であった話者B・話者Cと同様に）「共通語的発話」の方が「方言的発話」より方言アクセント型を発音したことになる。

2. 3 若年層の調査結果

表7 若年層・1拍名詞

	0型		1型	
血	100	100	0	0
戸	86	100	14	0
木	7	0	93	100
手	0	0	100	100

高年層・中年層と同様、「血」「戸」は大部分が0型であり、「木」「手」は大部分が1型である。「方言的発話」（点線の左側）と「共通語的発話」（点線の右側）の差は小さい。

表8 若年層・2拍名詞

	0型		1型		2型	
風	100	100	0	0	0	0
酒	100	100	0	0	0	0
石	43	36	0	0	57	64
胸	7	7	0	0	93	93
足	0	7	0	0	100	93
犬	7	7	0	0	93	93
糸	0	7	33	43	67	50
稲	0	7	29	50	71	43
海	0	7	29	50	71	43
数	7	7	36	50	57	43
肩	7	7	7	50	86	43
秋	0	0	43	57	57	43
汗	0	7	0	43	100	50

「石」「胸」（第2類）に2型が多く、また、第4・5類の「糸」～「猿」の語は中年層と比較して1型が増加している。すなわち、共通語化が進んでいる。

	0型		1型		2型	
窓	0	7	21	50	79	43
猿	0	7	14	50	86	43

表9 若年層・3拍名詞

	0 型		1 型		2 型		3 型	
桜	100	100	0	0	0	0	0	0
煙	100	100	0	0	0	0	0	0
頭	0	7	0	0	6	0	69	93
鏡	7	0	0	0	0	0	93	100
刀	14	7	0	0	0	0	86	93
仏	29	43	0	0	0	0	71	57
男	0	7	0	0	0	0	100	93
団扇	21	15	0	0	21	0	57	85
鉄	7	14	0	0	7	0	86	86
朝日	0	7	14	50	79	43	7	0
胡瓜	0	0	14	29	86	71	0	0
心	7	14	0	0	0	0	93	86
姿	0	43	21	29	50	29	29	0
涙	7	36	14	29	29	7	50	29
枕	0	14	7	21	21	14	71	50
油	14	38	0	0	0	0	86	62
柱	0	0	0	0	0	0	100	100
紅葉	0	0	27	57	60	36	13	7
兎	50	64	0	0	36	14	14	21
狐	36	57	0	0	43	21	21	21
雀	36	57	0	0	43	29	21	14
背中	14	57	0	0	71	14	14	29
鼠	43	64	0	0	50	14	7	21
蚯蚓	13	50	0	0	67	29	20	21
苺	29	71	0	0	64	7	7	21
薬	29	50	0	0	64	29	7	21
鯨	71	93	0	0	14	0	14	7
便り	0	0	36	57	36	43	29	0
後ろ	21	57	0	0	7	0	71	43
卵	0	0	0	0	86	93	14	7

中年層と比較して、「紅葉」と「便り」の1型の増加、「鯨」の0型のさらなる増加、「兎」「狐」「雀」「背中」「鼠」「蚯蚓」「苺」「薬」の0型の増加が認められる。すなわち、共通語化が進行している（共通語の型については表12参照）。

紅葉の1型

6%・19%=中 27%・57%=若
（左側は「方言的発話」、右側は「共通語的発話」。以下同じ）。

「便り」の1型

6%・13%=中 36%・57%=若

「鯨」の0型

44%・31%=中 71%・93%=若

「兎」の0型

19%・25%=中 50%・64%=若

「狐」の0型

13%・19%=中 36%・57%=若

「雀」の0型

25%・19%=中 36%・57%=若

「背中」の0型

19%・25%=中 14%・57%=若

「鼠」の0型

6%・13%=中 43%・64%=若

「蚯蚓」の0型

6%・6%=中 13%・50%=若

「苺」の0型

19%・31%=中 29%・71%=若

「薬」の0型

6%・13%=中 29%・50%=若

2. 4 少年層の調査結果

表 10 少年層・1 拍名詞

	0 型		1 型	
血	100	95	0	5
戸	95	100	5	0
木	10	5	90	95
手	0	5	100	95

高年層・中年層・若年層と同様、「血」「戸」は大部分が 0 型であり、「木」「手」は大部分が 1 型である。「方言的発話」(点線の左側)と「共通語的発話」(点線の右側)の差はほとんどない。

表 11 少年層・2 拍名詞

	0 型		1 型		2 型	
風	95	95	0	0	5	5
酒	90	100	0	0	10	0
石	14	20	5	10	81	70
胸	20	5	5	0	75	95
足	10	10	0	10	90	80
犬	0	0	0	5	100	95
糸	0	5	50	90	50	5
稲	0	0	35	75	65	25
海	0	0	45	89	55	11
数	0	0	35	90	65	10
肩	7	5	30	90	70	5
秋	0	0	45	95	55	5
汗	0	0	30	95	70	5
窓	0	0	40	90	60	10
猿	0	0	45	95	55	5

第 1 類(風・酒)は 0 型、第 2 類(石・胸)と第 3 類(足・犬)は 2 型が大部分である点は共通語アクセントと同じである。

第 4 類(糸・稲・海・数・肩)と第 5 類(秋・汗・窓・猿)は、「方言的発話」では方言アクセント型である 2 型が多く、「共通語的発話」では共通語アクセント型である 1 型が多い。すなわちアクセントの使い分けが認められる。

表 12 少年層・3 拍名詞

	0 型		1 型		2 型		3 型		共	方
桜	90	100	0	0	10	0	0	0	0	0
煙	95	100	0	0	5	0	0	0	0	0
頭	10	0	0	0	5	0	85	100	23	3
鏡	15	5	0	0	10	5	75	90	3	3
刀	25	10	0	0	0	0	75	90	23	3
仏	40	60	0	0	0	0	60	40	03	3
男	20	5	0	0	0	0	80	95	3	3
団扇	50	50	0	0	5	5	45	45	2	3
鉄	5	5	0	0	25	10	70	85	3	3
朝日	0	0	50	90	50	10	0	0	1	2
胡瓜	0	10	0	35	100	55	0	0	1	2
心	40	15	0	0	0	0	60	85	23	3
姿	0	10	50	80	50	5	0	5	1	3
涙	0	10	35	84	60	0	5	5	1	3
枕	20	15	25	50	25	10	30	25	1	3
油	50	75	0	0	5	0	45	25	0	3
柱	30	25	0	0	5	0	65	75	03	3
紅葉	0	0	50	95	45	5	5	0	1	2
兎	80	95	0	0	15	0	5	5	0	2
狐	63	95	5	0	32	0	0	5	0	2
雀	60	89	0	0	30	0	10	11	0	2
背中	70	95	0	0	30	5	0	0	0	2
鼠	70	90	0	5	30	5	0	0	0	2
蚯蚓	75	95	0	5	25	0	0	0	0	2
苺	70	80	0	20	20	0	10	0	10	2
薬	50	85	0	5	45	5	5	5	0	2
鯨	70	95	0	5	20	0	10	0	0	2
便り	10	15	40	75	40	5	10	5	1	2
後ろ	60	90	0	5	10	0	30	5	0	3
卵	10	0	0	0	86	100	5	0	02	2

でも方言アクセントでもない 0 型が 50 % 見られる。

胡瓜→「方言的発話」では方言アクセント型と 100 % 一致。「共通語的発話」では共通語アクセント型とほぼ一致している。

表 12 では、少年層の調査結果とともに、「共」の欄に共通語アクセント型を（注 1）、「方」の欄に、高年層の調査結果から推定される、この地域の方言アクセント型を記した（「共」の欄に複数の数字がある場合には、左側が高年層が使用している古いアクセント型、右側が若年層が使用している新しい型である）。

表 12 の調査結果を見ると、共通語アクセント型とほぼ一致している語が大部分であるが、一部に非共通語アクセント型（方言アクセント型）が多い語もある。

①共通語アクセント型、方言アクセント型の両方とほぼ一致している語→桜・煙・頭・刀・仏・男・鉄・心・柱・卵。

②共通語アクセント型とほぼ一致しているが、方言アクセント型とは不一致の語（すなわち共通語化が進んだ語）→朝日・姿・涙・油・紅葉・兎・狐・雀・背中・鼠・蚯蚓・苺・薬・鯨・便り・後ろ（ただし、これらの語は、「方言的発話」では方言アクセント型がある程度見られる）。

③その他

団扇→共通語アクセント型とは不一致。方言アクセント型とは 45 % が一致。ほかに、共通語アクセント型とほぼ一致している。

セント型が 35 % 見られる。

枕→「方言的発話」では 0 型、1 型（共通語アクセント型）、2 型、3 型（方言アクセント型）がほぼ同じ割合で見られる（すなわち個人差が大きい）。「共通語的発話」では 1 型（共通語アクセント型）がやや増加する。

3. 調査結果の概要

- ① 1 拍名詞は世代差が見られず、0 型（血・戸）と 1 型（木・手）の対立が明瞭である。
- ② 2 拍名詞は、第 1 類（風・酒）はどの世代も 0 型が大部分で世代差は見られない。第 2 類（石・胸）は世代が若くなるにつれて、0 型から 2 型への変化（共通語化）が認められる。第 3 類（足・犬）はどの世代も 2 型が大部分で世代差は見られない。第 4 類（糸・稲・海・数・肩）と第 5 類（秋・汗・窓・猿）は、高年層では 2 型が大部分であるが、世代が若くなるにつれて 1 型が増加する（共通語化が認められる）。第 4・5 類における第 2 拍の母音の広狭によるアクセント型の区別は、どの世代にも認められない。
- ③ 3 拍名詞は、多くの語について、世代が若くなるにつれて顕著な共通語化が認められる。とくに 2 型から 0 型への変化が著しい。
- ④ 高年層の一部（22 名中 3 名）、および、中年層の一部（16 名中 1 名）に無型アクセント（無アクセント）的な姿を示す話者が存在した（注 2）。

注記

1. 本稿で「共通語アクセント」としたアクセント型は、すべて『新明解国語辞典・第六版』（2009）記載のものである。この辞典は、規範としての標準アクセントではなく、現代東京語（若年層を含む）のアクセントを記載している。
2. 高年層寄りの世代（高年層・中年層）の話者に無型アクセント的な姿を示す話者が見られ、若年層寄りの世代（若年層・少年層）にそのような話者が見られなかった点は宮城県北西部の調査（佐藤 2011）でも認められた現象であり、その要因についての検討は今後の課題としたい（佐藤 2011 では、この問題について、いくつかの仮説を提示した）。

文献

- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究』塙書房
- 佐藤亮一（2005）「アクセント調査における「読ませる調査」と「言わせる調査」」佐藤喜代治博士追悼論集刊行会編『日本語学の蓄積と展望』明治書院
- 佐藤亮一（2011）「アクセント」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
- 山田忠雄主幹（2009）『新明解国語辞典・第六版』三省堂

アクセント ―三陸地方南部地域―

田中 宣廣

0 はじめに

当調査の対象とした三陸地方南部地域には、特徴的な2つの種類のアクセントの性質の地域が含まれている。これらは、東北地方の方言ではもちろんのこと、日本語全体のアクセントのなかでも、特徴的である。今回の研究は、これらの性質の現状を把握することを軸として進めることとなる。

1 三陸地方南部地域のアクセントの特徴

1.1 東北地方の方言のアクセントの分布

東北地方のアクセントは、平山(1957)、田中(2005)、その他より、以下のように整理される。

北奥羽方言地域（おおむね、岩手県中部より北側、青森県全域、秋田県全域、山形県の庄内地方と最上地方）と南奥羽方言地域の北半分（岩手県県南部、山形県村山・置賜の一部）が、言語体系内にアクセントが備わっている『有型アクセント』の地域である。

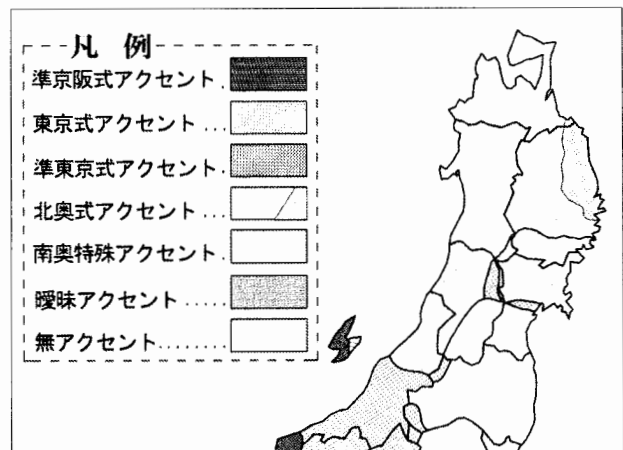
また、南奥羽方言地域の南半分（おおむね、宮城県南部、山形県村山と置賜の大部分、福島県の大部分）が、言語体系内にアクセントが備わっていない「無アクセント」の地域である。

有型アクセントと無アクセントとの接触地帯に「曖昧アクセント」が認められる。

さらに、北奥羽方言地域の太平洋沿岸部（八戸～大槌）には、1単語内に2箇所の高い部分の語例が認められる「重起伏調」の地帯がある。

以上を〔図1〕に示す。

〔図1〕東北地方アクセント分布図



1.2 東北地方のアクセントの性質

東北地方の有型アクセントの基本は「北奥式アクセント」で、これは「東京式アクセント」と大きく異なるアクセント構造である。「東京式」では語の中の声の下降の位置が固定されていて、この下降＝「さがりめ」が弁別的特徴のアクセント体系であるのに対し、「北奥式」は語の中の声の上昇の位置が固定されていて、この上昇＝「のぼり核」（のぼりアクセント核）が、アクセント節

内にあるか、ないか、あればどこにあるかによるアクセント体系である（田中 2005 他による）。

また、「1.3①」の「南奥特殊アクセント」も同様に「のぼり核」による体系である。

1.3 当調査の地域のアクセント

「0」で述べた当調査地域のアクセントの性質のうち特徴的な2種類とは、以下のものである。

①「南奥特殊アクセント」

語頭音節に「のぼり核」の位置する語例が、基本的に認められないアクセント体系で、岩手県の南部から宮城県の北部にかけての地域で認められる。平山(1957)では「東京式特殊音調Ⅱ」と呼称され、東北地方の方言のアクセントのなかでも、特徴的な性質を持つアクセントであることが知られている。「南奥特殊アクセント」の名称は田中(2005)他による。

②「北奥式アクセント」の『太平洋沿岸重起伏調地帯』

「重起伏調」とは、実現音調において、アクセント節内に2カ所の高い部分が認められることで、その語例のあるアクセント体系である。重起伏調の認められるのは、「北奥式アクセント」のうち、青森県の八戸から岩手県の大槌にかけての太平洋沿岸地帯と、その近隣の地域（特に八戸から街道が直結している地点では、岩手県軽米町などの内陸側も含まれる）である。

2 当調査の各地点のアクセント

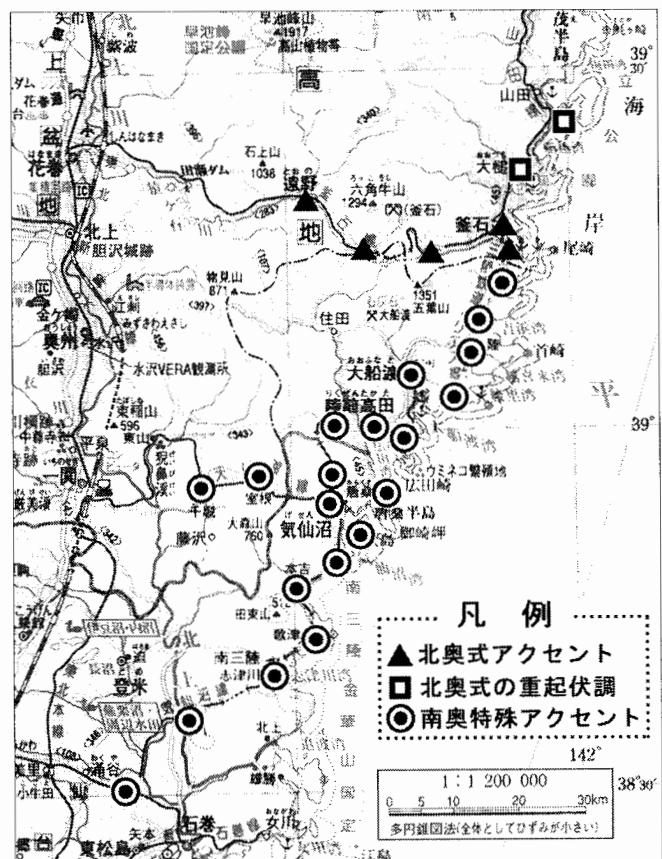
当調査の地域には、「1.3」の2つの性質のアクセントのほか、「北奥式アクセント」の岩手県内陸部（遠野、足ヶ瀬、洞泉）と釜石地区（釜石、平田）が含まれている。

これら3種類について、平山（1957）、森下（1986）、また、真田（1972）（1966年から1971年の5次にわたる東北大学国語学研究室による調査の報告、以降これを「前調査」と呼ぶ）などの先行研究（「3」で説明）、および、筆者のこれまでの調査から、各地点のアクセント性質を整理し、地図上に表したものを〔図2〕に示す。

〔図2〕の地図原版には、帝国書院編集部編(2011)『新詳高等地図 一初訂版一』（帝国書院）を用いた。

〔図2〕三陸南部地域のアクセント分布

（当調査の調査地点について）



3 先行研究

この地域のアクセントの研究には、日本全体が対象の研究の、平山(1940)(1957)があり、特に、平山(1957)において、この地域のアクセントの性質と日本語アクセントの中での所属が確定したと言ってよい。アクセントの構造については、その後の研究の進展により、「のぼり(アクセント)核」による体系であることが明らかになったが、以降のアクセント解説、例えば、『国語学辞典』や『国語学大辞典』も、所属については平山(1957)を原典としているし、平山(1957)収載の「奥羽方言音調分布図」こそ、現在なお、東北地方の方言のアクセントの考察の基本となっている。

そして、真田(1972)で報告された前調査である。1966年から1971年にかけて5次にわたり26地点について、東北大学国語学研究室の先生方や諸先輩の総力を挙げて、音韻、アクセント、文法、語彙の記述的研究を行い、そのうち16地点で実施したアクセント調査の考察を、佐藤・加藤(1972)のなかに収載した。これらの調査と並行して、南部藩と伊達藩の藩境付近の89地点で言語地理学的調査が行なわれたが、アクセントについては佐藤・加藤(1972)では未発表であった。

この真田(1972)は、当調査で課題とした北奥式アクセントと南奥特殊アクセントとの境界およびその付近、とりわけ宮城県側のアクセントの実態について、詳しく知ることができる数少ない公刊論考である。平山(1957)は、第二次世界大戦前に綿密な地点設定で調査した資料や原稿が、戦災により消失したための戦後の再調査による研究で、調査地点数は当初調査よりも減ぜられた。

その後、この地域のうち岩手県域について、森下(1986)で類別語彙の対応比較表の形式で整理された。さらに、東北地方全域のアクセントについて、森下(1996)で詳細な考察がなされた。

その他、方言研究のなかでは、本堂(1982)などで説明がなされている。

筆者も田中(2005)で、当調査の調査区域のアクセントについて関連内容に言及した。岩手県沿岸部の「重起伏調」について明確にし、「南奥特殊アクセント」の術語を用い、所属を確認した。

4 アクセント調査の内容

4.1 調査概要

アクセント調査は、宮城県気仙沼市を中心とする2005年からの3カ年の調査のうち、2007年の南三陸広域多地点調査のときに加えられた。他の多くの言語分野と合同の総合調査なので、項目は、「4.2」の目的に照らして、「4.3～4.4」のとおり、この地域のアクセントの特徴を確認する項目を少数選定した。この点、真田(1972)で報告された前調査においては、各地点での記述的研究として多数の項目を調査したのとは、異なる趣旨となった。

4.2 調査の目的

当調査のアクセント分野の目的は、「1.3」のとおりの特徴的なアクセントが認められる地域であることを鑑み、そのアクセント特色を検証するものとした。

調査票には、この目的を、各調査員への指示として、以下のように記載した。()内は、該当する項目番号で、項目は「4.4」に示す。

調査のねらい

論点1：北奥式アクセントか、南奥特殊アクセントか（1～9, 14・15）

＝南奥特殊アクセントは、第1音節にのぼり核の語のない体系だが、その現状や北奥式との境界を見出す。

論点2：北奥式地域における、内陸低平調地域か、太平洋沿岸重起伏調地帯か（10～13）

＝北奥式アクセントの無核語は、内陸は低平調、太平洋沿岸部は重起伏調だが、その現状や境界を見出す。

4.3 調査項目の選定

「4.1～4.2」より、調査項目（調査語彙）は、「論点1」の（「南奥特殊アクセント」関連）のものと、「論点2」（重起伏調の関連）のものとの2種のみとし、項目数も少数とした。この調査項目により、2論点以外の、「北奥式アクセント」の内陸側の地域におけるアクセントについても、前調査からの変化の現状を見るという目的を果たすことも可能だと判断した。

調査においては、全調査項目を、全調査地点で調査した。つまり、たとえば「南奥特殊アクセント」地域の地点であっても、「論点1」のために選定した項目だけを調査したのではなく、他の項目も含めた、用意した全語彙を調査したわけである。

4.4 調査項目と各項の目的

「4.3」により選定した調査項目と、主に確認する目的は以下のとおりである。

〔表記注〕●, ▼：高音節 / ○, ▽：低音節 /

◎：高まった音節から漸降する（少しずつ音が低くなってゆく）途中の音節

●, ○：名詞部分 / ▼, ▽：助詞「ーも」

論点1：南奥特殊アクセントに関して：1～9, 14, 15；()内が確認する目的

- | | | |
|----|----|-----------------------------|
| 1 | 鯨 | (○●○か, ●○○また●◎○か) |
| 2 | 雀 | (○●○か, ●○○また●◎○か) |
| 3 | 烏 | (○●○か, ●○○また●◎○か) |
| 4 | 啄木 | (○●○○か, ●○○○また●◎○○か) |
| 5 | 松茸 | (○●○○か, ●○○○また●◎○○か, ○○○○か) |
| 6 | 針 | (○●か, ●○か) |
| 7 | 跡 | (○●か, ●○か) |
| 8 | 猿 | (○●か, ●○か) |
| 9 | 陰 | (○●か, ●○か) |
| 14 | 山田 | (○●○か, ○○○か, ●○○また●◎○か) ※ |
| 15 | 大槌 | (○●○か, ○○○か, ●○○また●◎○か) ※ |

※「14 山田」と「15 大槌」は岩手県内の地名で、北奥式の地域では、●○○（内陸部）
また●◎○（沿岸重起伏調地帯）の音調で実現するので、この目的に有効と考え加えた。

==

論点2：北奥式地域における、内陸低平調地域か、太平洋沿岸重起伏調地帯か：10～13

- 10 魚 (○○○か, ●○●か)
11 車 (○○○か, ●○●か)
12 水も～ (○○▽か, ●○▼か)
13 寺も～ (○○▽か, ●○▼か)

4.5 調査方法

調査方法は、共通語による調査例文を話者に見せて、これを、話者に、その地点の方言に翻訳しつつ発音していただく方式である。話者に発音させるだけでなく、調査者が復唱して話者の確認を得る、という言語調査の基本に忠実なことも心掛けた。調査票にも以下の注意書きを示した。

調査の注意

- ①調査例文を話者に見せて口上を述べつつ、当該方言に反省的に翻訳して発音していただく方式で行う。
②話者の発音については、調査者が必ず復唱的発音をして話者の確認を得ることを励行する。
③票中の第1基本節部のカタカナは調査時に、話者の回答音声に合わせて修正し、第2基本節部の_____には回答形式を記録しつつ、全文にわたって反省的実現音調を、「線」により記録する。なお、カタカナの斜体（グなど）はカ行音濁音化が、ひらがなは鼻濁音が、それぞれ予想される音だが、必要があれば調査時に修正する。

また、説明文の①にある「口上」とは以下のもので、話者にも、このアクセント調査の趣旨が伝わるように努力したものである。

以下の文を、普段気をつかわないでしゃべるときのことばに直して発音して聞かせてください。
決して、文字を読み上げるのではありません。

但し、発音を教えていただく簡単な文なので、結果として文字と同じことばになってもかまいません。

話者に見せる例文は、以下のように、大きな文字で、漢字にはふりがなを付けて示した。

- | | | |
|---|-----------|-------------------------|
| 1 | くじら
鯨。 | くじら く
鯨 も 食 いた い よ。 |
| 2 | すずめ
雀。 | すずめ と
雀 も 飛 ん で た よ。 |

5 調査結果と考察

5.1 南奥特殊アクセント地域での現状

南奥特殊アクセントに関連する項目の調査結果を〈表1〉に示す。

この表は、□と▲の北奥式アクセントの地域では語頭に高音節のある語例で、・の南奥特殊アクセントの地点での実態を示したもので、当調査の目的に叶うように、地点を北から順に並べてある。洞泉と唐丹で地名が2つあるのは2名の話者を調査したからである。「アクセント所属」は、〔図2〕の分布図と同じ記号(□, ▲, ・)により、アクセント所属を示したものである。調査結果は、符号化せずに、音節ごとにそのまま示した。そのなかで、「松茸」は、[マツタケ]もしくは[マズダケ]の実現なら4音節だが、足ヶ瀬、釜石、大谷、志津川では[マツタケ]なので3音節である。

〈表1〉三陸南部地域高年層アクセント調査結果1

地点名	アクセント所属	鯨	雀	烏	啄木	松茸	針	跡	猿	陰
船越	□	●◎○	●◎○	●◎○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
大槌	□	●◎○	●◎○	●◎○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
遠野	▲	●○○	●○○	○●○	●○○○	●○○○	●○	○●	●○	○●
足ヶ瀬	▲	●○○	●○○	○●○	●○○○	●○○○	●○	○●	●○	○●
洞泉	▲	●◎○	○●○	○●○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
洞泉	▲	●◎○	○●○	○●○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
釜石	▲	●○○	○●○	○●○	●◎◎○	●◎◎○	●○	○●	●○	●○
平田	▲	●○○	○●○	○●○	○○○○	●○○○	●○	○●	●○	●○
唐丹	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	●○	●○
唐丹	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	●○	●○
吉浜	◎	●◎○	○●○	●◎○	●◎◎○	○●○○	○●	○●	●○	○●
越喜来	◎	○○○	●◎○	●○○	●◎◎○	○●○○	○●	○●	○●	○●
綾里	◎	●◎○	○●○	●◎○	○○●○	○●○○	●○	○●	○●	○●
大船渡	◎	●◎○	●◎○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
小友	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
陸前高田	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
鹿折	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
唐桑	◎	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
千厩	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
折壁	◎	○●○	○●○	●○○	○●○○	○○●○	○●	○●	○●	○●
気仙沼	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
大島	◎	○●○	○●○	●○○	●○○○	●○○○	○●	○●	○●	○●
大谷	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	●○○○	●○	○●	○●	●○
本吉	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○○○○	○●	○●	○●	○●
歌津	◎	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
志津川	◎	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
柳津	◎	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
前谷地	◎	●○○	○○○	●○○	●○○○	○○●○	●○	○●	○●	○●

実態は、少数の例外はあるものの、高年層では現在も南奥特殊アクセントの性質が保たれている。北奥式アクセントの地域に隣接している岩手県の唐丹、吉浜、越喜来、大船渡の諸地点では、語頭が高い語例も認められるので、北奥式アクセントと南奥特殊アクセントとの境界は、平山(1957)他の先行研究で示された平田・唐丹間から南側の、当調査では大船渡・小友(陸前高田市)間の間である。ただし、唐丹から語頭が高い語例が少なくなることも分かる(稿末に参考写真)。

なお、岩手県内陸部の遠野、足ヶ瀬、洞泉で「跡」（遠野と足ヶ瀬では「陰」も）は〔○●〕だが、これは、2音節名詞第Ⅳ類と第Ⅴ類で、末尾音節の母音の広狭によるアクセントの違いによる結果と見るのが適切であろう。

5.2 重起伏調地帯での実態

岩手県太平洋沿岸部の北奥式アクセントの重起伏調地帯に関連する項目の調査結果を〈表2〉に示す。地点名や「アク所属」に関しては〈表1〉と同じである。

〈表2〉は、□の北奥式の地域で重起伏調になっている語例で、その他の地点での実態を示したものである。

まず、先行研究では北奥式アクセントの内陸部の所属となっている釜石で重起伏調を示しているのが分かる。

「寺」は、「オデラ」の語形で、実現音調は〔●○●〕であり、これを加えると、重起伏調関連の4つの調査項目すべてで重起伏調となっている。詳しい調査による検証の必要を認めるところである〔注1〕。

その他では、低平調の〔○○○〕の地点が多く、地域差が明確である。

〈表2〉三陸南部地域高年層アクセント調査結果2

地点名	アク所属	魚	車	水も	寺も
船越	□	●○●	●○●	●○▼	●○▼
大槌	□	●○●	●○●	●○▼	●○▼
遠野	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
足ヶ瀬	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
洞泉	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
釜石	▲	●○●	●○●	●○▼	オデラ
平田	▲	○○○	○○○	○○▼	○○▼
唐丹	◎	○○○	○○○	○●▼	○●▼
唐丹	◎	○●○	○○○	○○▼	○●▼
吉浜	◎	○●○	○○○	○○▼	○●▼
越喜来	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
綾里	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
大船渡	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
小友	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
陸前高田	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
鹿折	◎	○○○	○○○	○○▼	○●▼
唐桑	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
千厩	◎	○●○	○○○	○○▼	○○▼
折壁	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
気仙沼	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
大島	◎	○○○	○○○	○○▼	○●▼
大谷	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
本吉	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
歌津	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
志津川	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼
柳津	◎	○○○	○●○	○○▼	○○▼
前谷地	◎	○○○	○○○	○○▼	○○▼

5.3 年層差の実態

2007年の調査では、宮城県内の地点を中心に、高年層の話者と併せて青年層の話者からも聴き取りをすることができた。

アクセントで言えば、これらの地点はいずれも、南奥特殊アクセントの地域であり、この観点からアクセントの年層差を見ることができる。

青年層のアクセントの調査結果を〈表3〉（次ページ）に示す。地点ごとに、高年層と並行させて示した。南奥特殊アクセントの観点から、つまり、高年層で語頭音節が高くなかった語例が、青年層では語頭音節が高くなった変化を、地点ごとに高年層との比較でみる。

大船渡：「猿，陰」，陸前高田：「針」，唐桑：「松茸，針，跡，猿，陰」，内陸部の千厩：「鳥，針，跡，猿」，同じく内陸の折壁：「針，跡，猿」，気仙沼：「鳥，針，跡，猿，陰」，大谷：「鳥，

啄木」，本吉：「陰」，歌津：「針，跡，陰」，志津川：「針，猿」で，この変化を認める。

筆者が実際に調査した本吉では，30 歳代始めの話者であったが，調査項目以外でも，南奥特殊アクセントの性質が依然として保たれているとの強い印象を得た。これも，詳しい調査による検証の必要を認めるところである。

ところで，「5.1」と「5.2」の高年層では，北奥式との関連を考慮して考察するのが基本であったが，青年層の場合，『共通語化』の問題も考慮する必要がある，上述の変化の理由については，すぐには判断できない。ただ，語頭音節が高くなった語例のあった 10 地点でも，他の語例では，共通語化，つまり，東京方言のアクセントへの変化と思われる実現例はほとんど認められない。

〈表 3〉三陸南部地域青年層アクセント調査結果

地点名	年層	鯨	雀	烏	啄木	松茸	針	跡	猿	陰
大船渡	高	●◎○	●◎○	○●○	○●○○	○●○○	○●	●○	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	●○	●○	●○
陸前高田	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	○●	○●
鹿折	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
唐桑	高	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○○○	○○○	●○○	○●○○	●○○○	●○	●○	●○	●○
千厩	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	●○	●○	●○	○●
折壁	高	○●○	○●○	●○○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○○○	○●○	●○○	○●○○	○●○	●○	●○	●○	●○
気仙沼	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○○○	○○○	●○○	○●○○	○●○○	●○	●○	●○	●○
大谷	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	●○○	●○	○●	○●	●○
	青	○○○	○○○	●○○	●○○○	○●○○	●○	○●	○●	●○
本吉	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○	○●	○●	○●	●○
歌津	高	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	●○	○●	●○
志津川	高	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○	○●	○●	○●	○●
	青	○●○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	●○	○●	●○	○●
柳津	高	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	●○	○●
	青	○○○	○●○	○●○	○●○○	○●○○	○●	○●	●○	○●

5.4 地名のアクセント—南奥特殊アクセントの調査の一部として—

南奥特殊アクセントの調査の一部として，北奥式アクセントの地点ならば，語頭音節が高くなる語例として，地名を 2 例，調査に加えた。いずれも岩手県沿岸部の地名で，「山田（やまだ）」と「大槌（おおつち）」である。両例とも現地また宮古市など周辺地域では [●◎○] と実現する。

高年層の調査結果を〈表 4〉に示す。なお，「大槌」は，[オーツチ]のほか，[オーズジ] また [オーズズ] の実現なので，3 音節となる [注 2]。

〈表 4〉から，は，「5.1」の一般語彙とは別の結果を認めた。まず，最上行の船越は「山田」町内の 1 地区であり，これと第 2 行の「大槌」は，各々自体の地名は，現地発音ということになる。

表は，釜石から大船渡までと，小友から柳津までとに分けて見ることができる。

釜石～大船渡では、「山田」に語頭が高い〔●○○〕は、足ヶ瀬と吉浜（〔●◎○〕）の2地点で、その他は、〔○●○〕の実現音調が多い。これは、現地発音に対して南奥特殊アクセントの『語頭の高音節を避ける』性質が幾分かでも働いているものと思われる。

釜石～大船渡の「大槌」は、現地に近い釜石、足ヶ瀬、洞泉では、現地発音と同じ〔●○○〕だが、唐丹以南は、語頭に高音節のない実現音調となっていて、南奥特殊アクセントの性質の影響と思われる。

以上の釜石～大船渡に対し、小友以南の各地点では、「山田」に〔○○○〕の実現音調が多い。これは、南奥特殊アクセントの性質というより、なじみのない地名であるためであると思われる。

同じく小友以南の各地点における「大槌」は、多くの地点で〔●○○〕が多いが、これは、南奥特殊アクセントの性質からすると例外となる。南奥特殊アクセントで例外の語頭音節が高く実現する例のうちに、“普段あまり使用しない語”がある。これらの地点では「大槌」は、なじみのない土地であると考え、この実現音調となったことが理解できる。

つまり、「山田」と「大槌」の二つの土地に、なじみのある釜石～大船渡の各地点では、現地発音に対する各々の地域のアクセントの性質の影響が現れるのに対し、二つの土地から距離があり、なじみのあまりない小友以南では、現地発音と関連のない〔○○○〕や、語例自体がアクセント体系の例外とされて〔●○○〕も実現したものと思われる〔注3〕。

〈表4〉地名のアクセント（高年層）

地点名	アクセ所属	山田	大槌
船越	□	●◎○	●◎○
大槌	□	●◎○	●◎○
遠野	▲	○●○	○●○
足ヶ瀬	▲	○○●	○○●
洞泉	▲	○●○	●○○
洞泉	▲	○●○	●○○
釜石	▲	○●○	●○○
平田	▲	○○○	○●○
唐丹	◎	○●○	○●○
唐丹	◎	○●○	○●○
吉浜	◎	●◎○	○●○
越喜来	◎	○●○	○○○
綾里	◎	○●○	○●○
大船渡	◎	○●○	○○○
小友	◎	○○○	●○○
陸前高田	◎	○○○	●○○
鹿折	◎	○○○	●○○
唐桑	◎	○○○	●○○
千厩	◎	○○●	●○○
折壁	◎	○○○	●○○
気仙沼	◎	○●○	●○○
大島	◎	○○○	○○○
大谷	◎	●○○	●○○
本吉	◎	●○○	○○○
歌津	◎	○○○	●○○
志津川	◎	○●○	●○○
柳津	◎	○○○	○○○
前谷地	◎	○○○	○○○

6 まとめ

以上、三陸南部地域のアクセントの現状を概観した。

当調査の調査では、論点を2点に絞り、この2点について検証するのを目的とした。この目的は、おおむね達成されたと思われる。

つまり、「0」で述べたように、東北地方のみならず日本語全体のアクセントのなかで特徴的な性質のアクセントが、当調査の調査地域の主要なアクセント性質であり、これについては、現在もその性質をほぼ保っている。また、各地点のアクセントの全体像を見ることはできなかったが、全

体像を推定し、今後、各地点ごとに詳しく調査するときの指針になり得ると考える。

1966年から1971年の前調査では、東北地方の方言のアクセントが研究途上であったところ、非常に貴重な資料を残した。この地域のアクセント性質からの論点による調査や分析ではないが、かえってそれが功を奏し、当調査では難しかった全体像が理解できる研究になっている。

当稿の「5.1」でも触れた、「跡」＝[○●]などの実現結果は、岩手県内陸部における北奥式アクセントの2音節名詞第Ⅳ類と第Ⅴ類の末尾音節の母音の広狭によるアクセントの違いからの結果と、南奥特殊アクセントによるものなのかは、現在のこの地域のアクセントに関する研究と照合して、地点により理解することになる。

7 おわりに

当調査の各地点の地名は、ほぼそのまま平成23年(2011)3月11日(金曜日)午後2時46分に発生した「東日本大震災」の津波被災地の地名となっている。これから先、この地域で、当調査の規模の方言調査が可能になるには、長い年月が掛かるであろう。それよりも、当調査の方言調査と同じ土地への帰還自体が困難な地区がいくつもある。住民は新たな土地での生活となり、方言の使われる土地が移動する。これを考えると、当調査と同じ質の資料を得ることは、難しくなっていて、当調査の結果や前調査の資料は、再採取困難なとても貴重な記録となった。

筆者は、津波被災地の岩手県宮古市で生活している。宮古市でも、死者・行方不明者約800人、市役所を含め全半壊建造物約5,000棟など甚大な被害を受けた。筆者の住居地の地区体育館が市の遺体安置所となり、私宅前の公園も仮設住宅となっている。脱稿時は東日本大震災から約1年後となったが、この間、時が進んでいない感じが、私にはあるなか、3年前から顧問をしているボランティアサークルの学生たちとともに、地域の皆さんと支え合いながら研究活動をしてきた。

そのなかで、中心地が壊滅してしまった各地点の地名に接しながら資料を見てゆくのは執筆者として気持ちが重くなることもあったが、前述のとおり、非常に貴重な資料なので、研究報告としてしっかりまとめる責務があり、その責任の重さを支えにして執筆してきた。

また、当調査の話者の方のなかでお三方の犠牲者が確認されたそうである。当調査の資料は、上で述べた資料の学術的貴重性のほか、お三方の犠牲者の残しておくべき遺言だとの思いもある。それら一言ずつを確かにまとめ上げることも大切な役目と考え、折れそうな気持ちの支えとした。

私の調査話者にも、陸前高田市の方が犠牲になってしまった。岩手県警察の犠牲者名簿で分かった。お宅は高田松原の近くであった。7万本の松がたった1本を残してなぎ倒されてしまったところである。一般個人家屋はひとたまりもなかったであろう。調査のときの話者の方との記念写真を見ながら、悔しさが募るばかりである。

もしこの報告がご親族方のお目に止まったなら、お伝えしたいことがある。当調査のときの記念写真が私の手元にある。せめてものお慰めになれば、お渡ししたい。

注

- 1 釜石の話者は、調査時は釜石市中心部（浜町）にお住まいであった（情報では現在は仮設住宅にお住まい）が、言語形成期の前半は、北側の大槌町と隣接してやや内陸側の栗橋地区でお過ごしであった。養育者は、母親が栗橋地区ご出身（父親は旧三陸町ご出身）であり、影響があるのかもしれない。
- 2 「**オー**ズジ」（**太字**＋**囲み**が高く発音される部分）などと、第1音節「オー」の部分が低い場合は、**【●○○】**と表記し、第2音節が高い「オー**ズ**ジ」は**【○●○】**と表記する。
- 3 実際、これらの地点では、青年層も含めて、「なじみがない」からアクセントも確実なところはよく分からない旨を、調査時に発言している話者も複数認められた。

（参考写真）東北地方太平洋沿岸部の方言の区域を南北に分かつ^{へいた}平田－^{とうに}唐丹間の^{くわだいとうげ}鉾台峠
—三陸鉄道南リアス線平田駅より南方向を望む＝画面中ほど鉾台トンネルの先、約5.4 kmが唐丹地区—



文 献

- 佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』8・9：pp. 116-166
- 真田信治（1972）「第二章 アクセント」佐藤・加藤（1972）pp. 131-142
- 田中宣廣（2005）『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう
- 平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』育英書院
- （1957）『日本語音調の研究』明治書院
- 本堂 寛（1982）「岩手県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編（1982）『講座方言学4「北海道・東北地方の方言」』国書刊行会 pp. 237-269
- 森下喜一（1996）『東北地方方言アクセントの研究』おうふう
- 森下喜一編・平山輝男監修（1986）『岩手方言アクセント辞典』第一書房

動詞の活用

田附 敏尚

1 調査の目的と概要

ここでは、2005・2006 年度に行った気仙沼市の方言調査の結果を報告する^{注1}。2005 年度の調査では、気仙沼市における動詞の活用体系を把握するため、高年層 3 名、若年層 2 名に対して動詞の活用に関する面接調査を行った。調査期間・調査時間も限られていたため、調査したのは動詞 28 語、動詞の後接形式 12 形式についてである。これだけでは動詞全体の活用体系を描くことは出来ず、今後の追調査が必要となるが、今回はひとまず概括的に全体を捉えることにつとめ、活用体系の素描としてここに報告する。2006 年度の調査では、2005 年度の調査で得られた結果をもとにアンケート調査を行った。その詳細は 4 節で述べる。

1.1 調査項目

2005 年度に調査した動詞は、以下の 28 語である。五段動詞は各行の語を入れ、また、ラ行・ワ行五段動詞については共通語と異なる活用となることが見込まれたので、調査語数を多くした。

- ・五段動詞 書く・行く（カ行）、脱ぐ（ガ行）、消す（サ行）、立つ（タ行）、死ぬ（ナ行）、飛ぶ（バ行）、読む（マ行）、取る・入る・走る・蹴る・喋る（ラ行）、買う・洗う・吸う・食う・背負う・思う（ワ行）
- ・一段動詞 見る・起きる（上一段）、出る・寝る・消える・教える・考える（下一段）
- ・カ変動詞 来る
- ・サ変動詞 する

調査した後接形式は以下の 12 形式である。否定、終止、命令などを中心に、基本的なものを調査した。

否定（ネー）、受身（レル）、使役（セル）、希望（テー）、丁寧命令（イン）、音便（テ）、推量・意志（ベ）、終止（〜。）、連体（〜トキ）、禁止（ナ）、条件（バ）、命令（〜！）

便宜上、それぞれの後接形式につく活用形を「否定形、受身形、使役形……」と呼ぶこととする。また、そもそも「ラ行五段動詞」「下一段動詞」などの名称は共通語のものであって、当該方言でもそれがすべて当てはまるわけではないが、これもまず便宜としてその名称と枠組みで記述していく。

1.2 調査の観点

上記の語形や後接形式を設定したのは動詞活用全体の概括的な把握が目的ではあったが、特に以下のような点についても配慮してのことである。

調査語に関しては、ラ行五段動詞の中でも「入る・走る・蹴る・喋る」は形態上、一段動詞に近似しているため、一段動詞のような活用が現れる可能性がある。

ワ行五段動詞に関しては、その連母音の融合がどのようなになっているかが問題となる。「洗う」の終止形は、岩手県の陸前高田市や一関市で「アラー」「アロー」となるという報告があり(斎藤(2001))、これらの地域と比較的近い気仙沼市ではどのようなかたちになるのかが問題となる。

後接形式に関して、まず使役では一段動詞において「サセル」が出るか「ラセル」が出るかがポイントとなる。一段動詞に「ラセル」がつくと、ラ行五段動詞の使役形と見かけ上同形となるため、これは一段動詞のラ行五段化に関わる問題となる。

推量・意志では、その音便が撥音便を取るか促音便を取るかが問題となる。先行研究からは大まかに言うと岩手側は撥音便、宮城側は促音便となっていると言えるが、では宮城県にありながら岩手県に接する気仙沼はどうなっているのか、その現状を確かめることが必要である。

条件では、岩手県に「ア段+バ」(書かば、など)が確認されている(国立国語研究所(1994)『方言文法全国地図』(以下GAJ)第3集132~135図を参照)。これが気仙沼市には現れるのか否かを確認したい。

以上のような点に留意しつつ、調査を行った。

1.3 調査の方法

調査は、共通語形を提示し、それを方言語形に翻訳してもらう方法をとった。まずは、後接形式を使うか否かを確認し、動詞についてもその終止形を用いて、その動詞を使うか否かを確認した。調査項目は28語×12形式=336項目である。

2 高年層の調査結果

ここではより伝統的な形式を保持していると考えられる高年層3名の結果を報告する。3名とも言語形成期を気仙沼市で過ごしており、調査時点でも気仙沼市在住の男性である。調査項目をほぼすべて調査することが出来たKY氏の結果を土台として、他の2名の方(KE氏、ON氏)の結果も合わせて一つの表として提示する(次頁表1)。そして、以下ではまず不変化部についての結果を述べ、各後接形式と変化部については、表1の中で特に共通語と異なる点について述べる。

2.1 不変化部

表1にはKY氏において回答された不変化部を挙げた。インフォーマントによっては多少異なるので、それも含めてここに記す。

まず「行く」の不変化部は、ON氏は*/ig/*で安定しているが、KY氏は*/ig~/iŋ/*の間で、KE氏は*/ig~/en/*の間で揺れがあった。「死ぬ」はKY氏はほぼ*/sün/*だったが、KE氏は*/sin/*という不変化部が多く現れた。「入る」「背負う」「教える」はKY氏において連母音融合が起これ、「入る」では*/hair/→/hæcr/*、「背負う」では*/seow/→/jow/*、「教える」では*/osiel/→/ofee/*が見られる。加えて、KE氏は「消える」

表 1 : 気仙沼市の動詞の活用

後接形式		否定	受身	役使	丁寧命令	希望	音便	終止	連体	推量・意志	禁止	条件	命令
不変化部		nee	reru	seru	IN	tee : dee	te	de	togi : dogi	pe	na	ba	Ø
五 段	力行	a	a	a	a	i	(i)	u	u	u	u	e	e
	行く	a	a	a	a	i	(Q)	u	u	u	u	e	e
	ガ行	a	a	a	a	i	(i)	u	u	u	u	e	e
	サ行	a	a	a	a	i	i	u	i	u	ü	e	e
	タ行	a	a	a	a	i	(Q)	u	u	u	ü	e	e
	ナ行	a	a	a	*	i	(N)	u	u	u	u	e	e
	ハ行	a	a	a	a	i	(N)	u	u	u	u	e	e
	マ行	a	a	a	a	i	(N)	u	u	u	u	e	e
	(-2拍母音o) 書く	ka(g)											
	(-2拍母音i) 取る	to(r)	a	a	a	i	(Q)	u	(Q)	(Q)	u/(N)	e	a e
	(-2拍母音i) 入る	he[ɛ(r)]	*	a	a	i	[Q]	u	*	(Q)/[Q]	(N)	e	e
	(-2拍母音i) 走る	hasu(r)	a	a	a	i	(Q)	u	(Q)	(Q)	u/(N)	e	e
	(-2拍母音e) 蹴る	ke(r)	a	a	a	i	(Q)	u	(Q)	(Q)	u/(N)	e	e
	(-2拍母音e) 喋る	jabe(r)	a	a	a	i	(Q)	u	(Q)	(Q)	u/(N)	e	e/o
	(-2拍母音a) 買う	k[a(w)]	a	a	a	i	(i)/[ɛæ]	(u)	(u)	(u)	(u)	(e)/[ɛæ]	(e)
ワ行	(-2拍母音a) 洗う	ar[a(w)]	a	a	a	i	(i)	(u)	(u)	(u)	(u)	(e)/[ɛæ]	(e)
	(-2拍母音u) 吸う	su(w)	a	a	a	i	(i)	(u)	(u)	(u)	(u)	(e)	(e)/(ɛ)
	(-2拍母音u) 食う	k[u(w)]	a/[a]	a	a	i	(i)	(u)	(u)	(u)	(u)	(e)	(e)/[ee]
	(-2拍母音o) 背負う	fo(w)	a	a	a	i	(i)	(o)	(o)	(Q)	(o)	(e)	(e)
	(-2拍母音o) 思う	omo(w)	a	a	a	i	(i)	(o)	(o)	(o)	(o)	(e)	(e)
	上	見る	ra	sa/ra	ra/sa	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
一 段	起きる	ogi	ra	sa/ra	ra	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
	出る	de	ra	sa	ra	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
	寝る	ne	ra	Ø	ra/sa	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
	消える	kie	*	*	ra	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
	教える	ojee	ra	sa	ra	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
	考える	kaNjae	ra	sa	ra	Ø	Ø	ru	Q	ru	ru/N	re	ro
変 格	力行	来る	ora	osa	*	i	i	uru	uQ	uQ	uru/uN	ure/ore	oi/q/o
	サ行	する	a	*	ira	i	i	uru	uQ	uQ	uru/uN	ure	iro/uro

※表の見方を示す。

基本的には、不変化部—変化部—後接形式をつなげれば語形が復元できるようになっている。

例)「書く」の否定形 **kag-a-ne** → **kagane**

表中の「Ø」は、変化部がなく直接不変化部に後接形式がつくことを表す。

例)「見る」の否定形 **mi-Ø-ne** → **mine**

また、終止形、命令形の後接形式も何もつかないということを「Ø」で示した。

五段動詞の不変化部と変化部に現れる()や[]は、音便などによりその括弧内が交替することを示す。

例)「入る」の否定形 **hæ(r)-(N)-ne** → **hæNne**

「入る」の音便形 **hæ[er]-[Q]-te** → **hæQte**

表中、変化部の太字斜体のものは、KY 氏以外の方の回答であることを表している。また「*」は3名のいずれからも回答が得られなかったものに付している。

※子音は/k, g, ŋ, s, t, d, n, h, b, m, r, w, j/を認めておく。「シ」は実際の発音が[ɕi]であっても/si/と解釈する。同様に「ヂ」は/di/、「ヅ」は/du/である。また、特殊拍は促音を/Q/、撥音を/N/とし、長音は母音を重ねることで表す。

※母音に関しては、無理にまとめることはせず、ある程度出てきたままに残しておく。これは、当該方言において母音の体系が把握できていないため、どの母音とどの母音が解釈上同じなのか（または異なるのか）の判断が付けられないからである。

で/kie/→/keel/、「考える」で/kaNjæ/→/kaNjæ/という不変化部も現れた。

2.2 否定形

否定形の後接形式は/nee/もしくは/ne/という形式が現れた。KY 氏はおおむね五段動詞が/ne/と短く、一段・カ変・サ変は/nee/であったが、長さも均一ではなくその境目が判然としないため表では/nee/で代表させた。これらはKE 氏においては/næ/、/næ/もしくは/ne/となる^{注2}。

この活用形は、ラ行五段動詞において撥音便が現れる。「取る」「蹴る」「喋る」では「トラネ」「ケラネ」「シャベラネ」という非音便形も現れているが、「取る」「蹴る」「喋る」という動詞個別の問題ではなく、ラ行五段動詞全体で音便形・非音便形のどちらでも適格であり、その中でも撥音便の方が優勢だということであろう。

また、特徴的なのはワ行五段動詞である。KE 氏においては、「カワネ」「アラワネ」が「カーネ」「アラーネ」のようになり、母音/a/に挟まれた子音/w/が脱落している。この/awa/という音環境は受身形・使役形、丁寧命令形などにも発生するが、KE 氏においてはこれらは未調査であるため、すべてそうなるかはわからない。ただし、近隣の陸前高田市や一関市では「アラーネー（洗わない）」とともに「アラーセル（洗わせる）」という語形が現れるので（斎藤（2001）を参照）、気仙沼市においてもそうなる可能性は指摘できよう。

同じくKE 氏からはワ行五段「思う」の否定形において「オモネー」「オモーネー」という語形が得られた。また、「食う」では「カンネ」が得られた。いずれもこれだけではデータ不足であり、ここから考察することはできないので、今回は現象の指摘にとどめる。

サ行変格「する」ではKE 氏、ON 氏からほぼ「スネアー」に近い/sünnæ/が得られた。これは「シ」と「ス」の音声が接近するという東北方言一般に見られる現象によるものである。「する」において同様の現象は以下、丁寧命令形、音便形、命令形においても見られ、いずれも共通語で/i/となると

ころで中舌寄りの*/ɲ/*が観察されている。これは「シ」が「ス」に近くなる例だが、逆にサ行五段動詞「消す」では、連体形「消す時」や禁止形「消すな」などで、共通語で「ス」となるところで「シ」に近い音 (*/kesidoɡi/ /kesūna/*) が見られたこともここに記しておく。

2.3 受身形・使役形

受身形と使役形は、いわゆる学校文法では五段動詞は「れる (受身)」「せる (使役)」、一段動詞は「られる (受身)」「させる (使役)」と後接形式を変化させるが、ここでは受身を「レル」、使役を「セル」に固定し、「ラレル」のラや「サセル」のサは変化部に含める。さて、その点を踏まえた上で表 1 を見ると、受身形は共通語と同じだが、使役形は多少異なっていることがわかる。

それは、上一段動詞において「サセル」とともに「ラセル」が出現しているという点であり、これは調査の観点で示したとおりである。この項目は KY 氏のみの回答であるが、「見る」「起きる」、また調査項目外で尋ねた「着る」でも「ラセル」が出現している (ミラセル、オギラセル、キラセル)。下一段動詞ではどうかという点についても尋ねたが、下一段動詞では「ラセル」は使わないとのことであった (*デラセル、*オシェーラセル、*カンガエラセル)。少なくとも KY 氏においては上一段動詞のみで「ラセル」が出現すると考えてよいだろう。

2.4 丁寧命令形

丁寧命令形は、「～しなさい」というような意味となるものであり、基本的には後接形式 */iN/* に接続する変化部の母音はア段が現れている。

丁寧命令形に関しては、「食う」では「クワイン」とともに「タベライン」、「来る」では「オイデライン」が回答された。そして、KY 氏によれば「クワイン」よりも「タベライン」のほうが優勢だということであった。これは「食う」と「食べる」という動詞において、より丁寧な「食べる」の方が丁寧命令として使うときは適当だということであろう。

また、「見る」「寝る」に関しては「ミライン」「ネライン」の他に、「ミサイン」「ネサイン」という語形も見られた。とりあえず今回はこの活用形に含めたが、五段動詞の方でも */saiN/* という形で現れてくるようであれば */iN/* とは別の後接形式として分けることも考えられる。これは例えば「書く」が「カギサイン」となれば、*/saiN/* が後接形式となり、一段動詞も含めていわゆる連用形接続として考えることが出来る、ということである。これもさらなる調査が必要である。

2.5 希望形

希望形はカ行変格「来る」、サ行変格「する」がそれぞれ「キテー」「シテー」となる以外は、「書く」は「カギデー」、「見る」は「ミデー」となり、すべて「デー」と有声化する。KE 氏は「買いたくなるから」が「ケーデグナッカラ」となっていたので、*/kai/ → /kæ/* となり不変化部を巻き込んだの形態変化が起こっている。これは同じ音環境をもつ「洗いたい」でも起こるものと考えられるが、これに関しては未確認である。

2.6 音便形

音便自体は他の活用形でも現れるのだが、ここで挙げるのはいわゆるテ形である。この変化部はほぼ共通語と変わらない。一点、「入る」が促音便を取る時、語幹の長音が短くなる点には注意を要する（「入って」は/hεQte/）。促音の前の長音が消去される（もしくは短くなる）という音韻規則が働いている可能性がある。同じく促音便となる推量・意志形でもやはり長音が保持されている形式（/hεεQpe/）とともに、長音が短くなっている形式（/hεQpe/）が回答されていることもここに記しておく。

共通語と異なるのは後接形式の方で、共通語では一段動詞に接続するとき、「見て」「出て」など「テ」に接続するが、気仙沼市では、これらはすべて「デ」に接続される。

2.7 終止形

終止形で共通語と異なるのは、ワ行五段動詞の次末位拍（以下、-2 拍と呼ぶ）の母音が/o/である場合、変化部は長音となり、「背負う」が「ショー」、「思う」が「オモー」となる点である。これによって、共通語の終止形はすべてウ段で終わるところが、気仙沼市ではオ段も入り込むこととなる。

2.8 連体形

ここで連体形として挙げたのは、具体的には「～する時」のように「トキ」に続くものである。

結果を見てみると、終止形が「ル」で終わるもの（ラ行五段、一段、カ変、サ変動詞。以下、これらを一括して「ル語尾」動詞と呼ぶ）は促音便が非音便形とともに現れ、それ以外は終止形と変わらない。促音便は、「ル」の代わりに現れていると言えよう。また、「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となるのは終止形と同様である。「消す」において「ス」の母音/u/が中舌寄りになり、むしろ/ɹ/の中舌音となっていることは先に述べたとおりである。

基本的に「トキ」は有声化して「ドギ」[dogi]となるが、促音便の後では多少その[d]の有声化が薄れ、[togi]もしくは[togi]となる（表 1 ではこれらをまとめて/togi/とした）。

2.9 推量・意志形

ここで挙げた後接形式「べ」は推量の意味としては共通語の「だろう」、意志や勧誘の意味としては共通語の「う・よう」に相当する。今回は「べ／ぺ」に接続していれば、このうちどの意味で捉えられていてもその点は不問とする。

さて、表 1 を見ると、これも連体形と同様、「ル語尾」動詞において促音便となっている。連体形と比べると非音便形もあまり回答されていないことから、音便形の方が優勢的に使われているであろうことが窺われる。また、「取る」「見る」「出る」においては撥音便も確認されたが、あまり活発に使われる状況にはないようである。例えば ON 氏は撥音便形を確認しても自分は使わないとのことだった。調査の観点のところでは挙げた促音便か撥音便かという問いに対しては、促音便が優勢

的に用いられるという答えとなるだろう。

他にも体系的な特徴としては、「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となったが、これは終止形、連体形と同様である。また、一段動詞の「見る」「起きる」「出る」「寝る」において不変化部に直接後接形式が接続するものが見られた（ミベ、ネベなど）。「ル」の脱落という点では「する」の「スベ」もこれらと同じ方向性のものかもしれない。「スベ」に関してはGAJ3-111図、114図から気仙沼市周辺（特に岩手側）に見られるので、これらとの関連性が考えられる。また、佐藤・加藤（1972）において、三陸地方南部では意志を表す場合に語幹（不変化部）に接続する「ベー」が現れるという言及がなされているので、表す意味によって使い分けがある可能性もある。

他に、今回の調査からは個別的な現象として見られるのは、「買う」の「カーベ」と「背負う」の「ショッペ」である。「買う」における「カーベ」の場合、否定形において現れた「カーネアー」は子音/w/の脱落という考えが成り立ったが、こちらは/au/→/aa/という変化を想定する必要があるため、否定形とはまた別に考える必要がある。ただし、斎藤（2001）によると陸前高田市において「洗うべ」が「アラー(ン)ベ」となるようなので、ワ行五段動詞で・2拍母音が/a/の場合、広くそのような接続が使用されている可能性はある。少なくとも同じく・2拍母音が/a/の「洗う」が同じような接続の仕方を見せるかどうかを確認する必要がある。「背負う」における「ショッペ」はKE氏の回答だが、同じくワ行五段動詞である「食う」は「クッペ」にはならないということであった。これに関しては少なくとも同じくワ行五段動詞であり、かつ同じく・2拍母音が/o/である「思う」が「背負う」と同じような接続の仕方を見せるかどうかを確認しなければ、これらが体系として扱えるかどうかはわからない。

2.10 禁止形

これも連体形、推量・意志形と同じく「ル語尾」動詞に音便形が現れているが、ここで現れている音便は撥音便である。「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となるのは終止形、連体形、推量・意志形と同様である。他に、「消す」「立つ」において、変化部の母音/u/が中舌寄りになっていたことも記しておく。

2.11 条件形

条件形では、「エ段＋バ」の形とともに、「ア段＋バ」も見られた。「ア段＋バ」はKY氏によれば「(～する) のであれば」という意味だという。つまり、「エ段＋バ」と「ア段＋バ」には意味的な使い分けが明確にあることになる。「ア段＋バ」の方はそれが認められる動詞と認められない動詞があるが、これは調査時に「(～する) のであれば」という意味での例文をうまく作ることが出来ず、意味的にそれが無いものと判断された可能性が高く、正しい例文が提示できれば空き（表中の「*」の部分）も埋まるものと思われる。

共通語との違いで言えば、ON氏の回答において、「来る」の条件形として「コレバ」が得られた。これはGAJ3-130図でも気仙沼市周辺に見られた語形である。

この他、KE 氏において、「買えば」「洗えば」でそれぞれ「ケアーバ」「アレアーバ」が見られた。
/kae/ → /kɛɛ/ もしくは /kɛæ/ という音変化が起こり、不変化部を巻き込んだ形態変化が起こっている
ものと見ることが出来る。

2.12 命令形

命令形において共通語と異なる点は、まずカ行変格「来る」において「コ」という語形が現れていることが挙げられる。また、KE 氏においては「来い」の /i/ が若干広口となり、「コエ」に近い発音も見られた。逆に、ワ行五段動詞においては /e/ が狭口となり、例えば「背負え」が「ショイ」に近い音となる現象も見られた。

この他、KE 氏においては、「食え」の /ue/ が /ee/ となっていた。また、「喋る」の命令形では、「シャベレ」とともに「シャベロ」が現れた。この後者の点については調査の観点でも述べたとおり、「喋る」が一段動詞に形態的に近いため、一段動詞のような命令形を生み出したものと考えることが出来る。

2.13 ここまでのまとめ

ここで、調査の観点に関して結果に即してまとめて述べることにする。

まず、ラ行五段動詞「蹴る」や「入る・走る・喋る」に下一段のような活用が現れるか否かという点だが、これについては「喋る」の命令形において「シャベロ」が見られた。

ワ行五段動詞に関しては、終止形にこそ「アラー」「アロー」などのかたちは出現しないものの、「買う」の否定形に「カーネアー」、「洗う」の否定形に「アラーネアー」、「買う」の推量・意志形に「カーベ」が現れた。また、「買う」の希望形に「ケアーデグ」（買いたく）、「買う」「洗う」の条件形に「ケアーバ」「アレアーバ」が見られることから、連母音の融合によって不変化部を巻き込んだ形態変化が起こっていることが確認できた。これらは連母音融合が活用形個別に形態的な変化をもたらしているものの、それがその動詞全体に影響を及ぼすまでには至っていないとみることが出来る。

後接形式に関して、一段動詞の使役において「サセル」が出るか「ラセル」が出るかという点だが、これは上一段動詞に「ラセル」が見られた。これにより、「ミラセル」「オギラセル」という語形ができ、ラ行五段動詞「トラセル（取らせる）」「ハシラセル（走らせる）」と語末の部分が同じになる。つまり、上一段動詞がラ行五段動詞に活用を近づけたということが出来るのである。

推量・意志では、その音便が撥音便を取るか促音便を取るかが問題となるのであった。これは、撥音便も多少は見られるものの、促音便が優勢という結果が得られた。

条件では、気仙沼でも「ア段+バ」（書かば、など）が確認された。これは「エ段+バ」と意味的な使い分けがあるようであった。

3 若年層の調査結果

さて、2005 年には若年層の調査も行っている。高年層の調査結果と多少異なる部分もあるので、それをここに記しておく。

まず、不変化部に関して、連母音融合があまり起こらなくなっていることが挙げられる。「背負う」において /seow/→/fow/ は安定して現れるが、「入る」における /hair/→/hæɪr/、「考える」における /kaŋgae/→/kaŋgæ/ は部分的にしか現れず、「消える」「教える」では連母音融合が起こらなかった。全体的に有声化もあまり起こらず、「書く」「行く」「立つ」「起きる」の不変化部も有声化することはあるものの、それぞれ /kək/ /ik/ /tat/ /oki/ が優勢的に用いられている。

否定形ではワ行五段動詞で撥音便が見られる。「買わない」が「カンネ」、「吸わない」が「スンネ」、「背負わない」が「ションネ」、「思わない」が「オモンネ」、「食わない」は「カンネ」であった。ただし、「洗わない」の「アランネ」は言わないとのことだった。また、カ行変格「来ない」でも撥音が挿入され「コンネ」という語形が確認された。

丁寧命令形では /iN/ ではなく /i/ という後接形式が得られた。これは、「書く」が「カカイ」、「見る」が「ミライ」などとなる。高年層においても実は /iN/ の撥音便があまり聞こえないこともあり、若年層だから /i/ になっているかどうかは不明である。また、「来る」の丁寧命令形では「キライ」「コライ」とともに「ライ」という語形が得られた。この「ライ」は老若問わず使うということだったので、調査量を増やせば高年層からも得られる語形なのかもしれない。

希望形は高年層では /dee/ が優勢であったが、若年層においては有声化しない /tee/ が優勢的に用いられている。

高年層では終止形、連体形、推量・意志形、禁止形においてワ行五段・2 拍母音 /o/ の「背負う」「思う」が「ショー」「オモー」となっていたが、若年層ではこれらは「ショウ」「オモウ」である。

推量・意志形ではやはり「ル語尾」動詞において促音便が優勢である。撥音便もあるかを尋ねると、使わなくはないが稀だという回答が得られた。また、高年層においてワ行五段「背負う」で「ショッペ」が見られたが、これは若年層でも同じである。加えて若年層ではワ行五段「買う」「吸う」「食う」において非音便形とともに撥音便形も確認された。「買う」は「カンベ」、「吸う」は「スンベ」であり、「食う」は「カンベ」となる^{注3}。また、バ行五段「飛ぶ」でも撥音便「トンベ」が見られた。

条件形では、サ行変格「する」において「スレバ」とともに「セーバ」が得られた。この長音は若干短く発音されることもある。

命令形では、高年層で見られたカ行変格「来る」の「コ」という語形は、若年層では聞けばわかるがあまり使うことはないという。高年層では「喋る」にだけ現れた一段動詞的な「シャベロ」のような語形は「蹴る」にも現れ（「ケロ」）、「入る」も「ハイロ」は言わないが連母音が融合した「ヘァーロ」であれば使うということであった。また、これについては調査項目外の動詞についても尋ねてみたが、その結果「ねじる」でも「ネジロ」を使うとの回答が得られた。

4 アンケート調査

4.1 調査概要

このような状況を踏まえて、2006 年度には気仙沼市生え抜きの方々に対してアンケート調査を行った。調査対象者は高年層 22 名、中年層 16 名、若年層 16 名、少年層 20 名の全 74 名、このうち回収できたのは 65 名分で回収率は 90%である。

調査したのは、2005 年度の調査において確認された「シャベロ」「ケロ」などの命令形がどのような単語に現れるのか、またその世代差があるのかという点と、推量・意志形において「ル語尾」動詞は促音便や撥音便となったが、ここに世代差はあるのか、という 2 点についてである。

まず 1 点目については、一段動詞に形態的に近いものに命令形「ロ」が現れるのではないかという予測から、-2 拍母音が /i/ と /e/ のラ行五段動詞を、拍数を変えていくつか挙げた。具体的には「切る」「蹴る」「練る」「入る」「走る」「ひねる」「しゃべる」「裏切る」「持ち帰る」の 9 つである。これらについて、以下のような質問文で、二択の選択式で回答してもらった。

- | | |
|--|-------|
| 1. 「髪が伸びてボサボサだから、髪を <u>切れ</u> 」と言うとき、「 <u>切れ</u> 」の部分を「 <u>切^きろ</u> 」と言うことがありますか。 | |
| 1. ある | 2. ない |
| 2. 「ボールをこっちに <u>蹴^けれ</u> 」と言うとき、「 <u>蹴^けれ</u> 」の部分を「 <u>蹴^けろ</u> 」と言うことがありますか。 | |
| 1. ある | 2. ない |

これらとの比較のために-2 拍母音が /a/ の「上がる」、/u/ の「もぐる」、/o/ の「戻る」についても同様に回答してもらった。

- | | |
|--|-------|
| 1 0. 「波が高くて危ないから陸へ <u>上^あがれ</u> 」と言うとき、「 <u>上^あがれ</u> 」の部分を「 <u>上^あが^ろ</u> 」ということがありますか。 | |
| 1. ある | 2. ない |
| 1 1. 「深く <u>も^もぐれ</u> 」と言うとき、「 <u>も^もぐれ</u> 」の部分を「 <u>も^もぐ^ろ</u> 」ということがありますか。 | |
| 1. ある | 2. ない |
| 1 2. 「さっさと仕事に <u>戻^{もど}れ</u> 」と言うとき、「 <u>戻^{もど}れ</u> 」の部分を「 <u>戻^{もど}ろ</u> 」ということがありますか。 | |
| 1. ある | 2. ない |

また、逆に一段動詞の命令形の変化部に「ロ」ではなく「レ」が現れることがないのかを探るために、以下の 2 問も設定した。

1. ある 2. ない

14. 「もう夜遅いから早く寝ろ」と言うとき、「寝ろ」の部分を「寝れ」ということがありますか。

1. ある 2. ない

15. 「一緒に帰ろう」と言うとき、「帰ろう」の部分はなんと言いますか。ふだん使うものすべてに○をつけてください。

1. かえっぺ (けえっぺ) 2. かえんべ (けえんべ)
3. かえるべ (けえるべ) 4. かえろー (けえろー)
5. その他 ()

4.2.1 -2 拍母音 /i//e/ のラ行五段動詞の命令形

表 2 : -2 拍母音 /i//e/ のラ行五段動詞の命令形

	切ろ	入ろ	走ろ	裏切ろ	蹴ろ	練ろ	ひねろ	しゃべろ	持ち帰ろ
拍数	2	3	3	4	2	2	3	3	5
-2拍母音	i	i	i	i	e	e	e	e	e
高年層(N=21)	42.9%	42.9%	38.1%	28.6%	38.1%	61.9%	61.9%	76.2%	38.1%
中年層(N=15)	86.7%	73.3%	80.0%	66.7%	80.0%	80.0%	100.0%	80.0%	80.0%
若年層(N=14)	50.0%	42.9%	14.3%	42.9%	64.3%	78.6%	78.6%	78.6%	57.1%
少年層(N=15)	60.0%	46.7%	40.0%	60.0%	80.0%	86.7%	86.7%	93.3%	86.7%
全体(N=65)	58.5%	50.8%	43.1%	47.7%	63.1%	75.4%	80.0%	81.5%	63.1%

まず先に図 2 から見てみよう。図 2 は調査結果から得られた割合を年層別に示したものである。

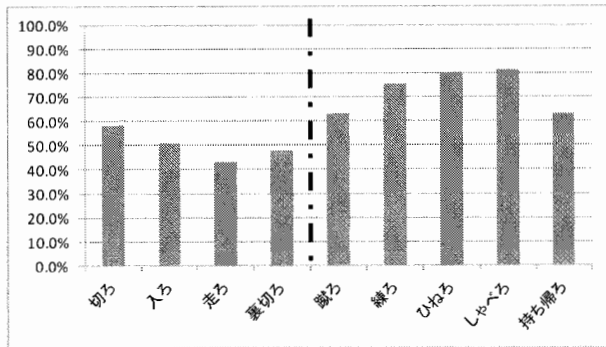


図 1：-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の
命令形（全体）

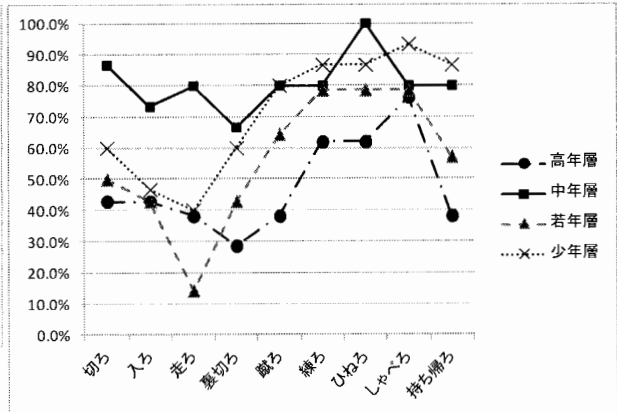


図 2：-2 拍母音/i//e/のラ行五段動詞の
命令形（年層別）

これを見ると、概略中年層＞少年層＞若年層＞高年層という順に使用する割合が低くなっていることが分かるが、なぜこのような順番となるのかについての答えは現段階で見出せていない。言語意識など他の諸要因をあわせて考えなければならないと思われるため、これについてはこれ以上の言及は避けておく。

さて、次に図 1 と表 2 をあわせて見てみよう。これらを見ると、拍数という要因はあまり効いておらず、-2 拍母音が/i/か/e/かという要因が命令形「ロ」の割合に大きく関与しているのがわかる。-2 拍母音/i/のものは 60%を超えることはないが、-2 拍母音/e/のものは、「ひねる」「しゃべる」で 80%を超え、割合が低いものでも 60%を切ることはない。

-2 拍母音が関係する証拠として、表 3 も示しておく。これは-2 拍母音が/a//u//o/のものの結果である。中年層が 20%台にあるが、全体としては/i//e/のものに比べてかなり低い値となっている。やはり、-2 拍母音が/i/や/e/であること、つまり一段動詞に形態的に近似していることが命令形に「ロ」が現れる現象にとって重要だと言える。

さて、ではなぜ-2 拍母音が/e/のもののほうが/i/のものよりも命令形に「ロ」が現れやすくなるのだろうか。

これに関しては、各活用種類の所属語数の多寡によって類推が起こったことがその要因として考えられる。田附（2004）では上野（1986）に記載されている動詞の資料をもとにその所属語数を挙げているが、それによると以下の表 4 のように、五段動詞が圧倒的に多く、下一段動詞がそれに続き 30%弱、上一段動詞は全語数中の 4%程度であることがわかる。

表 3：-2 拍母音/a//u//o/のラ行五段
動詞の命令形

	上がろ	もぐろ	戻ろ
-2拍母音	a	u	o
高年層(N=21)	14%	10%	10%
中年層(N=15)	27%	27%	20%
若年層(N=14)	0%	0%	0%
少年層(N=15)	0%	0%	0%
全体(N=65)	11%	9%	8%

表 4：各活用種類の所属語数と割合（田附（2004）より引用）

	五段	上一段	下一段	力変	サ変	計
語数	841	56	372	1	1	1271
割合	66.2%	4.4%	29.3%	0.1%	0.1%	100.0%

そして、ラ行五段動詞の・2 拍母音別の所属語数と割合も挙げているが、これを見るとラ行五段動詞の中では・2 拍母音/i/のものが少ないことがわかる。

表 5：ラ行五段動詞の・2 拍母音別の所属語数と割合（田附（2004）より引用）

	a	o	u	i	e	計
語数	138	58	46	34	15	291
割合	47.4%	19.9%	15.8%	11.7%	5.2%	100.0%

ここで、「ル語尾」動詞全体を・2 拍母音ごとに分けて考えると、・2 拍母音が/e/のものは、下一段動詞とラ行五段の中の・2 拍母音/e/の動詞、・2 拍母音が/i/のものは上一段動詞とラ行五段の中の・2 拍母音/i/の動詞、ということになる。表 4 と表 5 からその数を比べると、・2 拍母音/e/では下一段動詞が 372、ラ行五段の・2 拍母音/e/の動詞が 15 であり、圧倒的に下一段動詞の方が数が多いことがわかる。ここから、・2 拍母音が/e/のラ行五段動詞の命令形において「ロ」が現れやすいのは、数の多い下一段動詞への類推によって引き起こされたものだと推測できる。逆に・2 拍母音/i/では上一段動詞が 56、ラ行五段の・2 拍母音/i/の動詞が 34 となっていて、それほど数に差がない。上一段動詞には下一段動詞ほど類推を引き起こす力がないと見る事が出来る。このことがラ行五段動詞の・2 拍母音/i/の動詞と/e/の動詞の命令形に関する違いを生み出す素地にあると考えられるのである^{注4}。無論、これだけが原因ならば他の活用形でももっと一段動詞に活用を近づけるということが起こるはずであるが、実際はそうではない。命令形が他に先んじて変化する要因を突き止める必要があろう。今後の課題としたい。

さて、調査では一段動詞「起きる」「寝る」の命令形についても質問している。こちらは命令形が「起きれ」や「寝れ」という語形になるかどうかについて尋ねたものである。結果は表 6 のように、「起きれ」や「寝れ」にまったくならないわけではないが、かなり低い割合であることが窺える。つまりここから、気仙沼市においては一段動詞の命令形はあまりラ行五段化しておらず、・2 拍母音/i/のラ行五段動詞の命令形が一方的に一段動詞と同じ形態を取っている状況だと言えよう（ただし、それがどのように進んでいるのかは世代差からはわからないが）。

表 6：一段動詞の命令形

	起きれ	寝れ
	上一段	下一段
高年層(N=21)	14.3%	14.3%
中年層(N=15)	40.0%	33.3%
若年層(N=14)	35.7%	21.4%
少年層(N=15)	33.3%	40.0%
全体(N=65)	29.2%	26.2%

4.2.2 音便の世代差

ここでは「ル語尾」動詞の推量・意志形における音便の世代差について述べる。これに関しては、ラ行五段動詞「帰る」について、共通語で「一緒に帰ろう」（勧誘）というときの「帰ろう」の部分を普段何というかという設問で調査をした。結果が表 7 である。

表 7 から、まず促音便である「帰っぺ」が高年層・中年層で 90%前後、若年層・少年層では 100%

の方に用いられていることがわかる。これは他の形態に対しても優勢であり、2005 年度の調査結果にも合致している。

非音便形の「帰るべ」と共通語と同形の「帰ろう」に関しては、いずれも 50%前後と、あまり世代差は見られなかった。それに対して、顕著に世代差が見られたのは撥音便「帰んべ」である。「帰んべ」の使用率を見ると、高年層の 61.9%を頂点として、

表 7：ラ行五段動詞の促音便・撥音便

	帰っぺ	帰んべ	帰るべ	帰ろう
高年層(N=21)	90.5%	61.9%	57.1%	52.4%
中年層(N=15)	86.7%	40.0%	53.3%	60.0%
若年層(N=14)	100.0%	28.6%	42.9%	42.9%
少年層(N=14)	100.0%	13.3%	53.3%	46.7%
全体(N=64)	93.8%	38.5%	52.3%	50.8%

そこから年層が低くなるにつれ段々と使用率も下がっているのがわかる。ここから考えられるのは、高年層の上の世代では促音便と撥音便が均衡していた（どちらでもよかった）のが、徐々に促音便の方へ収束していくという流れである。宮城県北の内陸部では 1980 年ごろに撥音便が優勢だったのが、2010 年の調査では促音便が優勢となっており（加藤・佐藤・小林（1982）および田附（2011）参照）、この促音便に収束する流れは気仙沼市だけではなく、宮城県北一帯で起こっている現象のようである。また、もう少し地域と年代を広げてみると、1980 年代には栃木や福島、山形でもすでにこの撥音便から促音便への変化は見られており（井上（1984）参照）、北関東から南東北にかけて、（少なくとも）1980 年代ごろから進行している現象のようである。本報告は、その現象の一端を気仙沼市において観察したものだと捉えることが出来る。

5 今後の課題

最後に今後の課題を述べる。

2005 年の調査での一番の課題は何と言っても活用を体系として表すためにより多くの語、多くの後接形式を調べることである。今回は調査量の不足から調査資料をほぼそのまま提示したものとなったが、本来はここから形態的なまとまりを作り、動詞の活用体系全体を捉えることが出来るものを作らなければならない。

2006 年度の調査に関しては、「ル語尾」動詞の推量・意志形における音便の世代差について調査し考察したが、前述の佐藤・加藤（1972）の言及のように、「べ」が推量なのか意志なのかあるいは勧誘なのかによって、「べ／ぺ」に接続する時の形態に使い分けがある可能性がある（田附（2011）参照）。今回の例文の「べ」は勧誘の意味だったが、推量や意志の例文にすると、また違った結果となる可能性もあるのである。

ここでは、気仙沼市における動詞の活用体系を素描し、その中で 2 拍母音 /i/le/ のラ行五段動詞の命令形、ならびに「ル語尾」動詞の推量・意志形の音便についてアンケート調査を行った結果とその考察を述べた。いずれもいささか調査不足あるいは考察不足の感は否めず、今後の課題も大きい。それでも気仙沼市方言の一端を明らかにすることは出来たように思う。

- 注 1 2007 年度には南三陸地方で 2006 年度の気仙沼市のアンケート調査と同じような内容を面接調査にて行ったが、全体的に 2006 年度の気仙沼市の調査結果と同じような傾向となり、現時点ではそこに地理的な差異を見出すことが出来ていないため、本報告では 2005 年度と 2006 年度の結果に焦点を絞って述べることにする。
- 注 2 もう少し詳しい観察が必要だが、否定形が共通語において 3 拍になるもの（「見る」「出る」「寝る」「来る」「する」）が長音で出やすい傾向にある。これは、長音の部分が短くなることにより拍数が少なくなることを防いでいるためであると考えられる。
- 注 3 今回は一応この「カンベ」に関しては「食う」の活用を含めたが、本来的には「食う」ではなく「食らう」など他の動詞の可能性もある。
- 注 4 もっとも上野（1986）の資料は気仙沼市での調査のために作られたものではないので、そのすべての語が気仙沼市で用いられているわけではないし、気仙沼市で用いられているがこの資料の中にはないという語もあるだろう。そして、ここで数として挙げているのは異なり語数であり、気仙沼市で交わされる実際の談話の中でどの活用の種類に属する語がどのくらいの頻度で用いられているかという点も類推には関与していると考えられるが、この点もここでは考慮されていない。ただ、この資料から得られた語数の比は実際の談話においても一定の傾向として現れると考えられ、そうであるならばここでの考察も的外れではないと思われる。

文 献

- 井上史雄（1984）「現代東日本のベイの分布と変化」『東京外国語大学論集』34
- 上野善道（1986）「青森市動詞のアクセント」『日本海文化』13（井上史雄ほか編 1994『日本列島方言叢書〈2〉東北方言考 1 東北一般・青森県』ゆまに書房に再録）
- 加藤正信・佐藤和之・小林隆（1982）「宮城県北地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』19（井上史雄ほか編 1994『日本列島方言叢書 3 東北方言考 2 岩手県・宮城県・福島県』ゆまに書房に再録）
- 国立国語研究所（1994）『方言文法全国地図』第 3 集 大蔵省印刷局
- 小林隆（1996）「動詞活用におけるラ行五段化傾向の地理的分布」『東北大学文学部研究年報』45
- 斎藤孝滋（2001）『日本のことばシリーズ 3 岩手県のことば』明治書院
- 佐藤喜代治・加藤正信（1972）「三陸地方南部の言語調査報告」『日本文化研究所研究報告別巻』8・9（井上史雄ほか編 1994『日本列島方言叢書〈3〉東北方言考 2 岩手県・宮城県・福島県』ゆまに書房に再録）
- 田附敏尚（2004）「青森県五所川原市方言の一段・ラ行五段動詞の活用」『言語科学論集』8
- 田附敏尚（2011）「「べ」の接続と用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

格助詞相当形式「ンドゴ」

玉 懸 元

はじめに

2006 年度に行なわれた気仙沼市方言調査において、筆者は、格助詞相当形式「ンドゴ」に関する調査を行なった。本稿は、その調査結果を報告し、考察を行なうものである。

1 調査の目的と調査文の設定

気仙沼市方言には、「ンドゴ」という形式がある。その異形態として、一拍の長さを持たない「ン」を伴った「ンドゴ」や、「ン」を伴わない「ドゴ」や、それぞれの濁音が清音となった「ントコ」「ントコ」「トコ」など、多様な形がある。ここでは、気仙沼市方言においてもっとも多く観察される「ンドゴ」を代表形としておく。

この「ンドゴ」は、いわゆる目的語に後置され、格助詞を伴った形に相当する形式を作る。たとえば、行方不明になった飼い犬を探してきてもらうに際して、次のように言う。

(1) ウチノ イヌンドゴ サカ° ステキテ ‘うちの犬を探してきて’

2006 年度に行なわれた気仙沼市方言調査において、筆者は、この「ンドゴ」に関する調査を行なった。具体的に関心を持ったのは、次のような点である。

④ 「ンドゴ」は、どのような世代・性別において用いられているのだろうか。

⑤ 「ンドゴ」は、どのような用法を持っているのだろうか。具体的には、どのような名詞に対して用いられるのだろうか。たとえば、東日本諸方言に分布する「ンドゴ」やそれに類するものについては、有生名詞に対して用いられる一方、無生名詞に対しては用いられづらいものであることが明らかにされている（宮島達夫 1956、北条忠雄 1967、佐々木冠 1998・2004、日高水穂 2000、玉懸元 2002・2003・2011 など）。また、同じ有生名詞でも、特定のそれ（名詞「犬」の場合、ポチならポチという犬）を表す場合には「ンドゴ」の類が用いられやすく、一方、不特定のそれ（名詞「犬」の場合なら、犬という動物一般）を表す場合には用いられづらい方言があることも指摘されている（玉懸元 2002・2003 など）。以上の点、気仙沼市方言の「ンドゴ」については、どうだろうか。さらに、その名詞が述語動詞とどのような関係にあるかという点も、「ンドゴ」を使用することの適否にかかわってはいないだろうか。たとえば、(1) の「イヌ」は、「サカ° ス」という、いかにも他動詞らしい述語動詞を中心として描かれる事態（文）の項である。この述語動詞が自動詞的なものになった場合、同様に「ンドゴ」を使用できるのだろうか。

以上の関心に応じて、次の〔1〕～〔5〕を調査文として設定した。

〔1〕〔飼い犬が行方不明になった〕うちの犬ンドゴ 探してきて。

〔2〕〔飼い犬が行方不明になった〕うちの犬ンドゴ 知らないか？

〔3〕〔今度犬を飼うことになった〕どっかで犬ンドゴ 探してきて。

〔4〕 まんじゅうンドゴ 買ってきて。

〔5〕 グラウンドを走っている犬ンドゴ 見えるか？

これらの調査文は、上記⑥の関心に応じて作成したものである。上記④の関心については、この〔1〕～〔5〕による調査を通して、明らかになるものと考えた。

2 話者

筆者の調査（面接調査）には、気仙沼市出身在住の 72 名の方から協力を得た。その内訳は、次の通りである。

- ・高年層（60 歳以上） ……22 名（男性 12 名、女性 10 名）
- ・中年層（40・50 歳代） ……16 名（男性 8 名、女性 8 名）
- ・若年層（20・30 歳代） ……14 名（男性 6 名、女性 8 名）
- ・少年層（高校生） ……20 名（男性 10 名、女性 10 名）

3 調査結果

3.1 「ンドゴ」を使用する世代・性別

調査文〔1〕～〔5〕のいずれにおいても「ンドゴ」を使用しないと回答した話者（すなわち、「ンドゴ」を使用しないと考えられる話者）は、高年層女性 1 名、中年層女性 2 名、若年層男性 2 名のみであった。気仙沼市方言における「ンドゴ」は、老若男女の別なく用いられるものであることが分かる。

なお、以下では、「ンドゴ」を使用しない話者 5 名を掲げて、調査結果の報告と考察を進める。

3.2 「ンドゴ」の用法

調査文〔1〕～〔5〕のように「ンドゴ」を使用するか否かを尋ねたところ、次の結果を得た。

（2）調査文〔1〕～〔5〕それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数

- ・〔1〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 63 名（94.0%）
- ・〔2〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 47 名（70.1%）
- ・〔3〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 23 名（34.3%）
- ・〔4〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 8 名（11.9%）
- ・〔5〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 37 名（55.2%）

ここからは、〔1〕＞〔2〕＞〔5〕＞〔3〕＞〔4〕の順で「ンドゴ」が使用しづらくなる傾向が見てとれる。

では、このような傾向に、世代差はないだろうか。以下に、調査の結果を世代別に示す。

（3）調査文〔1〕～〔5〕それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数（高年層）

- ・〔1〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 20 名（高年層の 95.2%）
- ・〔2〕で「ンドゴ」を使用する話者 …… 17 名（高年層の 81.0%）

- ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 7名（高年層の 33.3%）
- ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 3名（高年層の 14.3%）
- ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 10名（高年層の 47.6%）

（4）調査文 [1] ～ [5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数（中年層）

- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 13名（中年層の 92.9%）
- ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 11名（中年層の 78.6%）
- ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 7名（中年層の 50.0%）
- ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 0名（中年層の 0.0%）
- ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 8名（中年層の 57.1%）

（5）調査文 [1] ～ [5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数（若年層）

- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 11名（若年層の 91.7%）
- ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 10名（若年層の 83.3%）
- ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 4名（若年層の 33.3%）
- ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 1名（若年層の 8.3%）
- ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 7名（若年層の 58.3%）

（6）調査文 [1] ～ [5] それぞれにおける「ンドゴ」の使用者数（少年層）

- ・[1] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 19名（少年層の 95.0%）
- ・[2] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 9名（少年層の 45.0%）
- ・[3] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 5名（少年層の 25.0%）
- ・[4] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 4名（少年層の 20.0%）
- ・[5] で「ンドゴ」を使用する話者 …… 12名（少年層の 60.0%）

各々の世代について、「ンドゴ」の使用が多く見られるものから使用があまり見られないものへと順に並べると、次のようになる。

- ・高年層 [1] > [2] > [5] > [3] > [4]
- ・中年層 [1] > [2] > [5] > [3] > [4]
- ・若年層 [1] > [2] > [5] > [3] > [4]
- ・少年層 [1] > [5] > [2] > [3] > [4]

このようにして見ると、（2）で見た傾向は、世代の差にかかわらず、全世代においてほぼ同様に認められることが分かる（少年層においてのみ、第二位と第三位の順が他の世代と異なるが、この点については後ほど検討する）。

4 「ンドゴ」の用法に関する考察

ここでは、以上の調査結果を踏まえ、「ンドゴ」の用法について考察する。調査文 [1] ～ [5] を再掲しておく。

- [1] [飼い犬が行方不明になった] うちの犬ンドゴ 探してきて。
 [2] [飼い犬が行方不明になった] うちの犬ンドゴ 知らないか？
 [3] [今度犬を飼うことになった] どっかで犬ンドゴ 探してきて。
 [4] まんじゅうンドゴ 買ってきて。
 [5] グラウンドを走っている犬ンドゴ 見えるか？

この調査文 [1] ～ [5] は、互いに次のような相違点（と共通点）を持っている。

まず「ンドゴ」によってマークされる語に注目すると、[1][2][3][5]におけるそれが「犬」という有生物である一方、[4]のそれは「まんじゅう」という無生物である。

有生物	無生物
[1] [2] [3] [5]	[4]

また [1] [2] [3] [5] の「犬」は、[1] [2] [5] のそれが「話し手の飼い犬」であれ「眼前のグラウンドを走っている犬」であれ、ある特定の（ポチならポチという）犬を指しているのに対して、[3] の犬は、特定の犬を指してはいない。

有生物	
特定	不特定
[1] [2] [5]	[3]

次に述語との関係に注目すると、[1] [2] の「探す」「知る」という動詞は、「〇〇が××を△△」という構文の「△△」に位置し得るという意味で、いわゆる他動詞であって、ここでの「犬」は、他動詞を中心として表される事態（文）の項である。それに対して [5] の「見える」という動詞は自動詞であり、ここでの「犬」は、自動詞を中心として表される事態（文）の項である。

さらに [1] の「探す」は、基本的には直接外界に働きかける行為を表していて、他動詞らしい他動詞である。一方 [2] の「知る」は、ある種の精神活動を表していて、その点で、典型的な他動詞とは距離を置いている。「みずから大人になって、はじめて親のありがたさを知る」などのように、自ずとそうなるという意味を表しうることにおいて、自動詞的な側面を持っている。つまり、[1] の「犬」は、他動詞らしい他動詞によって描かれる事態（文）の項であり、一方 [2] の「犬」は、一応他動詞ではあるものの自動詞的な側面を持った動詞によって描かれる事態（文）の項である。

他動詞文的事態の項	自動詞文的事態の項
[1]	[2] [5]

以上をまとめると、調査文 [1] ～ [5] において「ンドゴ」でマークされる名詞は、それぞれ、次のような特徴を持っていることになる。

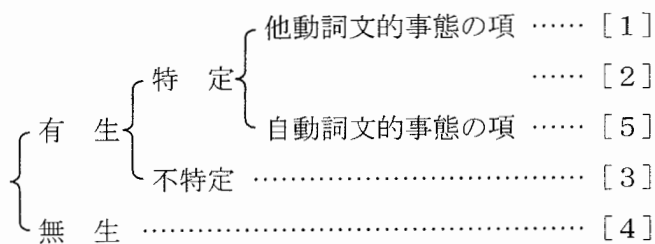


図1 調査文〔1〕～〔5〕において「シンドゴ」でマークされる名詞の特徴

さて、既に述べたように、ほぼ全世代において〔1〕＞〔2〕＞〔5〕＞〔3〕＞〔4〕の順で「シンドゴ」が使用しづらくなる傾向が認められるのであった。このことは、「シンドゴ」の使用の適否が次のような経緯で決定されていることを意味している。

まず、「シンドゴ」でマークされる候補となる名詞（以下「当該名詞」）が有生名詞か無生名詞かによって、第一のふるいがかけられる。当該名詞が無生名詞であれば、「シンドゴ」の使用が適さない。調査文〔4〕（当該名詞が無生物）で「シンドゴ」を使用する話者がきわめて少ないのは、これがこの第一のふるいによって真っ先に振り落とされるからである。

次に、当該名詞が特定のそれを表す名詞か、不特定のそれを表す名詞かによって、第二のふるいがかけられる。当該名詞が不特定のそれである場合、「シンドゴ」の使用は相対的に適さない。調査文〔3〕（当該名詞が不特定のそれ）で「シンドゴ」を使用する話者が、調査文〔1〕〔2〕〔5〕（当該名詞が特定のそれ）の群で「シンドゴ」を使用する話者よりも少ないのは、第二にこのようなふるいがかけられているからである。

最後に、当該名詞が他動詞文的事態の項か、自動詞文的事態の項かによって、第三のふるいがかけられる。文の表す事態がより自動詞文的事態の項であるほど、その項に対する「シンドゴ」の使用は、適さない。ほぼ全世代において、調査文〔1〕〔2〕〔5〕で「シンドゴ」を使用する話者が〔1〕＞〔2〕＞〔5〕の順で減ずるのは、第三にこのようなふるいがかけられているからである。

ところで、少年層においてのみ、この点に違いが見られる（〔1〕＞〔5〕＞〔2〕の順で「シンドゴ」を使用する話者が減じている）のは何故だろうか。これは、第三のふるいのみが程度性を持っていることによって生じたところの、回答の揺れであろうと考えられる。

第一の「有生か、無生か」というふるいも、第二の「特定か、不特定か」というふるいも、どちらかといえばどちらであるか（程度）を問題にすることなく、截然とどちらであるかを決められる性質を持っている。ところが、第三の「他動詞文的事態の項か、自動詞文的事態の項か」というふるいだけが、どちらかといえばどちらであるか（程度）を問題にする。程度を問題にする場合、往々にして判断に揺れが生じるものであって、少年層に見られた他の世代との差異は、世代的な変化のあらわれというよりは、他の世代においても生じる回答の揺れが今回の調査ではここに生じたものと考えられる。

以上、「シンドゴ」の使用の適否がどのような経緯で決定されているかを考えた。図示しておくと、次のようになる。



図2 「シンドゴ」を使用することの適否と、当該名詞の特徴

5 まとめ

以上、本稿では、次のようなことを述べた。

④「シンドゴ」を使用する世代・性別

気仙沼市方言における「シンドゴ」は、老若男女の別なく用いられる。

⑤「シンドゴ」の用法

気仙沼市方言における「シンドゴ」は、図2（再掲は省略）に示したように「有生∧特定∧他動詞文的事態の項」である名詞に対してもっとも用いられやすく、「有生∧特定∧自動詞文的事態の項」「有生∧不特定」「無生」の名詞となるにしたがって、用いられづらくなる（「∧」は連言（「かつ」）を意味する）。

文 献

- 佐々木冠（1998）「水海道方言の対格—有生対格と無生対格の統語論—」『日本語科学』4
- 佐々木冠（2004）『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版
- 佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂（2006）『方言の文法』岩波書店
- 玉懸 元（2002）「仙台市方言における格助詞相当形式『トコ』の用法」『国語学会 2002 年度秋季大会予稿集』国語学会
- 玉懸 元（2003）「格助詞・副助詞・終助詞」小林隆／編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 玉懸 元（2011）「目的語の標示形式」小林隆／編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 日高水穂（2000）「秋田方言の文法」秋田県教育委員会／編『秋田のことば』無明舎出版
- 北条忠雄（1967）「方言の実態と共通語化の問題点 秋田」『方言学講座』2 東京堂
- 宮島達夫（1956）「文法体系について—方言文法のために—」『国語学』25 国語学会

終助詞「ゴド」

玉 懸 元

はじめに

2006年度に行なわれた気仙沼市方言調査において、筆者は、終助詞「ゴド」に関する調査を行なった。本稿は、その調査結果を報告し、考察を行なうものである。

1 調査の目的と調査文の設定

気仙沼市方言には、「ゴド」という終助詞がある（異形態として「ゴダ」があるが、ここでは、気仙沼市方言において多く観察される「ゴド」を代表形とする）。これは、ものごとのありさまに驚いたり、感動したりした際に用いられるもので、名付ければ、感動の終助詞とでも呼ぶことができるだろう。

この終助詞は、動詞・形容詞・形容動詞の終止形や名詞＋ダの形（要するに、他の終助詞を伴わない言い切りの形）から接続し、たとえば、次のように用いられる（もともと、それぞれの用いられやすさには差がある。後述）。

(1) キレーナ^カ川ダゴドー

(2) キレーダゴドー

(3) キレーナ^カ川カ° アルゴドー

ただし、形容動詞から接続する際には、次のように連体形から接続する場合もしばしば見受けられる。

(4) キレーナゴドー

2006年度に行なわれた気仙沼市方言調査で、筆者は、この「ゴド」について調査を行なった。特に興味を惹かれたのは、次のような点である。

㉐「ゴド」は、どのような世代・性別において用いられているか。

㉑「ゴド」は、名詞「ゴド」(事)を出自とするものと考えられる。とすると、連体形から接続する形が本来であって、それが終助詞化するにしたがって終止形から接続するようになったのではないか。このことが世代差を観察することによって確認できないか。

㉒一口に感動表現と言っても、「きれいな川！（連体修飾を伴う名詞文）」「きれい！（形容動詞一語文）」「川がきれい！（形容動詞述語文）」「きれいな川がある！（動詞述語文）」など、その形式は幅広い。「ゴド」は、どのような形式の文とよくなじむのか。

以上の関心に応じて、次の〔1〕〔2〕を調査文として取り上げ、それぞれにおける「ゴド」の使用の適否を尋ねることにした。

〔1〕①この部屋、ずいぶん静かなゴドー

②この部屋、ずいぶん静かだゴドー

[2] ①きれいな川だゴドー

②きれいだゴドー

③川がきれいだゴドー

④きれいな川があるゴドー

調査文[1]は上記①、[2]は②の関心に応じて、定めたものである。上記②の関心については、[1][2]による調査を通して、明らかになるものと考えた。

2 話者

筆者の調査（面接調査）には、気仙沼市出身在住の 70 名の方から協力を得た。その内訳は、次の通りである。

- ・高年層（60 歳以上） ……22 名（男性 12 名、女性 10 名）
- ・中年層（40・50 歳代） ……15 名（男性 7 名、女性 8 名）
- ・若年層（20・30 歳代） ……13 名（男性 5 名、女性 8 名）
- ・少年層（高校生） ……20 名（男性 10 名、女性 10 名）

3 調査結果と考察

3.1 「ゴド」は、どのような世代・性別において用いられるか

調査文[1][2]のいずれにおいても「ゴド」を使用しないと回答した話者（すなわち、「ゴド」を使用しないと考えられる話者）は、中年層男性 1 名、若年層男性 1 名、少年層男女各 1 名のみであった。

共通語には「こと」という類似の終助詞があり、「ゴド」と同じく感動表現に用いられる（「きれいだこと」）。けれども、共通語の「こと」は、一定以上の年齢の女性による使用を想起させる（事実としてそうであるかは、別に調査が必要であるが）。それに対して、気仙沼市方言の「ゴド」は、そうした偏りを持たず、老若男女の別なく用いられるものであることが分かる。

なお、以下では、「ゴド」の不使用者である 4 名の話者を描いて、調査結果の報告と考察を進めることにする。

3.2 「ゴド」は、連体形と接続するか、終止形と接続するか

ここでは、調査文[1]による調査の結果について述べる。この調査文は、「ゴド」が連体形から接続するか、終止形から接続するかを明らかにしようとするものである。次の[1]①②のように「ゴド」を使用するか否かを尋ねた。

[1] ①この部屋、ずいぶん静かなゴドー（連体形接続）

②この部屋、ずいぶん静かだゴドー（終止形接続）

調査の結果は、次の通りである。

(5) 調査文 [1] による調査の結果

- ・連体形接続のみを使用する話者 …………… 6 名 (9.1%)
- ・連体形接続と終止形接続を併用する話者 ……… 18 名 (27.3%)
- ・終止形接続のみを使用する話者 …………… 42 名 (63.6%)

終止形接続を使用する話者が多数ではあるものの、連体形接続を使用する話者も全体の 3～4 割 (24 名) に上り、決して少数ではない。

この点については、世代差を見ることが興味深い。各年層における連体形接続の使用者数は、次の通りである。

(6) 連体形接続の世代別使用者数

- ・高年層 ……… 13 名 (高年層話者の 59.1%)
- ・中年層 ……… 6 名 (中年層話者の 42.9%)
- ・若年層 ……… 2 名 (若年層話者の 16.7%)
- ・少年層 ……… 3 名 (少年層話者の 16.7%)

このように、連体形接続を使用する話者は、主として高年層 (～中年層) であって、世代が若くなるにしたがって使用されなくなっていることが見てとれる。

さらに、話者それぞれの回答を見てみる。次の図 1～4 は、高年層・中年層・若年層・少年層の話者を生年順 (生年は 1900 年代の下二桁を示した) に並べ、話者それぞれが連体形接続／終止形接続を使うか否かを、「● (使う)」 「× (使わない)」の記号で示したものである。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
生 年	26	27	28	30	30	31	33	35	38	38	38	39	40	40	41	42	42	42	43	43	43	45
性 別	男	女	男	男	女	男	男	男	女	女	男	女	男	男	女	女	女	女	男	男	男	女
連体形接続	●	●	●	●	×	×	●	●	●	●	×	●	×	●	×	×	●	×	×	×	●	●
終止形接続	×	●	●	●	●	●	●	×	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図 1 連体形接続か、終止形接続か (高年層話者それぞれの回答)

No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
生 年	48	48	49	50	50	50	50	51	53	55	56	56	56	64
性 別	男	男	女	女	女	女	女	女	男	男	男	男	女	女
連体形接続	×	×	●	●	×	×	×	●	●	×	×	●	●	×
終止形接続	●	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図 2 連体形接続か、終止形接続か (中年層話者それぞれの回答)

No.	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
生 年	67	69	72	76	76	79	80	82	83	84	84	86
性 別	女	男	女	女	女	女	男	男	女	女	女	男
連体形接続	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×
終止形接続	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

図 3 連体形接続か、終止形接続か (若年層話者それぞれの回答)

No.	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66
生 年	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	89	90	90
性 別	女	男	男	女	女	女	女	男	男	女	男	男	女	男	男	男	女	女
連体形接続	×	●	×	×	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	●	×	×	×
終止形接続	●	×	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	×	●	●	●

図4 連体形接続か、終止形接続か（少年層話者それぞれの回答）

このようにして見ると、1940年以前に生まれた話者（図中の No.1～14。ここでは「最高年層」と呼ぶことにする）において、連体形接続を使用する話者がまとまって認められることが分かる。

ところで、一般に、言語形式Aが新しい言語形式Bに置き換わるまでには、次のようなプロセスが踏まれる。

[1]	[2]	[3]	[4]	[5]
A	A	A	A	
	B	B	B	B

図5 言語形式が置き換わるプロセス

左端の [1]は、新しい言語形式Bがまだ現れず、Aのみが使用されている段階である。次の[2]は、新しくBが現れ、それによってAの勢力がやや弱まる段階である。続く[3]は、Bが勢力を伸ばし、Aの勢力がいっそう弱まり、両者が拮抗する段階である。[4]の段階になると、Aの勢力がすっかり弱まり、Bが主たる言語形式となる。最後の[5]の段階では、Aが減び、Bのみが使用されるようになり、置き換えが完了する。

さて、あらためて図1を見ると、最高年層である話者（No.1～14）においては、連体形接続と終止形接続とが凡そ同等の勢力を持っていることが見てとれる。すなわち、この世代は、「ゴド」の接続の仕方が連体形接続（もともとの接続の仕方）から終止形接続（新しい接続の仕方）へと置き換わっていく過程における、ちょうど中間的な段階（図5における[3]の段階）にある世代と考えられる。高年層（No.15～22）および中年層の話者では、連体形接続も見受けられるけれども、終止形接続が主流となっている。この世代は、図5における[4]の段階にある世代である。そして、若年層・少年層と世代が若くなると、連体形接続を使用する話者は、ほとんど見られなくなる。この世代は、終止形接続への置き換えが完了しようとする段階（図5における[5]に近い段階）にある世代として位置づけられるだろう。以上のことを図示すると、次のようになる。



図6 各世代における、連体形接続と終止形接続の使用状況

3.3 「ゴド」は、どのような形式の文となじむか

続いて、調査文〔2〕による調査の結果について述べる。この調査文は、「ゴド」がどのような形式の文とよくなじむのかを明らかにしようとするものである。まず「旅行先でとてもきれいな川を見たします」と前置きした上で、次の〔2〕①～④のように「ゴド」を使用するか否かを尋ねた。

〔2〕①きれいな川だゴドー（連体修飾を伴う名詞文＋ゴド）

②きれいだゴドー（形容動詞一語文＋ゴド）

③川がきれいだゴドー（形容動詞述語文＋ゴド）

④きれいな川があるゴドー（動詞述語文＋ゴド）

調査の結果は、次の通りである。

（7）調査文〔2〕による調査の結果

- ・①で「ゴド」を使用する話者 …… 60名（90.9%）
- ・②で「ゴド」を使用する話者 …… 54名（81.8%）
- ・③で「ゴド」を使用する話者 …… 32名（48.5%）
- ・④で「ゴド」を使用する話者 …… 20名（30.3%）

①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文において、8～9割の話者が「ゴド」を使用し、この形式の文が「ゴド」とよくなじむものであることが分かる。一方、補語を持った③形容動詞述語文や④動詞述語文では、前者で5割弱、後者で3割弱の話者にしか「ゴド」の使用が認められない。特に④動詞述語文は、「ゴド」とはなじまない形式であることが伺える。

このような傾向に、世代による違いはないだろうか。以下に、調査文〔2〕による調査の結果を世代別にして示す。

（8）調査文〔2〕による調査の結果（高年層）

- ・①で「ゴド」を使用する話者 …… 20名（高年層の90.9%）
- ・②で「ゴド」を使用する話者 …… 20名（高年層の90.9%）
- ・③で「ゴド」を使用する話者 …… 12名（高年層の54.5%）
- ・④で「ゴド」を使用する話者 …… 10名（高年層の45.5%）

（9）調査文〔2〕による調査の結果（中年層）

- ・①で「ゴド」を使用する話者 …… 11名（中年層の78.6%）
- ・②で「ゴド」を使用する話者 …… 10名（中年層の71.4%）
- ・③で「ゴド」を使用する話者 …… 7名（中年層の50.0%）
- ・④で「ゴド」を使用する話者 …… 3名（中年層の21.4%）

（10）調査文〔2〕による調査の結果（若年層）

- ・①で「ゴド」を使用する話者 …… 11名（若年層の91.7%）
- ・②で「ゴド」を使用する話者 …… 9名（若年層の75.0%）
- ・③で「ゴド」を使用する話者 …… 5名（若年層の41.7%）
- ・④で「ゴド」を使用する話者 …… 4名（若年層の33.3%）

(11) 調査文〔2〕による調査の結果（少年層）

- ・①で「ゴド」を使用する話者 …… 18名（少年層の100%）
- ・②で「ゴド」を使用する話者 …… 15名（少年層の83.3%）
- ・③で「ゴド」を使用する話者 …… 8名（少年層の44.4%）
- ・④で「ゴド」を使用する話者 …… 3名（少年層の16.7%）

このようにして見ると、(7) で見た傾向は、世代の差にかかわらずなく、全世代において同様に認められることが分かる。この傾向は、次のように示すことができるだろう。

(12) 「ゴド」となじむ文の形式

①連体修飾を伴う名詞文 \geq ②形容動詞一語文 $>$ ③形容動詞述語文 $>$ ④動詞述語文
「 $>$ 」の左側が「ゴド」とよりなじむ文の形式である。高年層において①連体修飾を伴う名詞文と②形容動詞一語文とに同数の使用者があることを考慮して、①と②の間は「 \geq 」とした。

では、なぜ「ゴド」は、世代を超えて、①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文とよくなじみ、一方、④動詞述語文とはなじまないのだろうか。

この問題を考えるに際して手掛かりになるのは、山田孝雄の提唱した「喚体と述体」の概念である。

まず「きれいな川！」のような①連体修飾を伴う名詞文とは、感動喚体の形式そのものである。喚体は、「主格と述格の区別がない、直感的・一元性の、感情的な発表形式」（山田孝雄 1950、146・148 ページより要約）であって、その一種である感動喚体は、まさしく感動表現にふさわしい（感動表現をこそ役割とする、と言うべきか）。また、「きれいな川！」のような②形容動詞一語文は、感動喚体の形式そのものではないけれども、喚体と同じく補語を持たないことによって、二元的な述体の文と距離を置いている。

一方、「川がきれい！」のような③形容動詞述語文となると、もはや主格補語を持ち、これは述体の文である。述体は、「主格と賓格の対立がある、二元的性の、理性的な発表形式」（山田孝雄 1950、146・148 ページより要約）であって、感動表現には必ずしもふさわしくない。これがさらに④「きれいな川がある！」となると、主格補語の他にも（たとえば「あそこに」などの）補語を持ちうる、いっそう述体らしい述体となる。

以上のことをまとめると、次のようになる。

(13) 「ゴド」となじむ文の形式と、喚体らしさ・述体らしさ

①連体修飾を伴う名詞文 \geq ②形容動詞一語文 $>$ ③形容動詞述語文 $>$ ④動詞述語文
喚体的 \longleftarrow \longrightarrow 述体的
(一元性・感情的) (二元性・理性的)

「ゴド」が①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文とよくなじみ、一方④動詞述語文となじまないのは、「ゴド」は、感動を表すに際して用いられる終助詞であって、したがって、感動表現にふさわしい形式の文（喚体的な文）とはよくなじむものの、その表現に必ずしもふさわしくない形式の文（述体的な文）とはなじまない、という事情によるものと理解されるだろう。

ところで、(8)～(11)で示したように、どのような形式の文が「ゴド」とよくなじむかについては、世代差が認められないのであった。このことは、感動表現にどのような形式の文が好まれるかについて世代差が認められない、と理解し直すことができる。

それでは、この点について、地域差はあるのだろうか。筆者は、2004年度に宮城県白石市方言の終助詞「ゴダ」(これは、気仙沼市方言の「ゴド」と同様、感動表現で用いられる終助詞である)について、調査を行なった。そこで「ゴダ」となじむ感動表現の形式を調査したところ、気仙沼市方言の「ゴド」の場合と同傾向の結果が得られた(玉懸元 2012 予定)。このような調査を各地域の方言において推し進めていけば、日本語において普遍的に好まれる(あるいは、好まれない)感動表現の形式が見出されそうである。が、これは、本稿が取り上げるべき問題の範囲を大きく超えてしまう。非常に興味深い問題として、指摘するにとどめておく。^{注1}

4 まとめ

以上、本稿では、次のようなことを述べた。

㊐「ゴド」は、どのような世代・性別において用いられるか

老若男女の別なく用いられるものである。

㊑「ゴド」は連体形と接続するか、終止形と接続するか

終止形接続を使用する話者が多数ではあるものの、連体形接続を使用する話者も全体の3～4割に上り、決して少数ではない。

この連体形接続の使用については、世代差が認められ、使用する話者は主として高年層(～中年層)であって、世代が若くなるにしたがって使用されなくなっている。そのより具体的な様相は、次のようである。

最高年層である話者(1940年以前に生まれた話者)においては、連体形接続と終止形接続とが凡そ同等の勢力を持っている。すなわち、この世代は、「ゴド」の接続の仕方が連体形接続(もともとの接続の仕方)から終止形接続(新しい接続の仕方)へと置き換わっていくプロセスにおける、ちょうど中間的な段階にある世代である。高年層(1941～1945年生まれの話者)および中年層の話者では、連体形接続も見受けられるけれども、終止形接続が主流となっている。若年層・少年層と世代が若くなると、連体形接続を使用する話者は、ほとんど見られない。すなわち、この世代は、終止形接続への置き換えが完了しようとする段階にある世代である。以上のことを図示すると、次のようになる(再掲)。

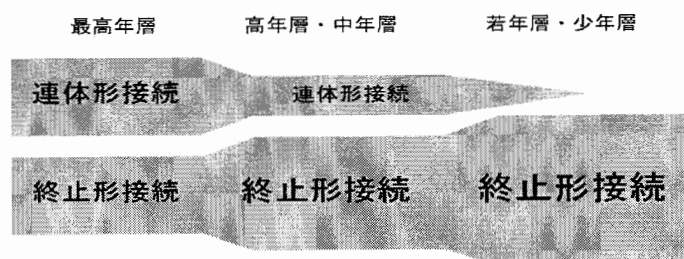


図6 各世代における、連体形接続と終止形接続の使用状況

◎「ゴド」は、どのような形式の文となじむか

①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文において、8～9割の話者が「ゴド」を使用し、この形式の文が「ゴド」とよくなじむものであることが分かる。一方、補語を持った③形容動詞述語文や④動詞述語文では、前者で5割弱、後者で3割弱の話者にしか「ゴド」の使用が認められない。特に④動詞述語文は、「ゴド」とはなじまない形式であることが伺える。このような傾向は、世代の差にかかわらず、全世代において同様に認められる。

この傾向は、文の喚体らしさ・述体らしさの反映と考えられる。すなわち、「ゴド」が①連体修飾を伴う名詞文や②形容動詞一語文とよくなじみ、一方、④動詞述語文となじまないのは、「ゴド」は、感動を表すに際して用いられる終助詞であって、したがって、感動表現にふさわしい形式の文（喚体的な文）とはよくなじむものの、その表現に必ずしもふさわしくない形式の文（述体的な文）とはなじまない、という事情によるものと理解される。

以上のことをまとめて示すと、次のようになる（再掲）。

(13) 「ゴド」となじむ文の形式と、喚体らしさ・述体らしさ

①連体修飾を伴う名詞文 ≥ ②形容動詞一語文 > ③形容動詞述語文 > ④動詞述語文
喚体的 ←—————→ 述体的
(一元性・感情的) (二元性・理性的)

注

注1 生越直樹（2002）は、日本語と朝鮮語とにおける、連体修飾を伴う名詞文（[A+N] 構文）を対照し、朝鮮語の感動表現としては、連体修飾を伴う名詞文よりも「形容詞文の方がより自然な表現であることが多」いことを指摘している（生越直樹 2002、96 ページ）。このことは、連体修飾を伴う名詞文という形式が、言語を超えて感動表現にもっともふさわしい形式であるわけではない、ということを示している。このような研究成果も、感動表現の形式に関する言語（方言）間の対照研究に対する興味をかき立ててくれる。

文 献

- 生越直樹（2002）「日本語・朝鮮語における連体修飾表現の使われ方―「きれいな花！」タイプの文を中心に―」生越直樹／編『対照言語学』東京大学出版会
- 玉懸 元（2012 予定）「終助詞『ゴダ』」小林隆／編『宮城県白石市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 山田孝雄（1950）『日本文法学要論』角川書店（書肆心水より『山田国語学入門選書①日本文法学要論』として 2009 年に再刊）

ヴォイス（受身・可能）

竹 田 晃 子

1 はじめに

本稿は、2005 年・2006 年・2007 年に行われた気仙沼市・南三陸地方における方言調査のうち、調査票の作成を筆者が担当したヴォイスについて報告するものである。

2005 年は気仙沼市の高年層 3 名を対象に、筆者が面接調査を行った。2006 年は気仙沼市の高年層から高校生までの 74 名を対象に、2007 年は南三陸地域における 80 代から 20 代の 41 名を対象に、筆者を含む調査者が分担して面接調査を行った。

本稿では、2005 年の伝統的気仙沼市方言の記述調査、2006 年の気仙沼市における多人数調査、2007 年の南三陸地方における分布調査の順に、調査結果を報告する。なお、調査における回答の表記について、注目する部分をカタカナ（下線付き）で示し、その共通語訳を文の後に（ ）に入れて示す。また、それ以外の部分は漢字ひらがな交じりで示す。

2 伝統的方言の記述調査

2.1 調査の概要

2005 年の記述調査では、宮城県沿岸北部に位置する気仙沼市の伝統的方言におけるヴォイス（特に受身・可能）を把握し、特徴を明らかにすることを目的として調査を行った。特に、(1)受身文における動作主マーカーの使い分け（ニ／ニカッテ／サ）、(2)受身・自動詞表現との連続性、(3)共通語の「～てもらう」相当の表現での受身文使用、(4)共通語の受身文相当の表現での非受身文使用を確認することを目的とした調査票を用意した。共通語例文を当該方言に翻訳し、実際に発音してもらう方法で行い、場合によって予想語形を提示し、使用の有無や使い分けをたずねた。

話者は、2005 年・記述調査については次の 3 名である。本稿では、伝統的方言の記述調査を目的とするため、主に高年層の〔1937 男〕〔1938 男〕を対象とした調査結果について述べ、必要に応じて〔1956 男〕の回答に触れる。

生年	性別	年齢	言語形成期	調査年月日
1937(昭和 12)年	男	67	気仙沼市大島外畑	2005 年 7 月 31 日午後
1938(昭和 13)年	男	66	気仙沼市三日町	2005 年 8 月 1 日午前
1956(昭和 31)年	男	49	気仙沼市河原田	2005 年 8 月 1 日午後

2.2 受身表現

2.2.1 動作主を表す格助詞（ニ／カラ／サ／ニヨッテ）の使い分け

気仙沼市方言では、能動文のヲ／ニ格名詞句を受身文の主語にする直接受身文において、有情物から有情物への方向性がある動詞ではカラが回答された。

- (1) あの先生あ、生徒たちガラ 信頼されてるな。
- (2) 武（タケン）あ お父さんガラ おごられた。
- (3) 昨日、武あ お父さんガラ 仕事を頼まった。
- (4) さっき、武あ お父さんガラ すぐ帰って来いと言われだっけ。
- (5) 武あ 犬ガラ 追かけられた。

非情物が動作を受ける受身文で、事実を叙述するような場合にはカラは用いられにくく、(6)

(7) のようにニを用いた受身文か、(8) のように受身文ではなく能動文が回答される。

- (6) その記事あ 河北新報の記者ニ 書がれた。
- (7) 松島あ 芭蕉ニ 詠まれたとごろだ。
- (8) 白石城あ 白石市が建てだ。〈非受身文〉

能動文にない名詞句が受身文の主語になる間接受身文では、ニが用いられる。

- (9) 武あ 運動会で次郎ニ 前を走られた。
- (10) 武あ 先生ニ ライバルの次郎をほめられた。
- (11) 傘 持たないで出かけたら、帰りに雨ニ 降られた。

使役受身文ではニとカラが用いられる。カラは、特に迷惑の意味を表現したい場合に用いられ、ニカカッテは回答されなかった。

- (12) 武ニ／カラ 変な物を食べさせられた。
- (13) (期待していたのに) 武ニ／カラ 本当にかっかりさせられた。

2.2.2 授受文と受身文

方向性のある動作の受け手に恩恵がある場合、共通語では「てもらう」が使われるが、気仙沼市方言では受身文が使われやすい。気仙沼市方言では、「～てもらう」はほとんど回答されず、主に受身文が回答された。

- (14) 彼女から子供の頃の話 キカサレダ。(聞かせてもらった)
- (15) 友達のお母さんがら りんご オグラレダ。(送ってもらった)
- (16) 夏祭りで、うちの子供たちあ ボランティアの人たちがら 世話サレダ。(してもらった)
- (17) 今日の授業で先生がら アデラレダガッタのに。(指名してほしかったのに)
- (18) でぎれば あんだに スケライデ。(助けてもらいたい)
- (19) そんなに余っているなら、少し ユズラレに 行けばよかった。(譲ってもらいに)

2.3 可能表現

2.3.1 状況可能

状況可能の否定文では、動詞＋助動詞レルが用いられる。

(20) この着物 古くなったので もう キラレネ。(着ることができない)

許可がないために動作ができない文にも、助動詞レルが用いられる。

(21) 留守番 頼まったがら、今日は散歩に イガレネ。(行くことができない)

(22) (家族に) 出かけるなど言われたから、今日は散歩に イガレネ。(行くことができない)

上記のように、状況可能の否定文では主に動詞+助動詞レルが用いられるが、可能動詞も用いられる。ただ、(23) のように暗くても少しは読めるような場合や、(24) のように泥まみれになってもよければ歩いて行ける場合など、程度問題であると認識された場合、動作を可能にする条件が状況よりも能力として解釈され、可能動詞も用いられることがある。

(23) この部屋 暗いがら、新聞 ヨマレネ／ヨメネ。(読むことができない)

(24) 道 悪いがら、この先は イガレネ／イゲネ。(行くことができない)

肯定文では、動詞+ノアイー／ヌイー／ナイー（以下、「動詞+ノアイー類」と称する）と、動詞+ニイーが用いられる。

(25) 今日は雨が降っていないから、この先もたぶん イグノアイー／イグナイー／イグニイー。
(行くことができる)

(26) 実際に歩いてみたら、最後まで イグナイガッタ／イグニイガッタ。(行くことができた)

(27) 留守番 頼まれながったがら、今日は散歩にイグノアイー／イグナイー／イグニイー。(行くことができる)

(28) 電灯 明るいがら、新聞 ヨムナイー／ヨムニイー。(読むことができる)

(29) 目覚まし時計 あるがら、早く オギンナイー／オギンニイー。(起きることができる)

(30) 車 あるがら、早く クンナイー／クルニイー。(来ることができる)

東北方言における可能表現・肯定文には、広くニイーが用いられることが知られているが、『方言文法全国地図』第4巻の第173～179図では、気仙沼市（字東八幡前，1973 男）に、動詞+ノアイー類が回答されている（一部、動詞+ニイーと併用回答）。この、動詞+ノアイー類は、『方言文法全国地図』においては、気仙沼市にみられる特徴的な形式である。一方で、東北方言の通信調査資料である小林好日資料（1940 年頃調査）にはこの形式が認められない。したがって、新しい形式である可能性が考えられる。今回の調査では、〔1956 男〕においてもこの形式が回答され、気仙沼市方言においては広く用いられる形式であることが明らかになった。

2.3.2 能力可能

能力可能の否定文では、可能動詞が用いられる。

(31) 足が遅いから、運動会で速く ハシレネ。(走ることができない)

(32) うちの孫あ まだ小さくて字を知らないがら本 ヨメネ。(読むことができない)

(33) 人間あ 空を トベネ。(飛ぶことができない)

(34) 一人で五人前は タベレネ／クエネ。(食べることができない)

肯定文では、動詞+ノアイー類、動詞+ニイーと可能動詞が回答される。可能動詞が用いられる

点で、状況可能の肯定文と異なる。

(35) 足あ 速いから、誰よりも速く ハシンナイー／ハシレル。(走ることができる)

(36) 練習したら前よりずっと速く ハシンナイグなった／ハシレルヨーニなった。(走れるようになった)

(37) 鳥は空を トブニイー／トベル。(飛ぶことができる)

2.3.3 属性可能

属性可能の否定文では、動詞＋レルと可能動詞が用いられる。

(38) 河豚あ 毒があるから、クワレネ／カレネ。(食べることができない)

(39) この車あ 小さいので山の中でこぼこ道を ハシレネ。(走ることができない)

次の(40)のカガンネ(カガルの否定形)のように、自動詞相当の形式が用いられる場合もある。

(40) この万年筆あ インクがなくて カガンネ／カゲネ。(書くことができない)

肯定文では、動詞＋ノアイー類、動詞＋ニイー類と可能動詞の他に、動詞によっては(42)のカガルのような自動詞相当の形式が用いられる。

(41) この車あ 大きいので山の中でこぼこ道を ハシンナイー／ハシルニイー。(走ることができる)

(42) この万年筆あ すらすらと カグノアイー／カガル／カゲル。(書くことができる)

カガルのような自動詞相当の形式が存在する動詞は限られており、たとえば「走る」に対するハシラル、「食う」に対するクワルのような形式は確認されなかった。[1956 男]も同様である。

2.4 まとめ

東北方言における受身表現で動作主を表す格助詞には、ニ、カラ、サ、ニカカッテなどがある。共通語のカラは、「尊敬する」など感情の動きや「頼む」などやりとりを表す動詞による受身文にしか用いられないが、東北方言では「追いかける」のような物理的働きかけを表す動詞の受身文にもカラが用いられる。また、若年層では受身文の動作主においてサの使用率が高くなっていることが知られている。これらと比べると、気仙沼市方言では、カラは直接受身文で用いられ、ニは直接受身文のうち非情物が動作を受ける場合と間接受身文に用いられる。高年層においては、サ、ニカカッテが回答されなかった。

また、授受文と受身文については、共通語などで用いられる「ーテモラウ」などの授受を表す形式が使われないわけではないのだが、受身形が代替形式として使われることが確認された。

可能表現においては、状況可能・否定文で動詞＋助動詞レルと可能動詞、状況可能・肯定文では動詞＋ノアイー類と動詞＋ニイーが用いられる。能力可能・否定文では可能動詞、肯定文では動詞＋ノアイー類、動詞＋ニイーと可能動詞が用いられる。属性可能・否定文では動詞＋レルと可能動詞、肯定文では動詞＋ノアイー類、動詞＋ニイー類と可能動詞の他に、カガルのような自動詞相当の形式が用いられる。

3 多人数調査

3.1 調査の概要

2006 年は、気仙沼市の高年層から高校生までの 74 名を対象に、動詞＋ノアイー類、動詞＋ニイー類、可能動詞、動詞＋助動詞レルの使い分けをみる目的で、次の状況可能の否定文・肯定文の面接調査を行った。

(43) 便せんがないので今は手紙を書くことができないよ。(状況可能・否定文)：表 1

(44) 便せんを用意したので今度は手紙を書くことができるよ。(状況可能・肯定文)：表 2

3.2 調査結果

調査結果を生年順に記号化し、表 1 にまとめた。性差も検討したが、ほとんど違いは見られず、年齢差による違いが大きいため、表 1 は生年によってまとめた。

否定文では、動詞＋助動詞レルと可能動詞が回答された。生年によって比較すると、高い年層（〔1926 男〕から〔1975 男〕まで）に可能動詞◎がやや少なく動詞＋助動詞レル▲が多いが、逆に、若い年層（〔1976 女〕から高校生）に動詞＋助動詞レル▲が少なく可能動詞◎が多い。

肯定文では、全般に可能動詞◎が回答されているが、より若い話者（〔1951 女〕から高校生にかけて）に特に多い。動詞＋ノアイー類☆、動詞＋ノイー井、動詞＋ニイー※を別に示したが、使用すると年代の幅という点では差がみられる。動詞＋ノアイー類☆は若年層から高校生（〔1983 女〕以下）にも回答があるが、動詞＋ノイー井は〔1940 男〕から〔1950 女〕の間、動詞＋ニイー※は高年層から〔1980 男〕までの間に回答が多く、高校生の回答は一名である。このことから形式の新古を推定すると、動詞＋ニイーが古く、動詞＋ノアイー類☆が比較的新しい形式とみることができる。前述のように、この動詞＋ノアイー類は、『方言文法全国地図』においては気仙沼市においてのみ回答されている特徴的な形式である。また、1940 年頃に調査された小林好日資料に動詞＋ノアイー類がないことを考えあわせると、動詞＋ノアイー類は、動詞＋ニイーが広く分布していたところに 1940 年以降に生じた新しい形式である可能性がある。一方、動詞＋レルは肯定文ではほとんど用いられない。

表1 気仙沼市方言・多人数調査における状況可能・否定文

	生年性別	カカレネ／カガレナイ	カケネ／カケナイ		生年性別	カカレネ／カガレナイ	カケネ／カケナイ
60代	1926 男	▲		30代	1964 女		◎
	1927 女	▲			1967 女	▲	
	1928 男		◎		1969 女	▲	◎
	1930 女		◎		1972 女	▲	◎
	1930 男	▲			1975 男	▲	◎
	1931 男	▲	◎		1976 女		◎
	1933 男	▲			1976 女		◎
50代	1935 男	▲		20代	1979 女		◎
	1938 女	▲			1980 男		◎
	1938 女	▲			1982 男		◎
	1938 男	▲			1983 女	▲	
	1939 女	▲	◎		1984 女		◎
	1940 男	▲	◎		1984 女		◎
	1940 男	▲	◎		1986 男	▲	◎
	1941 女	▲		10代	1988 男		◎
	1942 女	▲	◎		1989 女		◎
	1942 女	▲			1989 女	▲	
	1942 女	▲			1989 女	▲	◎
	1943 男		◎		1989 女		◎
	1943 男	▲	◎		1989 女	▲	◎
	1943 男	▲			1989 女		◎
	1945 女	▲			1989 女		◎
40代	1947 男	▲	◎		1989 女	▲	
	1948 男	▲			1989 男	▲	◎
	1948 男	▲			1989 男	▲	◎
	1949 女		◎		1989 男	▲	◎
	1950 女	▲	◎		1989 男		◎
	1950 女	▲	◎		1989 男	▲	◎
	1950 女	▲			1989 男		◎
	1950 女	▲			1989 男	▲	◎
	1951 女	▲	◎		1989 男		◎
	1953 男	▲			1989 男	▲	◎
	1955 男	▲			1990 女	▲	
	1956 女	▲	◎		1990 女	▲	◎
	1956 男	▲	◎				
	1956 男	▲					

表2 気仙沼市方言・多人数調査における状況可能・肯定文

	生年 性別	カク ノアイー	カク ノイー	カク ニイー	カケル◎/ カカレル▲		生年 性別	カク ノアイー	カク ノイー	カク ニイー	カケル◎/ カカレル▲
60代	1926 男	☆		※	◎	30代	1964 女				◎
	1927 女	☆		※			1967 女				
	1928 男				◎		1969 女			※	◎
	1930 女						1972 女			※	◎
	1930 男	☆					1975 男				◎
	1931 男	☆		※	◎		1976 女				◎
	1933 男	☆			◎		1976 女				◎
	1935 男				◎		1979 女				◎
	1938 女			※			1980 男			※	◎
	1938 女	☆					1982 男				◎
50代	1938 男	☆				20代	1983 女	☆			
	1939 女	☆			◎		1984 女				◎
	1940 男		#	※	◎		1984 女				◎
	1940 男	☆			◎		1986 男	☆			◎
	1941 女			※	◎		1988 男				◎
	1942 女			※	◎		1989 女	☆			
	1942 女	☆					1989 女				◎
	1942 女			※			1989 女	☆			
	1943 男	☆					1989 女				◎
	1943 男				◎		1989 女				◎
40代	1943 男			※	◎	10代	1989 女				◎
	1945 女				◎		1989 女				◎
	1947 男		#				1989 女				◎
	1948 男			※			1989 男			※	◎
	1948 男		#				1989 男				◎
	1949 女			※	◎		1989 男				◎
	1950 女				◎▲		1989 男				◎
	1950 女	☆			◎		1989 男				◎
	1950 女		#				1989 男				◎
	1950 女	☆					1989 男				◎
40代	1951 女			※	◎		1989 男				◎
	1953 男				◎		1989 男	☆			◎
	1955 男	☆		※	◎		1990 女				◎
	1956 女			※	◎		1990 女				◎
	1956 男				◎						
	1956 男			※	▲						

4 南三陸地方の分布調査

4.1 調査の概要

2007 年は、南三陸地域における 80 代から 20 代の 41 名を対象に、次の例文による面接調査を行った。(45) (46) は多人数調査と同じ例文である。

(45) 便せんがないので今は手紙を書くことができないよ。(状況可能・否定文) : 図 2

(46) 便せんを用意したので今度は手紙を書くことができるよ。(状況可能・肯定文) : 図 3

(47) この万年筆はインクがよく出るので、すらすら書くことができるよ。(属性可能・肯定文) :

図 4

4.2 調査結果

本稿では、調査した話者のうち、生年が 1919-1930 年の話者を対象とし、20-30 代の 13 名を除外して分布を考察する。それらの調査地点は、図 1 のように、最北が岩手県下閉伊郡山田町、最南が宮城県石巻市となり、岩手県と宮城県の県境をはさむ 26 地点（話者 28 名）である（番号は調査時に便宜的に付けられた地点番号をそのまま利用した）。

以下、これらの分布調査の結果について、『方言文法全国地図』（1980 年頃調査）と比較しつつ述べる。

図 2 の状況可能・否定文では、ほぼ全域にカガレネ（動詞+レル+否定辞）が回答されており、これと重なるようにカゲネ（可能動詞+否定辞）がやや南に分布する。また、カゲーネが釜石市平田と大船渡市盛に点在、カガラネ（自動詞カガル+否定辞）が遠野市細腰にある。25 年ほど前の調査結果である『方言文法全国地図』の「読むことができない（状況可能・否定文）」では、ヨマレネ・ヨマエネ（動詞+レル+否定辞）は岩手県・宮城県の県境付近に分布し、岩手県側にヨメネ（可能動詞+否定辞）、宮城県側にヨメネ（可能動詞+否定辞）とその他（動詞+コトガデキナイ類）が分布している。これと比べると、今回の調査結果は、併用ではあるが動詞+レルと可能動詞の回答される範囲が広い。また、『方言文法全国地図』では、ヨメーネが岩手県中北部より北に分布したのに対して、今回の調査では、カゲーネは岩手県の県境付近でも回答された。

図 3 の状況可能・肯定文では、ほぼ全域でカグニイー（動詞+ニイー）が回答されており、基本的な形式であることがわかる。調査地域の中ほどにあたる沿岸部の県境付近を中心に、カグノアイー（動詞+ノアイー）が回答されており、カグニイーの中にカグノアイーが新たに生じたように見える。カゲル（可能動詞）は点在する。『方言文法全国地図』の「読むことができる」をみると、ヨムニイー（動詞+ニイー）とヨメル（可能動詞）の分布のしかたはこれと大きな差はないが、ヨムノアイー（動詞+ノアイー）は気仙沼市のみで回答されており、分布としての広がりはない。『方言

図 3 の状況可能・肯定文では、ほぼ全域でカグニイー（動詞+ニイー）が回答されており、基本的な形式であることがわかる。調査地域の中ほどにあたる沿岸部の県境付近を中心に、カグノアイー（動詞+ノアイー）が回答されており、カグニイーの中にカグノアイーが新たに生じたように見

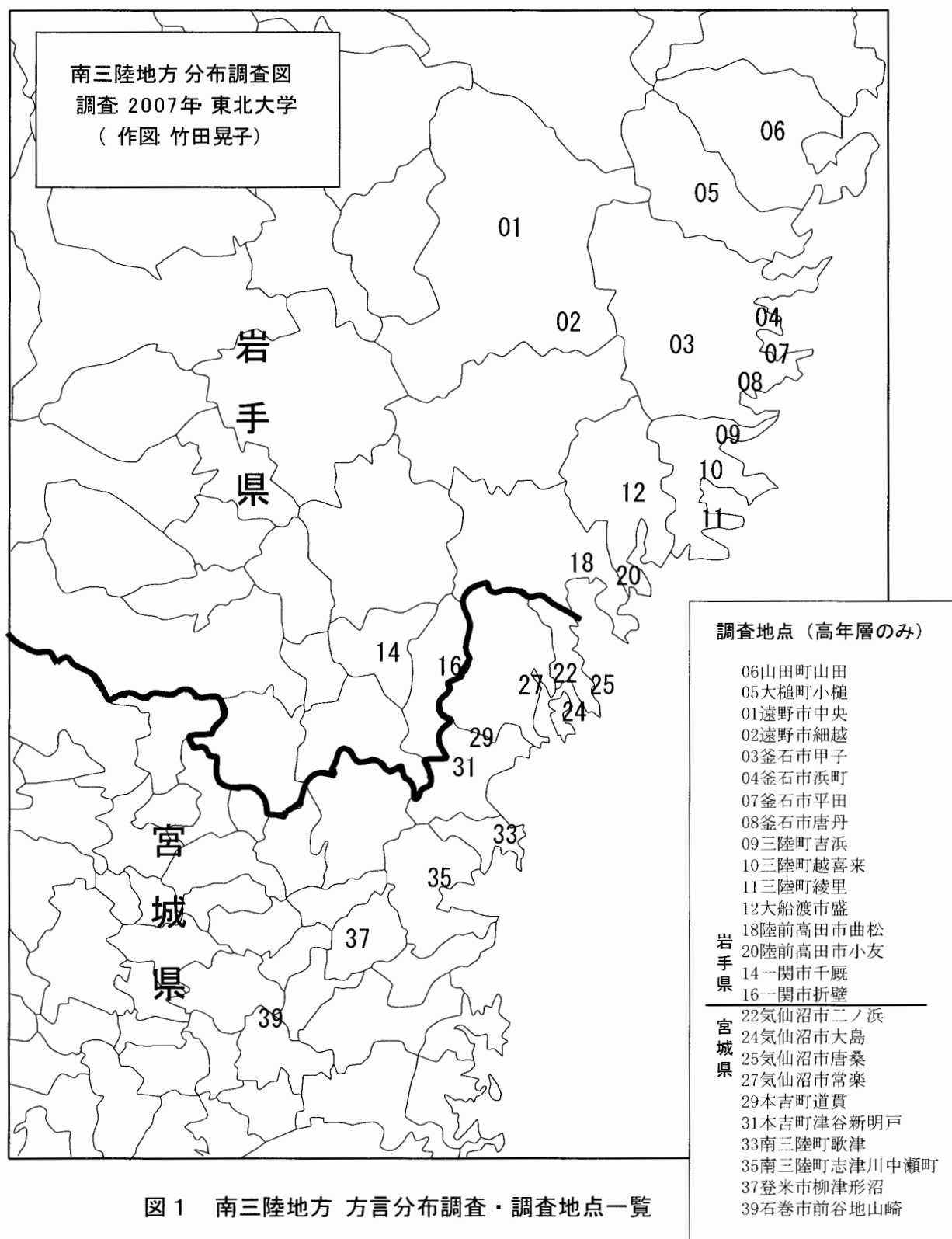


図 1 南三陸地方 方言分布調査・調査地点一覧

える。カゲル（可能動詞）は点在する。『方言文法全国地図』の「読むことができる」をみると、ヨムニイー（動詞＋ニイー）とヨメル（可能動詞）の分布のしかたはこれと大きな差はないが、ヨムノアイー（動詞＋ノアイー）は気仙沼市のみで回答されており、分布としての広がりはない。『方言文法全国地図』の他の図ではこの内陸に1地点、動詞＋ノアイーが回答された場合があるが、今回の調査のように、沿岸部に南北に分布するという分布調査の結果は、管見のかぎりなかったようである。

図4の属性可能・肯定文では、主に併用回答だが、南にカグニイー（動詞＋ニイー）とカグノアイー（動詞＋ノアイー）が主に分布し、北にカガサル（動詞＋サル）が分布する。カグニイーについてはほぼ同様の分布だが、カグノアイーは県境付近に多く分布する点で図3と同様である。動詞＋サルは、他の先行研究や『方言文法全国地図』181図では東北地方では青森県・秋田県の他に岩手県の中北部（旧南部藩地域）で用いられることが報告されている形式で、旧伊達藩地域（この図では釜石市以南）ではあまり報告がない。また、カガサルと平行してカガルも比較的広い地域で回答されているが、『方言文法全国地図』にはこの形式は回答されていない。一方、『方言文法全国地図』ではカガレル（動詞＋レル）も回答されているが、今回の調査では回答されなかった。

以上、分布についてまとめると以下ようになる。

- ①状況可能・否定文で、動詞＋レルが広く分布し、可能動詞が併用されている。
- ②状況可能・否定文で、カゲーネが『方言文法全国地図』に比べてやや南でも回答された。
- ③状況可能・肯定文で、動詞＋ニイーが分布するなかで、動詞＋ノアイーの分布が気仙沼を中心として沿岸部の南北に広がりつつあるようにみえる。
- ④属性可能・肯定文で、動詞＋サルの分布が北から南へと広がっているようにみえる。
- ⑤属性可能・肯定文で、カガルが回答され、動詞＋レルが回答されなかった。

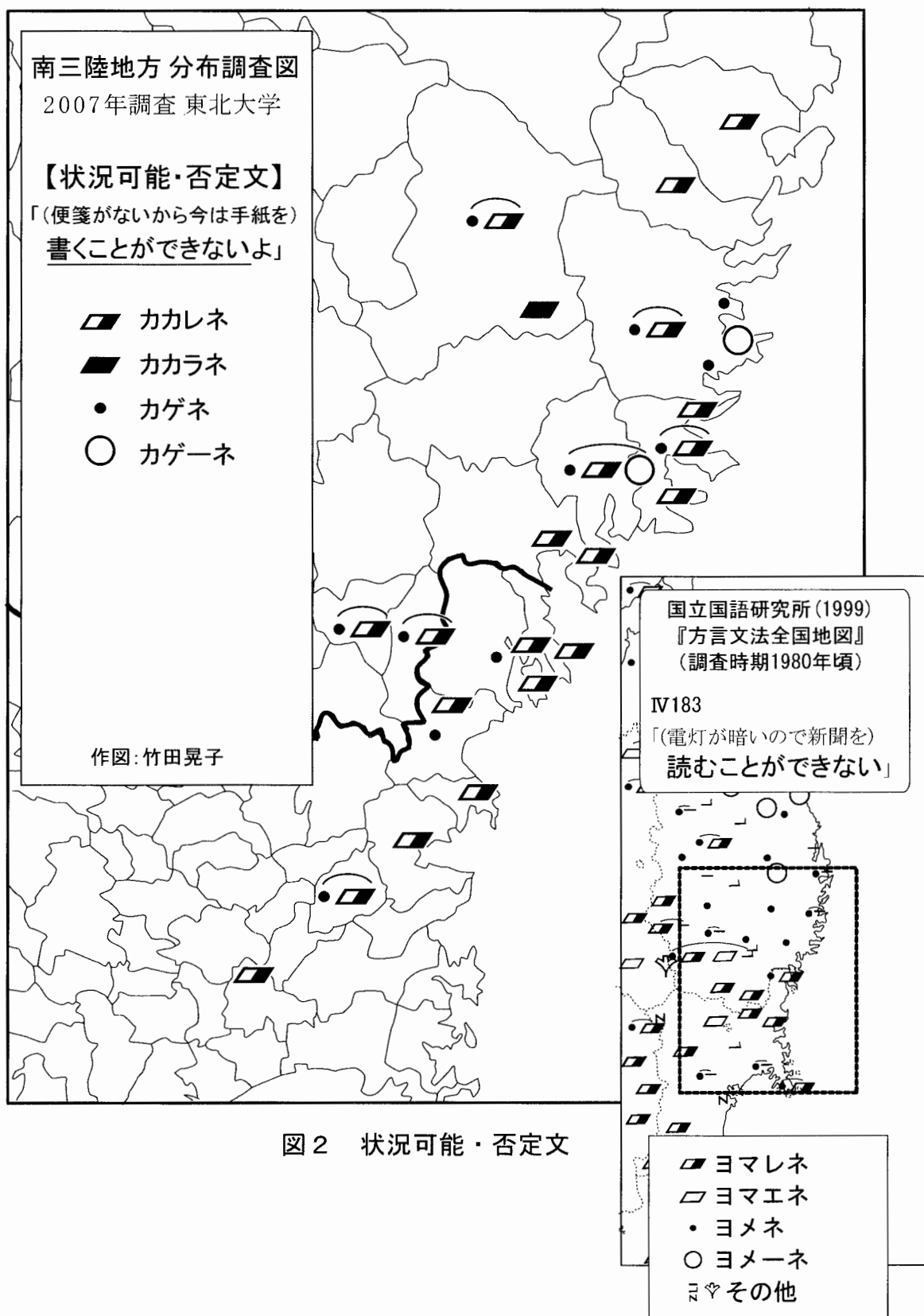


図2 状況可能・否定文

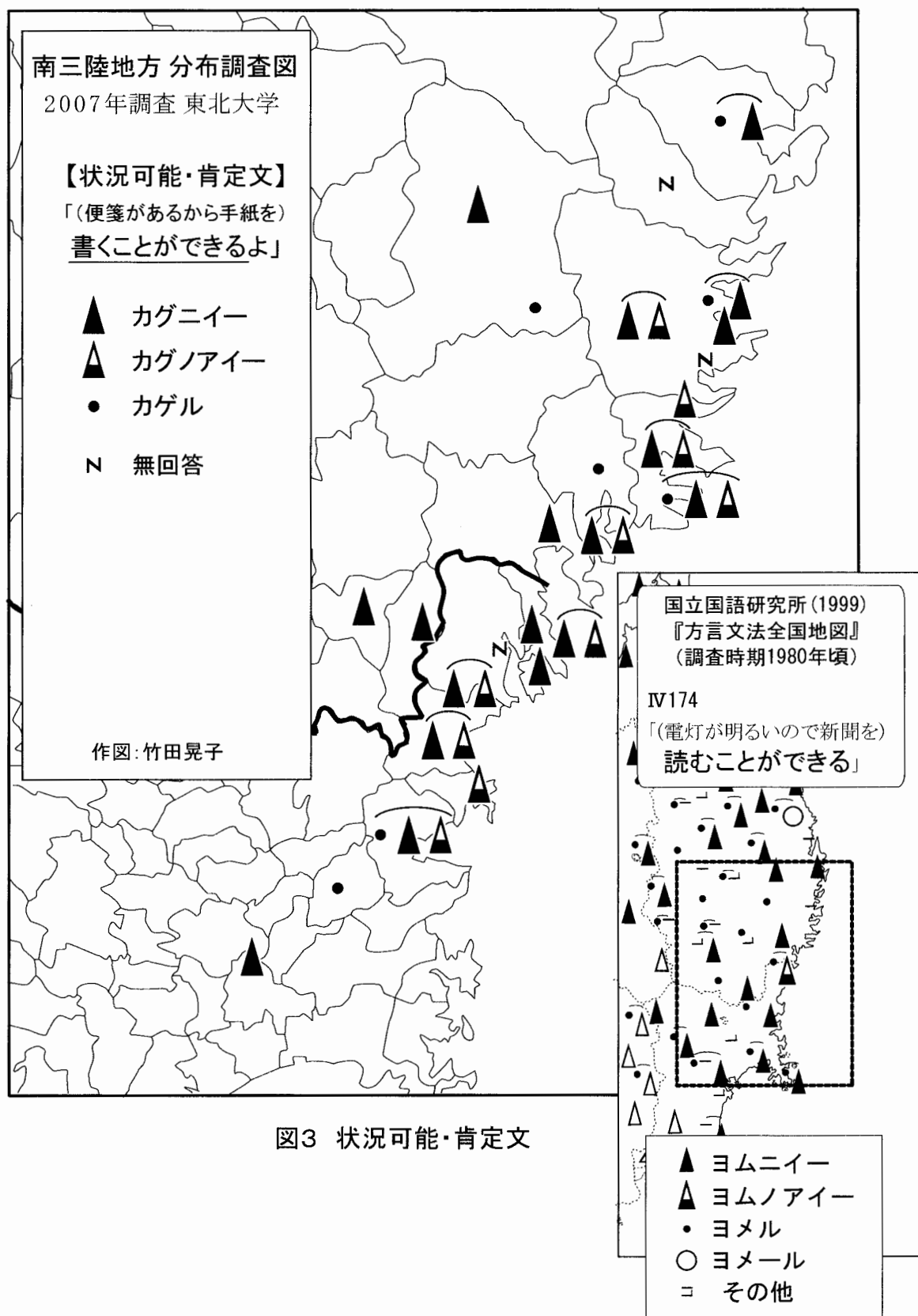


図3 状況可能・肯定文

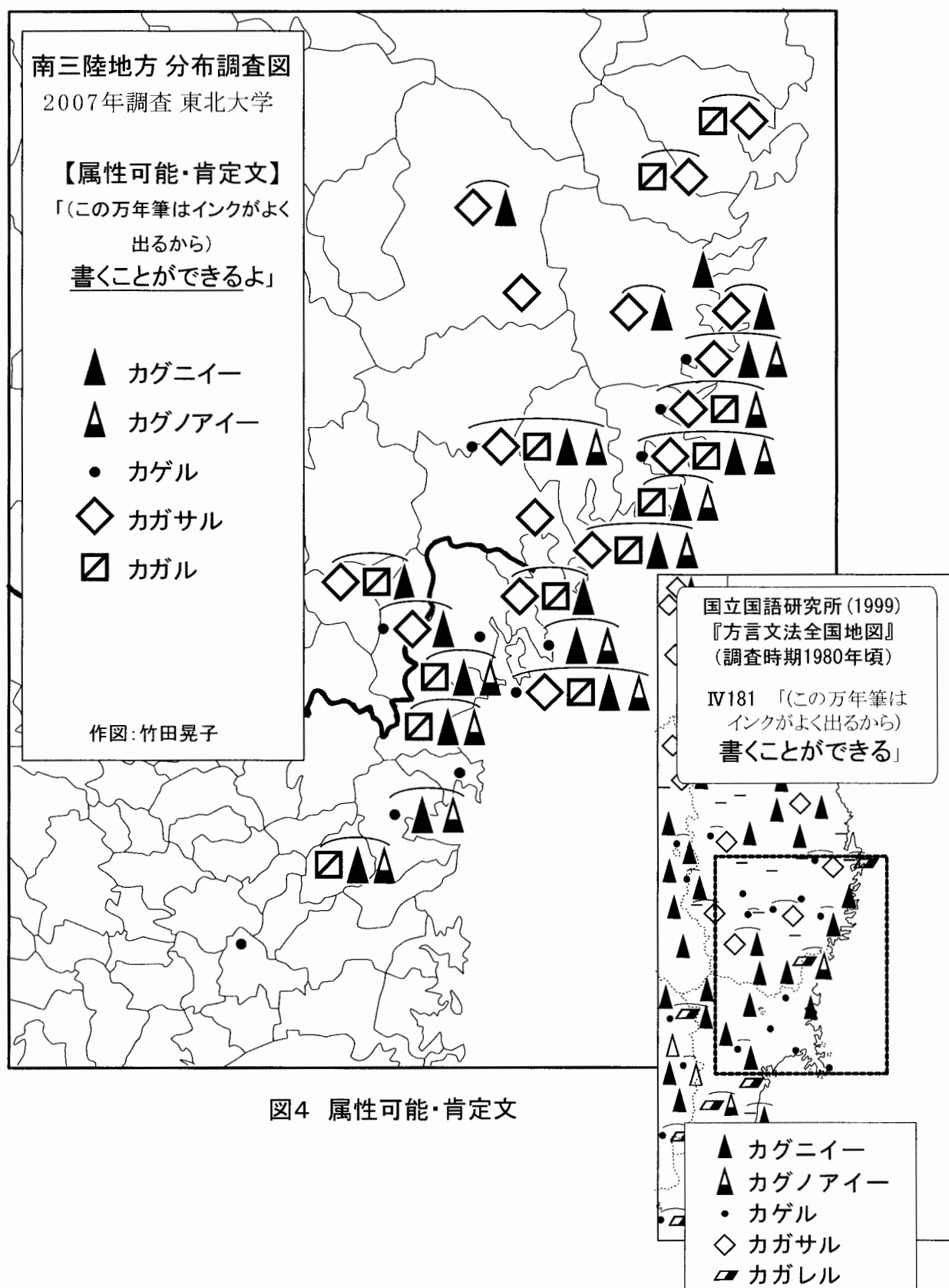


図4 属性可能・肯定文

5 おわりに

本稿では、気仙沼市における伝統的方言の記述調査、多人数調査、南三陸地方の分布調査におけるヴォイスの調査結果についてみてきた。本稿で述べたことをまとめるとつぎのようになる。

伝統的気仙沼市方言では、カラは直接受身文、ニは主に直接受身文で回答されたほか、共通語などで用いられる「ーテモラウ」などの授受を表す形式の代わりに受身形が使われることが明らかになった。また、可能表現について特筆すべきこととしては、肯定文で動詞＋ノアイー類が用いられることと、特に属性可能・肯定文でカガルのような自動詞相当の形式が用いられることがある。

気仙沼市方言の年代差については、状況可能・否定文では高い年層に動詞＋助動詞レルが多く、否定文・肯定文ともに若年層に可能動詞が多い。また、動詞＋ノアイー類は若年層にも幅広く回答があるが、動詞＋ニイーは高年層から中年層に回答が多いことから、動詞＋ニイーはやや古い形式で、動詞＋ノアイー類が比較的新しい形式と考えられる。

南三陸地方の分布については、特に、次の3点が新たに明らかになった。1点目として、状況可能・否定文でカゲーネが『方言文法全国地図』に比べてやや南でも回答された。2点目は、状況可能・肯定文では動詞＋ニイーの分布域の中で動詞＋ノアイーの分布が気仙沼を中心として沿岸部の南北に広がりつつあるようにみえることが明らかになった。3点目は、属性可能・肯定文で、動詞＋サル分布が北から南へと広がっているようにみえることがわかった。

今後の課題として、まずはこの地域の特色として、授受表現での受身形使用や、可能表現の動詞＋ノアイー、自動詞相当のカガルや、動詞＋サルなどの形式が内陸にむかってどのような分布域をもっているかがあげられる。

文 献

国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図』4, 財務省印刷局

渋谷勝己(2001「書評 国立国語研究所編『方言文法全国地図4』」『国語学』52-4

渋谷勝己(2006)「第2章 自発・可能」小林隆他編『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店

竹田晃子(2005)「東北方言分布資料の存在と意義—小林好日氏による東北方言通信調査—」『方言の記録と保存』東北大学文学部シンポジウム資料

竹田晃子(2006)「特集・地図に見る方言文法—読むことができる〔能力可能・状況可能〕」『月刊言語』35-12, 大修館書店

竹田晃子(2007)「可能表現形式の使い分けと分布—能力可能・状況可能, 肯定文・否定文—」『日本語学』26 卷 11 号, 明治書院

三井はるみ(2000)「日本語の中の多様性」『豊かな言語生活のために』国立国語研究所

テンス・アスペクト

竹 田 晃 子

1 本稿の目的

本稿は、2005 年・2006 年・2007 年に行われた気仙沼市・南三陸地方における方言調査のうち、調査票の作成を筆者が担当したテンス・アスペクトとその周辺形式ケについて報告するものである。

2005 年は気仙沼市の高年層 2 名を対象に、筆者が面接調査を行った。2006 年は気仙沼市の高年層から高校生までの 74 名を対象に、2007 年は南三陸地域における 80 代から 20 代の 41 名を対象に、筆者を含む調査者が分担して面接調査を行った。

本稿では、2005 年の伝統的気仙沼市方言の記述調査、2006 年の気仙沼市における多人数調査、2007 年の南三陸地方における分布調査の順に、調査結果を報告する。なお、調査における回答の表記について、注目する部分をカタカナ（下線付き）で示し、その共通語訳を文の後に（ ）に入れて示す。また、それ以外の部分は漢字ひらがな交じりで示す。

2 伝統的方言の記述調査

2.1 調査の概要

2005 年の記述調査では、宮城県沿岸北部に位置する気仙沼市の伝統的方言におけるテンス・アスペクトとその周辺形式ケを把握し、特徴を明らかにすることを目的として調査を行った。特に、動詞+タッタ、動詞+テタの促音化語形（動詞+ッタ）、文末形式のケの用法を確認することを目的とした調査票を用意した。共通語例文を当該方言に翻訳し、実際に発音してもらう方法で行い、場合によって予想語形を提示し、使用の有無や使い分けをたずねた。

話者は、2005 年・記述調査については次のとおり、〔1931 女〕〔1933 男〕の高年層 2 名である。お二人の回答はほぼ同様であったため、本稿では特に分けて扱わない。

生年	性別	年齢	言語形成期	調査年月日
1931(昭和 6)年	女	74	気仙沼市階上	2005 年 7 月 31 日午後
1933(昭和 8)年	男	73	気仙沼市大島	2005 年 7 月 30 日午後

2.2 運動動詞の用法

2.2.1 完成・過去

運動動詞の完成的な過去の出来事は、動詞+タッタ（カイトッタ）、動詞+タ（カイト）で表され

るのが基本である。

(1) 私は昨日、あの人にお礼状を カイトッタ／カイタ。(書いた)

動詞+タッタは、原型は動詞+テアッタだが、現在の気仙沼市方言においては完成的な過去の出来事に用いられ、かつ次のような回想的な表現で、動詞+タツケ(イッタツケ)と併用で回答される。

(2) 昔、二人でお祭りに イッタッタ／イッタツケ なー。(行った)

動詞+ケ(イグツケ)は、たとえば(3)のように話し手が何度も目撃して知っている恒常的な出来事を表す場合や、(4)のように発話の直前に目撃した出来事から引き続き起こるだろうと思われる出来事について発話現場とは異なる場所で発話時に起こっている出来事として表す場合に用いられる。どちらの場合も、話し手自身が見たことがないことを想像して言う場合や、自分自身のことについて言う場合は用いられない。

(3) 隣の子はいつも近所の子供たちと一緒に小学校に イグツケ。(行く)

(4) (隣の子が学校に出かける様子を見て家に入ってすぐ) 隣の子はこれから学校に イグツケよ。(行く) お前もはやく行きなさい。

2.2.2 継続・過去

運動動詞の継続的な過去の出来事は、動詞+テタ(カイトタ)、動詞+テタッタ(カイトタッタ)が用いられる。動詞+テタは現在の出来事に用いられることもあるため、動詞+テタッタのほうが出来事としてより過去らしい表現である。

(5) 昨日の夕方は、私は あの人へのお礼状を カイデダ／カイツタ／カイデダッタ／カイツタッタ。(書いていた)

動詞+テタは動詞+テタ／ツタ、動詞+テタッタは動詞+テタッタ／ツタッタのように発音される場合があるが、意味の違いはない。

2.2.3 継続・現在

運動動詞の継続的な現在の出来事は、動詞+テタ(カイトタ／カイツタ)、動詞+テル(カイトル)が用いられる。動詞+テタは前述のように過去の継続的な出来事にも用いられるが、時間副詞「今」や文脈によって、その出来事が現在であることが明示される。

(6) 私は今、あの人へのお礼状を カイデダ／カイツタ／カイデル。(書いている)

2.3 存在動詞イルの用法

2.3.1 継続・過去

存在動詞の継続的な過去の出来事は、一人称の場合、動詞+タ(イタ)、動詞+タッタ(イタッタ)で表される。

(7) 私はさっきまで、学校に イダ／イダッタ。(いた)

二人称・三人称では、(8)のように動詞+タツケ／タッタツケが用いられることがある。ケは、

話し手が目撃した出来事を表すため、一人称の文では用いられにくい。用いられる場合は、(9)のような疑問文の場合である。

(8) お前はさっきまで、学校に イダッケ／イダッタッケ。(いた)

(9) 私もさっきまで、学校にイダッケ／イダッタッケ? (いたか?)

2.3.1 継続・現在

存在動詞イルの継続的な現在の出来事には、一人称の場合、動詞＋タ（イタ）か、動詞イルがそのまま用いられる。

(10) 私は今、学校に イダ／イル。(いる)

二人称・三人称では、(11)のように動詞＋タッケ（イタッケ）が用いられることがある。ケが話し手の目撃による出来事を表す点、一人称の文では用いられにくい点については前述の通りである。

(11) 斉藤さんは今、公民館にイダ／イダッケ／イル。(いる)

2.4 形容詞

形容詞による過去の出来事については、形容詞＋タで表される。

(12) あの人はずいぶん相撲が ツヨガッタ。(強かった)

形容詞＋ケは、たとえば(13)では、話し手が相撲の試合を見たことを根拠に、現在もその人は強いということを表す文になる。

(13) あの人はずいぶん相撲が ツヨイッケ。(強い)

現在の出来事については、たとえば(14)ではタカイが用いられる。

(14) 近所の店では今も時々、品物の値段が タガイ。(高い)

3 多人数調査

3.1 調査の概要

2006年は、気仙沼市の高年層から高校生までの74名を対象に、過去・回想、現在・継続、反語・未実現表現で用いられる形式を明らかにする目的で、次の例文の面接調査を行った。

(15) 昔、私は千葉県の九十九里浜に行ったなあ。(過去・回想表現)：表1

(16) 私は今、あの人へのお礼状を書いているの。(現在・継続表現)：表2

(17) そんな大変なこと、誰がやるものか。(反語・未実現表現)：表3

3.2 調査結果

調査結果を生年順に記号化し、表1・表2・表3にまとめた。性差よりも年齢差が大きいため、表は生年によってまとめた。NRは無回答、すべて空欄の話者には別回答があるが回答数が少ないため、ここでは省略した。

表1は、過去の出来事を回想する場合である。ほぼ全年層に動詞+タッタ（イッタッタ）ナーが回答された。年齢差は、〔1979 女〕以下の若い年層において動詞+タッタが回答されなかった話者があり、若い年層で使われにくくなっていると思われる。動詞+タツケ（イッタツケ）ナーは、全年層に点在しているが、動詞+タッタツケ（イッタッタツケ）は30代以上の5名、回答があった。

表2は、現在、継続している出来事を表す場合である。〔1988 男〕以下の高校生のほとんどが動詞+テル（カイテル）を回答した。これに対して、高年層のほとんどが動詞+ッタ（カイッタ）または動詞+テタ（カイデタ）を回答している。この動詞+ッタの使用者は、年層を問わず男性に多いという傾向がある。

表3は、未実現の出来事を反語的に表現する場合である。動詞+ケ（ヤッケ）または動詞+ダッケ（ヤンダッケ）の形は、ほぼすべての年代で用いられており、一般的な形式であることがわかる。ただし、一部の話者からは「男性語である」との内省が得られた。男女差をみると男性70%（23／33名）、女性48%（18／37名）となり、男性の回答率が高いため、男性語的なくだけた表現とみることができるだろう。動詞+モンカ（ヤルモンカ）は、高年層に3名と、〔1984 女〕以下に7名の回答がある。動詞+ペ／ベ（ヤッペ／ヤンベ）は高年層・中年層に10名、動詞+カ（ヤッカ）は若い年層に14名の回答がある。

表1 気仙沼市方言・多人数調査における過去・回想

	生年 性別	タ	タッタ	タツケ	タッタ ツケ
60代	1926 男	△	▲	◎	
	1927 女		▲		
	1928 男		▲	◎	■
	1930 女		▲		
	1930 男		▲		
	1931 男	△	▲	◎	
	1933 男		▲		
	1935 男	NR	NR	NR	NR
50代	1938 女	△	▲		
	1938 女	△	▲	◎	
	1938 男	△	▲		
	1939 女	△	▲		
	1940 男		▲	◎	
	1940 男	△	▲		
	1941 女	△	▲		
	1942 女		▲	◎	■
	1942 女		▲		
	1942 女	△	▲	◎	
	1943 男		▲		
	1943 男	△	▲		
	1943 男		▲		
	1945 女		▲		
	1947 男	△	▲	◎	
	1948 男	△			
	1948 男		▲		
40代	1949 女	△	▲		
	1950 女	△	▲		
	1950 女		▲		
	1950 女		▲		■
	1950 女		▲		
	1951 女			◎	
	1953 男		▲		
	1955 男		▲	◎	
	1956 女		▲	◎	
	1956 男		▲		
40代	1956 男		▲		

	生年 性別	タ	タッタ	タツケ	タッタ ツケ
30代	1964 女	△			
	1967 女		▲		
	1969 女		▲		
	1972 女		▲	◎	■
	1975 男		▲		
	1976 女	△			
	1976 女	△	▲		
20代	1979 女	△		◎	
	1980 男		▲		
	1982 男	△			
	1983 女	△	▲		
	1984 女	△	▲	◎	
	1984 女	△			
	1986 男	△	▲		
	1988 男	△			
	1989 女	NR	NR	NR	NR
	1989 女	△	▲		
	1989 女	△	▲	◎	
	1989 女		▲		
	1989 女	△			
	1989 女	△			
10代	1989 女	△	▲		
	1989 女		▲	◎	
	1989 男	△	▲		
	1989 男	△	▲		
	1989 男			◎	
	1989 男		▲		
	1989 男		▲		
	1989 男		▲		
	1989 男	△	▲		
	1989 男	△			
	1989 男	△	▲		
	1990 女		▲	◎	
10代	1990 女	△	▲		

表2 気仙沼市方言・多人数調査における現在・継続

	生年 性別	テル	テタ	ッタ		生年 性別	テル	テタ	ッタ
60代	1926 男		◆		30代	1964 女	○		
	1927 女		◆	▼		1967 女		◆	▼
	1928 男			▼		1969 女			
	1930 女	○	◆	▼		1972 女	○	◆	▼
	1930 男			▼		1975 男		◆	▼
	1931 男		◆	▼		1976 女		◆	
	1933 男	○		▼		1976 女	○		
	1935 男	○		▼		1979 女	○		
	1938 女	○				1980 男			▼
	1938 女		◆	▼		1982 男	○		▼
50代	1938 男				20代	1983 女	○		▼
	1939 女					1984 女		◆	
	1940 男	○	◆	▼		1984 女	○		
	1940 男	○		▼		1986 男		◆	▼
	1941 女		◆	▼		1988 男			▼
	1942 女	○				1989 女	○		
	1942 女			▼		1989 女	○		
	1942 女		◆	▼		1989 女	○	◆	
	1943 男		◆	▼		1989 女			▼
	1943 男	○		▼		1989 女	○		
40代	1943 男	○		▼		1989 女	○	◆	
	1945 女			▼		1989 女	○		▼
	1947 男	○		▼		1989 女	○		▼
	1948 男			▼		1989 男	○		▼
	1948 男	○		▼		1989 男			▼
	1949 女	○				1989 男	○		
	1950 女	○	◆			1989 男	○		
	1950 女	○				1989 男	○		
	1950 女	○		▼		1989 男	○		
	1950 女	○		▼	10代	1989 男	○	◆	
40代	1951 女		◆	▼		1989 男			▼
	1953 男	○		▼		1990 女	○		
	1955 男	○	◆	▼		1990 女	○		
40代	1956 女	○	◆						
	1956 男	○		▼					
40代	1956 男	○		▼					

表3 気仙沼市方言・多人数調査における反語・未実現

	生年 性別	ヤッケ ▲/ ヤンダ ツケ△	ヤル モン カ	ヤッ ペ/ ヤン ベ	ヤッカ ／スッ カ	ヤラ ネ
60代	1926 男	▲			■	
	1927 女	▲		○		
	1928 男	▲	◇			
	1930 女			○		
	1930 男	▲		○		
	1931 男	▲				
	1933 男	▲△		○		
	1935 男	△	◇			
	1938 女			○		
	1938 女	▲				
50代	1938 男			○		/
	1939 女		◇			/
	1940 男	▲				
	1940 男				■	
	1941 女	▲				
	1942 女	▲		○		
	1942 女				■	
	1942 女					
	1943 男	▲				/
	1943 男	▲△		○		
40代	1943 男	△				
	1945 女	▲				
	1947 男	▲				
	1948 男					/
	1948 男	▲				
	1949 女					
	1950 女	NR	NR	NR	NR	NR
	1950 女	NR	NR	NR	NR	NR
	1950 女			○		
	1950 女	▲				
30代	1951 女	▲				
	1953 男	▲				/
	1955 男	▲				
	1956 女	▲		○		
	1956 男	▲				
	1956 男	▲△				
	1964 女	NR	NR	NR	NR	NR
	1967 女					/
	1969 女	▲				
	1972 女	▲				/
20代	1975 男					/
	1976 女					
	1976 女				■	
	1979 女				■	
	1980 男	▲				
	1982 男	▲			■	
	1983 女	▲			■	
	1984 女	▲				
	1984 女		◇			/
	1986 男					/
10代	1988 男				■	
	1989 女	△			■	
	1989 女	▲		○		
	1989 女				■	
	1989 女	▲	◇			
	1989 女				■	
	1989 女		◇		■	
	1989 女				■	
	1989 女	▲△				
	1989 男		◇			
10代	1989 男	▲				
	1989 男				■	
	1989 男	▲	◇			
	1989 男					
	1989 男	▲	◇			
	1989 男				■	
	1989 男	▲			■	
	1989 男	▲	◇			
	1990 女	▲			■	
	1990 女	▲				

4 南三陸地方の分布調査

4.1 調査の概要

2007 年は、南三陸地域における 80 代から 20 代の 41 名を対象に、次の例文による面接調査を行った。は多人数調査と同じ例文である。

(18) 昔、私は千葉県の九十九里浜に行ったなあ。(過去・回想表現)：図 1

(19) 私は今、あの人へのお礼状を書いているの。(現在・継続表現)：図 2

(20) そんな大変なこと、誰がやるものか。(反語・未実現表現)：図 3

4.2 調査結果

本稿では、調査した話者のうち、生年が 1919–1930 年の話者を対象とし、20–30 代の 13 名を除外して分布を考察する。それらの調査地点は、最北が岩手県下閉伊郡山田町、最南が宮城県石巻市となり、岩手県と宮城県の県境をはさむ 26 地点（話者 28 名）である。調査地点一覧図は「ヴォイス（可能・受身）」の図 1 を参照されたい。地点は次の通りである（番号は調査時に便宜的に付けられた地点番号をそのまま利用した）。

表4 南三陸地方 分布調査・調査地点一覧

岩手県	06	山田町山田	宮城県	22	気仙沼市二ノ浜
	05	大槌町小槌		24	気仙沼市大島
	01	遠野市中央		25	気仙沼市唐桑
	02	遠野市細越		27	気仙沼市常楽
	03	釜石市甲子		29	本吉町道貫
	04	釜石市浜町		31	本吉町津谷新明戸
	07	釜石市平田		33	南三陸町歌津
	08	釜石市唐丹		35	南三陸町志津川中瀬町
	09	三陸町吉浜		37	登米市柳津形沼
	10	三陸町越喜来		39	石巻市前谷地山崎
	11	三陸町綾里			
	12	大船渡市盛			
	18	陸前高田市曲松			
	20	陸前高田市小友			
	14	一関市千厩			
	16	一関市折壁			

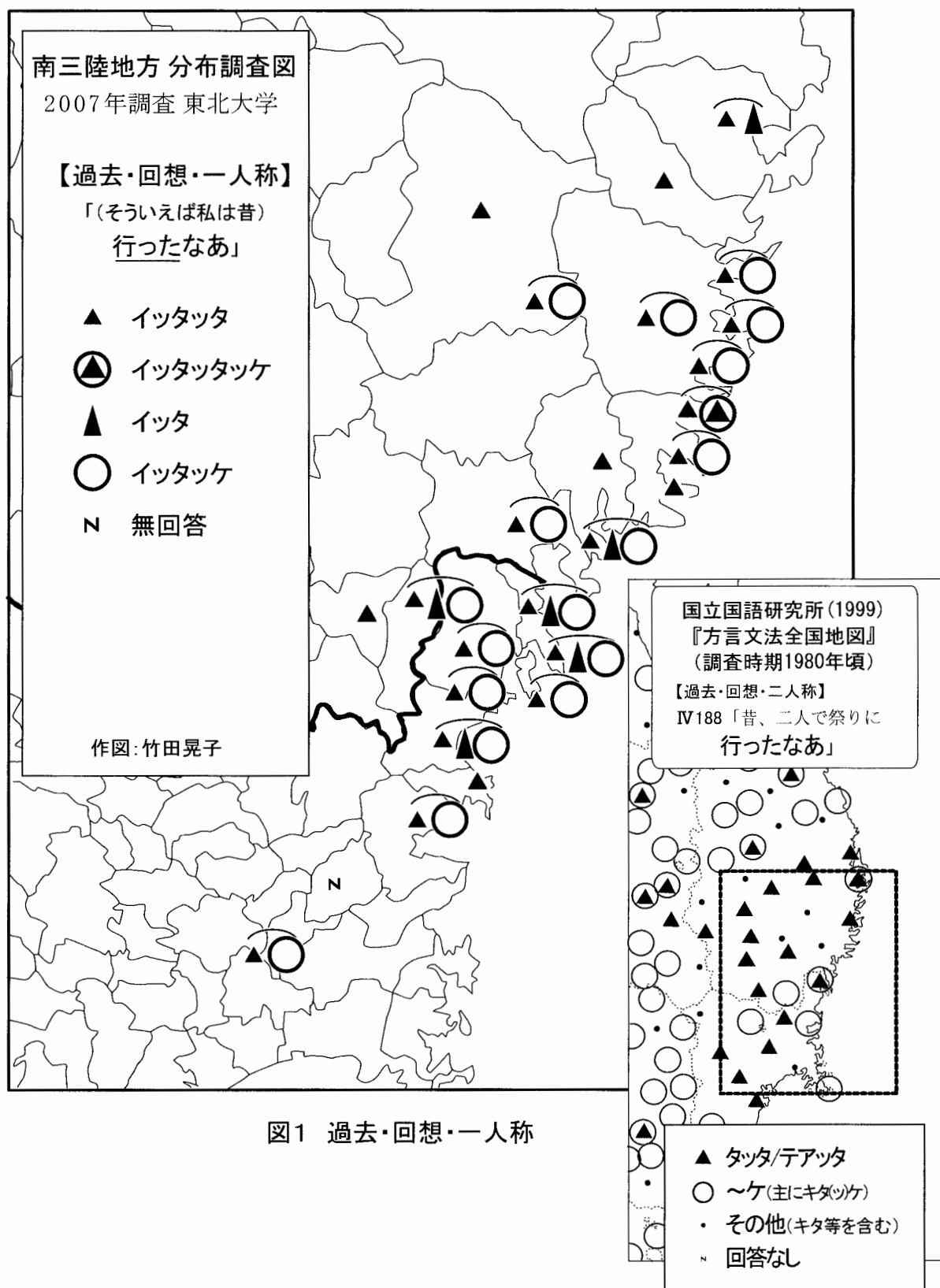


図1 過去・回想・一人称

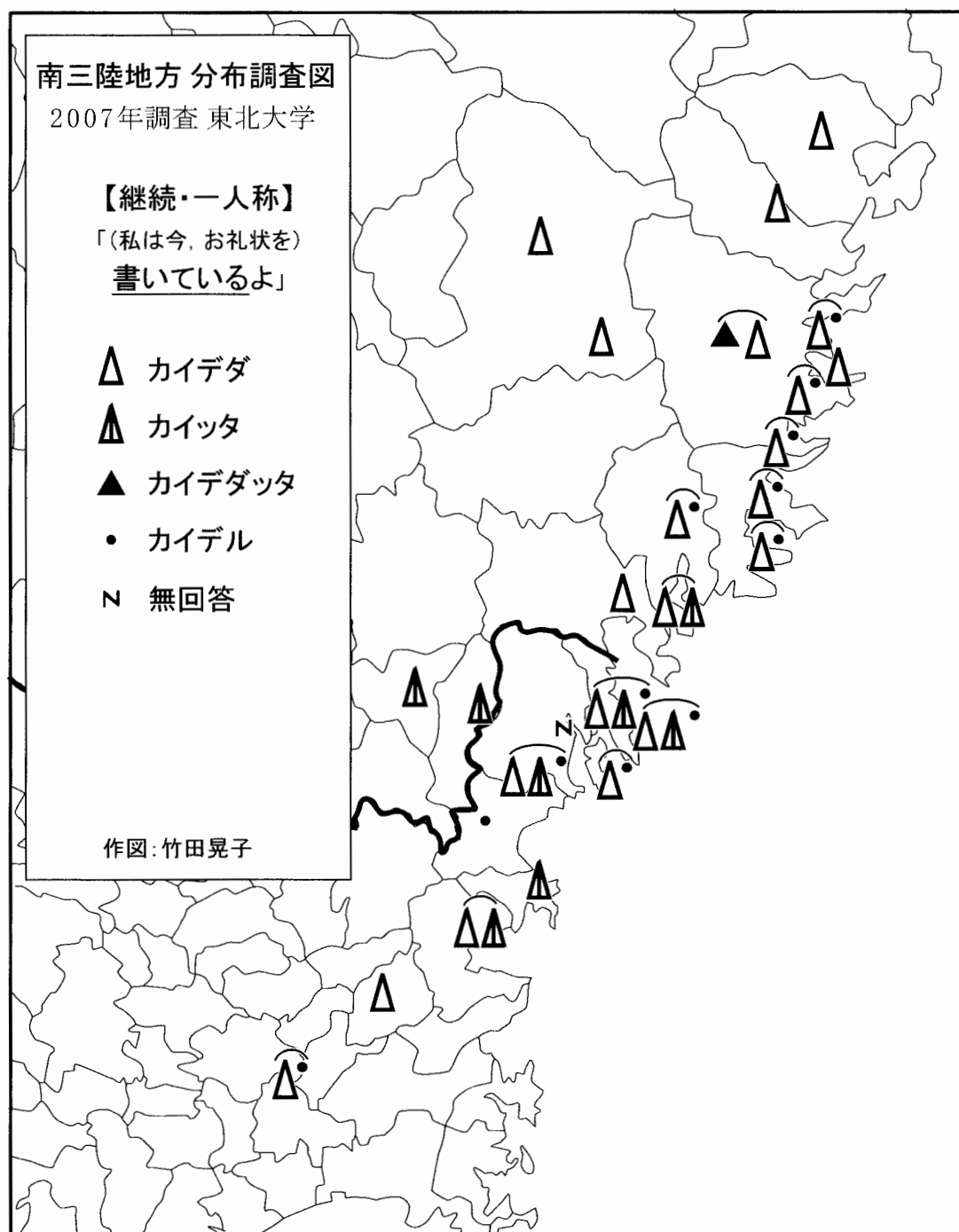


図2 継続・一人称

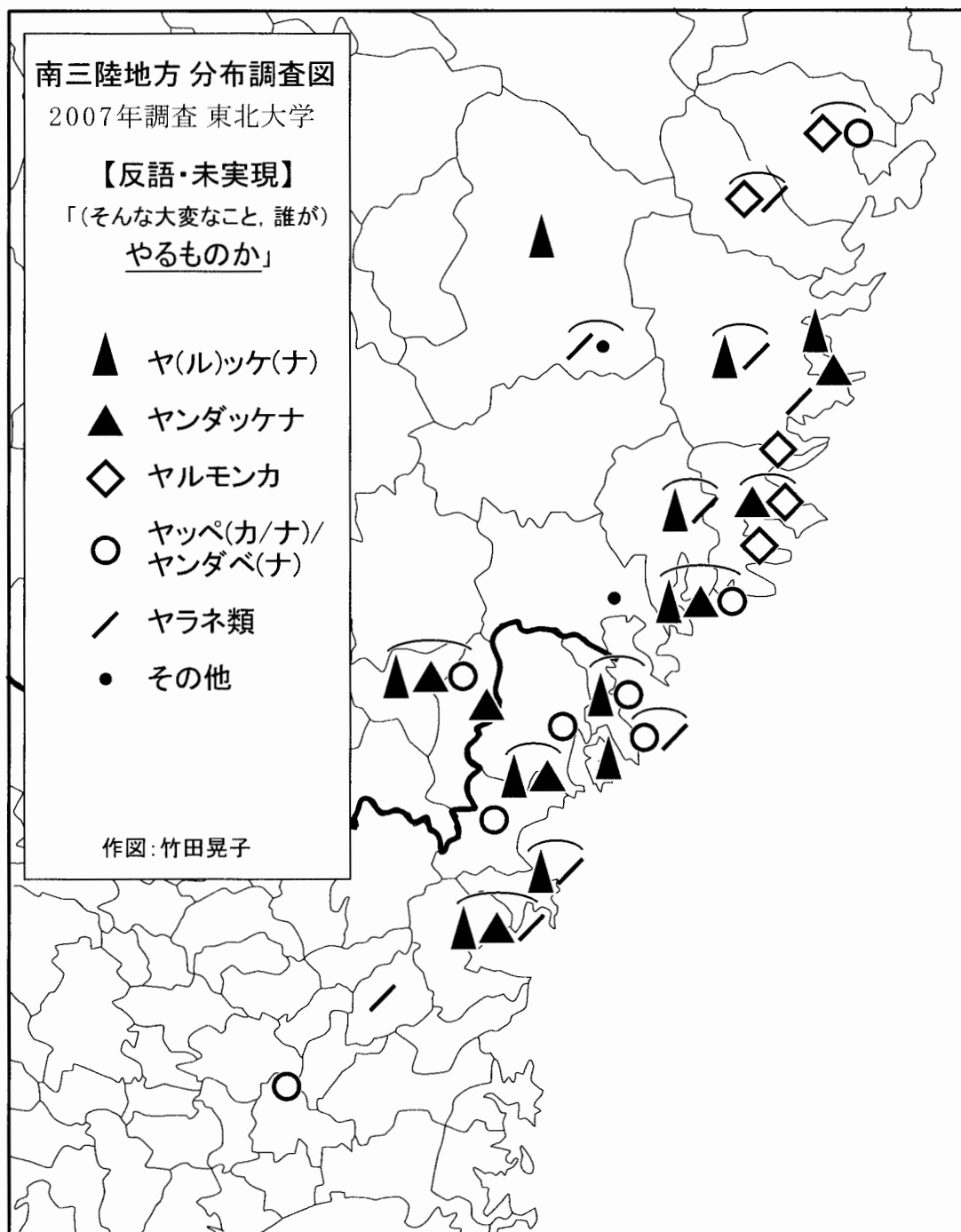


図3 反語・未実現

図1は、一人称による過去の出来事を回想する場合である。ほぼ全地点で動詞＋タッタ（イッタッタ）が回答されており、基本的な形式であることがわかる。次いで多い回答が動詞＋タツケ（イッタツケ）で、当該地域のやや真ん中から南に分布している。『方言文法全国地図』の二人称の例文と比べると、動詞＋タッタはほぼ同じ分布だが、気仙沼市ではイッタツケのみが回答されている。

次の図2は、一人称による出来事が現在も継続している場合である。ほぼ全地点で動詞＋テタ（カ

イデダ)が回答された。この促音化形式カイツタ(動詞+ツタ)は、岩手県・宮城県の県境をはさんで回答されている。この分布調査の話者のほとんどが男性である(男性22名・女性6名)。気仙沼市における多人数調査では、動詞+ツタの使用率は男性が高かったが、この分布調査でも同様の傾向があり、動詞+ツタが回答された8地点のうち女性の話者は1地点である。

図3は未実現の出来事の反語的表現である。岩手県側に動詞+モンカ(ヤルモンカ)が回答され、南部に動詞+ペ/ダベ(ナ)(ヤッペナ/ヤンダベナ)が比較的まとまって回答されている。岩手県・宮城県の県境をはさんで南北に動詞+ケ/ダッケ(ナ)(ヤッケナ/ヤンダッケナ)が回答されている。この形式は、気仙沼市の多人数調査ではほぼすべての年代で回答されており、基本的な形式であると考えられる。

5 おわりに

以上、気仙沼市における伝統的方言の記述、多人数調査の結果、南三陸町における分布調査の結果について報告した。

分布については、岩手県・宮城県の県境よりも旧南部藩・旧伊達藩の旧藩境のほうがややはっきり見える結果となった。旧伊達藩側には、図1では動詞+タツケの回答が多く、図2では動詞+ツタ、図3では動詞+ケが多かった。これらの形式が旧南部藩地域や旧伊達藩地域の内陸でどのような分布をもつか、今後の課題としたい。

文 献

国立国語研究所(1999)『方言文法全国地図』4, 財務省印刷局

竹田晃子・吉田雅昭(2000)「仙台市方言におけるテンス・アスペクト」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』

竹田晃子(2003)「石巻市方言におけるテンス・アスペクト—体系と属性差—」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』

竹田晃子(2003)「石巻市方言における可能表現」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』

竹田晃子(2004)「山形市方言におけるテンス・アスペクトと文末形式ケ」『国語学研究』第42集

竹田晃子(2011)「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』

想起表現

吉田 雅昭

1 本調査の概要

本章では、2006 年に宮城県気仙沼市で行われた方言面接調査の、想起(ある事態についての思い出し)及びその周辺の表現に関する調査結果について考察を行う。

想起表現の形式として、共通語では「昨日、どこに行ったっけ?」「昔、日光に行ったことがあったっけ」といった文で使用される文末詞(終助詞)の‘ヶ’が代表的なものとして挙げられる。このヶは、東日本でその使用が活発であり、中でも東北方言では、平叙文においても会話の中で多用される形式である。東北方言のヶに関しては、仙台市方言を調査した小林(2000)や、東北地方全体を取り上げた吉田(2004)などに、広い用法で使用されることが述べられている。

本調査では、想起に関しての様々な場面を設定し、その際にどのような形式を使うのかを被調査者に答えて頂いた。その答えの中ではヶも多く使用されているが、この調査はヶ形の用法そのものの考察ではない。いくつかの想起を表す文脈とそこで話される会話の内容を調査者側で設定して、被調査者に提示する。そして、提示する文の最後、文末の位置に、どのような形式を付加するのかを調べた。つまり、本調査の主な対象は、過去の事態を述べる際に現れる文末形式である。

二人による会話を場面として設定した。その相手と自分(被調査者)は、同性で小学校からずっと付き合いがある。また、くだけた場面の会話とした。方言形を含む、日常の話し方で現れる形式の記述を目指した。例文は、以下に挙げた、4 場面の 8 つの文である。

- ・場面 1 <昔一緒に海に行ったことを、思い出として話す場面>
 - (1): 小さいとき、一緒に海に行った()。
 - (2): うん、行った()。
 - (3): そのとき(あなた、お前、君、等)、けがをして大変だった()。
- ・場面 2 <あるテレビ番組を一緒に見ていた。少し経ってからそのことについて話す場面>
 - (4): さっきのテレビ、面白かった()。
 - (5): うん、面白かった()。
- ・場面 3 <小学校の時の担任の名前を質問し、それに対し相手が答える場面>
 - (6): 6 年生のときの先生の名前()。
 - (7): うーんと、確か佐藤先生()。

- ・場面4 <昨日、(相手は気づいていなかったが)会話の相手を見かけたことを伝える場面>
(8): 昨日、公園にいた()。車から見えたよ。

いずれも、過去に生じたある事態を述べるという文脈なのだが、それぞれ状況が異なっている。

場面1では、現在から離れた時点での昔の事態について話し合っている。

場面2では、現在から近い時点に経験した事態について話し合っている。

場面3では、過去の事態を忘れてしまい、聞き手に質問をし、聞き手は質問に答える。

場面4では、最近生じた聞き手にまつわる事態について、述べて伝えている。

本章は、全体としては想起という範疇であるが、以下、場面1～4それぞれを分けて、どのような形式が使用されるのか、またそこから考察されることを、述べていくことにする。そして、状況を勘案して、場面1を<遠い過去の事態の表現>、場面2を<近い過去の事態の表現>、場面3を<過去の事態についての質疑>、場面4を<共に認識した過去の事態の伝達>と呼ぶことにする。

面接で、それぞれの文を被調査者に伝え、文末に付加する形式を書く。そして、他にも言い方はないか、と聞いて、出てきた形式を全て書き記していくという方法をとった。そのため、人によっては1つの文に4、5形式を答えた場合もあるし、逆に形式なし、という回答も見られた。答えた形式には様々あるが、全ての形式を考察するわけではなく、ある程度特徴的なものを選び出したりまとめたりしながら、記述していくことにする。

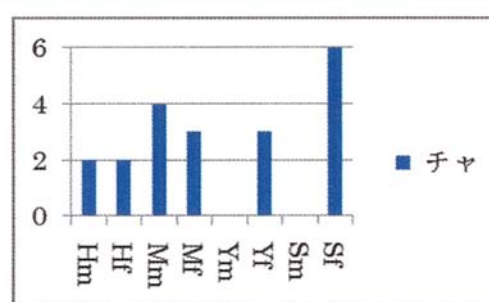
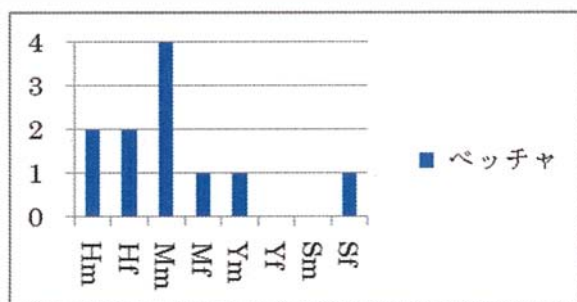
調査対象者は高年層(60代以上)男性12人、高年層女性10人、中年層(4, 50代)の男女8人ずつ、若年層(2, 30代)男性5人、若年層女性9人、高校生男性9人、高校生女性11人、計72人である。この8つの区別を基にして、以下の節でそれぞれの例文について考察し、述べていく。

2 遠い過去の事態の表現

ここでは、昔の体験を話すという文脈に現れる形式を取り上げていく。上述した場面1の3つの例文であり、その例文(1)～(3)を、その順番に沿ってそれぞれ記していく。

2.1 話題の提示

例文(1)「小さいとき、一緒に海に行った()。」というのは、話し手と聞き手が共に子供の頃という昔(遠い過去)に経験した事態を、話題として文脈の中に提示する文である。その際に付加される形式を、いくつかにまとめた上で、以下に示してみる。



グラフの縦軸は人数を表す。横軸は、Hが高年層、Mが中年層、Yが若年層、Sが高校生、またmが男性、fが女性を表す。例えば、横軸の一番左のHmは、高年層男性を指している。

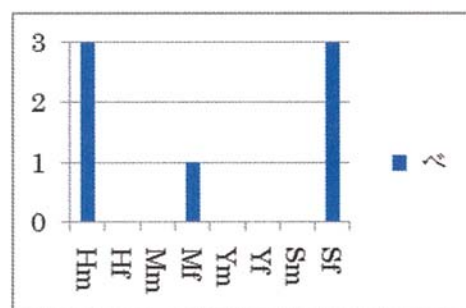
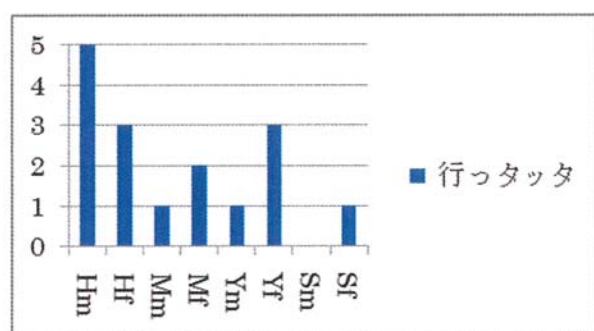
まず、方言形式であるベッチャとチャの回答を示した。これらの中には、ベッチャナや、チャネ、チャナなど、当該形式の後に別の文末詞を付加した例文も含めている。以下のグラフも同様に当該形式の後に別の形式(主にネ、ナなどの文末詞)を付加した回答も含めた人数で作成している。

ベッチャ形は、推量の意味などを表し、東北方言で広く使用されている形式であるべと、宮城県方言などで使用される方言文末詞であるチャ形とが融合して成立したもので、佐藤(1982:349)には「推量の強意は「ベッチャ」で、つとに“仙台べっちゃ”として有名である。推量形の「べ」に終助詞の「チャ」がついたものである」と記されている。ただし回答数としては、中年層男性でも4人で、他でも1～2人の回答に留まっている。高年層の回答も低く、話題の提示においてベッチャが主な用法として認識されているとは言い難い。武田・半沢(2003)には「言っただろう」のような確認要求方法を担う形式として、特に仙台市の北部の高年層などでベッチャが使用されることが記されている。例文(1)のような話題の提示も、確認要求のニュアンスはあるが、結果としてベッチャは、あまり使用されていない形式である。

一方、同じ例でもチャの方がより用いられている。中年層以上はそれほどベッチャとの差がないのに比べ若年層や高校生ではチャを回答した人数が多い。男性の回答はなかったのに対し女性は若年層で3人、高校生では6人がチャを用いると回答していることが特徴的である。この例のような話題を提示する際に、若い年代では女性がチャを使用しやすい傾向があることが示されている。

宮城県方言のチャについては、仙台市方言を考察した玉懸(2001)に詳しいが、そこで記された用法の中で、話題の提示は「隣接対第1発話相当位置」の用法に当てはまると考えられる(p37)。ただし、その用法は「相手のそもそも知っているはず・わかるはずの事柄X」(p39)というものである。

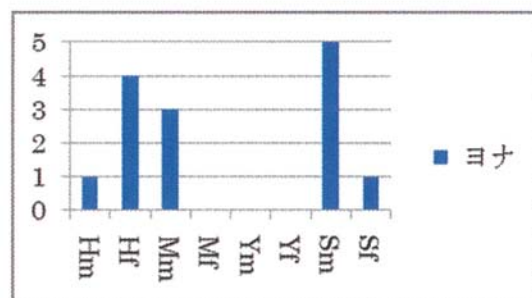
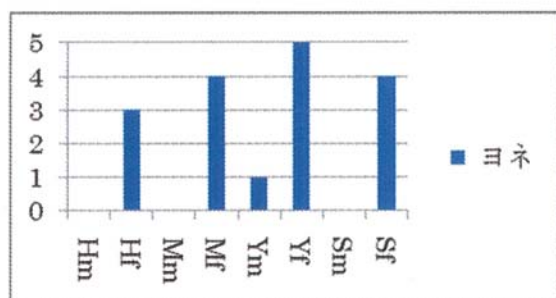
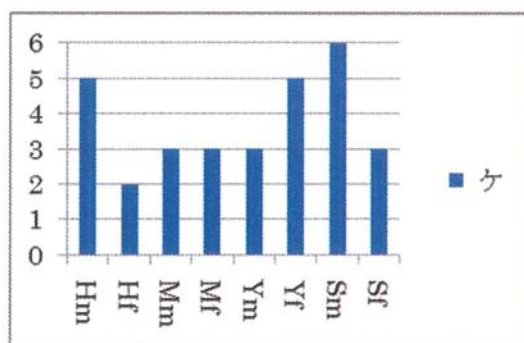
例文(1)は、遠い過去の事態であって、話題を提示した際には、必ずしも覚えていてわかるはず、と想定できるとは限らないと考えられる。そして、この文でチャの使用が女性に多いということは、男性と女性で、過去の事態の認識の想定に差があることの反映だと思われるのである。女性の方が、昔のことであってもずっと認識しているという考えを持っているのではないか。一方、男性は昔の事態など、忘れてしまっていることが多く、会話の相手も発話時点では忘れてしまい、分かるはず、とまでは考えていないのではないか。その男女の想定の違いが、チャの使用割合の差となって表れたのではないかと考えられる。チャの男女差に関しては、更に調査する必要がある。



本節の最初に挙げたベッチャはべとチャの融合形だが、チャがある程度使われているのに比べ、べの方は、回答数が合わせても7人に留まっている。高校生の女性で3人回答があるのは注目されるが、全体としては低調である。べは基本的に話し手の意志と推量の意味を表す文末詞であるため(玉懸 1999)、過去の事実を述べている例文(1)は、推量のニュアンスもいくらかはあるが、べを使用するほど不確定な事態でないために、あまり使用されていないのだと思われる。

もう1つ述べたいのは、行っタッタという形式である。この形式は他のような文末詞ではなく、ここでは‘行く’という動作を表す動詞を時間軸に位置づける、アスペクト・テンスに関する問題となる。東北方言では、一般的にタッタ形が動詞に下接して、過去に生じた事態を一体的に捉える過去完成相として機能することが認められている(吉田 2008a)。本文でも、昔行ったという事実を表す際にタッタ形を用いることが調査で示された。高年層男性の使用が最も多いが、他の年代でも使用するという結果となった。タッタ形は、まだある程度、生産性のある文法形式といえよう。

次に、共通語形で、当地域でも使用されているものを記していく。



例文(1)において最も使用すると答えられた形式は、ケであった。共通語においてもこういった文ではケを使用して、思い出したという意味を表すことが一般的だといえ、当地域でもケと答えた方がどの年代でも多く見られた。ケについては顕著な年代差や性差は見られず、万遍なく使用されており、想起の意味を表す際の、典型的な形式だと考えることができる。

一方、性差がみられたのは、ヨネ・ヨナ形である。これらは、文末詞のヨにネ・ナが付加した形式である。基本的な機能には違いがなく、会話において聞き手に対し共通認識の表出を表す形式だと捉えられるが、共通語ではヨナはヨネと同じ意味で、男性の会話により多く使用される形式だと考えられる(吉田 2008b)。この例も、話し手と聞き手の過去の共通体験を述べる場面なので、共に経験した事態を再認識して述べる、これらの形式を用いやすい場面である。

当地域でもやはりヨネ・ヨナ形の使用が多く、また性差がみられる。ヨネ形は、全ての男性の中で使用すると答えた方は1人しかいなかったが、女性は合わせて16人が使用すると答えており、当地域でも、ヨネ形は女性が用いやすい形式ということができる。ヨナ形については、男性では合わせて9人が使用すると答えており、女性は5人という結果だった。ヨネほど極端ではないが、ヨナ形は男性の方が使用するという結果が示された。ただし、高年層女性では、ヨネ形3人に対しヨナ形4人であり、どちらの形式も使われている。高年層に関して言えば、ヨネ・ヨナ形は、女性が使用する形式であり、男性はほとんど用いられない形式だといえる。

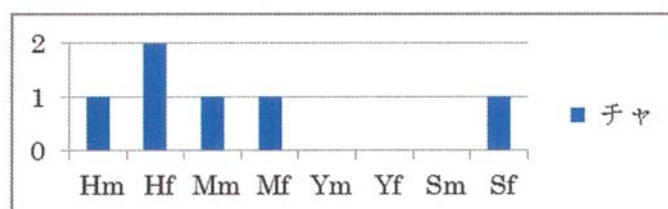
ヨネ・ヨナ形は共通語から広まり、女性の方が早く受容した形式であり、性差については更に後から形成された意識だといえるのではないだろうか。しかし、この点はヨネ・ヨナ形がどのように広まっていったかという全国的な推移を確かめる必要があり、他地域の動向も合わせて、今後の検討課題にしておきたい。

他にも回答のあった形式はあるが、ある程度の数の形式、また方言形式として取り上げたい形式について、回答結果と合わせて考察を行った。

2.2 肯定的応答

例文(2)「うん、行った()。」は、(1)で相手から過去の事態に関する話題を提示され、その発話に対し、自分もその事態を覚えている、認識していることを伝える、肯定的な応答が行われている文である。その時に動詞の‘行った’の後にどんな形式が付加されるのかを見ていく。

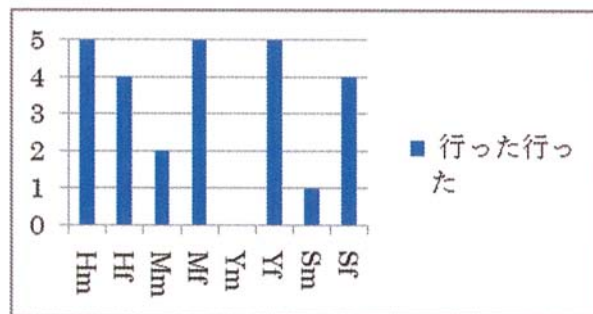
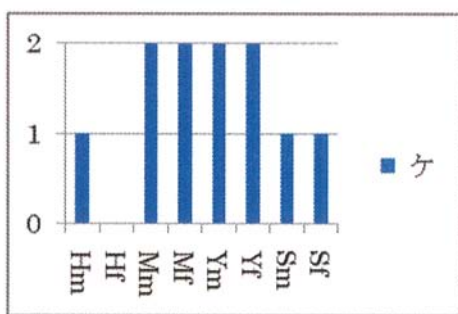
ここでは、行った、という動詞のタ形を示して調査したので、(1)で見られたタッタ形に関しては考察対象から外してある。



例文(1)はいくつか方言形式が現れていたが、(2)ではあまり用いられないという結果であった。

ベッチャと答えたのは高年層女性1人のみで、べも高校生の女性にベヨという形で1人見られたのみとなった。上に示したように、チャは計5人の回答があったが、高年層で3人、中年層で2人、高校生1人と、例文(2)においては、高年層を中心に少ししか使用されていない。

(2)は話題をある程度明確にしっかりと認識した(思い出した)という文脈である。推量の意味の強いべは、(1)よりも相容れないといえる。チャは相手が分かっているながら気づいていない文脈で使用され、また「後続させる発話内容にとっての土台になることとして取り上げる場合」(玉懸 2001:41)も使用されるということである。しかし、この文脈では、話を展開させるのは、話題を振ってきた相手の方であり、(2)の話し手は受け身の立場である。発話を後続させようという意識は低いので、チャの機能とはそぐわず、使用率も低い結果になったといえる。



例文(1)では使用する人の多かったケだが、(2)では全て合わせても11人に留まり、応答ではあまり用いられていない。ケ形は、基本的には明確な認識は表せず、質問文としても使用されることの多い形式である。(2)は、自分が認識していることを相手に伝えることが主な機能である。(1)の文脈だと、質問文として述べても話題を振ることはできるので、ケを使いやすいが、より確実な認識として相手に伝え、肯定するニュアンスを表す文脈である例文(2)でケは使いにくいのである。

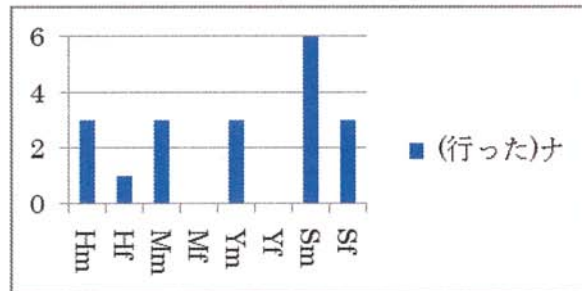
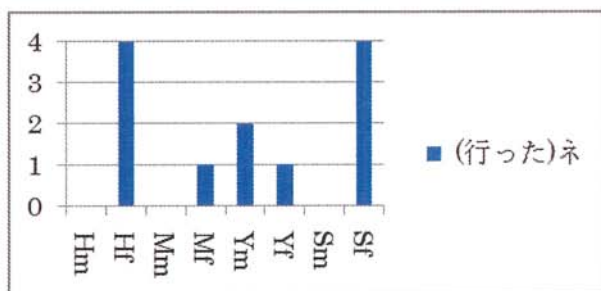
ケ形に代わって、一番使用するという回答が多かったのが、「行った行った」という動詞を重ねた形式であった。どの年代でも5人以上の使用者がみられた。概して女性の利用者が多いが、高年齢層では男性の方が多く、女性的な言い方、とまでは言えない。

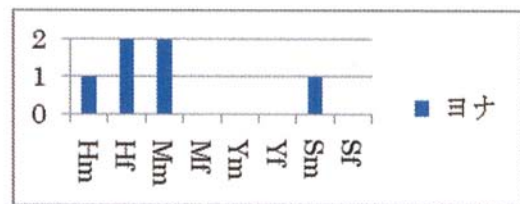
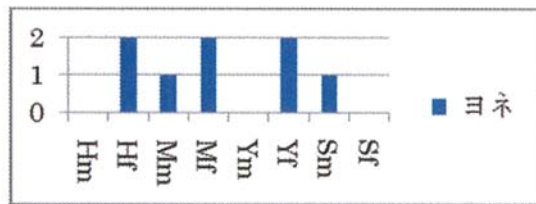
行った行った、のように同じ言葉を繰り返すのは、「反復法」と呼ばれるレトリック表現である。反復法には様々な下位分類があるが、例文(2)では2用法が合わさって使用されているといえる。

1つは、畳語法と呼ばれるもので、ここでは行った、という単語を繰り返し、単語を繰り返すことでその意味を強調する表現法である。(2)は、思い出しという自己内の認識の表出と同時に、聞き手と話し手が同じ体験を共有していることを相手に伝えるという面も存在する。1度言うだけでは自分の思い出の方が表立つが、繰り返すことで聞き手へのアピールも行っているのである。

もう1つは、おうむ返しというもので、この場合は、会話の相手の「行った」という発語をまた繰り返す、という用法である。本調査では、はじめから「行った」という言葉を応答として設定していたので、おうむ返しの用法は定められたものであったが、おうむ返し用法は、聞き手への肯定的な応答の機能を果たすもので、基本的な応答表現だと考えられる。ただし、「行った行った」と2回同じ単語を言うことで、自己の認識＝聞き手の認識、であることを更に強調することになる。

(2)では、チャのように能動的に会話を展開させようとするのではなく、認識の共有を強く相手に示すことで、受動的に後続する会話の場面づくりをする方が文脈として自然である。言葉を繰り返すという強調のレトリックは、そうしたやや複雑なニュアンスを上手く表す方法なのである。





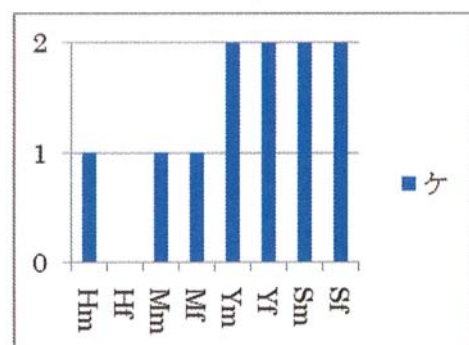
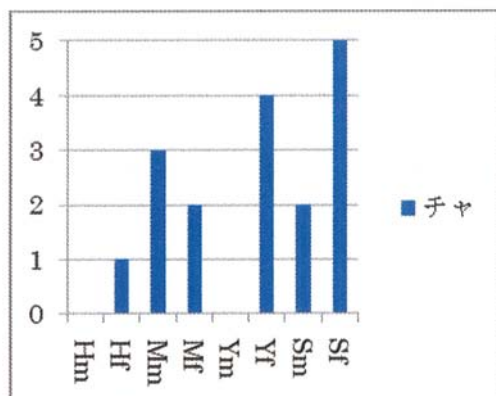
例文(1)では、チャネ、ケナなど他の文末詞にネ、ナが付加した回答が多かったが、(2)は「行った」に直接ネ、ナを付加した回答が目立った。ネは、計 12 人だったが、ナは計 19 人で、ナを使用する人数の方が多くなった。特に高校生男性は 6 人と、最も多くの人が使用すると答えた。

ネは若年層男性 2 人以外は女性のみ回答だが、ナは男性計 15 人で、全ての年代で男性の方が多く回答した。総じて、ネは女性が、ナは男性が使用する形式だといえる。男性は「行った行った」と比べると、中・高年層は「行った行った」の使用者の方が多いが、若・高校生層では逆に、ナの使用者の方が多くなっている。ナは独言的な場面で使用することが多い形式で、ただ男性的ではなく、自分の認識を自分自身に発することを表し、相手への働きかけが弱い形式でもある。その使用が若い世代の男性で多いのは、その人たちが会話の形成に消極的だということを示しているのではないだろうか。一方女性や高年層ほど、相手へのアピールが強く、共に会話をつくろうという意識が強く、それが使用者の差となって現れたのではないかとと思われるのである。

ヨネ・ヨナは単独のネ・ナより使用者が少ない。この複合形は話し手の認識を聞き手も受け入れると考えていう、「受容要求」(吉田 2008b)を表す機能を持つ。例文(2)は受容する側の文であり、相手へ何か要求する文脈ではないので、複合形の使用はあまり盛んではないのであろう。

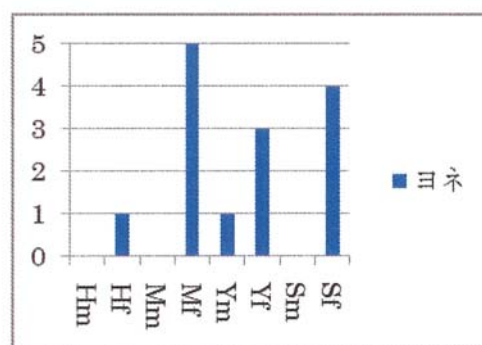
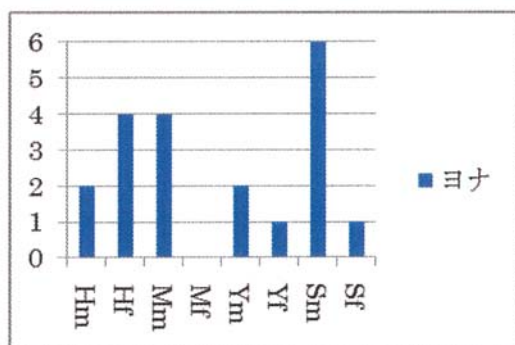
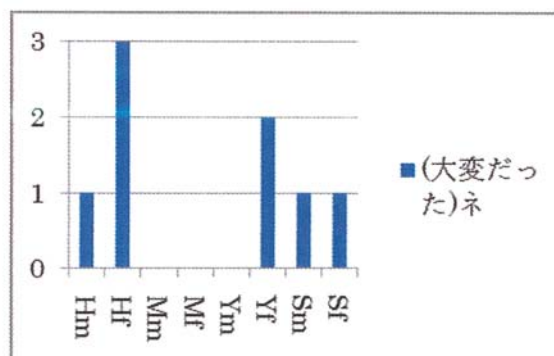
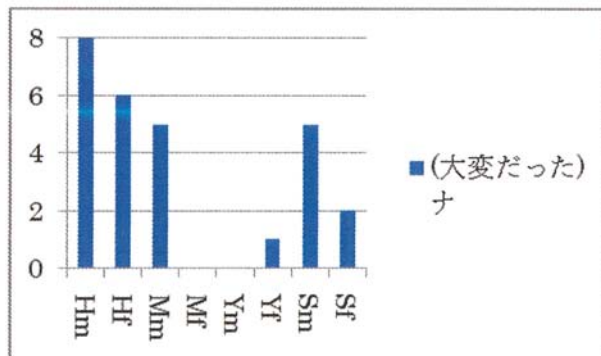
2.3 話題の再提示

例文(2)を聞き、例文(3)は再び相手に「そのとき(相手を指し)、けがをして大変だった()。」と言い、新たな話題を提供している。例文(1)では自分と相手が共に昔経験したことを述べていたが、(3)は相手の経験で、目撃はしても直接自分が体験した事態ではない。話題を提示する点では(1)と似ているが、一定の文脈が形成されつつあり、(1)と(3)の事態の性質も異なる点がある。



例文(3)に関し、方言形式はチャの使用のみが、どの年代にも見られ比較的使用されている。他の形式では、ベが高年層 2 人と高校生 2 人の計 4 人、ベッチャは高年層 2 人と中年層 1 人の計 3 人とほとんど使用されていない。チャは若い世代の使用が高年層と比べても多いことに目を引く。

想起表現の代表形式であるケだが、この例では、各年代でも多くて4人の回答に留まり、使用される形式とは言い難い。例文(3)は、昔のことを話題にしてはいるが、その場で思い出したというよりは会話の中である程度明確な認識を持った上で相手に伝えている。そのため、認識のあいまいさを感じるケは用いにくくなるのである。チャの使用者が多いのも、チャがある程度話し手に明確な認識を持っていることを表す形式だからだと考えられるのである。



例文(3)ではチャを用いるという回答も計17人と多かったが、一番多かったのは「大変だったな」と、タ形に直接ナを付加させた文で計27人となった。例文(2)にもナは見られたが(19人の回答)、(3)の方が回答人数は多くなった。逆に、ネは(3)では計8人に留まり、例文(2)の12人よりも少なくなった。この、ナがネよりも多いという傾向は、複合形ヨネ・ヨナも同様で、ヨナの場合は計20人の回答があったが、ヨネでは14人であった。

男女差だが、ナは男性18人女性9人と男性が多く、ネは女性6人男性2人と専ら女性で占められている。ヨナは男性14人女性6人と男性が多数を占め、ヨネは女性13人男性1人と、ほぼ女性専用形式といえるような結果である。ナは男性が中心で女性も使うが、ネは専ら女性の形式であるという違いがこの文の調査でも示されたといえる。

高年層では、男性はほとんどナしか使用しなく、女性はネも用いるが数としてはナの方が多い。男女ともナ形が一般的でそこに女性ではネも食い込んでいるという状況である。伝統的にはナ形が用いられていて、徐々にネが浸透した、と考えられるのではないだろうか。

また、高年層では単独形(ナ・ネ)の方が用いられているのに比べ、若い世代では複合形(ヨナ・ヨネ)の方が使用されていることが示された。高年層は単独形が計18人に比べ、複合形は計7人と単独形の使用が圧倒的に多い。しかし、若年層では単独形が計3人に比べ、複合形は計7人である。

高校生でも単独形の計9人に比べ、複合形は計11人と複合形の比率の方が高かった。

単独形の方が伝統的には普通に用いられていた形式であり、複合形の方が比較的最近になってから広まったということが、例文(3)の結果から、うかがえるのである。

以上グラフで示したのが、使用者の多い形式であった。他、「大変だったモン(ナ・ネ)」という、モノの文末詞的なモンという形式が高年層で2人、中年層で1人だけ見られた。また、「大変だったンダカラ」という、「だから」で文を終わらせるという人が、若年層と高校生で1人ずついた。

これらは形式名詞や接続詞が文末詞化した使用法である。モンの場合、例文(3)のような相手のことを指すのではなく、自分自身が大変だったことを相手に強く伝えるという場合に使うという用法も一般的である。高年層だけに見られたのは、若い世代では相手に関する事態よりは自分に関する事態にモノを用いることが多いからではないだろうか。また「だから」では、相手が忘れていた事態を思い出させるような、やや押しつけるようなニュアンスがあると思われる。それを若い人で使われたのは接続詞の文末詞的用法の広まりなのかもしれないが、用いている人は少数であり、この例など、相手の経験を話題として提示する際の、一般的な形式とはいえないのが現状である。

以上、発話時点から離れた過去の事態を述べるという文脈で、文末に使用される形式に関して、グラフを用いながら調査結果を示し、合わせて考察を行った。

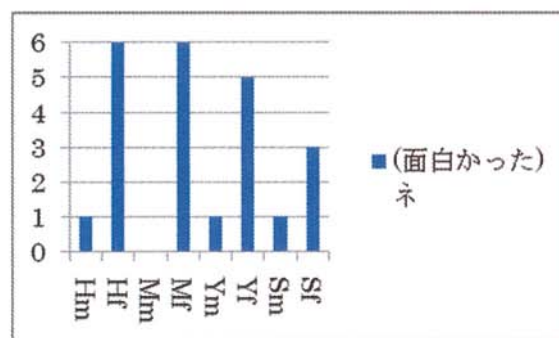
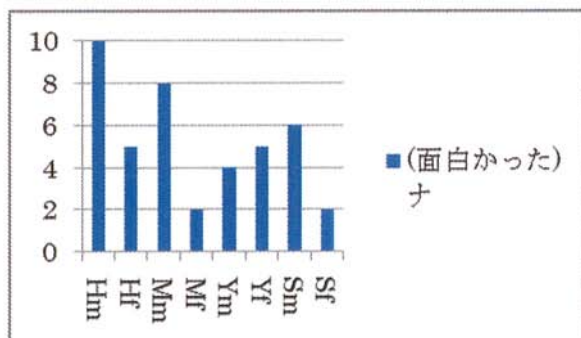
3 近い過去の事態の表現

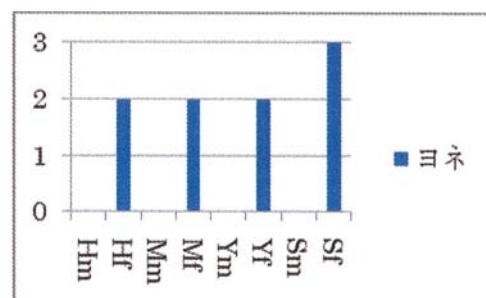
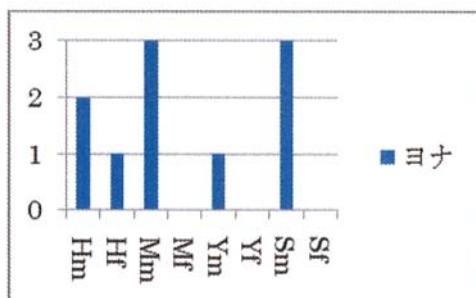
ここでは、発話時点から近い過去に生じた事態を話す際の、文末に見られる形式について述べていく。調査では、例文(4)と(5)の結果である。テレビ番組を一緒に見ていて、少し経ってからそのテレビ番組について話すという設定である。

3.1 自分の事態認識の伝達

例文(4)は「さっきのテレビ、面白かった()。」と、テレビ番組を一緒に見た相手にその共有した事態に関して自分が「面白かった」という認識を持ったことを伝達している文である。例文(1)～(3)は昔経験した事態の話だったが、(4)は発話時から離れていない、最近生じた事態に関しての話し手の思いを話している。本調査では、例文(5)で「うん」と聞き手が言うと設定をした。それで聞き手も自分と同じように、面白く思った、という文脈につながっていく。

ここではまず、使用者の多かった形式から記していくことにする。

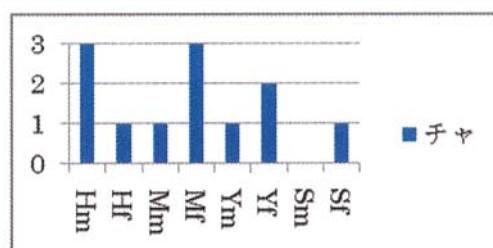




例文(4)では、ナ・ネを付加した文を発話するという回答が圧倒的に多く、使用される形式のバリエーションはあまり多くない。中でも、ナは合計 42 人を占め、ネの 23 人を大きく上回っていた。だが、複合形ヨナ・ヨネと比べるとヨナが計 10 人、ヨネは計 9 人で、単独形ナ・ネの回答数の方が圧倒的に多いという結果になった。前節でも述べたが、ヨネ・ヨナ形は、話し手と聞き手が共通の認識を持っていると話し手が想定する状況で使用される形式である。(4)でも、テレビ番組を聞き手も自分と同じく面白いと感じた、と想定することは可能なので、複合形も使われる。

しかし、聞き手も自分と同じ認識を持ったかどうか、聞き手の表情が笑っていたなど、はっきりした状況がなければ普通よく分からない。それよりも「面白かった」という自分の感想をそのまま伝え、その感想について聞き手に同意を求める方が自然で話しやすい。共通語の考察だがネ・ナには、「同意要求 聞き手の意向との一致を問う」(野田 2002:280)という用法が存在する。この例文も同意を求める言い方をすることを自然と感じ、結果としてナ・ネを使用するのが典型的だという結果になったのである。男性ではネの使用がほとんど見られず、ナを使う傾向が強い。女性はネの使用者も多いが、若年層女性ではナとネがどちらも 5 人、高校生女性もナ 2 人、ネ 3 人など、若い世代の女性でも、同意要求でナが使用されているという現状が見られた。

複合形では女性はヨネを使用する人の方がどの年代でも多い。複合形は、やはり新たに浸透した共通語的形式で、浸透する段階で男性的なヨナはあまり受け入れられず、ヨネの方が当地域でも受け入れられたのではないかとと思われるのである。



例文(4)では、他にまとまった使用が見られたのは、チャのみであった。このチャは、チャの持つ機能から、複合形の場合と同じ共通認識を持っているという想定で発話されると思われる。しかし計 12 人であり、やはりナ・ネなどの方が一般的に用いられる形式だといえよう。

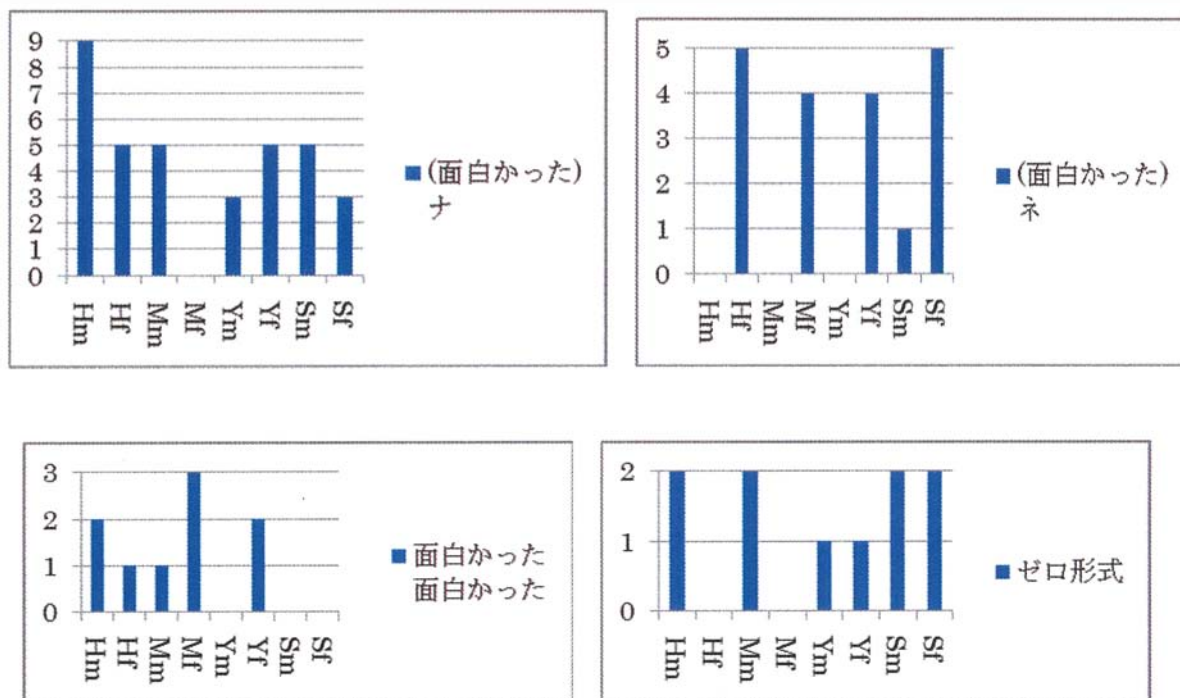
他にはべが高年層男性で 2 人、ベッチャが高年層と中年層 1 人ずつ計 2 人で、これらの形式はほぼ用いられていないと言い得る状況であった。数は少なかったが注目したいのは、「面白かったし」という回答である。これは、高校生で計 3 人(男性 1 人、女性 2 人)であり、非常に少ないのだが、高校生のみの回答だったということが興味深い。この「し」というのは、接続表現「(～だ)し」が

文末詞的に使用された用法である。この文末に「し」を使うのは、若者語として取り上げられることのある用法だと考えられ、それが、気仙沼でも同じく若者から浸透しつつあるのではないかと考えられる。ただ、若年層には使用が見られなかったことから、学校を中心に広まっているのではないだろうか。今後この「し」が上の年代にも広まるのか、注目すべき現象である。

例文(4)では、ケ形を回答した人はゼロであった。時間が離れていないため、思い出すという過程は必要ないことから、ケは用いられないのである。

3.2 相手の認識への同意

会話の相手から例文(4)の「テレビ番組が面白かった」という認識を聞き、それに対して自分も同じように感じたことを伝えるのが、例文(5)「うん、面白かった()。」という文である。相手の認識に対し、自分も同意している、同じように「面白かった」と感じたことを伝える文である。例文(5)も(4)同様、形式のバリエーションがあまりなかった。まず、代表例をまとめて記してみる。



例文(5)で最も多い回答は、「面白かったナ」であり、合計 35 人であった。高年層男性の 9 人が最も多かったが、若年層、高校生に至るまで安定した回答数が見られた。また、中年層女性の回答はゼロだったが、それ以外の年代は女性でもナを回答した人が存在した。一方「ネ」は計 19 人であり 2 番目に回答の多い形式だったが、使用者が女性に偏り男性は高校生 1 人の回答しかなかった。

この文で使用されるネ・ナの用法は「同意表明 聞き手の意向との一致を示す」(野田 2002:280)という同意表明用法であり、当方言でも例文(5)のように相手に同意を伝える際には、ナ・ネが最も使用される形式なのである。そして、全体ではナの方が使用される形式であり、男性ではほぼナに限られていることも、(4)と同様に(5)の結果からも示された。女性は、ネをより好むが、ナも根強く残っており、女性では、ナとネを共に使用するというのが現在の状況といえよう。

例文(2)では、肯定的な応答として「うん、行った行った」という、動詞(述語)を重ねる言い方が最も多かった。例文(5)にも「面白かった面白かった」という回答はあったが、合計で9人に留まり一般的な表現とはいえない結果である(この数字は、オモシエガッタ形も含めている)。(5)と(2)の大きな違いは、事態を思い出すという過程が存在しないことである。そして、2人が共にテレビを見る、という共通体験をしたことも、発話時点では明確に意識されている。そのため聞き手に共通体験をしたことをアピールする必要はない。「面白かった」という自分の認識を素直に伝えるだけで十分に同意表明としての役割を果たせると思われるので、反復法により強調して述べる必要を、(2)よりは感じず、結果として(5)では反復表現はあまり用いられていないのである。

(5)では、文末に何も付けないという、ゼロ形式の回答「うん、面白かった。」数が、合計10人と3番目に多い結果になった。他の例文でも1、2人はゼロ回答があるが、これだけまとまった数はこの文だけである。話し手自身のテレビを面白く見たという認識は、聞き手の方が「面白かった」と言っているのだから、特に強く聞き手に伝える必要はない。「面白かった」と、ただ伝えたい内容を表す単語だけ述べれば、事足りると考えるのも自然である。それで、文末詞も付加させない、動詞形で終了させた文の使用にも、一定の広がりがあったといえる。

その他の形式は、少数の回答しか得られなかった。ヨナ形が合計で6人、ヨネ形が合計で4人である。ヨナ形は男性5人女性1人、ヨネ形は全て女性という点で、この複合形もナとネの男女差は見られる。この複合形は、相手に対し「共通認識の表出・受容要求」(吉田 2008b)の意味を表すのが基本である。しかし例文(5)は、相手が自分と同じ認識を持つことを分かっている状況の発話なので、複合形を使用する必要のない文である。そのため、少ない回答となったのである。

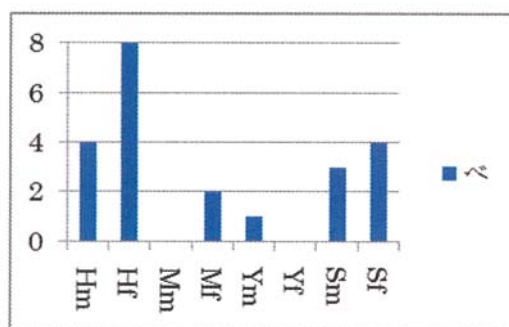
例文(5)で方言形式の使用は、チャ形が合計3人(高年層2人、中年層1人)だけで、ほとんど見られなかった。ナ・ネといった単純な文末詞の付加が一般的という結果となった。

4 過去の事態に関する質疑

この節は、過去の事態に関しての質問をし、それに対して答える、質問と応答の場面である。小学校の時の担任の名前という、発話時ではすぐに認識しにくい過去の事態を設定した。

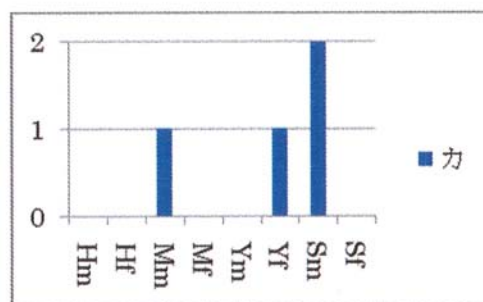
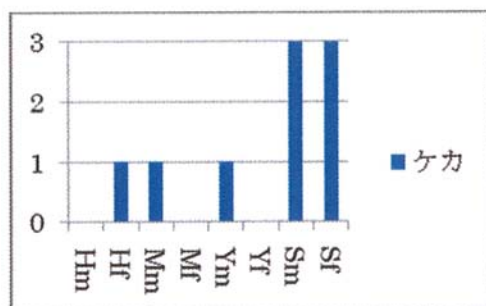
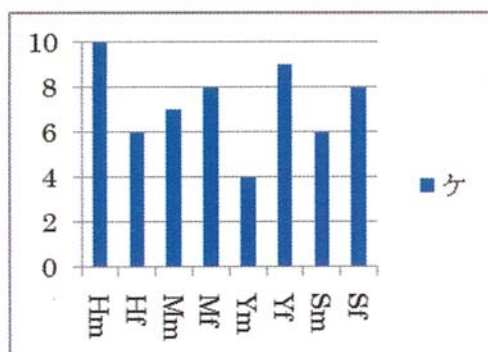
4.1 過去の事態の質問

例文(6)は「6年生のときの先生の名前()。」というものである。まず、べの結果を記す。



例文(6)では「6年生のときの先生の名前」の後に「誰だ(誰だった)、何だ(何だった)」という語句が来ると設定し、その後に付加される形式に関して、考察をする。‘べ’であれば「誰だべ、何だったべ」という文になるが、「誰だ、何だった」の部分は考察対象としていない。

(6)で使用される方言形はべのみだったが、合計 22 人の回答があり、ある程度使用される形式だということができる。べは話し手の推量を表すので質問文で使用されるのは当然とも思われるが、(6)では‘誰’なのかについての想定が何もなく不定である。そのため「佐藤さんだべ」のように何らかの想定を表す質問文に比べるとやや使用しにくく、そのため 22 人の回答に留まった、と考えることも可能である。ただし、若い世代でもべが使用されていることは示された。



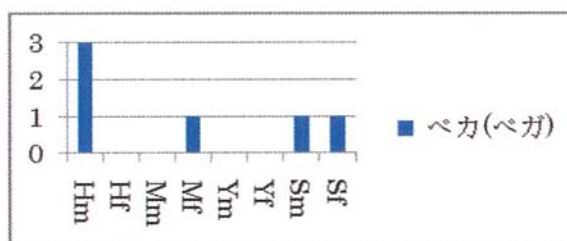
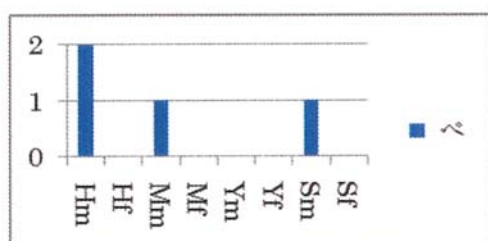
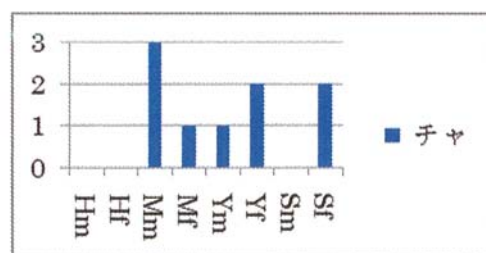
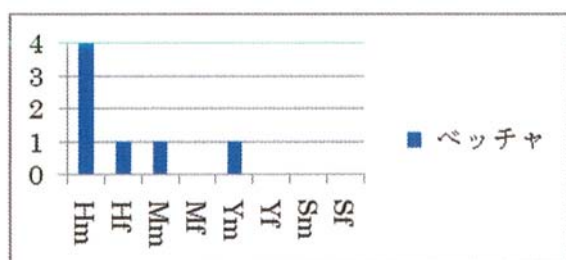
例文(6)では、べの他には、上に挙げたケ形に回答が集中していた(ケネ、ケナ等も含む)。ケカも当然ケ形の中に含まれるが、カ形単独の答えも少数だがあったことから、比較のためケ形と分けてケカの数もグラフにした。いずれにせよ、ほとんどの層でケの回答が最も多く、(6)のような過去の事態について質問する際は、思い出しを表すケ形を用いていることになる。思い出そうとしている内容が不定の際にもケは用いられ、共通語でも(6)ではケが代表的な形式だと考えられる。

疑問を表すカの使用も見られるが、数は少ない。ケカという形式も存在するが、ケ単独で十分に質問のニュアンスがあるために、カを付加する必然性はないと思われる。しかし、高校生のケカ・カの回答が、他の世代より多いという結果があった。ケカの使用実態などは、あらためて調べていく必要があるかと思うが、全体でみれば質問文であっても、圧倒的にケ単独で表現することが、現在の当地域では一般的であることが、調査から示されたといえよう。

なお、イネという回答が高齢層に、イナが中年層で各 1 人ずつ見られた。「誰だい」という質問文にネ・ナが付加した形式と思われるが、ほとんど使用がないとみなしてよく、少なくとも過去に関する質問文では、ほぼケ形のみが使われているというのが現在の状況である。

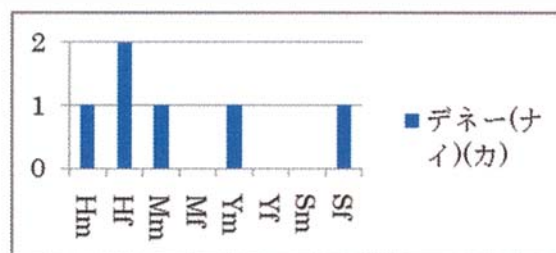
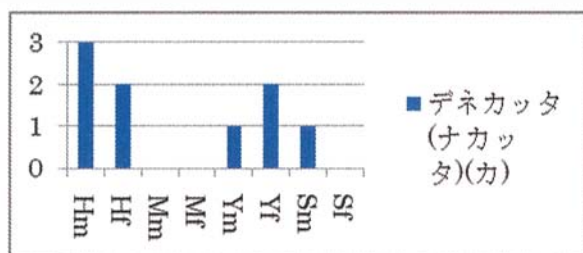
4.2 過去の事態についての応答

例文(6)の質問文に対する応答として、例文(7)では「うーんと、確か佐藤先生()。」という回答を設定した。この例文(7)の最後にくる形式を、本調査で記述していった。しかし、(7)では、(6)と違い、複数の回答があり、抜きん出て多くの人が答えた回答というものがなかった。そこで、回答数が比較的多かったもの、また方言形など、重要だと思われるものについて、以下述べていき考察を行うことにする。なお(7)も、(6)同様「だ、だった」の部分は直接の考察対象とはしない。



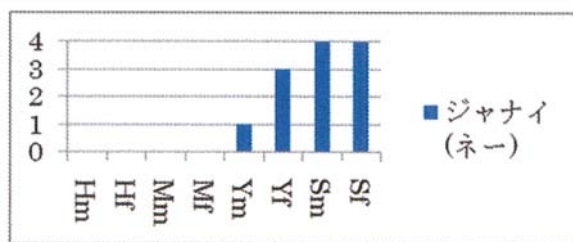
例文(1)「小さいとき、一緒に海に行った」という遠い過去の事態を述べるときに使用されていたベッチャ形が、ここでも見られた。例文(1)では計11人だが、例文(7)は計7人と(7)の方が少なくまた中・高年層に偏っている。(1)に比べても、更に確認要求のニュアンスが低い、質問への回答という場面なので、ベッチャの使用があまりないと考えられる。また、ベッチャの使用が多い高年層男性はそれほど要求の度合いを感じずに使用しているのかもしれないが、更に調べる必要がある。

中年層以下では、チャがある程度使用される。相手は「佐藤先生」ということは、忘れているだけで実は知っているはずなので、チャは使用可能である。また、べ・ベカという回答も見られた。べは推量を表すので、答えに対し自分でもあまり自信がないと考えれば、べを用い相手に問い返す文を発話することも可能であろう。質問文であるため、べ単独の回答と共に、カを付加したベカという回答も、べと同じくらいに見られるのだと思われる。

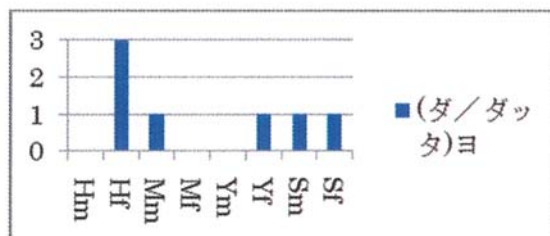
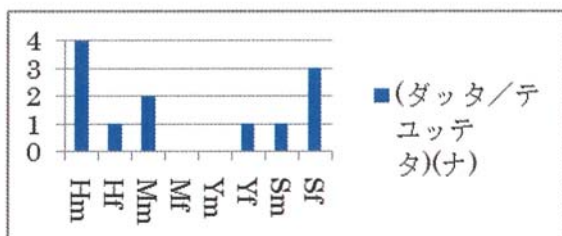
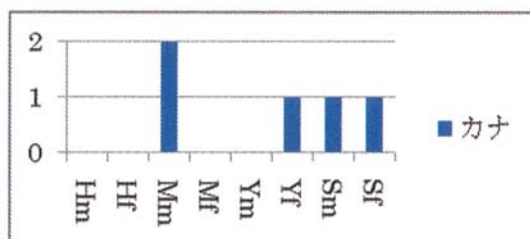
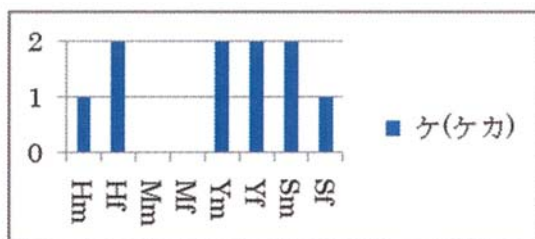


上のグラフは、「佐藤先生デネカッタ。／デネー。」など、それで文を終止させた回答の数を挙げたものである。これらは、「デ＋ネカッタ、ネー(カ)」などという、デに否定形(ナイ・ネー)が続く

疑問形式である。共通語では‘デハナイカ’と‘デハ’に否定形が付加するが、その‘デハ’が‘デ’となっている。これらデ系の回答は計 15 人となった。



デ系の疑問形式の回答がある一方で、‘ジャナイ(ジャネー)’という、ジャの後に否定形が続く形式の回答が、若年・高校生層で計 12 人見られた。若い世代でも‘デ’系の回答はあるが、結果としては、ジャナイという共通語的な否定疑問文が、若い世代では浸透していて、逆に中年層以上では浸透していないということである。当方言では、元々否定疑問文は‘デ’に否定形を付加する形式が一般的で、現在はデ系と若い世代はジャ系が共に使われているという状況である。



その他、比較的回答数の多い形式として、ケが計 10 人見られた。過去の事態を思い出したとき、また自信がなく問い返す場合でもケは使用できるので、ある程度の数があるといえる。

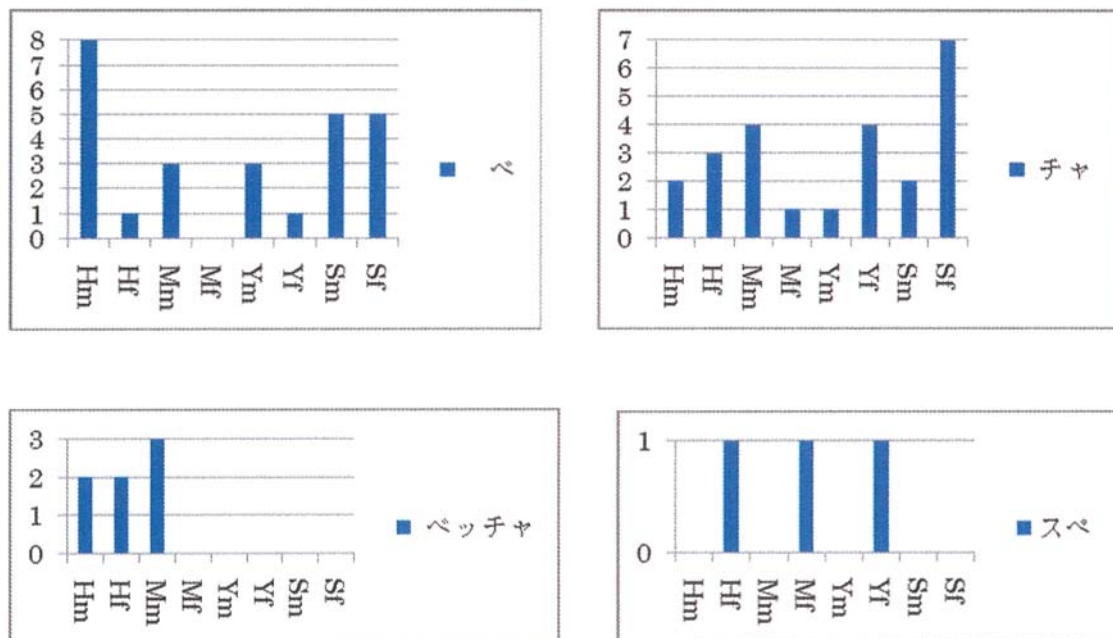
「ダッタ(テユッテタ)ナ」という回答は計 12 人あったが、「ダッタ(テユッテタ)ネ」と回答した人はいなかった。女性でもネの使用が見られないのは、この文の事態認識に話し手があまり自信をもっていなく、聞き手にはっきり伝えるよりは、独り言のようにあいまいに伝える方が自然だと判断する被調査者が多かったためだと考えられる。なお、「ダ(ッタ)ヨ」という回答も見られたが、高年層女性の使用が多く、他の層は 1 人だけだった。高年層の男性がベッチャを比較的使用するのと同様で、高年層では質問に対して強いニュアンスを持って答えることにあまり抵抗感がないのではないかと。こういった年代による応答の仕方の違いは、別に調べていきたい。

ヨネ・ヨナの複合文末詞形式は、ヨネ・ヨナ共に 5 人ずつで、あまり使用されなかった。この文は話し手自身の認識がはっきりしないと考えるのが自然であり、複合形の持つ受容要求というニュアンスは強すぎてそぐわないと判断されて、使用が少ないのだと考えられる。

その他、「と思う(思った)」の回答者が計5人、「ような気が(する)」の回答者が計4人、それぞれいた。こういった、分析的な語彙形式が回答されたことも、この例文(7)のような、比較的昔の事態について質問を受けた際は、代表的な使用形式がなく、それぞれの人の感じ方により様々な形式の使用が可能であることが示されたといえる。これは、例文(6)の質問文では、ケやベに使用が集中したのとは違う傾向である。また、文末詞の問題だけでなく、否定疑問形式の問題も絡んでいる。例文(7)は、その中にいくつかテーマがあり、課題となることも多い文である。

5 共に認識した過去の事態の伝達

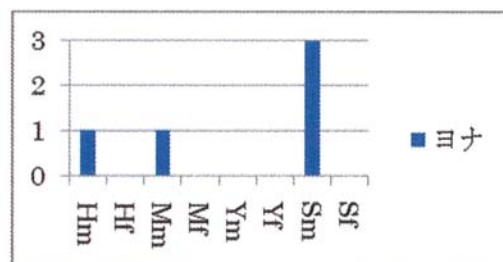
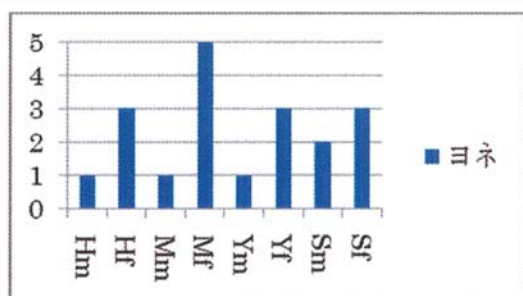
想起表現に関する本調査の最後の文として、例文(8)「昨日、公園にいた()。車から見えたよ。」を設定した。この文は、相手は気づかなかつたが話し手が昨日、会話の相手を公園で見かけたことをその相手に伝えるという状況で発せられた文である。昨日のことなので、自分も相手もその事態は、はっきりと覚えていることが想定される場面である。



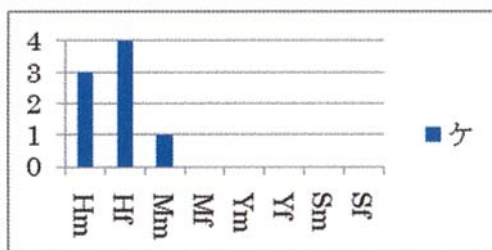
例文(8)では、方言形であるべの回答が計26人、チャの回答が計24人と、比較的多くの数が得られ、これらの方言形式を使用しやすい文脈であることが分かる。高校生でも使用されており、ベやチャが根強く使われていることが示された。上に述べたように、「昨日公園にいた」という事態は、聞き手が当然知っているので、相手の知っているはずの事態を取り上げる際に使用されるチャを付加するのは、自然だといえる。また、べについて、確認の意味があることが玉懸(1999)で述べられている。その確認は、ある事態が現実であるかを聞き手に確認する、という特徴があるとされる。その例には「アッコサ郵便ポストガ見エッべ。」(玉懸 1999:45)という文もあり、話し手は現実のことと認識しているが、聞き手もそう認識することを確認する際に、べが使用されることが分かる。例文(8)は典型的な確認要求の文脈と捉えられるので、チャとべがほぼ同じ機能を持つ形式と見なされ、結果的にどちらの形式も同じ程度使用されているのであろう。

ベッチャも見られたが、年代の高い層に限られている。ベッチャの機能としては用いやすい文脈だと考えられるが、あまり回答されていない。やはり、ベッチャは若い世代ではほぼ使用されない形式となっていると思われる。当地域では、元々確認要求の意味は、ベ形が担っていて、ベッチャはそれほど浸透していなかったのかもしれない。べ、チャ、ベッチャの古い世代の使用状況やその地域分布は、まだ考察すべき点が多いといえるが「確認要求の意味は本来べが担っていたものであり、チャは別の意味を持っていたもののように思える」（武田・半沢 2003：121）という指摘は当地域の動向と通じている。ただし高年層男性は圧倒的にべの使用が多いが、高年層女性はべよりチャの回答数の方が多い。高年層でも女性には比較的チャが早く浸透していたのではないだろうか。

また、スペという形式が、数は少ないが若・中・高年層の女性に1人ずつ見られた。丁寧さを表現する‘ス’にぺ(べ)が付加した形式だと思われるが、男性の使用はなく、女性の方が丁寧に表現する傾向が強く、この形式が出てきたのであろう。しかし各年代1人ずつしか見られず、女性を中心に、細々と命脈を保っている、衰退した形式だと位置づけられよう。



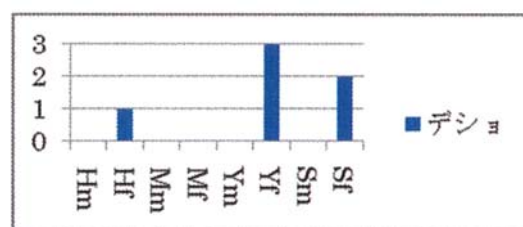
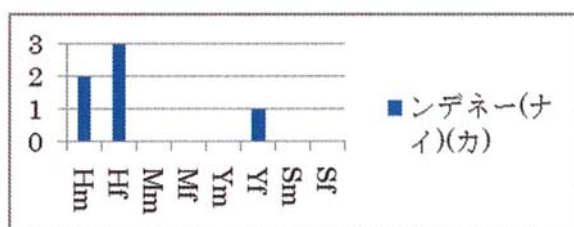
複合形式ヨネ・ヨナも見られた。ヨネは合計19人である程度数があるのに比べ、ヨナは計5人と少なく、例文(8)に関してはヨネの方が使用しやすい形式である。ただしヨネは女性の回答が14人と女性が主に用い、ヨナは全て男性の回答となっており、ここでもヨネは女性、ヨナは男性中心という違いが示されている。遠い昔の事態を述べた例文(3)「そのとき、けがをして大変だった()。」でも複合形は使われていたが、(3)はヨナの使用者が多く、(8)とは逆の結果である。例文(3)は思い出して自分自身で確認するという側面があるため、独り言でも使いやすいヨナが選ばれている。それに対し例文(8)は自分自身の認識は明確で、相手に対する確認という側面が前面に出るため、独り言的なニュアンスのあるヨナより、聞き手に伝えていることを明確に示すヨネが選択されている。男性は伝統的なべなどを好み、結果としてヨナの数が少なくなってしまったと思われる。



この文でもケは使用されているのだが、中・高年層に回答が集中する結果となった。(8)は質問文として発話することは考えられにくく、このケは平叙文での用法として用いられたケだと捉えられる。ケに平叙文の用法があることは、東北方言では一般的である。そして、昨日のことであるから

昔のことを思い出すわけではなく、自分の認識を確実なものとして相手に伝達するという文脈で、ケが使用されるのである。このケは、自分が見たことを伝えるのがメインであるが、その裏に、相手が公園にいたことを確認するという意図もある。東北方言のケの用法は、吉田(2004)に観察、経験、想起要求という主な3用法があると述べられている。例文(8)のケは、基本的には観察用法であるが、その中に想起要求の意味合いも混じった用法だと位置づけられると考える。いずれにしても、平叙文として認識を伝える文であり、共通語的なケの用法とは異なる使用法だといえる。

ケが年代の高い層に集中しているということは、若い世代になるほど、平叙文的用法が衰退し、他の例文でみたように、質問文的な用法としてケを用いるという、ケ形の共通語化が浸透しつつあることの結果だと考えられるのである。共通語にはない用法は排除されているわけで、方言形であるベやチャが若い世代でも使用されているのとは対照的である。ケ形自体が、伝統的方言形ではなく、若い世代では共通語形として認知される傾向が強いのではないかと考えられるのである。



数は少なかったが、‘デネー(ナイ)(カ)’と‘デショ’という回答があった。デネー等は、4.2節でも述べたが、否定疑問形の形式であるが、‘デ’の後に否定形(ネー、ナイ)が続く伝統的な形式である。例文(8)でも高年層に回答が集まっている。それに対し、デショは推量の丁寧形「でしょう」の変化形で、(会話的な)共通語形である。このデショは、全て女性の回答で、しかも若い世代の回答が多い。ここでも、伝統的な形式から共通語形への移行がみられるのである。

例文(8)では、ベやチャという方言形の使用が多く確認されたが、その一方ケ形などでの方言的用法の衰退現象も見られた。また、女性の方が丁寧形を使用するという傾向も見られた。

6 まとめ

本章で述べてきた調査は、想起表現という過去の事態に関して述べた文に関する文末表現を対象にしたものである。ただし、思い出すという過程を伴う典型的な想起表現以外にも、昨日のことなどあまり時間が経っていない事態を述べる文も合わせて調査し、広い意味での過去の事態の表現に関して、例文(1)～(8)まで、それぞれの調査結果を示し、考察を行ってきた。

現在から離れた事態を表現する際、また過去の事態についての質問文では、共通語と同様に、当方言でもケ形が全体的に用いられている。時間を経ている、明確な認識を持って事態を述べる際は、ネ・ナ、ヨネ・ヨナといった形式が使用されている。これらの形式は、基本的に話し手の持つ事態認識を、聞き手も同様に持っているとして想定して使われている。その中でも、ネは女性の使用が多く、男性はナを用いることが多いという性差が確認された。また、ヨネ・ヨナという複合形式の方が比較的新しく浸透したといえ、特にヨネは女性の受容が著しい形式である。

話し手と聞き手が共通認識を持っている場合、チャ形が使用され高校生などの若い世代でも、ある程度盛んにチャが使用されていることも示された。また、確認する場面ではべも使用され、こちらでも若い世代でもある程度使用され続けているということができる。方言形として、チャ・ベはまだ命脈を保っている形式だが、融合形のベッチャは上の世代の使用が多く、若い世代の使用は衰退した状況である。若年層や高校生の女性でも、チャは比較的使用されている。この点は、方言に対する意識に関する調査と合わせて考えていかなければならない。方言形のアクセサリー化と、本調査で出てきたような文末詞の使用がどの程度リンクするかは、今回は詳しく触れられなかった。

想起表現というテーマの中に、様々な状況を設定し、また基本的に会話という状況設定のため、聞き手と話し手の共通の事態を述べる例文を作成したことで、確認要求に関する発話と重なる点が多かった。また、同じ文であっても、方言形と共通語形を含め、様々な形式が回答された。

本調査は、状況設定をした上で自由に形式を回答してもらうというスタイルをとったが、ここに出てきた個別の形式について更に考察する必要がある。これまでの研究は、べ、チャなど方言形の成果が先行していたが、ヨネ、ヨナといった共通語形に関し、当地をはじめ東北地方や各地方でどのような使用状況がみられるのかについては、まだあまり調査されていないと思われる。

形式ごとの調査は今後積み重ねる必要があるが、様々な形式が、年代差や性差、方言形と共通語形という要素を含めながら、共存して使用されているという実態が明らかになったのは、成果といえるのではないだろうか。その成果を活かしながら出てきた課題について1つ1つ詳しく調査し、文末表現の実態について、当地を含めた東北地方の状況を明らかにしなければならない。課題は多いが、継続した調査、考察をしていきたい。

参考文献

- 小林隆(2000)「文末形式「ケ」」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤亨(1982)「宮城県の方言」『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 佐藤信夫・佐々木健一・松尾大(2006)『レトリック事典』大修館書店
- 瀬戸賢一(2002)『日本語のレトリック—文章表現の技法—』岩波ジュニア新書
- 武田拓・半沢康(2003)「仙石線グロットグラム調査報告」小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 玉懸元(1999)「仙台市方言の「べー」の用法」『言語科学論集』3
- 玉懸元(2001)「宮城県仙台市方言の終助詞「チャ」の用法」『国語学』52-2
- 野田春美(2002)「終助詞の機能」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 吉田雅昭(2004)「東北方言における文末表現形式「ケ」の用法」『国語学研究』43
- 吉田雅昭(2008a)「東北方言における基本的時間表現形式について—形式の変化と文法体系との関係—」『日本語の研究』4-2
- 吉田雅昭(2008b)「終助詞「ヨネ・ヨナ」の機能・意味について」『言語科学論集』12

伝統的方言語彙

作田 将三郎

1. はじめに

本報告では、昭和初期に行われた「小林好日博士東北方言通信調査資料」（以後、「第〇回小林資料」と略す）（注 1）、昭和中期高年層の言語を反映している『日本言語地図』などの方言調査結果、昭和初期以降の方言集類、2005・2006 年度に行った気仙沼市方言調査から、「唾」、および「雷」を意味する語形を取り上げる。そして、昭和初期以降の時間的側面、および世代別・男女別といった観点を考慮に入れた報告を行うことを目的とする。

2. 「唾」

2. 1 先行研究の概観

まず、「唾」を意味する語形が気仙沼市や隣接する地域ではどのように分布しているのか確認するため、図 1 として『日本言語地図』第 3 巻 118 図の略図を示す。図 1 を見ると、宮城県北部地域にはシタキが分布しているが、国立国語研究所（1968）『日本言語地図』第 3 巻 118 図の原図で確認してみると、シタキとタンペの 2 語が多く分布している。また、岩手県南部から気仙沼市を含む宮城県北部にかけての地域について、原図である国立国語研究所（1968）を見てみると、ネッペ、タンパキ、スタンペといった語形も分布している。特に、シタキとタンペの接触地域として、両語形が混在していることを読み取ることができる。

ただ、気仙沼市を見てみると、シタキとネッペの 2 語が回答されている。この他の方言調査の先行研究として、気仙沼市は含まれてはいないが、登米郡東和町、桃生郡北上町、遠田郡涌谷町、栗原郡栗駒町、志田郡三本木町、玉造郡岩出山町などの県北部地域で調査を行った小林隆（1982）が

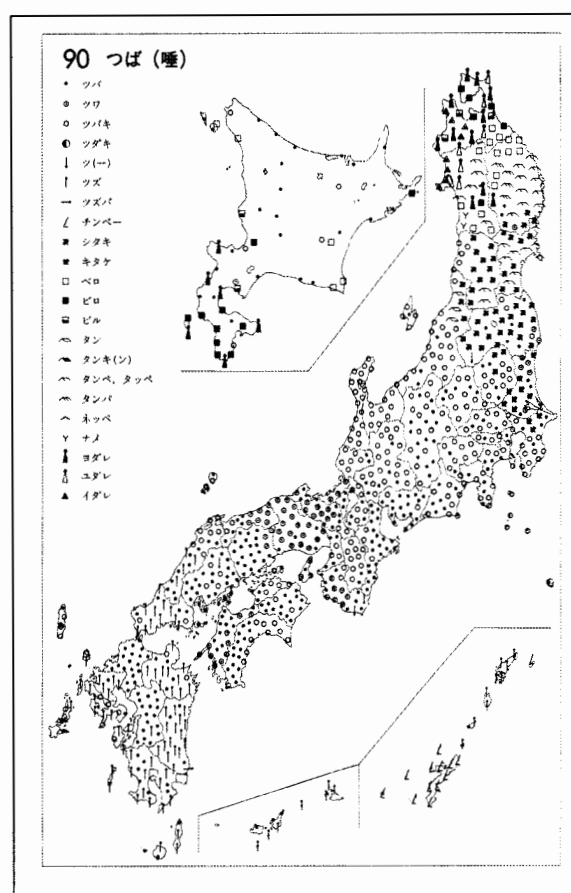


図 1 「唾」の方言分布図

(『日本方言大辞典』上巻より転載)

ある。小林（1982）によれば、これらの地域の昭和後期高年層では、タンペ、ネッペ、シタキ 3 語の使用が優勢であることを指摘している。

以上の先行研究から、県北部地域における昭和中期高年層、および昭和後期高年層では、「唾」を意味する語形として、シタキ、ネッペ、タンペ、タンパキが使用されていたことが窺える。

ところで、国立国語研究所（1968）において、宮城県北部にナッペという語形が 1 地点だけ見られるが、小林（1982）では報告されていない。この語形について、作田将三郎（2003）では、宮城県の中央部に位置する塩釜市において、昭和初期の言語資料である「小林資料」のうち塩釜市の調査票でナンペという語形が回答されていること、さらには、塩釜市の昭和後期高年層、および平成期高年層においてナッペが回答されていることを示している。ナッペという語形についてであるが、作田（2003）では、これらのことと仙台市・石巻市間グロットグラム調査の結果から、元々塩釜市に存在していたナンペと新たに石巻市から伝播してきたネッペが混交し、「ナンペ+ネッペ→ナッペ」という語形を作り出したという推定を行った。ただし、ナッペの使用について、作田（2003）では、仙台市・石巻市間グロットグラム調査の結果から、塩釜市の 10 代から 30 代といった若い世代では使用されていないが、隣接する地域の若い世代で使用されていることを指摘している。

次節では、気仙沼市では「唾」を意味する語形として、どのようなことばが使用されているのかについて見ていくことにする。

2. 2 気仙沼市における「唾」を意味する語形

ここでは、気仙沼市における「唾」を意味する語形について、昭和初期以降の方言調査資料、方言集類といった文献資料、および 2005・2006 年度に行った気仙沼市方言調査の結果をまとめたものとして表 1 に示す。なお、表 1 で使用した資料は以下のものである。

<文献資料>

【昭和～平成】

- ・『本吉郡誌』（1949）本吉郡町村長会編、本吉郡町村長会、〈本吉郡誌編纂委員会編『本吉郡誌』1973、名著出版より再版〉
- ・『気仙沼町誌』（1953）気仙沼町誌編纂委員会、三陸印刷有限会社
- ・『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』（1992）菅原孝雄編、三陸新報社

<方言調査>

【昭和初期】

- ・「第 1 回小林好日博士東北通信調査資料」（1938）東北大学国語学研究室所蔵

【昭和中期】

- ・『日本言語地図』3（1968）国立国語研究所編、大蔵省印刷局（注 2）

表 1 気仙沼市の「唾」を意味する語形

年代	資料	被調査者	シタキ 類	タンペ	ネッペ	ナッペ	タンパキ 類	スタンペ	ツバ
1938	第1回小林好日博士 東北方言通信調査 資料	昭和初期	2/2	1/2 (理 1)	2/2	0/2	0/2	0/2	0/2
1949	本吉郡誌		○						
1953	気仙沼町誌		○	○	○				
1959 ～65	日本語地図	昭和中期高年層	1/2	0/2	1/2	0/2	0/2	0/2	0/2
1992	けせんぬま方言 ア・ラ・カルト	平成期高年層		○	○		○		
2005	気仙沼市方言調査 (面接調査)	平成期高年層	2/2	2/2	2/2 (理 1)	0/2	1/2	1/2	0/2
		平成期若年層	0/2 (理 1)	1/2 (理 1)	1/2 (理 1)	0/2	0/2	1/2 (理 1)	2/2
2006	気仙沼市方言調査 (多人数面接調査)	平成期高年層	9/22 (理 8)	8/22 (理 9)	13/22 (理 6)	2/22	7/22 (理 8)	1/22 (理 1)	15/22
		平成期中年層	3/15 (理 5)	6/15 (理 3)	3/15 (理 7)	2/15 (理 3)	2/15 (理 2)	0/15 (理 2)	9/15
		平成期若年層	0/13 (理 2)	2/13 (理 2)	2/13 (理 2)	0/13 (理 2)	0/13 (理 1)	0/13 (理 1)	13/13
		平成期少年層	0/20 (理 7)	2/20 (理 9)	0/20 (理 1)	1/20	0/20 (理 1)	0/20 (理 1)	17/20

【表の見方】

(1) 回答された語形のうち、「スタギ、シタギ」はシタキ類に、「タンパキ、タンバギ、タンパゲ、タンパツ、タンバジ」はタンパキ類に、それぞれ含めて処理した。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

(3) なお、スタギ類、タンパキ類は、各類の語形のうち、どれか1語でも回答した人数である。

つぎに、文献資料から得られたすべての用例を以下に示す。

①シタキ類

- | | |
|------------------|------------------|
| (1) すたき＝唾 | 『本吉郡誌』 |
| (2) したき＝唾液。つばき。 | 『気仙沼町誌』 |
| ②タンペ | |
| (3) たんぺ＝唾。 | 『気仙沼町誌』 |
| (4) たんぺ (唾) | 『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』 |
| ③ネッペ | |
| (5) ねつぺ＝唾。つばき。 | 『気仙沼町誌』 |
| (6) ねっぺ (唾) | 『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』 |
| ④タンパキ類 | |
| (7) たんぱぎ (唾液、つば) | 『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』 |

まず、昭和初期の「第1回小林資料」を見ると、気仙沼市においてシタキ類、タンペ、ネッペが回答されているが、このうちタンペは理解語化していたようである。その後、昭和初期から平成期にかけての文献資料では、シタキ類、タンペ、ネッペ、さらに平成期高年層の言語を反映している資料においてタンパキ類の記述が見られる。

2. 3 気仙沼市方言調査

2. 3. 1 調査結果の概観

ここからは、2006 年度に行った多人数面接調査から得られた結果を使用して、表 1 に示した語形の使用状況について見ていくことにする。

まず、シタキ類であるが、高年層では使用語回答者と理解語回答者がほぼ同じである。一方、中年層では理解語回答者の方がやや多いものの、使用者回答者も見られる。しかしながら、若年層、および少年層では使用語回答者がおらず、もはや理解語化となっている、あるいはそこからもっと進んで廃語化へと向かいつつあることが窺える。

つぎに、タンペであるが、高年層ではシタキ類と同様に、使用語回答者と理解語回答者がほぼ同じである。ただし、中年層では、調査人数の半分もいってはいないが、使用語回答者が理解語回答者を上回っている。若年層では、使用語回答者と理解語回答者の数は同じであるが、それぞれ 2 名ずつと少ない。それに対して、少年層では、調査人数の約半数がこの類の語形を理解しているという回答が得られた。ただ、この語形類については、他の方言語形と比べると、若年層や少年層でも使用語回答者がいるという特徴を持っている。したがって、現在のところ、方言語形の中では、理解語化から廃語へと進む速度が遅いということが言える。

ところで、シタキ類とタンペの理解語回答者数であるが、調査人数に違いはあるものの、若年層よりその下の世代である少年層において多いという傾向が見られる。

ネッペは、高年層の使用語回答者が多く、他の方言語形と比べると、高年層では最も使用されて

いる方言語形と言える。しかし、下の世代になると、中年層では理解語回答者が使用語回答者を上回り、若年層では使用語回答者と理解語回答者の数が共に少なくなっている。また、少年層になると使用語回答者がおらず、しかも理解語回答者が1人しかいない。このことから、ネッペは高年層において使用語として扱われているが、中年層では理解語として扱われていることが窺える。一方、若年層では使用語、および理解語としてもあまり認識されておらず、少年層ではネッペという語形すら知らないようである。したがって、シタキ類・タンペと比べると、若い世代、特に少年層において理解語化を経ずに、廃語となっていることが見て取れる。

また、ナッペは若年層を除き、少数ながら使用語回答者がいる。また、理解語回答者も少ないながら、中年層・若年層に見られる。ところで、この語形は、県中央部の位置する塩釜市近辺の若い世代で使用されていることは前節で述べたが、今回の調査結果から、県北部地域の若い世代にはあまり浸透していないことが窺える。

タンパキ類であるが、使用語回答者は高年層と中年層に留まっている。一方、理解語回答者は各世代にいるものの、高年層以外は少ない。したがって、この語形は、高年層において使用語から理解語化へと移行している状態にあり、中年層以下では理解語化を経ずに既に廃語と化しているというのが現状であろう。

スタンペについては、使用語回答者が高年層の1人だけで、他の世代で皆無である。また、理解語回答者は各世代いるものの人数が少ない。したがって、ほとんど廃語となっていると解釈してよいものと思われる。ところで、このスタンペは、「シタキ類＋タンペ」が想定される語形であるが、国立国語研究所(1968)で概観すると、県北部地域では登米郡登米町に見られ、また岩手県南部にも分布している(注3)。したがって、かつては県北部地域でも使用されていたことを窺わせるが、小林(1982)では、『日本言語地図』とほぼ同地点である登米郡登米町の昭和後期高年層においてスタンペが回答されていない。また、今回の調査結果では、平成期高年層の使用語回答者がほとんど皆無であること、などを考え合わせれば、少なくとも昭和後期以降、廃語へと進みつつあったものが、平成期になりほぼ廃語となったと解釈することができる。

最後に、共通語形のツバであるが、各世代において、方言語形よりも多く使用語として回答されている。

2. 3. 2 世代別、および男女別の観点から

ここでは、2006年度の多人数面接調査から得られた使用語・理解語の内訳を、世代別、および男女別という観点から見ていくことにする。そこで、表2として、回答語形を使用語と理解語に分け、世代別、および男女別の回答者数をそれぞれ分けたものを示す。なお、世代ごとに得られた回答語形について、男女における使用語回答者と理解語回答者の数を比較したうえで、数が多い方には太字の数字を示した。また、使用語回答者と理解語回答者とが同数の場合には、便宜的に両者を太字で示したが、どちらも回答者が0人の場合には太字を付さなかった。ここでは、数の面から考察するため、太字の数字に着目して表を見ていただきたい。

表2 世代別・男女別に見た「唾」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		シタキ類		タンペ		スタンペ		ネッペ		ナッペ		タンパキ類		ツバ	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	5	3	5	6	1	1	8	3	1	0	5	4	9	0
	女 10	4	5	3	3	0	0	5	3	1	0	2	4	6	0
中	男 7	2	2	3	1	0	0	2	2	1	2	0	1	4	0
	女 8	1	3	3	2	0	2	1	5	1	1	2	1	5	0
若	男 5	0	0	1	1	0	1	2	1	0	0	0	0	5	0
	女 8	0	2	1	1	0	0	0	1	0	2	0	1	8	0
少	男 10	0	4	0	6	0	1	0	1	1	0	0	0	9	0
	女 10	0	3	2	3	0	0	1	0	0	0	0	1	8	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

まず、シタキ類であるが、使用語回答者が高年層男性と中年層男性といった男性に多い。一方、理解語回答者が多いのは、高年層女性、中年層男性・女性、若年層女性、少年層男性・女性である。これらのことから、シタキ類は、男性でも特に高年層でしようされているものの、それ以外の世代、および世代を問わず女性では理解語化していることが窺える。

つぎに、タンペであるが、中年層の男女において使用語回答者が多いものの、高年層女性、若年層男性・女性では使用語回答者と理解語回答者とが同数である。また、高年層男性、および若年層女性ではやや理解語回答者が上回り、少年層男性では完全に理解語化している。したがって、使用語と理解語とが拮抗している状況であり、今後は先に見たスタキ類のように若い世代から理解語化していく可能性があることが窺える。

スタンペ類は、全体の回答者数が少なく、使用している人や理解している人がほとんどいない語形である。そのため、廃語になりつつある、あるいは廃語化しているといえそうである。

ネッペであるが、高年層男性・女性、中年層男性、若年層男性、少年層女性において使用語回答が多い。ただ、高年層では理解語回答者との差があるのに対し、それ以外では理解語回答者と均衡している。また、回答者数の数も高年層では多いが、それ以外では少数である。したがって、ネッペは主に高年層で使用されている語形といえる。一方、中年層女性においては理解語回答者が多いため、理解語化していると考えられる。さらに、若年層・少年層では回答者数自体が少ないことから、これらの世代では廃語になりつつある、あるいは廃語化していると思われる。

ナッペについては、スタンペに比べれば、使用している人や理解している人はいるものの、もはや廃語になりつつある、あるいは廃語化している、とっていいかもしれない。

タンパキであるが、高年層男性と中年層女性で使用語回答者が多い。しかしながら、理解語回答者数とほとんど差がない。一方、高年層女性、中年層男性、若年層女性、少年層女性では理解語回答者が多いものの、高年層層女性を除けば、少数である。したがって、高年層では、男性で使用語、および理解語、女性では理解語と認識されているが、その他の世代では男女差なく、理解語ではなく、廃語になりつつある、あるいは廃語化していると考えられる。

最後に共通語形のツバであるが、各世代の男女において使用語形回答者が最も多い。したがって、主として、気仙沼市では現在最も使用されている語形ということになる。

ところで、表を横軸で見た場合、特に方言語形において、使用語と理解語とどちらが多いのだろうか。例えば、高年層男性ならば、使用語回答者に太字が付された方言語形は、シタキ類・スタンペ・ネッペ・ナッペ・タンパキ類の「5」、理解語回答者に太字が付された方言語形は、タンペ・スタンペの「2」とそれぞれ数える。その結果、使用語回答者のほうが多い、というような方法で分類を行うと、つぎのようになる。なお、ツバに付してある太字は数に入れていない。

①使用語回答者に太字が付された方言語形のほうが多い・・・高年層男性

②使用語回答者と理解語回答者に太字が付された方言語形が同数、または理解語回答者に太字が付された方言語形のほうがやや多い・・・高年層女性、中年層男性・女性、若年層男性

③理解語回答者に太字が付された方言語形のほうが多い・・・若年層女性、少年層男性・女性

すなわち、①に分類された「高年層男性」は主に方言語形を使用している、②に分類された「高年層女性、中年層男性・女性、若年層男性」では、方言語形が使用語でもあり、理解語でもあるという状況、③に分類された「若年層女性、少年層男性・女性」は方言語形が理解語化、あるいは廃語化している状況にある、ということになる。また、高年層男性は方言語形を保持しているのに対し、世代が下がるにつれ、使用語・理解語の拮抗状態から理解語化、さらには廃語化へと移行していくことが見て取れる。さらには、各世代の男性よりも女性のほうが、方言語形を使用しない傾向にあることも窺える。

2. 4 まとめ

以上のことから、気仙沼市における「唾」を意味する語形が現在どのような状況にあるのかについて、つぎのようにまとめることができる。

- ・スタンペ、ナッペ・・・各世代において、廃語になりつつある、あるいは廃語化している状況にある。
- ・タンパキ類・・・高年層では使用語でありながらも、徐々に理解語化しつつある。一方、中年層以下では理解語化ではなく、廃語になりつつある、あるいは廃語化している。
- ・シタキ類・・・高年層ではタンパキ類と同様に、使用語でありながらも、徐々に理解語化しつつある。一方、中年層と少年層では理解語化している。また、若年層では廃語になりつつあ

る、あるいは廃語化している。したがって、中年層以下の世代においては、スムーズに「理解語化→廃語」へと移行せず、世代によって複雑な変化が見られる。

・タンペ・・・高年層・中年層では使用語としてだけではなく、徐々に理解語化しつつある。一方、若年層では廃語になりつつある、あるいは廃語化している状況にある。ただし、少年層では、理解語化しており、特に若年層・少年層ではシタキ類と同様に「理解語化→廃語」へと移行せず、「理解語化」が踏みとどまっているような現象が起きている。

・ネッペ・・・高年層では使用語であるが、中年層では理解語化している。一方、若年層以下では廃語へと進みつつある、あるいは廃語化している。

・ツバ・・・各世代において最も多く使用されている。

3. 「雷」

3. 1 「雷」を意味する方言分布図の概観

まず、「雷」を意味する語形が宮城県、および気仙沼市ではどのように分布しているのか確認する。

そこで、図2として『日本言語地図』第6巻256図「雷」の略図を示す。図2から宮城県、および気仙沼市の分布状況を概観すると、気仙沼市を含む県全域にライサマ類が、岩手県との県境である北部の一部、および西部の海岸沿いの一部にカンダチ類が、福島県との県境である南部にライ類が、それぞれ分布している。また、国立国語研究所(1974a)『日本言語地図』第6巻256図「雷」の原図には、宮城県北西部、および中央部にゴロゴロサン類が分布しているが、幼児語との注記が見られる。

ところで、作田将三郎(2005)では、宮城県における「雷」を意味する語について、「ナルカミ→カミナリ→カンダチ類→ライ類→ライサマ類」と変遷したこと、さらには、特に近世後期において作成された文献資料から得られた用例をもとに、近世後期における「雷」の方言分布図を作成し、現代方言の分布との比較した結果、近世以降、「カンダチ類→ライ類→ライサマ類」と推移したことを指摘した。したがって、『日本言語地図』に見られる現代方言の分布は、最も新しい語形であるラ

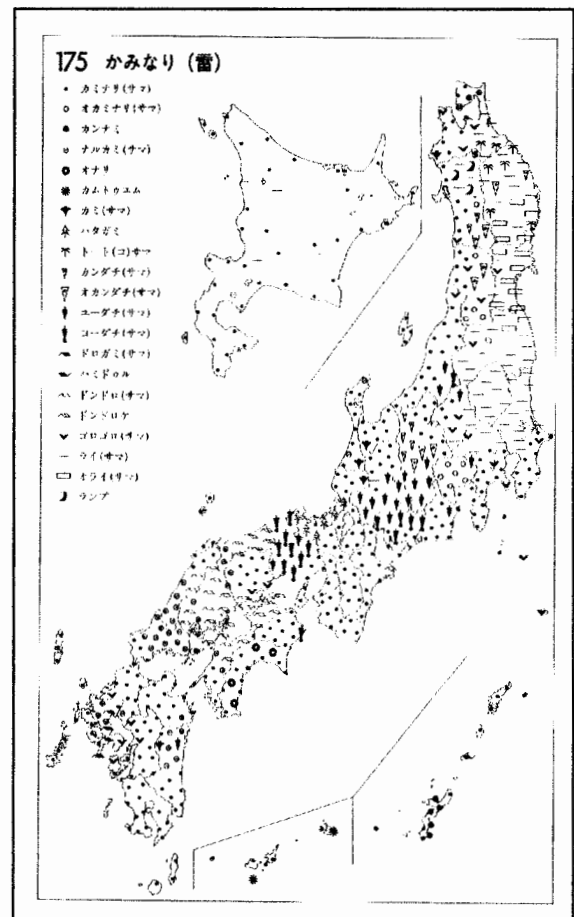


図2 「雷」の方言分布図
(『日本方言大辞典』下巻より転載)

イサマ類が県全域に分布し、それより古い語形であるカンダチ類やライ類が周辺部に残存し分布していると解釈することができる。

3. 2 気仙沼市における「雷」を意味する語形

ここでは、表 3 として、近世後期以降の方言調査資料、文献資料、および 2005・2006 年度に行った気仙沼市方言調査結果をまとめたものを示す。なお、表 3 で使用した資料のうち、2. 2 において挙げてないものだけを以下に記しておく。

<文献資料>

【近世】

- ・『天保凶作天候記録』、小山家蔵、村役人？、1835（天保 6）、〈気仙沼市総務部市史編さん室編『気仙沼市史 8 資料編』1995、気仙沼市に所収〉

<方言調査>

【昭和初期】

- ・「第 2 回小林好日博士東北通信調査資料」（1939）東北大学国語学研究室所蔵

【昭和中期】

- ・『日本言語地図』6（1974a）国立国語研究所編、大蔵省印刷局

まず、近世後期の気仙沼市において、気仙沼市総務部市史編さん室編（1995）『気仙沼市史 8 資料編』に収録されている『天保凶作天候記録』を見てみると、ライ類が使用されている。なお、用例の後にある〔 〕には、書名、作成者、作成者の身分、記載年代などの情報を記しておいた。

(8) 雷ハ一切発声ナシ 〔『天保凶作天候記録』小山家蔵、村役人？、天保 6（1835）〕

ところで、用例（8）に見られる「雷」の読み方であるが、作田（2006）において、岩手県・宮城県・福島県といった東北地方太平洋側地域における近世後期の地方語文献から得られた「雷」を意味する語形について、以下のようなことを指摘した。

- ①「カミナリ」は「かみなり、神鳴、神なり」などと表記されている用例が多い
- ②「雷」には「らい」と表記されている例や「^{らい}雷、^{ライ}雷」などのルビが付されている用例がある
- ③同一資料において、「^{かみなり}神鳴」「^{らいなり}雷鳴」といった使い分けが見られる例がある
- ④近世の仙台方言集である『浜荻』（1813 頃）に、「らいがとけた 雷墜 かみなりがあまった」（注 4）という方言的言い回しが記載されている

これらのことから「雷」の語形の読み方を「らい」と読むものと判断した。

さて、昭和初期の気仙沼市において「第 2 回小林資料」を見ると、オナリとライサマ類が回答されている。このうち、オナリであるが、先に見た国立国語研究所（1974a）の原図、および国立国語研究所（1974b）を参照すると、オナリに近い語形として、ナリが兵庫県（1 地点）に、オナリが高知県（6 地点）にそれぞれ分布している。しかし、高知県に分布しているオナリが遠く離れた

表 3 気仙沼市の「雷」を意味する語形

年代	資料	被調査者	カンダチ 類	ライ 類	オナリ 類	ライサマ 類	ゴロゴロサン 類	カミナリ 類
1835	天保凶作天候凶作	近世後期・庶民？	①					
1939	第 2 回小林好日博士 東北方言通信調査資 料	昭和初期	0/4	0/4	2/4	3/4	0/4	0/4
1959 ～65	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	0/2	0/2	2/2	0/2	0/2
1992	けせんぬま方言 ア・ラ・カルト	平成期高年層				○		
2005	気仙沼市方言調査 (面接調査)	平成期高年層	0/3	0/3	0/3	3/3	1/3	2/3
		平成期若年層	0/2	0/2	0/2	2/2	0/2	2/2
2006	気仙沼市方言調査 (多人数面接調査)	平成期高年層	0/22	0/22	0/22	20/22	11/22	9/22
					(理 2)	(理 2)	(理 4)	
		平成期中年層	0/15	0/15	0/15	11/15	3/15	6/15
			(理 1)			(理 4)	(理 4)	
		平成期若年層	0/13	0/13	0/13	2/13	1/13	11/13
						(理 4)	(理 1)	
		平成期少年層	0/20	0/20	0/20	1/20	4/20	19/20
			(理 1)			(理 7)		

【表の見方】

- (1) 回答された語形のうち、「カンダチ、オカダチ」はカンダチ類に、「オレサマ、オレーサマ、オリーサマ、オデサマ」はライサマ類に、「ゴロゴロサン、ゴロゴロサマ、ゴロゴロ」はゴロゴロサン類に、「カミナリ、カミナリサン、カミナリサマ」はカミナリ類に、それぞれ含めて処理した。
- (2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。
数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○数字＝資料内の用例数、○＝使用
- (3) なお、カンダチ類、オレサマ類、ゴロゴロサン類、カミナリ類は、各類の語形のうち、どれか 1 語でも回答した人数である。

気仙沼市に飛び火的に伝播してきたとは考えにくい。そこで、東北地方に目を向けると、ナラシが秋田県（2 地点）に、ナラサリが青森県（1 地点）に、オナリカミサンが岩手県盛岡市（1 地点）ではあるがそれぞれ回答されている。国立国語研究所（1974a）では、ナルカミという語形が中国・

四国・九州の一部と東北地方の青森・秋田県に分布している。ただ、宮城県には見られない。一方、カミナリという語形が東北地方で青森県・秋田県・山形県の日本海側に多く分布し、岩手県・福島県にも点在している。宮城県では県北部と中央部にそれぞれ1地点ずつ見られる。また、国立国語研究所(1974b)によると、全国的に「ナルカミ→カミナリ」という推定が示唆されており、宮城県でも3.1で示した推定語史から「ナルカミ→カミナリ」と推移したものと考えられる。

さて、オナリであるが、国立国語研究所(1974a)の凡例において、ナルカミの一種に類別されている。したがって、オナリはナルカミが変化したものと考えられる。おそらく、「ナルカミ→ナリカミ→オナリカミ」と変化し、岩手県盛岡市に見られるようなオナリカミサン、あるいはカミ(サン)の部分省略したオナリという語形を派生させたのではないだろうか。

ところで、ナルカミであるが、仙台藩(現在の岩手県南部から宮城県全域にかけての地域)では、近世前期の武士層が使用していたが、以降、姿を消してしまう。ただ、昭和初期の気仙沼市ではオナリと形を変えて使用されていた、と解釈しておきたい。

つぎにライサマ類であるが、漢語である「雷」を字音で読んだ「ライ」に敬称の「御(オ)」や「様(サマ)」をつけてできた語形である。おそらく、ライ類が原型であり、そこからライサマ類が生み出されたものと考えられる。その後、昭和中期になり、使用の主流がライサマ類へ移行していった。その結果が、先に見た国立国語研究所(1974a)の分布に反映されていると解釈することができる。また、平成期の高年層の言語を反映していると考えられる『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』(1992)にもライサマ類の記述が見られる。

(9) おれあさま (雷)

『けせんぬま方言ア・ラ・カルト』

3.3 気仙沼市方言調査

3.3.1 調査結果の概観

ここからは、2005年度、および2006年度に行った調査から得られた結果を使用して、表に示した語形の使用状況について見ていくことにする。

まず、面接調査を行った2005年度調査結果を見ると、3人の高年層のうち、3人とも使用語形と回答したライサマ類と1人が使用語形と回答したゴロゴロサン類がある。2人の若年層では、2人とも使用語形と回答したのはライサマ類であり、理解語形と回答したのはゴロゴロサン類である。したがって、2005年度調査結果からは、ライサマ類は高年層と若年層の両世代で使用されていること、一方、ゴロゴロサン類であるが、高年層ではあまり使用されておらず、若年層になると理解語形化している傾向が窺い知れる。

つぎに、多人数面接調査を行った2006年度の結果について、語形ごとに見ていくことにする。

まず、カンダチ類を見ると、各世代で使用語との回答は得られなかったが、中年層、および少年層ではそれぞれ1名ずつ理解語との回答が得られた。ただ、その数は少なく、既に廃語になってい

るようである。

ライについては、各世代において使用語、および理解語との回答が得られておらず、カンダチ類と同様に、既に廃語になっている。

オナリであるが、高年層で2人が理解語と回答しているが、それより下の世代では、使用語や理解語の回答は得られなかった。

ライサマ類については、使用語回答者が高年層や中年層に比較的多い。しかし、若年層や少年層では使用語回答者が理解語回答者を下回る。ただし、若年層と比べて少年層では理解語回答者が20人中6人と少ない。したがって、この語形は主に高年層、および中年層で使用されている語形であり、若年層や少年層では理解語化していることが窺える。

ゴロゴロサン類であるが、高年層において22人中11人と約半数が使用語形と回答している。しかし、中年層以下では使用語回答者がいるもののその数は少なく、さらに理解語回答者の数の少ない。そのため、高年層では使用語であるものの、それより下の世代では理解語化を経ずに、廃語へと向かっているのが調査結果から読み取れる。

最後に、共通語形のカミナリ類であるが、高年層や中年層では使用語形回答者は半数以下であるが、若年層と少年層では、ほぼ全員が使用語形と回答している。したがって、先に述べたゴロゴロサン類のように、理解語を経ずに「使用語→廃語」という方言語形の推移が窺える。これらに見られる傾向は、若い世代の共通語形使用が大きく関係しているものと思われる。

3. 3. 2 世代別、および男女別の観点から

ここでは、2006年度の多人数面接調査から得られた使用語・理解語の内訳を、世代別、および男女別という観点から見ていく。そこで、表4として、回答語形を使用語と理解語に分け、世代別、および男女別の回答者数をそれぞれ分けたもの示す。なお、表の示し方は、2. 3. 2で述べているため、ここでは省略する。また、すべての語を取り上げることはせず、ライサマ類、ゴロゴロサン類の2語について見ていくことにする。

まず、ライサマ類であるが、高年層・中年層において使用者回答者の数が理解語回答者の数を大きく上回っている。一方、若年層・少年層では回答者数自体少ないが、理解語回答者の数が上回っている。したがって、中年層と若年層との間に使用語の境界線が存在していることになる。

つぎに、ゴロゴロサン類であるが、高年層、中年層男性、少年層女性で使用者回答者の数が理解語回答者の数を上回っている。高年層では回答者の半数が使用語としているが、中年層男性と若年層女性では、理解語回答者の数が上回っているのはいるが、回答者数自体少ない。一方、中年層女性では、回答者数自体少ないが、理解語回答者の数が上回っている。したがって、中年層女性では理解語化していると見てとれる。これらのことから、中年層の男性と女性との間に境界線が引けると見ることもできるが、使用語としての境界線は、高年層と中年層との間にあるものと考えられる。

表4 世代別・男女別に見た「雷」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		オカダチ類		ライサマ類		オナリ		ゴロゴロサン類		カミナリ類	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高 22	男 12	0	0	11	0	0	1	6	2	5	0
	女 10	0	0	9	0	0	1	5	2	3	1
中 15	男 7	0	0	5	2	0	0	2	1	2	0
	女 8	0	1	6	2	0	0	1	3	4	0
若 13	男 5	0	0	1	2	0	0	0	0	4	0
	女 8	0	0	1	2	0	0	1	1	7	0
少 20	男 10	0	1	1	4	0	0	0	1	9	0
	女 10	0	0	0	3	0	0	2	1	10	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

(3) なお、「ライ」は回答者がいなかったため、表には示さなかった。

3. 4 まとめ

以上のことから、気仙沼市における「雷」を意味する語形についてまとめると、つぎのようになる。

- ・カンダチ類、ライ類・・・各世代で使用語、および理解語との回答がほとんど得られていないため、既に廃語になっているようである。
- ・オナリ・・・昭和初期には使用されていたが、平成期ではカンダチ類、ライ類と同様に、廃語になっていると考えられる。
- ・ライサマ類・・・昭和初期以降、平成の高年層、中年層で使用されているが、平成期の若年層・少年層では理解語化していることが窺える。
- ・ゴロゴロサン類・・・主に平成の高年層で使用されている語形である。若年層女性で理解語となっているが、それより下の世代では、理解語を経ずに廃語へと向かっている。その背景には、共通語形カミナリの使用が大きく関係しているものと思われる。
- ・カミナリ・・・高年層、および中年層男性では使用語回答者の数はさほど多くないが、中年層女性から下の世代にかけてはほとんどが使用語形と回答している。したがって、平成期の気仙沼市において、高年層と中年層男性ではライサマ類を、中年層女性より下の世代ではカミナリを、それぞれ使用しているといえそうである。

4. おわりに

以上、気仙沼市における「唾」、および「雷」を意味する語形について見てきた。伝統的方言は、高年層において使用語として存在しているのに対し、中年層以下では理解語とならずに廃語化しつつある、あるいは既に廃語になっている傾向が見られた。一方、共通語形は、高年層ではあまり使用されていないが、伝統的方言を使用しない世代である中年層以下では使用語となっている。したがって、気仙沼市における伝統的方言語彙は、共通語化により急速に失われている状況にあるといえそうである。その際、伝統的方言から共通語化への推移として、「伝統的方言語彙の使用語化→理解語化→廃語化（共通語化）」という変化でなく、「伝統的方言語彙の使用語化→共通語化」といった理解語化を経ずに直接共通語化へと移行していく傾向にあることも、今回の調査結果から窺い知ることができた。

最後に、本報告では2語しか取り上げなかった。この他にも、2006年度には「痰」、「夕立」、「糠」、「粃殻」を意味する語についても調査項目に立て、調査を行った。なお、これらの調査結果であるが、表5から表12として本報告の末尾に示しているので、そちらを参照されたい。

注1 当時、東北帝国大学（現在の東北大学）教授であった小林好日氏が東北地方の方言を対象に行った通信調査の調査票。調査は計3回行われ、本報告では、調査当時の気仙沼町（現在の気仙沼市）分の調査票のうち、第1回の2部、および第2回の4部を使用する。なお、同資料の調査概要については、竹田晃子（2002）が詳しく論じており、そちらを参照されたい。

注2 全国2400地点に及ぶ面接調査の結果を300枚の地図にまとめたものとして刊行されている。気仙沼市においては、1959年（昭和34年）、および1965年（昭和40年）にそれぞれ1名ずつ調査が行われている。

注3 スタンペについては、作田（2002）において、県中央部の仙台市、多賀城市、県南部の丸森町と白石市の例を示して述べている。

注4 佐藤武義ほか編（1999）を利用した。

【文献】

国立国語研究所（1968）『日本言語地図』第3巻 大蔵省印刷局

国立国語研究所（1974a）『日本言語地図』第6巻 大蔵省印刷局

国立国語研究所（1974b）『日本言語地図解説—各図の説明6—』大蔵省印刷局

小林 隆（1982）「3. 語彙」加藤正信・佐藤和之・小林隆編「宮城県北地方の方言調査報告」『日本文化研究所研究報告』別巻第19集『東北文化研究室紀要』通巻第23集

作田将三郎（2002）「伝統的方言語彙」小林 隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

作田将三郎（2003）「宮城県における＜糠＞の地方語史」『言語科学論集』第7号

作田将三郎（2005）「宮城県における＜雷＞の地方語史」『国語学研究』第44集

作田将三郎（2006）「東北地方における＜雷＞の地方語史」『文化』第 69 集 第 3・4 号—秋・冬—

佐藤武義ほか編（1999）『近世方言辞典』第 1 輯 港の人

小学館国語辞典編集部編（1989）『日本方言大辞典』上巻・下巻 小学館

竹田晃子（2002）「小林好日氏による東北方言通信調査」『東北文化研究室紀要』通巻第 44 集

表5 気仙沼市の「痰」を意味する語形

年代	資料	被調査者	タンペ	タンコ	ネッペ類	タンパキ類	タン
2005	気仙沼市方言調査 (面接調査)	平成期高年層	1/2	0/2	1/2 (理 1)	1/2	2/2
		平成期若年層	1/2 (理 1)	1/2 (理 1)	0/2	0/2	2/2
2006	気仙沼市方言調査 (多人数面接調査)	平成期高年層	6/22 (理 6)	2/22 (理 1)	3/22	8/22 (理 4)	13/22
		平成期中年層	1/15 (理 6)	0/15 (理 1)	0/15 (理 1)	0/15 (理 4)	13/15
		平成期若年層	2/13 (理 3)	0/13 (理 3)	0/13	0/13 (理 2)	12/13
		平成期少年層	3/20 (理 10)	1/20 (理 3)	3/20 (理 3)	0/20	20/20

【表の見方】

- (1) 回答された語形のうち、「タンパキ、タンバギ、タンパゲ、タンパツ、タンバジ」はタンパキ類に、それぞれ含めて処理した。
- (2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。
 数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用
- (3) なお、タンパキ類の語形回答者数は、各類の語形のうち、どれか1語でも回答した人数である。

表6 世代別・男女別に見た「痰」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		タンペ		タンコ		ネッペ		タンパキ		タン	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高 22	男 12	4	4	0	0	3	0	5	1	7	0
	女 10	2	2	2	1	0	0	3	3	6	0
中 15	男 7	1	3	0	0	0	0	0	2	5	0
	女 8	0	3	0	1	0	1	0	2	3	0
若 13	男 5	1	1	0	2	0	0	0	1	4	0
	女 8	0	2	0	1	0	0	0	1	3	0
少 20	男 10	1	5	0	1	0	1	0	0	10	0
	女 10	2	5	0	1	0	2	0	0	10	0

【表の見方】

- (1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。
 高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数
 使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数
- (2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

表7 気仙沼市の「タ立」を意味する語形

年代	資料	被調査者	オカダチ アメ	オレサマ アメ類	ユーダチ	ニワカ アメ	カミナリ アメ
1959 ～65	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	2/2	0/2	0/2	0/2
2005	気仙沼市方言調査 (面接調査)	平成期高年層	0/2	2/2	0/1	0/1	1/2
		平成期若年層	0/2	0/2	1/2	0/2	0/2
2006	気仙沼市方言調査 (多人数面接調査)	平成期高年層	0/22	19/22 (理 2)	14/22	4/22	0/22
		平成期中年層	0/15	7/15 (理 4)	9/15	1/15	2/15
		平成期若年層	0/13	0/13 (理 3)	12/13	0/13	0/15
		平成期少年層	0/20	0/20 (理 2)	16/20	7/20	0/20

【表の見方】

(1) 回答された語形のうち、「オレサマアメ、オレーサマアメ、オデサマアメ」はオレサマアメ類に含めて処理した。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

(3) なお、オレサマアメ類は、オレサマアメ類の語形のうち、どれか1語でも回答した人数である。

表8 世代別・男女別に見た「タ立」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		オカダチアメ類		オレサマアメ類		ユーダチ		ニワカアメ		カミナリアメ	
		使	理	使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	0	0	11	1	7	0	2	0	0	0
22	女 10	0	0	8	1	7	0	2	0	0	0
中	男 7	0	0	3	2	5	0	1	0	1	0
15	女 8	0	0	4	2	4	0	0	0	1	0
若	男 5	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0
13	女 8	0	0	0	2	7	0	0	0	0	0
少	男 10	0	0	0	1	6	0	1	0	0	0
20	女 10	0	0	0	1	10	0	6	0	0	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

表9 気仙沼市の「糠」を意味する語形

年代	資料	被調査者	コヌカ	サクズ	ヌカ	コメヌカ
1949	本吉郡誌			○		
1953	気仙沼町誌			○		
1959 ～65	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	2/2	0/2	0/2
2005	気仙沼市方言調査 (面接調査)	平成期高年層	0/2	2/2	2/2	1/2
		平成期若年層	0/2	1/2	2/2	0/2
2006	気仙沼市方言調査 (多人数面接調査)	平成期高年層	2/22 (理 6)	15/22 (理 5)	15/22	0/22
		平成期中年層	0/15 (理 2)	6/15 (理 6)	9/15	3/15
		平成期若年層	1/13	0/13 (理 4)	13/13	2/13
		平成期少年層	2/20	2/20 (理 2)	11/20	3/20

【表の見方】

(1) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

(2) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

表10 世代別・男女別に見た「糠」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		コヌカ		サクズ		ヌカ		コメヌカ	
		使	理	使	理	使	理	使	理
高	男 12	1	5	9	2	7	0	0	0
22	女 10	1	1	6	3	8	0	0	0
中	男 7	0	0	2	4	4	0	3	0
15	女 8	0	2	4	2	5	0	0	0
若	男 5	0	0	0	2	5	0	0	0
13	女 8	1	0	0	2	8	0	2	0
少	男 10	2	0	1	0	4	0	1	0
20	女 10	0	0	1	0	7	0	2	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

表11 気仙沼市の「杓殻」を意味する語形

年代	資料	被調査者	ヌカ	モミガラ	モミ
1959 ～65	日本言語地図	昭和中期高年層	0/2	1/2	0/2
2005	気仙沼市方言調査 (面接調査)	平成期高年層	2/2	2/2	0/2
		平成期若年層	2/2	2/2	0/2
2006	気仙沼市方言調査 (多人数面接調査)	平成期高年層	8/22	15/22	4/22
		平成期中年層	3/15 (理 1)	11/15	5/15
		平成期若年層	2/13 (理 1)	7/13	6/13
		平成期少年層	5/20 (理 5)	9/20	11/20

【表の見方】

(1) 表中に示した数字、および記号は、以下のことを表している。

数字/数字＝使用すると回答した人数/調査人数、(理)＝理解語〈聞いたことはあるが使用しない〉と回答した人数、○＝使用

表12 世代別・男女別に見た「杓殻」を意味する語形の使用語・理解語回答者数

		ヌカ		モミガラ		モミ	
		使	理	使	理	使	理
高	男 12	6	0	5	0	1	0
22	女 10	2	0	9	0	3	0
中	男 7	1	0	5	0	3	0
15	女 8	2	1	5	0	2	0
若	男 5	0	0	3	0	3	0
13	女 8	2	1	4	0	3	0
少	男 10	2	1	4	0	0	0
20	女 10	3	4	5	0	2	0

【表の見方】

(1) 表中に示した略称や数字は、以下のことを表している。

高＝高年層、中＝中年層、若＝若年層、少＝少年層、略称の下に示した数字＝各年層における被調査者数

使＝使用語と回答者した被調査者数、理＝理解語と回答者した被調査者数

(2) 表中の太い線を境に、左側は方言語形、右側は共通語形となる。

新しい方言語彙・三陸地方特有語彙

武田 拓

1 はじめに

気仙沼市での動態が注目される語彙 3 項目について、面接による多人数調査を行った結果を報告する。家族・友人とくつろいだとき、という場面設定である。対象者は高年層（2006 年の調査時に 60 歳以上の男性 12 名、女性 10 名）、中年層（同 40 歳から 59 歳の男性 8 名、女性 8 名）、若年層（同 20 歳から 39 歳の男性 6 名、女性 8 名）、少年層（同高校生の男性 10 名、女性 10 名）である。

2 調査結果

以下、調査結果を図で示し、それぞれに若干の考察を加える。男女は分けず、年齢層ごとに集計し、回答率を百分率で示した。

2.1 運動着

（質問文）主に子供が運動するときに着る服を何と言いますか。

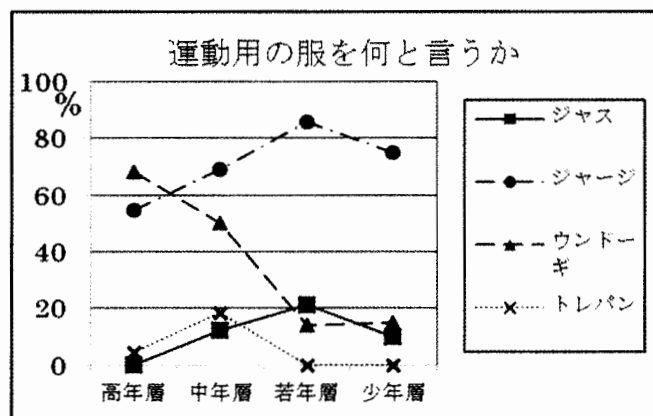
ジャスは宮城県の「気づかない方言」とされているが、宮城県の北端である気仙沼市での動態を調べた。全国的にはジャージが一般的な、主に子供が運動するときに着る服のことである。結果（複数回答可）を図 1 に示す。ジャスは気仙沼市でも中年層・若年層が使用しているが、いずれも使用率は低い。ジャージは上の年齢層、ウンドーギは下の年齢層に多い。トレパンは高年層・中年層のみが使用している。なお、複数回答が得られた場合の使い分けの有無およびその内容についても興味深いところだが、調査時間の制約上、今回は調査項目とはしなかった。なお図 1 に挙げた以外に得られた語形には、ランニング（高年層 1 名）、パンツ（高年層 1 名）、ウンドーフク（高年層 1 名）、ジャンパー・ジャンバー（高年層 1 名、中年層 1 名）、タイツ（中年層 1 名）、タイソーギ（中年層 2 名、若年層 2 名、少年層 1 名）、タイイクギ・タイクギ（中年層 1 名、少年層 2 名）がある。

図 2 はジャスを使用しないと回答した話者に対し、ジャスを過去に使用したかどうか、ジャスを聞いたことがあるか（よその土地で聞いた場合も含む）どうか尋ねた結果である。少年層 4 名については調査もれのため集計から除外した。過去に使用したのは中年層、若年層に限られる。聞いたことはあるが使用しない、使ったことも聞いたこともないという回答率の高さからすれば、気仙沼市では方言形ジャスはそれほど広まらなかったと言えよう。1998～1999 年当時、仙台市でのジャスの使用率は高年層で約 20 パーセント、中年層で約 75 パーセントであり（武田拓(2000)

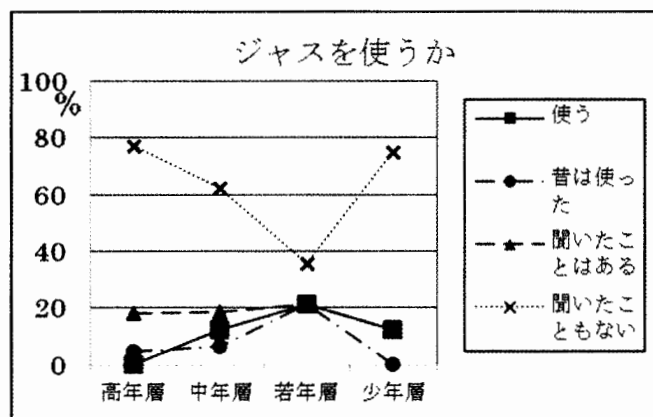
による)、また 2001 年当時、石巻市でのジャスの使用率は高年層で約 5 パーセント、中年層で約 45 パーセントであった(武田拓(2003)による)ことから分かる。

さらに、図にはしなかったが、ジャスを使用する話者に対して「もしお友達と一緒に全国放送のテレビに出演されてお話しになるとしたら、なんと言いますか。」と尋ねたところ、いずれの話者もジャスではなく、ジャージまたはウンドーギを使用すると回答している。

(図 1)



(図 2)



2.2 ページワン

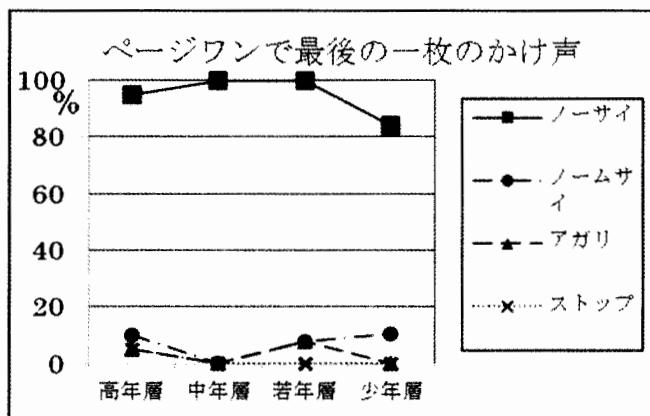
(質問文) トランプ遊びで「ページワン」というのがありますね(知っていたら質問を続ける)。
最後の一枚を出すときのかけ声を何と言いますか。

「遊びを知らない」「遊びは知っているが、したことはない」「忘れた」、および「無回答」を合計しても高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 1 名、少年層 1 名のみで、集計から除外した。遊び自体は各年齢層に広く普及していることが分かる。結果を図 3 に示す。ノーサイが各年齢層と

も約 90 パーセントの使用率で、ノームサイ、アガリとも、各年齢層で 10 パーセント以下である。図 3 に挙げた以外に得られた語形には、ストップ（高年齢層 1 名）、ページワン（少年層 1 名）、ノーサイド（高年齢層 1 名）、ノ（少年層 1 名）、かけ声なし（少年層 1 名）がある。

1998～1999 年当時、仙台市では各年齢層ともノーサイに比べてノームサイの使用率が圧倒的に高く（武田拓(2000)による）、逆に 2001 年当時、石巻市では各年齢層ともノームサイに比べてノーサイの使用率が圧倒的に高かった（武田拓(2003)による）。また、宮城県内でのグロットグラム調査の結果では、仙台市に近いほど、また年齢層が低くなるほどノーサイに比べてノームサイの回答が多くなる（武田拓・半沢康(2003)）ことから、石巻市同様、気仙沼市にもノームサイはそれほど広がっていないと言えよう。

(図 3)



2.3 オシバテ

（質問文） 酒の肴（お酒を飲むときのつまみ）のことを、「オシバテ」「オスバデ」などと言うそうですが、なんと言いますか。

はっきりとしたことはわからないが、分布領域は宮城、岩手の三陸沿岸である。気仙沼市の南に隣接する宮城県本吉郡南三陸町志津川では年末に「南三陸志津川湾おすばで祭り」を開催していることから、ある程度一般的に通用するものと思われる。調査結果を図 4 に示す。高年齢層 1 名は調査もれのため集計から除外した。

高年齢層、中年層はともに使用率が 90 パーセント前後であるのに対して、若年齢層、少年層は大きく下がり、若年齢層では 10 パーセント未満である。2001 年当時、石巻市ではオシバテ類の使用率は高年齢層で約 30 パーセント、若年齢層で約 20 パーセントであり、中年層、若年齢層の使用率はともにゼロであった（武田拓(2003)による）。石巻市と比べると使用率は格段に高い。

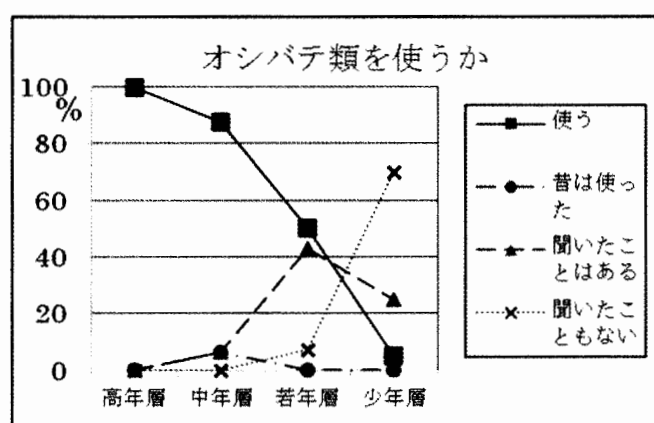
それにしても低い年齢層の使用率はどうかとらえたらよいのであろうか。オシバテはやがて使用されなくなるのか、それとも今後成人し種々の集まりに参加するようになって習得し、使用する

ようになるのか。追跡調査が望まれる。

なお、『日本方言大辞典』では見出しを「しばて」としている。これに従えば、語形のバリエーションについては、接頭辞の「オ（御）」がつくか否か、「シ」が中舌化するか否か、「テ」が有声化するか否か、ということで整理できよう。おおまかな傾向として、上の年齢層ではオスバデ、オシバデが優勢で、年齢層が下がるにつれてオスバテ、オシバテが増える。

この語には民衆語源説が多数ある。具体例は菅原孝雄（2006）に詳しい。今回の調査でも、この語の語源に興味をもつ話者が多く、特に高年齢層・中年層は約半数から回答が得られた。

（図 4）



文 献

菅原孝雄(2006)『けせんぬま方言アラカルト 増補改訂版』三陸新報社

武田 拓(2000)「新しい方言語彙」(小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室

武田 拓(2003)「方言語彙の動向」(小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

武田 拓・半沢康(2003)「仙石線グロットグラム調査報告」(小林隆編『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室

方言特有の「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の分布状況

櫛引 祐希子

1 はじめに

下にあげたイキナリ、ナゲル、オチルを使った文に対して、違和感をおぼえる人とそうでない人がいるだろう。ただし、違和感を覚えるとしたら、AではなくBの方ではないだろうか。

(1) A: 車がイキナリ飛び出してきた。

B: イキナリ暑いなあ。

(2) A: ピッチャーがボールをナゲル。

B: 紙くずを足元のゴミ箱にナゲル。

(3) A: 花瓶が棚からオチル。

B: 汽車からオチル。

種を明かせば、(1)(2)(3)のAは共通語の意味(全国どこでも通じる意味)のイキナリ、ナゲル、オチルを使った文で、Bは方言特有の意味(特定の地域で通じる意味)のイキナリ、ナゲル、オチルを使った文である。それゆえ、方言の意味を知らなければ、別の言い方をすれば共通語の意味しか知らなければ、Bのイキナリ、ナゲル、オチルに対して違和感を持つのはごく自然なことである。

だが、宮城県の仙台市方言話者の多くはBのイキナリを違和感なく使い、東北方言話者のほとんどがBのナゲルを日常生活で使っている。また、Bのオチルを使う東北方言の話者もいる。

しかし、一概に東北といっても内実は様々な事情を抱えた地域の集まりである。東北の山間部と沿岸部では気候や風土が違いうように、地域によって使用される方言には違いがある。今回調査した南三陸地域は宮城県においても岩手県においても中心部から離れた地域であり、他の地域にはない文化や習慣があることが知られているが、方言に注目するとどのような性格が見えてくるのだろうか。本稿では、共通語と同一の形態を有する方言特有のイキナリ、ナゲル、オチルの地理的な分布を通して南三陸という地域について考える。

2 調査概要

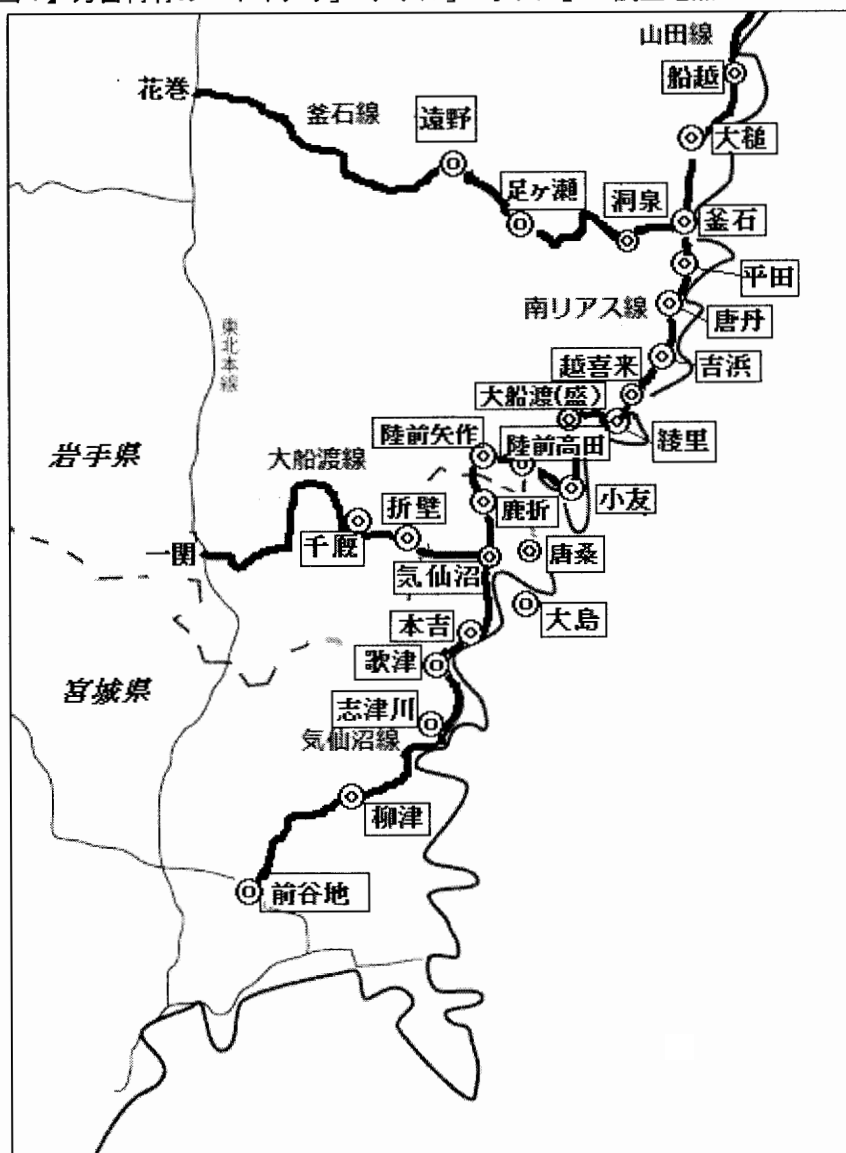
筆者は2007年に行われた東北大学大学院文学研究科国語学研究室による南三陸方言調査に参加し、方言特有の意味を持つイキナリ、ナゲル、オチルの使用状況について調べた。質問文の一部を次のページに示す。

＜調査における質問文（一部）＞

- 「非常に暑いなあ」ということを「イキナリ暑いなあ」と言いますか。
- 握っていた手をゆるめ、紙くずを足元のゴミ箱に捨てることを「紙くずをナゲル」と言いますか。
- ところで、（調査地域名）には、（鉄道名）がありますよね。（鉄道名）のような汽車が駅に到着して、お客が下車することを、（調査地域名）では、汽車からどうすると言いますか？

調査は、下の【図1】に示した26地点の高年層に方言特有のイキナリ、ナゲル、オチルを使用するかどうか面接して尋ねるかたちで行った。なお、分析の参考にするため、若年層13名にも同じ質問で使用の有無を確認した。

【図1】方言特有の「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の調査地点



3 程度副詞的なイキナリの分布

宮城県仙台市を中心とした地域では、共通語では情態副詞として事態成立の瞬間性と意外性を表すイキナリ（例、「イキナリ雨が降ってきた」）を、「イキナリおいしい」「イキナリ暑い」のように「非常に」という意味で程度副詞的に使うことが知られている。なお、この時、イキナリは変化や状態の程度性と意外性を表す（佐藤（2000, 2003））。

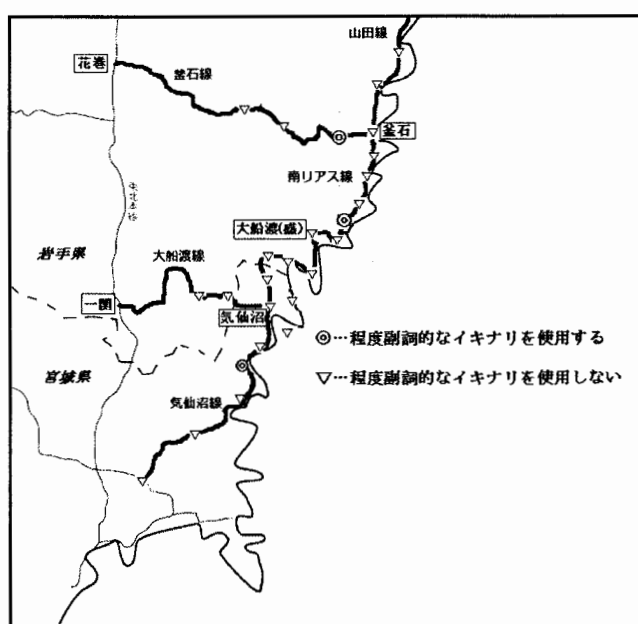
佐藤（2003）では、程度副詞的なイキナリが情態副詞である共通語のイキナリから派生したことを指摘した。すなわち、イキナリの被修飾語が瞬間的な動作や変化を問題にする動詞から程度を問題にできる動詞にまで拡大したことで、イキナリが状態の程度性を意味に取り込み、動詞の他に形容詞や形容動詞も修飾するようになったと考えられるのである。これをまとめると次のようになる。

【図2】程度副詞的なイキナリの派生

	意味	被修飾語	
共通語のイキナリ	瞬間性と意外性を表す	瞬時に行われる動作・変化を表す動詞	変化 ↓
方言特有のイキナリ	程度性と意外性を表す	動作・変化・状態の程度を問題にできる動詞 形容詞・形容動詞	

ところで、程度副詞的なイキナリが情態副詞である共通語のイキナリから派生したとすれば、情態副詞のイキナリを使用する地域には程度副詞的なイキナリが生じる素地が整っているということになる。だが、実際に程度副詞的なイキナリの使用が報告されているのは宮城県の仙台市を中心とした地域であり、全国的な使用は認められない。つまり、程度副詞的なイキナリの使用は、仙台市を中心とした地域特有の現象ということになる。したがって、もし仙台市の社会的威光が強く、その方言に影響力があるならば、程度副詞的なイキナリは仙台市から遠く離れた南三陸地域や岩手県の内陸にも伝播しているはずである。しかし、2007年度の調査では【図3】のような結果となった。

【図3】南三陸地域における程度副詞的なイキナリの分布



図にあるように南三陸地域における程度副詞的なイキナリの使用は、3地点（岩手県洞泉、岩手県越喜来、宮城県歌津）だけである。なお、歌津の話者は19から22歳まで仙台に在住した経歴がある。岩手県の洞泉と越喜来で使用の回答があった理由はよくわからない。

さて、この結果だけを見ると、南三陸地域では程度副詞的なイキナリを使用しないという結論を導きたくなるが、そう結論付けるのは少々乱暴である。なぜなら、一概に程度副詞的なイキナリといっ

でも、今回の調査のように形容詞を修飾する程度副詞的なイキナリもあれば、動詞を修飾する程度副詞的なイキナリもあるからである（例、「イキナリ揺れる」「イキナリ踏む」）。先の【図2】に示したように、イキナリが形容詞を修飾するようになるのは程度副詞化の最終段階である。動詞を修飾する程度副詞的なイキナリは、昭和13年に刊行された土井八枝による『仙台の方言』にも掲載されており、高年層に広く浸透していることが考えられる。したがって、もし今回の調査で動詞を修飾するタイプの程度副詞的なイキナリの使用を尋ねたならば、【図3】の結果以上に使用する地域が増えた可能性があることは否めない。

そこで、少し視点を変えて南三陸地域の若年層の使用状況に注目してみよう。仙台市では形容詞を修飾する程度副詞的なイキナリの使用は高年層よりも若年層に多いのだが（佐藤（2000, 2003））、南三陸地域でも同様の傾向が見られるのだろうか。今回の調査では調査地域すべてで若年層の使用状況を調べたわけではないが、調査した範囲では次のような結果になった。

【図4】南三陸地域の若年層における程度副詞的なイキナリの使用状況（○；使用 ×；不使用）

【岩手県】

大船渡	折壁	千厩	陸前高田	矢作
×	×	×	×	×

【宮城県】

鹿折	唐桑	気仙沼	大谷	本吉	歌津	志津川	柳津
×	×	○	○	×	○	×	○

この結果を見る限り、若年層での使用は高年層に比べて一地点だけ多いが、大谷の話者は19歳から21歳まで、歌津の話者は18歳から22歳まで仙台に在住しており、その頃に仙台で習得した可能性もある。しかし、最も注目すべきは、岩手県での使用が皆無である点と岩手県に近い宮城県の地域での使用がない点だ。つまり、程度副詞的なイキナリは、仙台市の若年層の間では盛んに使用されているとしても県を超えて伝播していくほどの普及力を持っていないと言える。

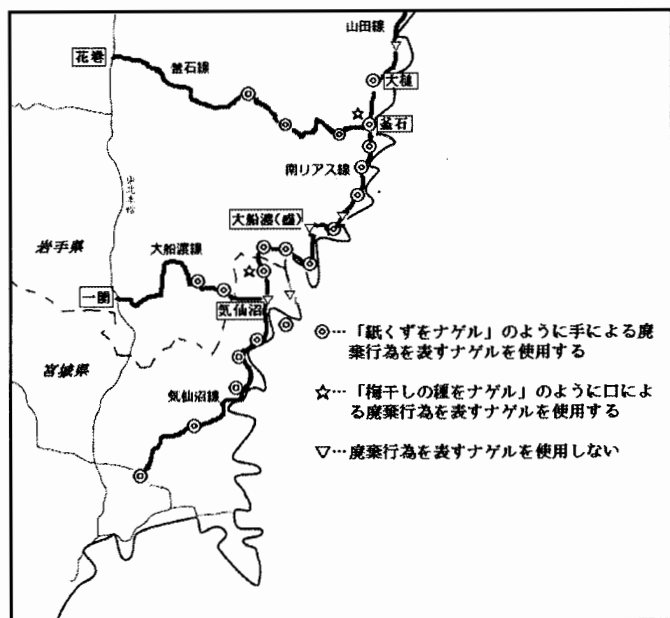
4 廃棄行為を表すナゲルの分布

では、東北全域で使用される廃棄行為を表すナゲルの場合はどうだろうか。東北方言の廃棄行為を表すナゲルは＜動作主が不要な対象を自分の所有領域から外側に移動させる＞ことを表すが、共通語のナゲルは＜対象を遠くに飛ばすことで動作主の領域から動作主の存在しない領域へと移動させる＞ことを表す。つまり、東北方言のナゲルと共通語のナゲルは意味的には異なる行為を表しているが、より抽象的にとらえれば、両者とも対象を動作主のいない別の領域へ移動させるという点で類似した現象を問題にしているのである。佐藤（2004）では、この類似点が原因となって東北方言のナゲルの意味と共通語のナゲルの意味を、ナゲルという形態が表す多義ととらえ「捨てる」という意味を表すナゲルを方言だと思わない、いわゆる「気づかない方言」だと意識する人が後を絶たないと考察した。

廃棄行為を表す方言語彙の全国分布をまとめた国立国語研究所『日本言語地図 第62図』による

と、ナゲル・ブンナゲルの回答は東北地方のほぼ全域を占めている。しかしながら、東北の中にはごく少数だが、廃棄行為を表す際にナゲルではなくステルを使用する地域があることも確かである。では、今回の調査地域である南三陸地域はどうだろうか。

【図5】南三陸地域における廃棄行為を表すナゲルの分布



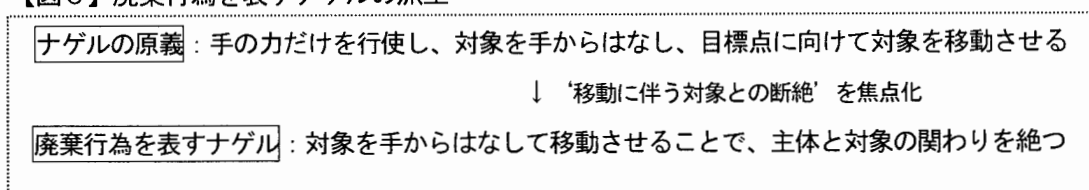
図を見る限り、ほとんどの地域で廃棄行為を表すナゲルが使用されている。ただし、それは「紙くずをナゲル」のように手による廃棄行為を表す場合に限られるようだ。今回の調査では、手を使わず口から直接に対象を廃棄する「梅干しの種をナゲル」の使用の有無も尋ねたが、使用の回答があったのは岩手県の釜石と宮城県の鹿折の2地点のみだった。

その一方で、岩手県の洞泉、船越、越喜来、大船渡、宮城県の唐桑、気仙沼では廃棄行為を表すナゲルを使用

しないという回答があった。『日本言語地図 第62図』でも東北地方で廃棄行為を表すナゲルの使用がない地域は山間部や沿岸部に集中する。だとすれば、なぜ山間部や沿岸部に廃棄行為を表すナゲルを使用しない地域があるのだろうか。

この問題を考えるためには、そもそも廃棄行為を表すナゲルがどのような過程を経て成立したのかという点について考察しなければならない。櫛引（2008）では【図6】のような考えを述べた。

【図6】廃棄行為を表すナゲルの派生



【図6】におけるナゲルの原義とは、歴史的には中央語のナゲルであり、現在は共通語の意味のナゲルである。ナゲルの原義が表す行為は主体が対象から手をはなすことで対象を移動させることだが、その移動の結果、対象を移動させた主体と対象の間には距離が生まれ直接的な関わりは断たれる。つまり、ナゲルの原義は‘移動に伴う対象との断絶’という特徴を潜在的に有しており、それが焦点化したことで、主体と対象の関わりを断絶を問題にする廃棄行為のナゲルが生じたのではないかと考えられる。

では、その廃棄行為を表すナゲルはいつ頃生じたのだろうか。その詳しい年代はわからないが、近世の南部藩藩士の服部武喬による『御国通辞』に、

(4) 江戸詞 御國辞

すてる 棄 なげる

(御國通辞 態藝門：寛政二年 1790)

という記述があることから、廃棄行為を表すナゲルは近世の東北ではすでに成立していたと考えられる。しかし、『日本言語地図 第62図』の分布状況を踏まえると、【図6】の変化は内陸部で起きたものであり、山間部や沿岸部など地理的条件の厳しい地域には廃棄行為を表すナゲルは伝播しなかったようだ。今回調査した南三陸地域における廃棄行為を表すナゲルの非使用地域もそうした事情を抱えた地域であり、東北地方において廃棄行為を表すナゲルが成立する以前の状況を残した地域であると考えられる。

ところで、今回の調査では手を使わず口で直接に対象を廃棄する場合の表現についても尋ねたが、その結果、＜吐き出す＞という意味のホキダスという回答が多くあった。ホキダスは東北から中部地方にかけて使用されることが知られているが、古くは(5)(6)のように江戸語の文献にも登場する。

(5) さし向かひまづほうづきをほき出させ

(川柳万句合：宝暦九年 1759)

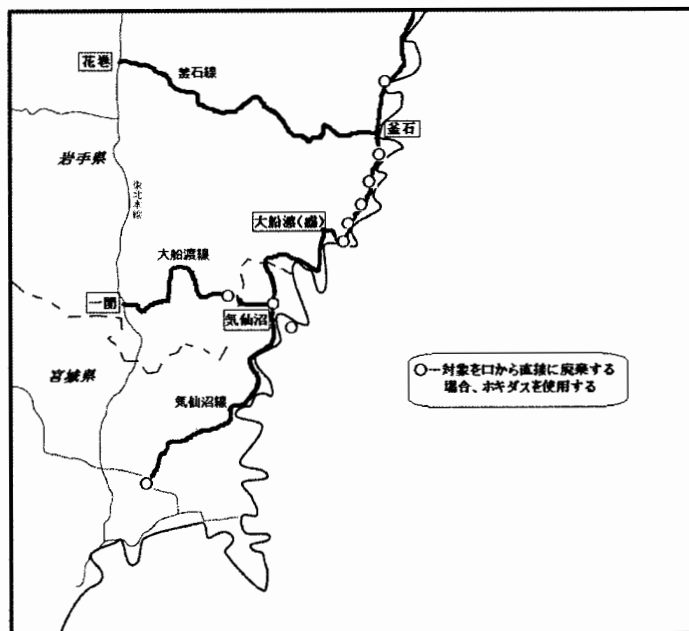
(6) 彌次郎はめをふさいでいちぜんくってしまふに、北八ほき出して

(続東海道中膝栗毛 九・下：文化七年 - 文政五年 1810 - 22)

ホキダスについては回答者による自由回答であったため、すべての調査地点で確認がとれたわけではないが、回答のあった地域を地図化してみると三陸沿岸にそって分布していることがわかる。

【図7】自由回答としてホキダスが回答された地域

ホキダスは『日本方言大辞典』（小学館）に掲載がなく、詳細な使用地域の実態がわからない。そういう意味で【図7】は、南三陸地域におけるホキダスの分布状況を示す貴重な資料だと言えるだろう。



5 下車を表すオチルの分布

東北方言にまつわる笑い話の一つに次のようなものがある。

(7) [駅でのアナウンス]「オチルヒトガ シンデカラ オノリクダサイ」

これは、電車の乗客に対して、下車する人が済んでから乗るように注意を促したものである。「シンデカラ」は「済(す)んでから」のことだ。東北では母音[ɯ]の発音が中舌母音[i]になることから、「済(ス)んでから」のス([ɯ])がシ([i])のように聞こえる。

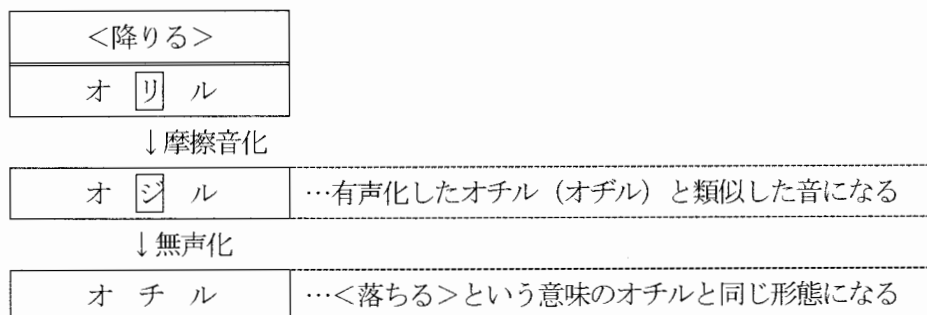
しかし、本稿で問題にしたいのは「オチルヒト」の方である。東北の一部の地域では、共通語ではオ Ril とすることをオチルと言う。

なぜO ril をオチルというのか。加藤正信(1996)は次のように述べている。

(8) オチルは、太平洋側のどこか、たとえば仙台あたりに発生して、交通路沿いに伝播した新しい方言と思われる。「O ril」の「リ」が摩擦化して「ジ」に近くなって、これが「落ちる」の有声化した「オジル」と似た音になり、一方、意味の上でも「降りる」と「落ちる」の類似が作用して、「降りる」がオチルになったのではあるまいか。(p46)

この仮説を少し補うかたちで図示すると、次のようになる。

【図8】下車を表すオチルの派生



下車を表すオチルの全国分布を示した『日本言語地図 第94図』の解説でも、東日本において「リ」が摩擦化して「ジ」に聞こえる地域とオチルが下車の意味で使われる地域が重なることが指摘されているが、下車を表すオチルについては<落ちる>という意味のオチル自体の意味変化による派生も考えられる。だが、本稿では音声的な変化や意味的な変化の問題ではなく、(8)で加藤が指摘した「交通路沿いに伝播した」という点に注目して論を進めたい。

下車を表すオチル、つまりオチルを<降りる>という意味で使うことが文献で確認できるのは、南部藩士の服部武喬がまとめた『御国通辞』からである。

(9) 屋根からおりる をちる

下ルヲ落ルト云テハ分ラズ、馬カラヲリル・ヲチル 階子カラヲリル・ヲチルニテ考フベシ。

(御国通辞 態藝門:寛政二年1790)

この記述から、近世の南部藩では高い場所から低い場所への移動をオチルで表していたことがわかる。当時はもちろん汽車はないが、移動手段の対象から降りるという意味では「馬からオチル」の用例に近い。

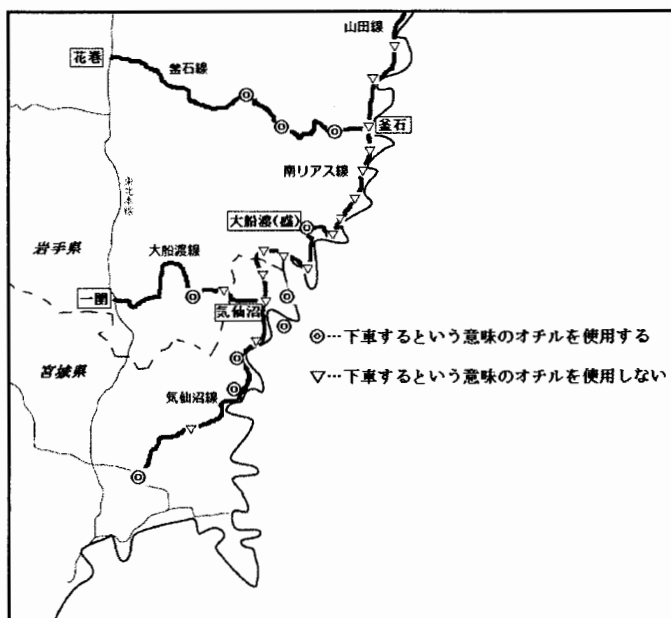
しかし、『日本言語地図 第94図』を見ると、山形と秋田の大半と青森県の日本海側、さらに岩手県と宮城県の三陸沿岸ではオチルを下車の意味で使わないと回答されている。逆に、福島県、宮城県と岩手県の内陸部ではオチルを下車の意味で使う回答が集中している。

さらに詳しく見ると、オチルを下車の意味で使う地域は東北本線沿いか比較的歴史が古い在来線沿いである。そもそも東北本線は日本最初の私鉄として開業した日本鉄道の路線を受け継いでいる。日本鉄道は明治十五（1882）年に着工されてから紆余曲折を経て、明治二四（1891）年に東京の上野から福島、宮城、岩手を経由し青森までを繋げた。

こうした事情を踏まえると、次のような仮説が立てられる。東北の内陸部では、すでに近世の頃からオチルを<降りる>の意味で使っていた。これは先に見たとおり方言集『御国通辞』で確認できる。そして、明治以降、鉄道の開業が急ピッチで進みにつれ、内陸部で使われていた下車を意味するオチルは各地に伝播した。だが、鉄道開発が遅れた地域である東北の日本海側や三陸沿岸の地域までは伝播が進まなかった。それが結果として『日本言語地図 第94図』の東北における<下車する>という意味のオチルの分布状況を生み出したのではないか。

この仮説を検証するためには、東北全域における鉄道の歴史に踏み込む必要があるが、今回は三陸沿岸の状況を把握することにする。2007年の調査では「電車から下車する場合」「バスから下車する場合」「階段から降りる場合」についてオチルを使用するかどうか尋ねた。その結果、電車やバスから下車するという意味でオチルを使用する人のほとんどが、階段から降りるの意味でもオチルを使用することが確認できた。

【図9】南三陸地域における下車を表すオチルの分布



図を見て最初に気がつくのは、釜石と大船渡を結ぶ南リアス線に▽が集中して分布すること、つまり大船渡を除いた調査地点で下車を表すオチルが使用されていないという点である。

また、釜石から北にのびる山田線の大槌、船越でもオチルの使用はない。

一方、今回調査した釜石線の3地点、気仙沼線の3地点では使用が確認できる。また、大船渡線では千厩のみ使用が確認できた。ただし、山田線、釜石線、大船渡線については部分的にしか調査していないため、これらの路線に

における下車を表すオチルの分布については、あらためて調査が必要である。

次のページに、調査地点がある鉄道の歴史の概略をまとめた。

【図 10】 今回の調査地点がある鉄道の歴史

	釜石線	山田線	南リアス線	大船渡線	気仙沼線
1913 (大正 2)	花巻—土沢 ※岩手軽便鉄道 西線開業				
1914 (大正 3)	遠野—仙人峠 ※貨物				
1925 (大正 14)				一関—摺沢	
1927 (昭和 2)				摺沢—千厩	
1928 (昭和 3)				千厩—折壁	
1929 (昭和 4)				折壁—気仙沼	
1932 (昭和 7)				気仙沼—上鹿折	
1933 (昭和 8)				上鹿折—陸前矢 作—細浦	
1934 (昭和 9)		盛岡—宮古		細浦—大船渡	
1935 (昭和 10)		宮古—陸中山田		大船渡—盛	
1936 (昭和 11)	花巻—仙人峠	陸中山田—船越			
1938 (昭和 13)		船越—大槌			
1939 (昭和 14)		大槌—釜石			
1950 (昭和 25)	花巻—釜石				
1956 (昭和 31)					気仙沼—気仙沼港
1957 (昭和 32)					南気仙沼—本吉
1968 (昭和 43)					前谷地—柳津 ※柳津線
1970 (昭和 45)			盛—綾里 ※盛線		
1973 (昭和 48)			綾里—吉浜		
1977 (昭和 52)					
1981 (昭和 56)			三陸鉄道株式会 社創立		
1984 (昭和 59)			盛—釜石 吉浜—釜石 第三セクターと して開業		柳津—本吉

ここに挙げた5路線のうち、南リアス線は開業してからの歴史が最も浅く、民営化のあおりを受け最終的には第三セクターとして開業した複雑な経緯を有している。

前のページの【図9】と【図10】を合わせると、釜石線のように歴史が比較的古い鉄道の沿線には下車の意味のオチルが分布していることに気づく。このことから、比較的早くから開業していた鉄道は、内陸部で使用されていた下車を表すオチルの使用地域を拡大させる原動力になったことが推測される。それに対して、歴史が浅い南リアス線は、下車を意味するオチルを伝播させるだけの力が十分ではなかったのではないかと。さらに、南リアス線が全線開業に至った頃(1980年代)には、共通語化が進行して下車の意味で使うオチルそのものに使用地域を拡大させるだけの活力がなかったことも考えられる。

6 南三陸という地域の特徴

本稿では、共通語と同一の形態を有しながらも方言特有の意味を持つ程度副詞的なイキナリ、廃棄行為を表すナゲル、下車を表すオチルの南三陸地域における地理的な分布を報告した。この結果から見てくる南三陸の特性は次の三点である。

<南三陸地域における仙台の影響力の限界>

まず、南三陸地域における程度副詞的なイキナリが浮き彫りにしたのは、東北最大の都市である仙台が南三陸において強い社会的威光を持った地域とは言い難いということである。程度副詞的なイキナリは仙台を中心とした地域で盛んに使用されているが、南三陸地域の宮城県側に若干の使用が確認できるものの、岩手県側にはほとんど使用がない。このことは、東北最大の都市である仙台市が人口や経済面では東北一だとしても、社会的威光という面では他地域を凌駕するような力を持ち得ていないということを意味する。詳しい調査を行っていないためここからは推測の域を出ないが、おそらく南三陸地域および他の東北の地域では、仙台の影響よりもメディアを通じた東京の影響を強く受ける傾向があるのではないだろうか。

<南三陸地域の言語的な孤立性>

廃棄行為を表すナゲルの分布状況から明らかになったのは、南三陸地域の東北における孤立性である。廃棄行為を表すナゲルは東北のほぼ全域で使用されているが、山間部や沿岸部など地理的条件が厳しい地域では使用されていない。今回調査した南三陸地域の中にも使用が確認できなかった地域があった。これらの地域は、廃棄行為を表すナゲルが共通語の意味のナゲルから意味変化をして派生する以前の状態を維持していると考えられる。南三陸地域は地理的条件の厳しさ故に東北の他の地域から孤立したことによって、東北方言の中でも特異な言語状況を維持している地域と言えるだろう。

＜南三陸地域における方言伝播の媒体としての鉄道の二面性＞

下車を表すオチルの分布状況は、南三陸地域において鉄道が方言伝播に果たした役割の大きさを露わにした。離れた地域を結ぶ鉄道は人だけでなく言葉も運ぶことから、鉄道と言語伝播の問題は従来から注目されてきた。だが、南三陸地域の場合、方言伝播の媒体としての役割を果たしたのは開業の歴史が古く長い期間の中で地元根付いてきた鉄道であり、南リアス線のように開業までに大幅な時間をかけた比較的新しい鉄道はそうした伝播の媒体としての力を持ち得なかった。その結果、南リアス線沿いでは共通語と同様、下車を表す際にはオシルが用いられている。南三陸地域は大正期から開業された古い鉄道と昭和の終わりに全線開業した鉄道が存在する地域であるため、方言伝播に関わる鉄道の影響と限界の両面を見ることができる。

7 おわりに

2011年3月11日に起きた地震による津波は、今回の調査地域に多大な被害をもたらした。関東大震災で被害を被った東京や神奈川の住民の多くが関西に移住したように、今回の東日本大震災でも多くの住民が県外へと避難している。それゆえ、本稿で報告した方言特有のイキナリ、ナゲル、オチルの地理的な分布状況は、震災後、大きく様相を変えたかもしれない。

しかしながら、本稿の6節で述べた＜南三陸地域における仙台の影響力の限界＞と＜南三陸地域の言語的な孤立性＞は、そこで生活する人がいる限り変わらないのではないだろうか。なぜなら、この二つの特性は内陸部との交流を容易に許さない厳しい地理的な条件によって生じたものだからである。内陸部との物理的な距離が解消しない限り、南三陸地域の地域らしさは失われないだろう。

だが、気がかりなのは南三陸地域における鉄道の今後である。今回調査した地点の駅の被害は次のように報じられている。

【図 11】 今回の調査地点で津波の被害を受けた駅

	津波で流出した駅	津波で半壊した駅
釜石線		釜石
山田線	大槌	
南リアス線		釜石、唐丹
大船渡線	大船渡、小友、陸前高田	唐桑
気仙沼線	歌津、志津川	

南三陸地域を走る鉄道は、その歴史の新旧によって地域の方言に異なる影響を及ぼした。長い歴史を持つ鉄道は内陸部で使う下車を意味するオチルを南三陸地域に運んだが、南リアス線のように新しく開業した鉄道は下車を意味するオチルを沿岸地域には伝えなかった。このことは、鉄道が方言伝播の媒体として果たす役割を考える時に、その鉄道の歴史も十分に考慮しなければならないことを示唆する。そういう意味で南三陸地域は大正期から敷かれた鉄道と昭和の終わりに敷かれた鉄道を有しており、鉄道と方言伝播の関係を考える上で理想的なフィールドだと言えるだろう。地元

の鉄道の復旧は、地元の復興の象徴でもある。南三陸地域の鉄道の復旧を切に願う。

<引用文献>

国立国語研究所（1967）『日本言語地図第二集』「第62図 すてる（捨てる）」「第94図 オチルを
“下車する”の意味で使うか」大蔵省印刷局

加藤正信（1996）「日本の方言と古語」加藤正信・佐藤武義・前田富祺共著『日本の方言と古語』南
雲堂

佐藤（櫛引）祐希子（2000）「いきなり」の方言用法」小林隆編『宮城県仙台市方言の研究』東北
大学大学院文学研究科国語学研究室

佐藤（櫛引）祐希子（2003）「気づかない方言」の意味論的考察—仙台市における程度副詞的な「イ
キナリ」—『国語学』212 国語学会（現、日本語学会）

佐藤（櫛引）祐希子（2004）「東北方言の「ナゲル」の形成に関する一考察—宮城県石巻市方言の分
析を通して—」『文芸研究』158 日本文芸研究会

櫛引祐希子（2008）『日本語方言語彙の意味変化に関する研究』東北大学大学院文学研究科博士学
位論文

御國通辞：服部武喬・寛政二年 1790（「近世方言辞書 第2輯」佐藤武義・木村晟・山田瑩徹・古
瀬順一・片山晴賢編輯 平成十二年 2000 港の人）

※日本鉄道と南三陸地域における鉄道の歴史については、以下の資料を参考にした。

中村建治（2011）『日本初の私鉄「日本鉄道」の野望—東北線誕生物語—』交通新聞社

日本鉄道旅行地図帳編集部（2010・6・18）『新潮「旅」ムック 日本鉄道旅行歴史地図帳 東北』
新潮社

朝日新聞（2011・9・5）『AERA Mook 震災と鉄道 全記録』朝日新聞出版

グイラ・ボット系オノマトペの個人差について

川 越 め ぐ み

1 グイラ・ボット系オノマトペの概要

オノマトペは、自然の音や人・動物の声や様子、身体感覚や感情などを言語音の組み合わせによって模写する語彙の総称で、音を写し取った擬音語と、音のない様子や状態を表す擬態語に大きく二分される。擬音語は、人や動物の発声器官によってつくられた音を写し取る擬声語、それ以外の音を写し取った擬音語に分けられる。擬態語は、人や動物の外見を形容する擬容語、感情や感覚を表す擬情語、その他の様子や状態を表す擬態語に分類される。

そのオノマトペの大きな特徴として、副詞として機能し、具体的に動作を描写するという点が挙げられる。例えば、「ぐいと引っ張る」とオノマトペを用いた場合、「強く引っ張る」という一般語彙^{注1}を用いた場合と比べて分かるように、力の入れ具合や勢い、その他さまざまなイメージが喚起される。このイメージは音象徴から来るものであったり、その語が使用され続けることで形成される文化的・社会的イメージであったりするものであるが、いずれにしても、そのイメージの具体性という点がオノマトペの特徴である。

しかし、東北方言には下の(1)(2)のように「急に」「いきなり」「すぐに」などと同じような意味用法を持つオノマトペが存在する。これらは具体的なイメージを弱めてしまっている。

(1) あの人 ガラリ 亡くなつたんだ。(＝あの人、急に亡くなったんだって)

(2) 天気 グラリ 変わった。(＝天気が急に変わった)

小野正弘編(2007)『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』には、「びらり」という項目があり、「すばやいさま」という意味で「びらり取る(さっと取る)」〈岩手県〉、「いいど聞いたんで、びらり買いますた」〈宮城県〉という用例が載せられている。「ビラリ」は共通語の「びらびら」(紙や服の裾など薄い物がひるがえる様子)というオノマトペと同じ「びら」という語基を持つが、「びらびら」の描写する「薄い物が翻る」といったイメージから考えると、「びらり買う」という言い方はかなり異質なものに感じられるだろう。

このような用法を持つオノマトペは、「ガラリ」「グラリ」「ビラリ」に限らない。宮城県気仙沼市では、菅原孝雄(2006)『気仙沼方言アラカルト(増補改訂版)』に、「ボット」「ボッポリ」「グエラ」などの複数のオノマトペが「急に」や「いきなり」「突然」という意味、「ビラット」「ビラリ」は「すぐに」などとほぼ同じ意味であると解説されている。また 2005 年調査の際、菅原氏本人に面接調査をする機会を得、これらのオノマトペをほとんど同じ意味で用いているという内省を得た。

このような語は、(3)のように、語基音ごとの系統に分けると 7 系統になる。現在のところ山形県・宮城県において 31 語^{注2}を収集しており、すべて動作の取りかかきの早さ、あるいは急激に物事が

起こる様子を表している。これらを本報告では、気仙沼市で特に多く用いられているらしい「グイラ」と「ボット」にこの語群を代表させ、グイラ・ボット系オノマトペと総称することとする。この31語のうち、気仙沼市で使用が確認されたのは、(3)のうち波線で示した9語である。

(3) ①グイラ系：グイラ（グエラ）、グイラリ、グイット（グエット）、グット

グラリ、グイラギッタリ、グラット

②ボット系：ボット、ボッポリ、ボッポラ、ボッポラボット、ボイット（ボエット）

ボイラ（ボエラ）、ボッコリ、ボッコラ、ボコット、ボックラ、ボックラボット

③ガラリ系：ガラリ、ガラット、ガイラ（ガエラ）、ゲアラ、ゲアリ

④ビラリ系：ビラット、ビラリ

⑤ズイラ系：ズイラ（ズエラ）、ズラリ

⑥ゴイラ系：ゴイラ（ゴエラ）、ゴエット

⑦ドイラ系：ドイラ（ドエラ）、ドエット

本報告では、このグイラ・ボット系オノマトペについて調査を行った2006年度の多人数調査の結果から、個人差あるいは地域差についての分析を行っていきたいと思う。

2 具体的描写性について

通常、オノマトペが副詞的に用いられる場合は、様態副詞あるいは結果副詞として用いられる。仁田(2002)では、「〈取り掛かりの早さ〉を中心に動きの早さに関わる」様態副詞として、共通語のオノマトペである「さっと 顔色を変える」「パッと 瞬間に変わってしまう」の「さっと」「パッと」などを分類している。これらのオノマトペを用いた副詞はあくまで様態副詞であり、「時間関係の副詞」のうち、取り掛かりの早さを表す「急に」「いきなり」などの一般語の副詞とは区別されている。様態副詞は「動きそのものの展開の時間的早さ」を表すものであり、時間関係の副詞は「事態の実現・成立のあり方を限定し特徴づける副詞的成分」である。時間的早さを表す時間関係の副詞は「動きが占める時間幅」を表す。

様態副詞と時間関係の副詞、この2種類の副詞を区別する根拠として、仁田(2002)では「パッと瞬間に 変わってしまう」のように時間関係の副詞と様態副詞が共起する例を挙げている。この基準から見てみると、グイラ・ボット系オノマトペは「急に グイラ 来た」のように「急に」と共起し、様態副詞的性格を持つはずだが、(4)のように「急に」「突然に」といった時間関係の副詞とは共起できず、時間関係の副詞に近づくことがある。

(4) * あの人 急に ガラリ 亡くなったんだ。

？ 天気 突然 ガラリ 変わった。

宮城県北部に位置する栗原郡のオノマトペをまとめた佐藤(2003)では、グイラ・ボット系オノマトペに属する「ズイラ」が「時間的表現」に分類されている一方、同じグループの語は(5)のように様態副詞的なものとなっている。

(5) 時間的表現 : スカスカトやってくる。 棚にチャカット置いた。

ズイラ戻ってきた。 家にトロットやってくる。(佐藤 2003 p.130)

仁田 (2002) の分類に従うと、佐藤 (2003) のような語は早さを表す様態副詞の中でも「〈質・様〉への言及を含みながらの〈早さ〉」を表す様態副詞に当てはまると思われる。この様態副詞の特徴として、「より純粋に早さを表す」様態副詞に比べて使用範囲が狭いことが仁田(2002)で指摘されている。より純粋に早さを表す様態副詞「ユックリト」などは使用範囲が広いが、「スタスタト」などは動きの〈質・様〉への言及を含んでいる分、使用範囲が狭いのである。そして、時間関係の副詞は純粋に早さを表す様態副詞よりもさらに〈質・様〉への言及という性格は弱くなっていると考えられる。

多くのオノマトペは、小林 (2010) でも述べられているように「現場性」が強く、「状況をリアルに映し出す」ものであり、描写対象と非常に密接に結びついている点において、〈質・様〉への言及という点はオノマトペの特徴と重なる部分であると思われる。「スタスタ」というオノマトペであれば移動に関わる動詞と結びつき、「オイオイ」というオノマトペであれば泣く様と結びついている。すなわち、〈質・様〉への言及を含む様態副詞がオノマトペの基本的な性格なのである。

この「〈質・様〉への言及」があることを本報告では「具体的描写性がある」と言う。具体的描写性が強いほどオノマトペらしく、使用範囲が狭く、共起する動詞の多様さに欠けるということになる。すなわち、グイラ・ボット系オノマトペにおいては、具体的描写性が弱くなればなるほど、オノマトペらしさが弱くなり、使用範囲が広がって、より純粋に早さを表す動き様態の副詞に近づく。さらに、具体的描写性がより弱くなれば、動きそのものの展開に関わらなくなる分、「急に」などの時間関係の副詞と共起しなくなる。まとめると、グイラ・ボット系と具体的描写性との関係は次の表1のように表せるだろう。

〈表1〉

	グイラ・ボット系オノマトペにおける具体的描写性の強弱		
強弱	強い	弱い	ない
副詞の種類	「〈質・様〉への言及」を含む様態副詞	「より純粋に早さを表す」様態副詞	時間関係の副詞
動詞との共起	共起する動詞の種類が少ない	共起する動詞の種類がある程度多い	共起する動詞が多い
オノマトペらしさ	オノマトペらしい	オノマトペらしさが薄れている	オノマトペらしさがあまりない

以上から、グイラ・ボット系オノマトペは具体的描写性を持つ様態副詞から具体的描写性の弱い様態副詞、そして時間関係の副詞という3つの範囲にまたがる語彙であると考えられる。このことから、本報告ではグイラ・ボット系オノマトペの具体的描写性がどのように用法や地域差、個人差などに関わってくるかという点について考察を加えていきたいと思う。

3 調査の概要と結果

分析の対象とするのは 2006 年度に行われた東北大学国語学研究室による気仙沼市方言調査（多人数調査）によるものである。話者は高年層 21 名、中年層 16 名、若年層 14 名、少年層 20 名の気仙沼市在住の合計 71 名に、他の項目に関する面接調査の際にアンケート調査票を渡し、それを郵送してもらうという形で行った。本報告で考察に用いるのは回答を得た 65 名分である。

内容としては、「急に」を使う(6)の 6 つの場面についてグイラ・ボット系オノマトペと置き換えができるかを聞いた。(6)は菅原(1992)に記載の用例を参照して調査文を設定した。場面 1 が最も典型的な用法で他人の抽象的な動作が急であることについて言及する場面である。場面 2 は自分の動作、場面 3 は状態、場面 4 は目の前の具体的な動作、場面 5 は目に見えないものがなくなった様子、場面 6 は「ビラット」について音象徴的な効果が表れるかどうかを見る動詞としている。各場面でグイラ・ボット系オノマトペの選択肢を出し、複数回答可とした。

(6) アンケート調査文

- ◆ 気仙沼には「急なこと」をあらわすことばがたくさんあるようです。ここでは、そういったことばについておうかがいします。各質問文の「急に」の部分と言いかえのできることを、それぞれ選択肢の中からすべて選んでください。

場面 1：予定があるのに、前日になって急に仕事を頼まれた。

「(急に) そんなこと言われても困るよ」

場面 2：急に思い立って、ともだちの家に遊びにきたので、お土産をもってこなかった。

「(急に) 来たものだから、手ぶらで来ちゃったよ」

場面 3：道を教えるとき、曲がり道があることを伝える。

「そこで (急に) 道が曲がっているから、そこを道なりに行くんだ」

場面 4：前を歩いていた人が、急に道を曲がっていったことを伝える。

「それで、その人 (急に) 道を右に曲がっていったんだよ」

場面 5：用事があったのだが、突然その用事がなくなってしまった。

「今日の日曜、(急に) 予定がなくなって、暇になったよ」

場面 6：自転車もしくは自動車に乗っているとき、強風で目の前に新聞紙が飛んできた。

「新聞紙が (急に) 飛んできて、びっくりしたよ」

〔選択肢〕

ア. ぼっと	イ. ぼっぽり	ウ. ぼっぽら	エ. びらっと	オ. びらり
カ. ぐいら	キ. ぐえら	ク. げあら	ケ. げあり	コ. げらり
サ. ずらり	シ. どれも使わない			

表 2 が調査の結果であり、数字は使用すると答えたインフォーマントの数である。また、表 3-1 ～3-3 は各インフォーマントの回答の例で、特に特徴的な回答が見られた高年層男性の話者 3 名のものを挙げた。最左枠は年層・性別、年齢、居住地の順の記載となっている。

〈 表 2 〉

場面	ボット	ボツポリ	ボツポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	27	17	31	2	3	7	1	1	5	23
2	10	17	21	0	0	2	0	0	2	25
3	4	2	4	0	0	15	4	1	5	38
4	4	4	8	3	4	12	0	3	8	34
5	7	2	17	0	1	2	0	0	1	41
6	13	3	11	6	4	1	0	0	2	34

(表 3-1)

Info.No.18	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
高男 65 松崎前浜	1	○	○	○			○						
	2		○	○									
	3							○					
	4									○			
	5		○										
	6	○	○	○									

(表 3-2)

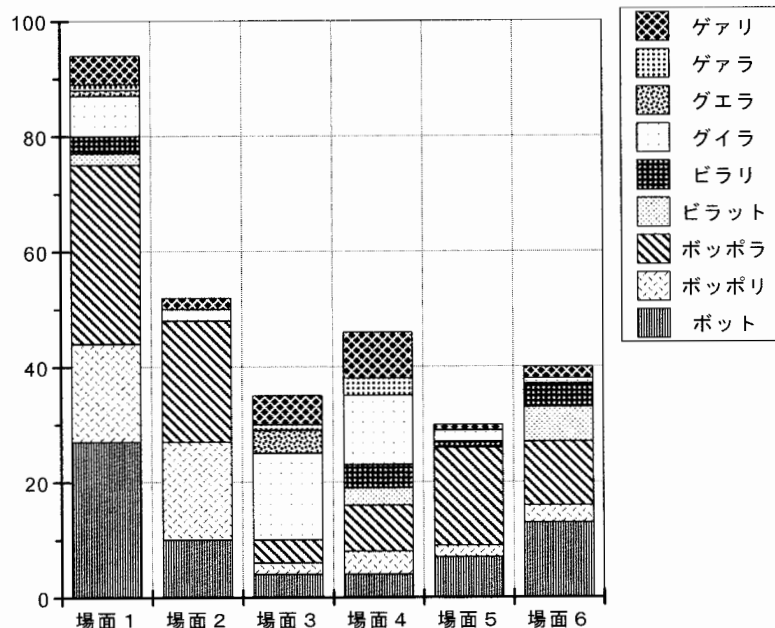
Info.No.5	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
高男 75 松崎萱	1			○			○			○			
	2			○			○			○			
	3			○			○			○			
	4			○		○	○			○			
	5			○			○			○			
	6			○			○			○			

(表 3-3)

Info.No.7	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
高男 76 常楽	1	○											
	2	○											
	3							○					
	4									○			
	5												○
	6												○

まず表2を見ると、場面ごとに語の使用の偏りがあるのがわかる。場面1と場面2ではボット系が多く使用され、場面3と4ではグイラが、場面5はボツポラ、場面6ではボットが目立ち、ビラリ系の中では場面6での使用が若干多めとなっている。場面6でビラリ系が多いのは音象徴的に「言えなくもない」と判断されたことによるものと思われる。場面と語形の数をグラフにまとめると、図1のようになる。

〈 図 1 〉



また、表 3-1、3-2、3-3 の各インフォーマントごとの使用を見ると、個人差として、場面ごとに様々な語を使い分けるタイプ（表 3-1）、少数の語をほとんどの場面について汎用的に用いるタイプ（表 3-2）、少数の場面にしかグイラ・ボット系オノマトペを用いず、さらに 1 種類の語しか用いないタイプ（表 3-3）に分けられる。

これら個人差のタイプについて具体的描写性のとの関わりから見ると、場面ごとに様々な語を使い分けるタイプ（表 3-1）は、具体的描写性をより強く感じて残している話者と思われる。少数の語を多くの場面について用いるタイプ（表 3-2）は、具体的描写性をかなり弱めた意味として用いており、その語を汎用的に用いることができるタイプである。前に挙げた表 3-1、3-2、3-3 以外の話者の回答例を表 A～C に挙げる。表 A-1 と A-2 が A タイプ、表 B-1、B-2 が B タイプ、表 C-1 と C-2 が C タイプというようになっている。

（表 A-1：中年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
30 中男 53 幸町	1			○									
	2		○										
	3						○						
	4		○	○			○						
	5			○									
	6						○						

（表 A-2：若年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
51 若男 26 田中	1	○	○	○									
	2			○									
	3												○
	4					○							
	5	○											
	6					○							

（表 B-1：高年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
11 高女 75 松崎中瀬	1	○											
	2	○											
	3	○											
	4	○											
	5	○											
	6	○											

（表 B-2：少年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
57 少女 17 所沢 (新城)	1	○		○									
	2			○									
	3	○		○									
	4	○											
	5	○		○									
	6	○											

（表 C-1：若年層）

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぼり	ぼっぼら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
43 若男 36 魚市場前	1			○									
	2			○									
	3												○
	4												○
	5												○
	6				○								

(表 C-2 : 少年層)

Info.No.	問No.	ぼっと	ぼっぽり	ぼっぽら	びらっと	びらり	ぐいら	ぐえら	げあら	げあり	げらり	ずらり	使用無
59 少女 17 三日町	1		○						○				
	2			○									
	3												○
	4												○
	5												○
	6	○											

なお、2006 年調査においては、当時 75 歳前後の話者にこの汎用タイプがまとまっている。少数の語しか使用しない話者は、文と場面とがかなり緊密に結びついており、それ以外の場面への応用がきかず、そのため、「急に」などの時間関係の副詞との共起もできないことが予想される。

次に、各世代の語形に使用頻度を表 4 にまとめる。

〈 表 4 〉

高年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	10	9	11	2	2	6	1		6	4
2	5	9	8			2			2	4
3	1		1			8	2	1	4	8
4	1	1	2	2	3	7		3	6	5
5	2	1	8		1	3			1	10
6	4	3	4	3	2	2			1	9

中年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	8	5	11							3
2	3	7	6							5
3				1		6	1		1	6
4		2	4	1		4			1	7
5	1		6							8
6	3		5			1	1			7

若年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	6	2	6		1					6
2	2	1	5							8
3	1	1	2			1				10
4	3	1	1	1						8
5	3	1	2							9
6	2		1	2	1					8

少年層

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	ゲアラ	ゲアリ	使用無
1	2	1	2							10
2	2		4							8
3	1	1	1			1				11
4	1		1			1				11
5	1		2							11
6	3		1	1						9

表4において、語の使われ方の傾向を見てみると、高年層についてはすべての語形がまんべんなく出てくる。タイプBの話者によって汎用的に用いられる語も、ボット系以外に「ゲアリ」などが見られるが、中年層以下になると汎用的に用いるタイプで使用される語はボット系に偏ってくる。ビラットから右側、ビラリ系、グイラ系、ガ拉里系がなくなってくるのが見て取れる。

世代差に関して、年齢層とタイプの関係についてグラフにまとめたものが図2である。

語の用いられ方の傾向としては、高年層についてはすべての語がまんべんなく出てきて汎用的に用いるタイプの話者も多い。汎用的に用いられる語もボット系以外にも「ゲアリ」などが見られるが、中年層以下になると汎用的に用いるタイプで使用される語はボット系に偏ってくる。若年層・少年層になると様々な語を使い分けるタイプがほとんどなくなり、少数の場面、少数の語というタイプが多くなっていく。

この世代差から、高年層において具体的描写性が強いものとして使われていたグイラ・ボット系オノマトペは、次第に具体的描写性を弱めて、特定の語が時間関係の副詞に近い性格のものとして用いられるようになったと推測される。若年層・少年層の段階ではグイラ・ボット系オノマトペ自体の使用が少なくなってきた、典型的な場面と文以外では用いられなくなり、オノマトペの音象徴的性格から類推できない文脈ではまったく使われなくなっていったことが見て取れる。

以上のグイラ・ボット系オノマトペの世代差に関して、簡単に図で示すと図3のようになる。なお、3.1の山形県寒河江市での中年層の話者は、気仙沼市においては中年層・若年層あたりの状況のあたりの話者に属していると思われる。

〈 図3 〉

高年層：タイプA（様々な語を使い分けるタイプ）が最も多い。



中年層：タイプB（汎用的に用いるタイプ）やタイプC（使用が少ない）が増加してくる。

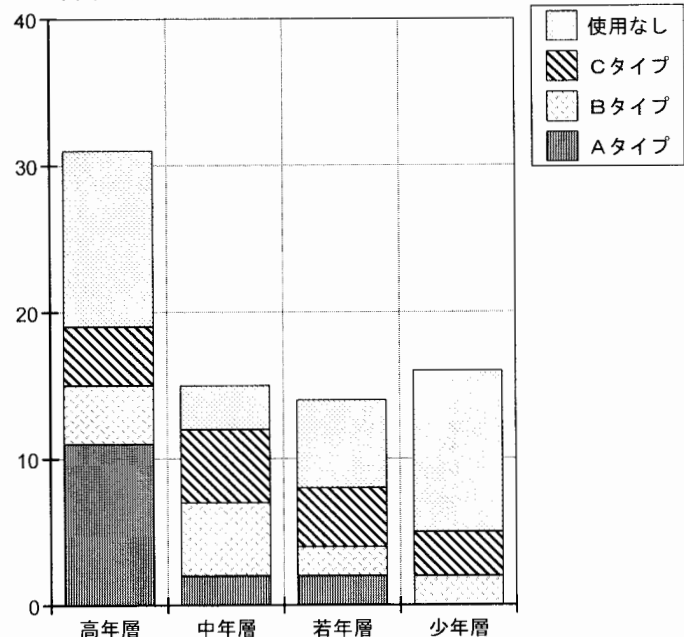


若年層：使用する話者の中ではタイプC（使用が少ない）が最も多い。



少年層：全く使用しない話者が半数を超える。

〈 図2 〉



4 個人差の地域差

このような個人差について、気仙沼市の中でも地域を限定して細かく見ていきたいと思う。そこで、ある程度のインフォーマント数のある松岩地区と気仙沼地区を取り上げ、比較しつつ見ていくことにする。

4.1 松岩地区の傾向

まず、松岩地区は明治8年、旧松崎村と旧赤岩村が合併して松岩村となり、その後、町部の気仙沼村と合併した地域であり、この旧松岩村を松岩地区とする。気仙沼市中心部から見て南及び西方面に位置する。本報告では住宅の多い旧松崎村と旧赤岩村のうちでも東部のインフォーマントを対象とし、山間部の赤岩水梨子・上羽田・四十二の話者は除いて考察を行う。

インフォーマント数は26名（高年層10名、中年層11名、若年層5名）で、うち「使用なし」6名（中年層、若年層各3名ずつ）である。結果を表5にまとめる。

〈表5〉

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	グエラ	グェラ	グアリ	無
1	12	8	15	2	1	4	1	0	3	6
2	4	9	9	0	0	1	0	0	1	9
3	1	0	2	0	0	7	3	0	4	12
4	2	2	3	1	3	4	0	1	4	13
5	4	1	8	0	1	1	0	0	1	13
6	4	3	8	1	1	1	0	0	1	13

表5では「ボッポラ」が安定して使用されており、表2で見た全体の傾向と同様の傾向を見せている。「ボッポラ」が「急に」という時間関係の副詞近づいているためと思われる。また「ビラット」「ビラリ」が場面6で少なく、様態副詞としての解釈をする話者はほとんど見られない。「ビラット」「ビラリ」もまた時間関係の副詞的な使われ方がメインのようである。「曲がる」の場面3・4を「グイラ」に譲っている点は、全体的な傾向と同じである。

しかし、ひとつひとつの回答を見ていくと、No.5、11、34、39のインフォーマントは、ひとつもしくはいくつかの語を、場面を問わず用いている。つまり3節で挙げたタイプBの話者である。このような回答は、都市部である気仙沼地区にはなく、旧新城村の所沢地区の少年層、赤岩地区山間部の高年層など、非都市部に多く見られるようである。そこで、松岩地区のこの4人のインフォーマントを除いた結果を表6に示す。

すると、場面3・4での「ボット」系の回答が減り、全体的な傾向のところで示した語ごとの傾向がより鮮明に現れる。すなわち、場面1ではさまざまな語形が用いられる。場面1では「ボット」系が中心となり、場面2・5・6で「ボッポラ」が安定している。場面3・4では「グイラ」が多いということである。

〈 表 6 〉

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	クエラ	クアラ	クアリ	無
1	10	7	12	2	1	3	1	0	2	6
2	3	8	6	0	0	0	0	0	0	9
3	0	0	0	0	0	5	3	0	1	12
4	0	2	1	1	2	3	0	1	3	13
5	2	1	6	0	1	0	0	0	0	13
6	3	2	5	1	1	1	0	0	0	13

つまり松岩地区では、オノマトペの具体的描写性を活用しながら場面ごとに語を使い分けるタイプ A の話者が多く見られるということになる。そして、場面にかかわらず 1 つあるいは複数の語を「急に」という意味で区別なく用いるタイプ B の話者も中心部から離れた地域で見られる。

4.2 気仙沼地区の傾向

次に、松岩地区と隣接する市街地、気仙沼地区を見てみる。気仙沼地区はかつての宿場町でもあり、現在の気仙沼市の中心部である。気仙沼駅、南気仙沼駅周辺の地域で、松岩地区とは神山川をなしている。

インフォーマント数は 18 名（高年層 2 名、中年層 2 名、若年層 3 名、少年層 10 名）である。うち 7 名が 6 つの場面すべてで「どれも使用しない」という回答をしているが、すべて少年層だった。表 7 に気仙沼地区の結果を示す。

〈 表 7 〉

場面	ボット	ボッポリ	ボッポラ	ビラット	ビラリ	グイラ	クエラ	クアラ	クアリ	無
1	7	3	7	0	0	1	0	0	0	8
2	4	2	6	0	0	0	0	0	0	7
3	1	0	0	0	0	4	1	0	0	11
4	0	1	2	1	1	4	0	0	2	10
5	2	0	3	0	0	0	0	0	0	14
6	3	0	0	3	1	1	0	0	1	10

「ボット」系がやはり安定しているが、松岩地区と比較して「ボッポラ」の場面 6 においての使用がないという点が注目される。場面 6 では「ボット」「ビラット」の促音を含む形が用いられているが、「新聞紙が現れる」という動きの突然さに、促音を含んだオノマトペを様態副詞的に用いた可能性がある。「グイラ」はやはり場面 3・4 で主に用いられている。

インフォーマント数は少ないが、6 場面すべてで「どれも使わない」と回答したインフォーマントが松岩地区では中年層にも及んでいるのに対して、気仙沼地区では若年・少年層に限られている。気仙沼地区のインフォーマント数が少ないので断定はできないが、市街地である気仙沼地区よりも市街中心部から少し離れた松岩地区の方が、個人差のばらつきが若干大きいように思われる。

4.3 個人差の現れ方

以上から、松岩地区と気仙沼地区における個人差の現れ方を見ていきたい。3節で見たように、グイラ・ボット系オノマトペの個人差には、ある程度オノマトペの描写的意味を使いながら場面ごとに使い分けを行うタイプA、1つもしくは複数の特定の語を「急に」という意味で汎用的に用いるタイプB、そして使用頻度の少ないタイプCの3タイプがある。松岩地区と気仙沼地区における各使用特徴を有するインフォーマントの人数を表にまとめると、次の表8ようになる。A、B、Cは使用の各タイプ、「無」は6場面とも「どれも使わない」と答えた人数である。

〈 表 8 〉

松岩	高年層	中年層	若年層	気仙沼	高年層	中年層	若年層	少年層
A	6	2	0	A	1	2	1	1
B	2	1	1	B	0	0	1	1
C	2	5	1	C	2	0	1	3
無	0	3	3	無	0	0	2	7

表8のように、松岩地区の方が使用頻度もばらつきが大きい。推測でしかないが、市街地の気仙沼地区では、語がどのような意味で用いられるかよりも、どのような場面で用いられるかが重要であり、慣習的な文脈の果たす役割が大きくなっているのではないだろうか。そのため、場面1や2のような「聞いたことがある」という文脈において、特定の語の使用が多くなる。

対して、松岩地区ではオノマトペが「急に」という意味を持ちうるということが認識されることで、様々な文脈に応用できるようになっている。そのことは、1つもしくは複数の語をすべて同じ意味で用い、「急に」を表すオノマトペの語群を好んで使うタイプBのインフォーマントがいる一方で、「急に」という概念的意味をとりたてて用いない、オノマトペの派生的な意味での使用に消極的なタイプCのインフォーマントも多いということにつながるだろう。

さらに、3節の世代差との関連で見ると、気仙沼地区のほうの若年層、少年層にタイプAの具体的描写性を残した使用をするインフォーマントが各1名いるものの、この話者はいずれも都市部からは若干離れた位置に居住しており、全体的にはグイラ・ボット系オノマトペの使用が消滅しつつある状況であると言える。一方、松岩地区では高年層にタイプAの話者が多いものの、中年層、若年層と下るに従ってタイプC→使用なしと推移しているように見える。そのため、時間の経過とともに気仙沼地区と同様の状況となることが予想される。

5 まとめと今後の課題

本報告では、オノマトペの中でも「急に」という意味に特化した語群、グイラ・ボット系オノマトペについて、気仙沼市における個人差と世代差、地域差を中心として考察を行ってきた。個人差に具体的描写性を生かしたタイプA、「急に」という意味に特化して使用するタイプB、ほとんど使

用が見られないタイプCがあり、世代が下るにつれたA→B→Cと推移するであろうことを予測した。しかし、タイプBの話者が若干少なく、また話者の人数自体が少ない周辺部に多く見られるらしいことから、世代と個人差のタイプの関連性を立証するにはこころもとない感が否めない。よって、今後は気仙沼のみならず他地域において多人数調査を行い、世代差と個人差のタイプの関係について検証を行っていきたいと思う。

注

- 1 オノマトペ以外の語彙または語をそれぞれ「一般語彙」「一般語」と呼ぶこととする。
- 2 語中の「イ」は「エ」になることが多く、具体的な語形としてインフォーマントに提示するアンケート調査票などには「イ」と「エ」を別に記載していることがあるが、基本的には「イ」のほうに「エ」を持つ形も含めることとする。31語は「イ」のもののみを数えた数字である。

文 献

- 小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
- 小林隆（2010）「オノマトペの地域差と歴史 —「大声で泣く様子」について—」『方言の発見』ひつじ書房
- 佐藤一男（2003）「十八、方言の擬態語・擬声語がおもしろい」『栗原郷土研究』34
- 菅原孝雄（1992）『気仙沼方言ア・ラ・カルト』三陸新報社
- 仁田義雄（2002）『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 飛田良文・浅田秀子編（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版
- 山形県方言研究会編（1970）『山形県方言辞典』山形県方言辞典刊行会
- 川越めぐみ（2011）「山形県・宮城県におけるグイラ・ボット系オノマトペについて —具体的描写性の強弱の観点から—」『日本方言研究会第92回発表大会発表原稿集』

驚きの感動詞「バ」

小林 隆
澤村 美幸

1. 調査の趣旨

感動詞のひとつに、「アバ」とか「バ」といった形式をもつものがある。これらをアバ系感動詞と名付けておこう。アバ系感動詞はある種の驚きを表すものであるが、現代共通語ではほとんど使用されず、「いないいないばー」や「べろべろばー」など、きわめて慣用的な表現にその痕跡を残しているにすぎない。しかし、この感動詞は、別れの挨拶「あばよ」を生み出すとともに、西日本では美しさを意味する形容詞「あばい」に姿を変え、一転して近畿では汚さを表す「ばばい」を、東日本では同じく「ばばっちい」を生成したものと思われる。そして、なによりも興味深いのは、このアバ系感動詞こそが「もののあはれ」の「あはれ」の語源であり、同時に「あっぱれ」の源泉とも目されることである。

日本語史や方言形成史の視点から見たとき、アバ系感動詞はかくも魅力に満ちている。その歴史的変遷を追い、地理的展開を明らかにすることは、われわれにとって興味深い課題と言える。^{注1}

ところで、中央語の歴史から姿を消したアバ系感動詞は、現在、各地の方言の中に息づいている。『日本方言大辞典』や東北大学で行った「消滅する方言語彙の緊急調査研究」のデータによれば、東北および九州・琉球列島を中心に、いくつかの地域から使用の報告がなされている。東北の中では、とりわけ今回の調査地域である三陸地方南部でよく使われる形式のようである。

2007年度の調査結果から、アバ系感動詞の分布を示してみた。図をご覧ください。海岸部を中心にこの感動詞の使用地点が広がっていることがわかる。一方、内陸部、および海岸部でも釜石周辺にはこの感動詞は行われていない。なお、図では「アバ」と「バ」をまとめてアバ系感動詞の分布としたが、実際には「バ」を使用する地点がほとんどであり、「アバ」は少数の地域からしか回答されなかった。

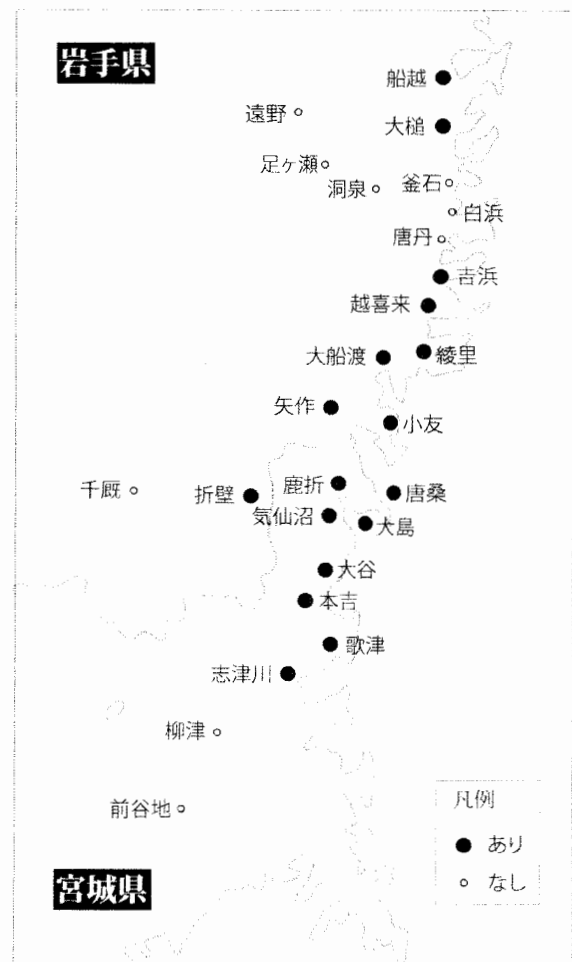


図 アバ系感動詞の分布

さて、アバ系感動詞の歴史的・地理的展開を明らかにするためには、中央語史との対比や分布論的な考察のほかに、各地におけるこの感動詞の用法について詳しく知る必要がある。この報告では、そのような作業の一環として、2006年度に行った気仙沼市多人数調査の結果について分析する。

なお、気仙沼市においても、「アバ」の回答は少なく、「バ」が主流であった。用法を比較してみても、両者には特に違いが認められない。以下では、この感動詞の表示を「バ」で代表させておく。

2. 調査項目の内容

まず、この調査で用いた調査文を示しておこう。次のとおりである。

【調査文】

○それでは、次に、驚いたときの叫び声について教えてください。

1. ぼんやりと歩いていたら、誰かに急に背中を押されました。そのとき、驚いて何と声を上げますか。例えば、「バツ」とは言いませんか。【驚き】

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

b. 言わない → それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

2. 驚いた拍子に、手に持っていた花瓶を床に落としてしまいました。花瓶は割れませんでした。水がこぼれてみるみる床の上に広がっていきます。そのとき、慌てふためいた感じで、何と声を上げますか。【慌て】

2-1. 例えば、「ババババ」とは言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

b. 言わない

2-2. それでは、そういうときに、「サーサー」とは言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

b. 言わない

2-3. (「ババババ」も「サーサー」も出ない場合)

→ それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

3. それでは、花瓶が割れてしまった場合はどうでしょう。大事にしていた花瓶です。割れた花瓶を見て、がっかりした気持ちで、何と声を上げますか。【落胆】

3-1. 例えば、「ババー」とか、「バーバー」とか言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

b. 言わない

3-2. それでは、そういうときに、「サーサー」とは言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

b. 言わない

3-3. (「ババババ」も「サーサー」も出ない場合)

→ それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

ご覧のとおり、この調査においては、同地域で使用される失敗の感動詞「サーサー」についてもあわせて取り上げた。しかし、それについてはまた機会を改めて報告することにしたい。

さて、以上のように、質問は3つの柱から構成されている。質問1は単純に驚く場面、質問2は慌てふためいて驚く場面、そして質問3は落胆の気持ちで驚く場面、といった意図で用意した。これらの場面の違いによって、「バ」がどのように使用されるかを見ようとした。

実際の調査においては、話者から「バ」を使った例文が多数得られた。中には、設定した質問以外の場面についての用例が得られることもあったが、この点は、調査項目数の制約の中で、「バ」について全体的に考える貴重な手がかりとなった。また、「バ」の使用条件について、話者の内省を豊富に収集することもできた。それらの話者の意識は、「バ」の用法について考える上で重要な示唆を与えてくれた。以下では、そうした話者の回答内容を引用しながら検討を進めていくことにする。

気仙沼市調査の話者は、4世代にわたる74名である。回答の引用においては、〈話者2〉〈話者13〉のように番号で示した。話者と世代との対応関係は次のとおりである。

高年層：〈話者1〉～〈話者22〉

中年層：〈話者23〉～〈話者39〉

若年層：〈話者40〉～〈話者54〉

高校生：〈話者55〉～〈話者74〉

一般の方言形と同様、世代が下がるにつれて「バ」の使用は衰退する傾向はあるものの、若い世代の中にも「バ」をよく使用し、内省も的確に行える話者が多数いる。全体として、気仙沼市の「バ」はよく保たれていると言える。また、用法の世代差も特に認められない。したがって、以下の考察においては、世代差や性差を考慮せずに結果を扱うこととする。

あらためてこの報告のねらいを述べるならば、気仙沼市の「バ」という感動詞が言葉としてどのような性質をもつのかを明らかにするということである。分析の手順として、最初に「バ」の意味について考察し、次に形態について検討する。最後に「バ」が使用される文の特徴を取り上げる。

3. 「バ」の意味

(1) 質問1の場面では使用されにくい

まず、全体を概観すると、質問2・3では「バ」が回答されやすいが、質問1はそうではなかった。実際には74名の話者のうち、質問1で「バ」を使用するとしたのは14名にとどまった。しかも、それらの中には、話者が調査場面を確実に理解しているか、やや疑わしいものも含まれている。この場面で「バ」を使用すると回答した話者のうち、使用例が得られているものを挙げてみよう（「／」で仕切ったものは、複数の回答が得られた場合である）。

〈話者2〉 バッ ナンダベ オラ タマゲタヤ。

〈話者13〉 バッ オッカネコト。／バッ アブネコト。

〈話者16〉 ババババ ナント ビックラコイタヤ。／ババババ ナンダベ イギナリ コエカケ

テ ビックラコイタコト。

〈話者 18〉 バッ ナニスンダベ。／バッ コノヒト ナニスンダベア。

〈話者 23〉 バー タンマケ^o ダ。

〈話者 27〉 バッ ナンダベ。／バババババ ナンダビャー。／バババババ ナンダベヤ アンダ
ダッタノスカ。

〈話者 32〉 バッ ナン オメガ。

〈話者 48〉 バッ ナニスンノー。

この質問 1 は、前節で調査文を示したように、急に背中を押されたという場面であり、言わば生理的な反応として反射的に発する驚きの声を聞き出そうとしたものである。しかし、これらの例文の中には、咄嗟の反応ではなく、わずかに間を置き、加害者の方を振り向いて発するのではないかと思われるものが多い。特に、〈話者 18〉の「コノヒト ナニスンダベア（何をするつもりだ）」、〈話者 27〉の「アンダダッタノスカ（あなただったのですか）」、〈話者 32〉の「オメガ（お前か）」といった語句は、その例文の発話が、自分を押した相手に向けて発せられたものであることを示している。そのように見ると、場面 1 でアバ系感動の使用を肯定した話者たちの多くは、回答の際、反射的な場面を想像するのではなく、振り向いてこの感動詞を発するイメージを抱いていたのではないかと思われてくる。

(2) 「バ」は反射的な反応ではない

一方、このような場面では「バ」は使用しないという話者の回答を見てみよう。

〈話者 3〉もう少し余裕があるときに言う。この場面では言わない。

〈話者 5〉言うかもしれないが、ニュアンスが違う。

〈話者 53〉バは驚かされたときには使わない。

〈話者 69〉バは後ろから押されたときではない驚きだったら使用する。

これらは、別の驚き場面であるならば、「バ」を使用する可能性を示唆している。もう少し、具体的な説明が加わった回答を挙げてみる。

〈話者 12〉それは後で誰だかわかったときには、バー、と言うが、押された時には使わない。ナンダベ、と言う。

〈話者 37〉後ろからやられたときは、オッ、人に会ったときには、バッ、と言う。意外な人、久しぶりに会った人、本当はそこにいないような人がいたときに、バッ、と言う。後ろから押された場合には言わない。

〈話者 38〉回り込んでみて知っている人だったときに、バッ ナンダベ、と言う。突然びっくり

したときには言わない。次の段階で、軽い非難を込めて確認するみたいな感じだ。

〈話者 39〉バは瞬間的なびっくりを表すのではなく、何かを見ていての反応だ。驚かされて、ワッ、という感じではない。

〈話者 47〉使うが、こういうときは使わない。ウオッ、とびっくりして振り向いて、相手を見た瞬間に、バツ、と言う。振り向いてこの人だとわかったときに、バー、と言う。咄嗟には出てこない。

以上のようにさまざまな内省が得られているが、これらに共通するのは、「バ」が反射的な反応ではなく、相手を目視してから発する声だということである。上で、〈話者 3〉が「もう少し余裕があるときに言う」と述べていたが、ここでも、〈話者 38〉の「突然びっくりしたときには言わない」、〈話者 39〉の「バは瞬間的なびっくりを表すのではない」、〈話者 47〉の「咄嗟には出てこない」といった内省に共通の感覚がうかがえる。おそらく、振り返って相手を確認するという少しの間が、〈話者 3〉の言う「余裕」という意味なのだと思う。

(3) 「バ」は何かを見て発する声である

ところで、反射的な反応ではなく、自分を驚かせた相手を目視した上で発するということは、「バ」の使用には、事態の観察という条件が必要なのではないかと考えられる。質問 1 に比べて質問 2・3 で使用するという回答者が多かったのは、それらが、床の上に広がる水の様子（質問 2）や、割れた花瓶（質問 3）を見るという、何らかの観察を伴う場面設定であったためであろう。ここで、質問 2・3 にも範囲を広げて、その点と関連した回答を拾い上げてみよう。

〈話者 10〉保育所などで、子供がおもらししたのを見て、バー、バツ、バーバーバー、などと言う。落っことしちゃったときには瞬間的に、アッ、と言うけど、状況を見たときは、バーバー、と言ったりね。

〈話者 12〉バーバババ、と言うのは、たまげたときだから、それは見たことのときだ。ババババ、というのは、例えば、洗濯機の水が忘れて出しっ放しになっているのを見たときに、ババババババ、と言う。何か見たとき言う。

〈話者 16〉しばらくぶりに来た子供たちに、ババ ヨグキタコト、と言う。

〈話者 20〉バーババババは人さまのやったのを見て言う。自分は被害者の立場。

〈話者 22〉バはびっくりしたとき、驚いたときに、いろいろな場面で使うが、後ろから押されたような場面では使わない。例えば、ここに水こぼしたときに、ババババ ミズコボシテシマッタヤ、などと言う。

〈話者 22〉バヤバヤバヤバヤ オメサン ナンダベ、というのは、あっちの誰かがやったりなんかしたときの言い方だ。

〈話者 26〉子どもたちがお湯なんかこぼしたときは、バーバーバーバー、と言う。人がやったの

を見て言う。

〈話者 30〉まず、こう水をこぼした段階で、アッと、言うだろうね。アッ バッ ナゾスッペ、という感じだ。ナゾスッペはドースッペという意味だ。アッはやってしまったことに対する驚きのアッだ。一呼吸おいて、バッ ナゾスッペ、という感じだ。状況を見た状態で発する。ひっかけて倒したときにアッ。そして、そいつを片づけなければというときに、バッ ナゾスッペ、と言う。

以上の回答には、その場の状況を「見て」発するというものが多い。子どもがおもらしをした様子、あるいは、水が出しっ放しになっている状態や水・湯をこぼしてしまった状態、さらには、久しぶりにあった孫たちの様子などを目撃した上で「バ」が発せられることがわかる。

ところで、中には、「バ」は自分のことには使用しないと答える話者もいた。

〈話者 3〉 ババババは、人がやった時に言う。自分がやった時ではない。怒る寸前、こっちがどなりつけたいときに言う。

〈話者 10〉相手がやったときに、バーバーバーバー、と言う。自分がやった時は使わない。自分がやった時は、サーサーサーサー、と言う。

〈話者 26〉自分がやったとき言わない。

〈話者 51〉自分がやったら、サササササ、誰かがやったら、ババババババ。

「バ」の使用条件に観察という要素が入るとすると、自分自身のことよりも、自分を含まない外界の状況について使いやすいことは確かであろう。しかし、これが絶対的な制約かという点、そうではないと思われる。ひとつには、この調査が失敗の感動詞「サーサー」と組み合わせて行われており、その「サーサー」が自分自身の失敗についてのものであるために、勢い、「バ」を自分以外と位置付ける意識が働いた可能性がある。また、このように、自分のことには使用しないと言う話者はかならずしも多くなく、次のように、自分のことがらについての使用を明言する話者もいる。

〈話者 69〉コップに注いだジュースを誰かがこぼしたら、アババババババ、と言う。アババババ ナニヤッテンダベ、と。(調査者：あなた自身が花瓶を落として水がこぼれたときも言いますか?) こぼれてしまったということを認識してから言う。

(4) 「バ」は何かを聞いた時にも発せられる

上では、「バ」は何かを見たときに上げる声であり、「観察」という要素が使用条件に入ること指摘した。しかし、そのように言ってしまうと、話者の次のような内省が気になってくる。

〈話者 19〉バーバー ナントヤー ソンナコトカタッテ。/バーバー ソンナコトユッテ コマ
ンデネーノ、といったように使う。

〈話者 49〉話をしている、予想以上のことを話された時に、バツ、と言う。バツ ソンナニ、とか言う。

〈話者 60〉普通の会話をしていて、なんか、こうびっくりすること、初めて聞いたこととか言われると、バー、とか言う。

これらの回答は、いずれも会話の相手から聞いたことがらに対して「バ」を使用することを述べている。すなわち、「バ」はかならずしも「見る」という行為によってのみ発せられるものではなく、「聞く」という行為によっても使用可能であることを物語る。そうすると、「バ」の使用条件として「観察」というまとめ方は適切ではない。ここでは、見ること、聞くことの両方を含めて、「認知」という用語を使っておきたい。何らかの事態を目や耳を通じて把握すること、すなわち、認知することが「バ」の使用条件になると考えられるのである。

なお、視覚、聴覚のほかに、味覚や触覚など他の感覚によって事態の認知がなされる場合にも「バ」の使用は可能であることが予想される。それらの場合については、今後確認が必要である。

(5) 認知される事態は想定外のことである

さて、「バ」は何らかの事態を認知したときに発せられる。しかし、「バ」の意味を説明するにはそれだけでは不十分である。事態の認知は、いついかなるときも行われるものであり、いわば人間にとって当たり前の行為だからである。それでは、「バ」を発する際の事態の認知とはどのようなものであるのか。これを考えるときに、そもそも、「バ」は驚きの感動詞であることを前提に検討しなければならない。つまり、どのような状況下で驚くことが、「バ」の使用につながるのかということである。

このことを考えるヒントは、すでに、ここまで見てきた話者の内省の中にある。あらためて、3つの回答を示してみよう。

〈話者 37〉後ろからやられたときは、オッ、人に会ったときには、バツ、と言う。意外な人、久しぶりに会った人、本当はそこにいないような人がいたときに、バツ、と言う。

〈話者 49〉話をしている、予想以上のことを話され時に、バツ、と言う。バツ ソンナニ、とか言う。

〈話者 60〉普通の会話をしていて、なんか、こうびっくりすること、初めて聞いたこととか言われると、バー、とか言う。

以上からは、「意外な人」に出会い、「予想以上のこと」「初めてのこと」を聞いたときに「バ」が発せられることがわかる。すなわち、想定外の事態を認知したときの驚きが「バ」で表現されていると考えられるのである。

そうした点に言及する回答は、ほかにもある。それらにも耳を傾けてみよう。

〈話者 10〉「えー、そんなことするの」というときに、バーー、と言う。バーー フツー ソーイウコト シナイネー。バーー ナンカチガウンジャナイ、というとき。何かやって違うものが出たとき、自分の意図と違う、意図に反することが起きたときに、バ、と言う。

〈話者 11〉変ったもの見たときに、アラ バーバーバと言う。アララ バーバーバー、という感じで。畑でいつも草が生えていないところに、取らないでいたら草が生えていたとき、ナント バーバーバー ソコサ クサ イッパイ オガッテ。いつもと違う様子を見て、アレ バーバーバー ナンダイ コノクサ トンナイデ、と言う。

〈話者 39〉見ていて何か変なことやったりすると、バババババ、と言う。

〈話者 51〉バは、自分がこうだろうなと思っていたのが全然違ったときに使う。エーという感じで、バーと言う。例えば、待ち合わせをしていて、友達から電話が来て、車が壊れて行けなくなったというときに、バツと言う。また、うちの祖母が使うのは、部屋で飼っている犬がいて、気づかないうちにマーキングをしたときに、ババババババ、と言う。連発する。

〈話者 51〉ちょっと落としただけで割れてしまった場合は、ナンダベ ワレシマッタノスカ、ということで、バババババ、とか、バツ、とか言う。割れないと思っていたのに割れたら、バツ。

〈話者 56〉「えっ、何やってんの」という感じのときは、バツ、と言う。失敗したり、変なことしていたりする時に、「何やってんだ」という感じで、バー、とか言う。

〈話者 61〉友だちが変なことをしていたときに、バツ ナニヤッテンダ、と言う。

以上、「バ」は、「自分の意図に反することが起きたとき」や「こうだろうなと思っていたのが違ったとき」に使用するものであり、予想と異なる事態に驚くことで発するものであることがわかる。「変ったものを見た」「変なことをしているのを見た」という状況も、想像を超える事態との遭遇を意味する。感覚的に「えー、そんなことするの」「えっ、何やってんの」という感じであるというのも、「バ」の使用状況をよく物語っている。これらの内省からは、「バ」が意外な事態を認知したときの驚きを表すものであることがよく理解される。

(6) 感動詞「バ」の意味

ここまで検討してきたことをまとめてみよう。「バ」の意味に関する重要な点は次の2つである。

- ①「バ」は、反射的な反応によるものではなく、事態を認知した上で発する言葉である。
- ②「バ」は、予想しなかった意外な事態を認知したときに、その驚きを表す言葉である。

論述の順序に従い、①と②の2つに分けて整理したが、①は②に含まれる関係にある。その点では、②のみで説明が足りているとも言える。結局、「バ」という感動詞は、意外な事態を認知した際の驚きを表現するものであるということになる。わかりやすく言えば、「今、見聞きしたことが

らがあまりにも意外だったので私は驚いている」という意味が、「バ」に込められているのである。

4. 「バ」の形態

4. 1. 基本形と実現形

ここまで見てきたことから明らかなように、今回の調査で回答された「バ」のバリエーションは非常に豊富である。形態の種類の豊富さは、この感動詞について語るときに、まず、注目しておかなければいけない点である。

さて、それらの形態をどのように整理すべきか、ということが問題になるが、その点については次のように考えたい。まず、この感動詞の基本的な形態として「バ」を認める。そして、ババババやバー、バーバーなどのさまざまな形態は、この「バ」がそのときどきの感情に応じて形を整え、実際の姿を現したものと考える。この、基本的な形態という概念を「基本形」と呼んでおこう。基本形は、いわば抽象的な概念であるから、「感動詞素」などの名称の方が適当かもしれないが、ここでは一応「基本形」としておく。これに対して、実際の姿にあたる概念を「実現形」と名付けることにする。実現形は、現実には発話された形態のことであり、語形と言ってもよい。また、基本形から実現形（語形）を導き出す操作を「語形化」と呼ぶことにする。

以上の関係を図示すれば、次のようになる。

基本形	語形化	実現形（語形）
「バ」	→	ババババ、バー、バーバーなど

ところで、意味の面については、前節で「バ」を「意外な事態を認知したときの驚き」を表すと結論づけた。この意外性の驚きという点はすべての実現形に共通するものであり、これを基本形に対応させて「基本義」と呼んでおく。この基本義に新たに何らかの意味的なものが加わって実際の語の意味が生み出される。この実際の意味を「実現形」にそろえて「実現義（語義）」と呼び、それが生成される操作を「語形化」になぞらえて「語義化」と言うておく。これらの名称の妥当性については十分な検討が必要であるが、とりあえず、以上のような考え方をとると、上の図に意味の側面を加えて次のように示すことができる。xは「バ」の基本義「意外な事態を認知したときの驚き」であり、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ はその基本義に加わる何らかの意味を表す。

基本形	語形化	実現形（語形）
「バ」	→	ババババ、バー、バーバーなど
〈x〉	→	$x + \alpha$ 、 $x + \beta$ 、 $x + \gamma$ など
基本義	語義化	実現義（語義）

さて、ここで明らかにすべき課題は、語形化・語義化の内実ということになる。語形化と語義化は、上の図でもイコールで対応させたように、ある一定の形式的な操作が、ある一定の意味を基本義に加えるという関係になる。ところで、先に、「バ」という基本形がそのときどきの感情に応じて語形化され、ババババ、バー、バーバーなどの実現形となって現れる、と述べた。すなわち、実現形のバリエーションの違いは場面に依存した発話者の感情の異なりを表すということになる。そのことは、基本義が実現義に語義化される際に加わるのは「場面に依存した発話者の感情」であることを意味する。そのような「場面に依存した発話者の感情」を、ここでは「感情的意味」と称しておく。

4. 2. 語形化のシステム

語形化の操作は形態のバリエーションによって行われるのが基本であるが、イントネーション、ストレス、声の質などの音調的特徴も同時に利用されると考えられる。ここでは、形態面の操作を「形態的操作」、音調面の操作を「音調的操作」と呼んでおく。

さて、ここから、いかなる語形化の操作がどのような感情的意味の付加に対応するかを検討することになるが、その前に、実現形のバリエーションをひととおり見渡しておきたい。音調的側面はひとまず置いておき、特に、形態的側面から実現形を概観する。

全体を見渡すと、まず、基本形がそのまま実現形になったようなバ単独の語形が認められる。ただし、末尾に声門閉鎖音 (glottal stop) を伴うので、これを、バツと表示する。このバツを「基本形式」と呼んでおく。一方、バを連呼したり、引き伸ばしたりする語形も多く、その連呼の数や引き伸ばしの位置・長さの違いで実現形の種類が豊富に生産されていることがわかる。この連呼するという形態的操作を「重音化」、引き伸ばすという操作を「長音化」と名付ける。

以上のような観点から、回答された実現形のすべてを整理すると次のようになる。

基本形式

バツ

重音化単独形式（長音化なし）

ババ

バババ

ババババ

バババババ

ババババババ

バババババババ

長音化単独形式（重音化なし）

バー

バーバー

バーーーー
バーーーーー
バーーーーー

重音化＋長音化（語頭）形式

バーバ
バーババ
バーバババ
バーババババ
バーバババババ

重音化＋長音化（語尾）形式

バババー
ババババー
バババババー
バババババババー

重音化＋長音化（語中・語尾）形式

バーバ
バーババ
バーバババ
バーバババ
バーババババ
バーバババババ
バーババババババ
バーバババババババ
バーババババババババ
バーバババババババババ

重音化と長音化について見ると、それぞれが単独で起こるものと、両者が組み合わさって起こるものがあることがわかる。重音化について、「バ」が何回、連呼されるのか観察すると、上に示すようにさまざまな場合があるが、回答の頻度が高かったのは 4・5 回のケースである。この点は、何人かの話者からも、その程度の回数が多いとの内省を得た。一方、長音化については、1 拍から 4 拍までの間で引き伸ばしが行われるのが普通のようなのである。これらの形態の特徴については、次節で意味の問題と絡めながら、あらためて検討を行う。

4. 3. 感情的意味と語形化

あらためて、どのような語形化の操作がどのような感情的意味の付与に対応するか考えてみよう。今回の調査では、第 2 節に示した調査項目にあるように、あらかじめ、「驚き」「慌て」「落胆」と

いう3つの感情が表出される発話場面を設定し、そのような感情の違いによる実現形の異なりを見ようとした。もう一度、調査文を抜粋して示す。

質問 1. ぼんやりと歩いていたら、誰かに急に背中を押されました。そのとき、驚いて何と声を上げますか。【驚き】

質問 2. 驚いた拍子に、手に持っていた花瓶を床に落としてしまいました。花瓶は割れませんが、水がこぼれてみるみる床の上に広がっていきます。そのとき、慌てふためいた感じで、何と声を上げますか。【慌て】

質問 3. それでは、花瓶が割れてしまった場合はどうでしょう。大事にしていた花瓶です。割れた花瓶を見て、がっかりした気持ちで、何と声を上げますか。【落胆】

これらの質問によって得られた語形は、それぞれ、「驚き」「慌て」「落胆」という感情的意味に対応する形式が回答されたものとみなしてよいだろう。もちろん、話者が設定された場面をよく理解せずに答えるというケースもありうるので、その点に注意しつつ検討を進めよう。

なお、質問 1 は「驚き」の感情としたが、「驚き」という要素自体は「バ」の基本義、すなわち、「意外な事態を認知したときの驚き」の中に含まれている。したがって、質問 1 の場面は、特に感情的意味が付与されず、基本義がストレートに実現義（語義）となる場合とみなしてよい。この関係を図示すれば、次のとおりである。

質問 1：基本義 + 感情的意味「 ϕ 」 の場合

質問 2：基本義 + 感情的意味「慌て」 の場合

質問 3：基本義 + 感情的意味「落胆」 の場合

以下、この3つのケースごとに見てみよう。

(1) 基本義がそのまま実現義になる場合

質問 1 については、第 3 節で述べたように調査項目の場面からは少し外れた回答が多く得られた。すなわち、背中を押されて反射的に発するものではなく、押した相手を確認してから口にするものとして「バ」が答えられていた。しかし、その点は、ここでの感情的意味の検討の障害にはならない。そのような場面であっても、基本義 + 感情的意味「 ϕ 」というケースとして扱うことができるからである。

【回答一覧】

さて、この場面での回答の一部は第 3 節でも取り上げたが、あらためて全体を示せば次のとおりである（例文や内省の得られているものはそれも載せてある。明らかに質問場面が理解されていないと思われるものは除いた）。

〈話者 2〉 バツ ナンダベ。オラ タマゲタヤ。

〈話者 7〉 バツ。

〈話者 12〉それは後で誰だかわかったときには、バー、と言うが、押された時には使わない。

〈話者 13〉バッ オッカネコト。/バッ アブネコト。

〈話者 16〉ババババ ナント ビックラコイタヤ。/ババババ ナンダベ イギナリ コエカケ
テ ビックラコイタコト。

〈話者 18〉バッ ナニスンダベ。/バッ コノヒト ナニスンダベア。

〈話者 23〉バー タンマケ°ダ。

〈話者 27〉バッ ナンダベ。/バババババ ナンダビヤー。/バババババ ナンダベヤ アンダ
ダッタノスカ。

〈話者 32〉ナン バッ オメガ。

〈話者 37〉人に会ったときにはバッと言う。久しぶりに会った人、本当はそこにいないような人
がいたときに、バッと言う。

〈話者 38〉回り込んでみて知っている人だったときに、バッ ナンダベ、と言う。

〈話者 43〉バッ。

〈話者 47〉ウオッとびっくりして振り向いて、相手を見た瞬間に、バッと言う。振り向いてこの
人だとわかったときに、バーと言う。

〈話者 48〉バッ ナニスンノー。

〈話者 57〉バッ。

〈話者 71〉バッ。

【形態的操作】

以上の回答一覧を見ると、ババババ、バババババ、バー、バーといった語形も回答されているが、バッという形式が圧倒的に多く回答されているのがわかる。これは、第2節に掲げた調査文にあるように、「バッ」という形式を例に挙げて質問を行っていることから、話者がそれに引かれた結果であるという恐れもある。しかし、録音で確認する限り、特に不自然な回答の誘導は行われておらず、また、上記のように話者の解説や使用例も得られている。したがって、この場面でのバッの使用は自然なものとなしえてよい。そうすると、この場面、すなわち、基本義 + 感情的意味「 ϕ 」の場合には、「バ」はバ 1 音として語形化され、末尾に声門閉鎖音を伴ったバッという実現形となって発せられるのが基本であると考えられる。

【音調的操作】

バッの音調的特徴を観察すると、その発音にはストレスが付与され、力みを伴って実現されることが多い。また、語頭子音は強い呼気とともに発音される [b^h] であることがあり、ときに、ふるえ音気味の摩擦音 [β] として実現することもある。音声記号では、[b^ha?] ないし [βa?] とでも表記するのが適当である。

(2) 感情的意味「慌て」が加わる場合

次に、質問2の場面、すなわち、落とした花瓶の水がこぼれて慌てふためく場面について見てみ

よう。回答は次のとおりであった。

【回答一覧】

〈話者 4〉 ババババ。

〈話者 5〉 バーバ ヌレタベッチャ。

〈話者 7〉 バババ、と 2 つ 3 つつなげて言う。あるいは声の強弱も利用する。

〈話者 9〉 バババ、と言う。

〈話者 10〉（調査者：金魚鉢かなんかひっくり返したときには？）そういったときに、アババババ、と言う。

〈話者 11〉 バババ ナンダベー キーツケタラ イーノニ。

〈話者 12〉 バババババ コボシテシマッタヤ。ババババ、というのは、例えば、洗濯機の水が忘れて出しっぱなしになっているのを見たときに、ババババババ、と言う。

〈話者 13〉 バババババ コマッタコトシタヤー。／アラー ババババ コマッタヤ ナントシタコッタベ。

〈話者 15〉 ババババ コボシテシマッタヤ。／ババババ コボシテシマッタナ。

〈話者 16〉 ババババ ナゾシタライエーベ。水物だったら急いで処理しなければいけないから、その急ぐ状態が、ババババ、というように速くなる。

〈話者 18〉 ババ ナンダベ。アババ コボシテシマッテ。たいへんであればバを余計に言う。下が立派な絨毯で醤油などこぼしたとき、バババババ、ぐらい言うかな。4・5回くらいは言う。

〈話者 20〉 バーババババ。バーバー。繰り返しの回数が多いほど、被害の程度が大きい。

〈話者 22〉ここに水をこぼしたとき、ババババ ミズコボシテシマッタヤ、と言う。こういう場面では、バババのスピードも少し早い。

〈話者 26〉子どもたちがお湯なんかこぼしたときは、バーバーバーバーって言う。人がやったのを見て言う。バーバーバー。

〈話者 27〉 ババババ ナンダベー アブネゴド。

〈話者 28〉 ババババ、と言うかな。バーバババ。

〈話者 29〉 ババババ。アリヤー、とか。

〈話者 30〉慌てたときは、ババババ、と時々使う。

〈話者 32〉 バババババ。

〈話者 37〉言うとするば、バババババが合う。

〈話者 38〉オッ ババババ。

〈話者 39〉（調査者：水がこぼれてみるみる広まっていくというときは？）そういうのは、ババババ、という感じだ。バーバババ。強調するときにはバを繰り返す。蜂の巣の大きいのがいっぱいあったときなど、ババババ、と言う。

〈話者 41〉 アバババババ。こういうときは、ウッ、ていう感じで、バババババ、となる。

〈話者 43〉アッ バババ、となるし、ババババ、と速く言ってしまう。私はよく使うが、バッ、

と言う感じで、バツ コボレテシマッタ、とか、バババ フカナクテ、とか。

〈話者 47〉その驚き度によっても違う。バの数が多いほど、たいへんな感じが強い。もしこれをこぼしたら、アララララララ、となって、拭くときに、ババババババ。

〈話者 48〉バーバババ マゲテシマッタヤ。バは連続する。何回でも言う。4・5回。

〈話者 51〉ババババ ナニシタベ。／ナンツコトスンダベ。

〈話者 55〉アババババ。

〈話者 56〉ババババ、と言う。バー、って。

〈話者 60〉言う。バババババー。

〈話者 61〉言う。こぼしたときよりも、ちらかしたときに言う。バババババー。物を持っていて、袋の中にいっぱい物が入っていて、それが散らばった時。水のときも言う人もいる。

〈話者 64〉バババババ。

〈話者 65〉アバババババ。バが多いほどやばい、重大な感じ。

〈話者 66〉バババババババー。バーバーバーバーバー。

〈話者 68〉言うかもしれない。ババババババ。

〈話者 69〉コップに注いだジュースを誰かこぼしたら、アババババババ、と言う。アババババ ナニヤッテンダベ。(調査者：君が花瓶を持ってぼんやり歩いていて、花瓶を落として水がこぼれたときは言うか?) こぼれてしまったということを認識してからなら言う。アババババ。

〈話者 71〉たまに使う。ババババ。

【形態的操作】

以上の回答を見ると、〈話者 43〉のバツと〈話者 56〉のバーを除き、すべてにバを連呼する重音化が起こっていることがわかる(ここでも調査文の影響はないと判断する)。中でも、長音の入らないバババ、ババババ、バババババといった重音化単独形式が主流であり、これらが慌てふためく場面での一般的な「バ」の実現形であると考えられる。おそらく、バを引き伸ばさず、短く連ねる重音化の操作が、「慌て」という感情的意味の表出を担っているのであろう。この点は、「バババ、と2つ3つつなげて言う」〈話者 7〉、「急ぐ状態が、ババババ、というように速くなる」〈話者 16〉、あるいは、「強調するときにはバを繰り返す」〈話者 39〉、「バは連続する。何回でも言う。4・5回」〈話者 48〉、といった話者自身の内省からもうかがえる。

話者の内省にさらに注目すると、バを連呼する回数の多さが事態の重大さや驚きの度合いと関わるという意識が聞かれた。「たいへんであればバを余計に言う」〈話者 18〉、「繰り返しの回数が多いほど、被害の程度が大きい」〈話者 20〉、あるいは、「その驚き度によっても違う。バの数が多いほど、たいへんな感じが強い」〈話者 47〉、「バが多いほどやばい、重大な感じ」〈話者 65〉といった内省がそれである。表現はさまざまであるが、これらは、バを連呼する回数が慌ての感情の強さと比例することを意味していると理解される。すなわち、感情的意味「慌て」はバの重音化(単独)によって表され、かつ、その感情の度合いは重音の数によって示されることができると考えることができる。

【音調的操作】

重音化単独形式の音調面の特徴に言及しよう。バの発音に力み（ストレス）があり、子音に強い呼気が加わることがある点は、前節で見た基本形形式の場合と同様である。ただし、この場合には、語頭のバに特にこの傾向が著しく、語末に向けて次第に弱まりを見せる。イントネーションは平板調か下降調であるが、下降調がとられることの方が多い。語頭を強く高く発音し、語末に向けて弱く低くしていくといった音調が最も自然のようである。こうした操作が、〈話者 7〉の言う「声の強弱も利用する」ということなのであろう。また、〈話者 16〉〈話者 22〉〈話者 43〉の内省にもあるように、重音化単独形式の発音はスピードが速い。まるで早口言葉のようであり、いかにも慌てふためいているといった雰囲気が生成される。上記の特徴と合わせると、重音化単独形式の発音は、あたかも機関銃の音のような印象さえ受けるものである。

なお、今述べた語頭を強調するという発音は、語頭のバがやや長めに発音される現象を引き起こす可能性がある。上記の回答の中に、バーバババという形式がいくつか見られるのは、そのためと思われる。このことは、バーバババのような重音化＋長音化（語頭）形式の場合、語頭の長音化は一種の生理的・物理的な現象として生じたものであって、次節の「落胆」場面に現れる形式のような意図的な操作とは異なるのではないかと考えられる。

(3) 感情的意味「落胆」が加わる場合

続けて、質問 3 の場面、すなわち、大事にしていた花瓶が割れてがっかりする場面について見る。得られた回答は次のとおりである。

【回答一覧】

〈話者 1〉 バーバー イタマスィーゴトシタヤ。／バババババ イタマスィーゴトシタヤ。

〈話者 2〉 がっかりしたときは、バヤバヤと言う。

〈話者 4〉 バを 4 回くらい繰り返す。バーバババ ナンダベヤ。

〈話者 5〉 悲観的な場合、バーバ コワシテシマッタと言う。バー コワシテシマッタ、は自分一人の歎き。

〈話者 9〉 バー。バは 1 回だけ言う。

〈話者 10〉 これは相手がやったときに、バーバーバーバー。

〈話者 12〉 バー ナントシタベヤ。

〈話者 13〉 がっかりしたときには、アリヤー、とか、バーー、と言う。バーー、バヤー、とか。

〈話者 16〉 バーバーバーバー コレ エライコトシテシマッタナー。／バーバーバー コレ エライコトスタヤー ナゾ スベヤー。処置もさること、高価な物を割ってしまった後悔とごっちゃ混ぜになった言葉なのかと思う。誰か一緒にいれば、バーバー ドースッペネ、と相手に対して助けを求める言い方になるかもしれない。

〈話者 16〉 バーバー ぐらいなら言うか。

〈話者 20〉 バー、と語尾が落胆する感じで言う。

〈話者 21〉バー——、とひとつだけ言う。

〈話者 26〉アババー、と言うかもしれない。アーババー。

〈話者 27〉ババー ナンダベ コワレテシマッタヤー、と言うかもしれない。

〈話者 28〉バー ドースッペ、とか。

〈話者 29〉アバは言わない。バーだったら言うかも。

〈話者 30〉バー、と言う。バー ナゾスッペヤ。落胆した状態では、こう、バー、って下がる。

〈話者 33〉バーバーバー、と昔言ったかもしれない。バーバー ヤッテシマッタ。

〈話者 38〉バー。

〈話者 39〉ババババ。／ババババ ドーショー。

〈話者 41〉バー、という感じですね。

〈話者 43〉バーバーバー。

〈話者 47〉バイヤ、と言いますね。バイヤ。これは、バババより上の、なんてことをしてくれ
たんだ、みたいな感じ。自分がやったことに対しても、バイヤみたいな感じも言う。

〈話者 48〉バー、と伸ばす。1回ですね。ワレデシマッター、とかそのあとに付く。

〈話者 52〉使うかもしれない。バー ヤッチマッタナー。

〈話者 53〉私は使わないが、バー ナジョニスッペ、という感じ。こういうときはバは続けない。
伸ばす感じ。

〈話者 59〉言う。バツ、と1回だけ言う。

〈話者 65〉ババ——。

【形態的操作】

これらを見ると、まず、今まで現れていなかったバヤ、バイヤという形式が何人かの話者から回答されていることに気づく。この形式は、「バ」に他の感動詞が複合したもののようで、意味的にも落胆等のある種の場面に特化した形式であることが考えられる。詳しい検討は別の機会を待つことにして、今回は保留として置く。

それ以外の形式についてあらためて眺めると、〈話者 1〉のバババババ、〈話者 39〉のバババババ、〈話者 59〉のバツを除き、すべての形式に長音化が生じているのがわかる。このことは、長音化という操作が、「落胆」という感情的意味を表現していることを示す。中でも、重音化が加わらない長音化単独形式が中心であり、バー、バー、バーのように、バを意図的に引き伸ばすことで落胆の感情を表しているようである。バを単独で長音化させるという操作は、「バー。バは1回だけ言う」〈話者 9〉、「バー——、とひとつだけ言う」〈話者 21〉、あるいは、「バー——、と伸ばす。1回ですね」〈話者 48〉、「バー ナジョニスッペ、という感じ。こういうときはバは続けない。伸ばす感じ」〈話者 53〉というように、話者自身も意識している。なお、どの程度伸ばすかについては、上記の例のように1～4拍程度の場合が多い。話者の内省は得られていないが、長音化の程度は落胆の度合いと比例しているのではないかと思われる。

こうした長音化単独形式の次に多く回答されたのは、バーバー、バーバーバー、バーバーバーバ

一のような、重音化+長音化（語中・語尾）形式である。これらも、調査状況から見るかぎり、落胆の場面を正しく理解して話者が回答したものとみなしてよさそうである。「落胆」という感情的意味は、長音化単独形式のほか、重音化+長音化（語中・語尾）形式によっても表現されうると考えられる。この場合も、バーの繰り返しの回数が多ければ多いほど、落胆の度合いも強いものと予想される。

【音調的操作】

これらの形式の音調面の特徴を見てみよう。まず、長音化単独形式について述べると、先に取り上げた基本形形式や重音化単独形式と異なり、ストレスや呼気はそれほど強くない。逆に、声に力がなく、いかにもがっかりしているという雰囲気を漂わせた発音になっている。イントネーションは、バー、バーには平板調・上昇調の両方が見られるが、バーバー以上の長さになると上昇調に限られてくる。上記の〈話者 30〉の内省には、「落胆した状態では、こう、バー、って下がる」とあるが、録音を聞いてみると、話者の意識に反して実際の発音はやや上昇気味である。長音化単独形式の基本は上昇調だと考えてよい。ただ、緩やかな上昇もあれば、明確な上昇もあることは確かである。

バーバーなどの重音化+長音化（語中・語尾）形式も、長音化単独形式と同様にイントネーションは上昇調をとる。ただし、語頭から語末にかけて徐々に上昇するというパターンのみでなく、例えば、バーバーバーの最初のバーバーは平板で最後のバーのみ高くなるといったパターンも観察される。その他、力のないがっかりした発声を行う点は長音化単独形式と同様である。

(4) まとめ

以上、語形化の操作と感情的意味との対応関係について見てきた。簡潔にまとめれば、次のようになる。

a. 基本義がそのまま実現義になる（特に感情的意味が加わらない）場合

形態的操作：バ1音の末尾に声門閉鎖音を伴い、バツと発音される。

音調的操作：発音に力み（ストレス）が加わると同時に、子音に強い呼気を帯びることもある。

b. 基本義に感情的意味「慌て」が加わる場合

形態的操作：バを短く連呼する重音化の操作により、バババ、ババババ、バババババのような重音化単独形式が作られる。感情の度合いは、重音の数によって表される。

音調的操作：発音に力み（ストレス）が加わる。また、同時に子音に強い呼気を帯びることもある。この特徴は、語頭に特に著しく、語末に向けて次第に弱まりを見せる。イントネーションは平板調か下降調であり、とりわけ下降調が選ばれやすい。また、発音のスピードが速く、いかにも慌てふためいているといった雰囲気を生み出す。

c. 基本義に感情的意味「落胆」が加わる場合

形態的操作：バを長く引く長音化の操作により、バー、バー、バーバーのような長音化単独形式が作られる。また、バーバー、バーバーバーのような、重音化+長音化（語中・語尾）

形式が作られることもある。感情の度合いは、前者においては長音の長さ、後者においては重音の数によって表されると推定される。

音調的操作：声に力がなく、いかにもがっかりという気分を漂わせた発音をする。イントネーションは、平板調か上昇調であり、とりわけ上昇調が選ばれやすい。

ところで、以上の結論は、なお検討すべき点が多い。ここでは、限られた調査の結果から、「慌て」と「落胆」という2つの場面について考察したが、慌ては重音化によって、また、落胆は長音化によって表現されるということは言えても、その逆の、重音化は慌てを、長音化は落胆を表すということは単純には言えない。なぜならば、慌てと落胆意外の感情的意味をも、重音化や長音化が担っている可能性があり、さまざまな感情的意味について全体的に分析した上でないと、重音化や長音化の真の機能は把握できないと思われるからである。

例えば、次の回答を見ていただきたい。

〈話者 10〉「えー、そんなことするの」というときに、バーー、と言う。バーー フツー ソーイウコト シナイネー。バーー ナンカチガウンジャナイ、というとき。また、保育所などで、子供がおもらししたのを見て、バーー、バツ、バーバーバー、などと言う。

〈話者 11〉変ったもの見たときに、アラ バーバーバと言う。アララ バーバーバー、という感じで。畑でいつも草が生えていないところに、取らないでいたら草が生えていたとき、ナント バーバーバー ソコサ クサ イッパイ オガッテ。いつもと違う様子を見て、アレ バーバーバー ナンダイ コノクサ トンナイデ、と言う。

〈話者 60〉普通の会話をしていて、なんか、こうびっくり、初めて聞いたこととか言われると、バーーとか。（調査者：実演してみせてくれませんか。「この機械、6 万もするんだよ」と言われたら？）バーー。

これらは、その状況からして、「呆れ」や「困惑」の感情が表出された場面と考えられるが、ここでも、長音化単独形式のバーーや、重音化+長音化（語中・語尾）形式のバーバーバーなどが回答されている。また、次の回答も長音化形式が使用されているが、これらには「恐縮」の感情が込められているように感じられる。

〈話者 8〉バーバー ナントナント、と、何か贈り物を持って来てくれた年寄りに対して言う。
ありがたい気持ちを出すとき。

〈話者 38〉（調査者：お礼にも使いませんか？）そういう場合もあるね。バー モーシワケナイコト。

一方、次の回答の重音化単独形式には、ある種の「歓喜」の感情が含まれているように思われる。

〈話者 16〉しばらくぶりに来た子供たちに、ババ ヨグ キタコト、と言う。

このように見てくると、長音化は「落胆」のほかにも「呆れ」「困惑」「恐縮」といった感情と対応し、重音化は「慌て」だけでなく「歓喜」の感情とも結びつく可能性が見えてくる。そうすると、長音化や重音化といった形態的操作は、こうした個々の具体的な感情のレベルではなく、それらを統括するより抽象的で大まかな感情のレベルで機能するものであるのかもしれない。例えば、長音化は抑制された不安定な感情を、重音化は開放的で活性化した感情を表現する、といったようにである。また、そのように、形態的操作がより高次のレベルで機能するのに対して、音調的操作がより具体的な感情の機微を表し分ける役割を受け持っているとも考えられる。これらの問題については、またあらためて検討したい。

5. 文の特徴

最後に、「バ」が使用される文の特徴を取り上げることとする。幸い、今回の調査では、「バ」を使用した例文が豊富に得られたので、それらを整理しながら検討してみたい。なお、文の中での「バ」の位置はほぼ文頭に限られるということができる。文の冒頭で、バッ、ババババなどと声を発してから、次の語句を続けていくというパターンである。

今回得られた「バ」の例文には、主に文の内容から見て次のような種類のものがある。

(1) 状況描写文

(1-1) 事態描写文

(1-2) 心情描写文

(2) 評価表明文

(3) 非難表明文

(3-1) 状況描写文・評価表明文＋疑問詞

(3-2) 疑問詞文

(4) 困惑表明文

以下、この分類にしたがって見ていく。

(1) 状況描写文

状況描写文には、認知した事態をそのまま描写するものと、それに伴って生じた心情を描写するものがある。

(1-1) 事態描写文

まず、事態を描写する例文は次のようなものである。眼前で起こったできごと、例えば、水をこぼしたこと、床が濡れたこと、あるいは花瓶が割れたことなどを描写している。

〈話者 5〉 バーバ ヌレタベッチャ。／ババ コワシテシマッタテ。／バーバ コワシテシマッタ。／バー コワシテシマッタ。

〈話者 12〉 バババババ コボシテシマッタヤ。

〈話者 15〉 ババババ コワシテシマッタヤ。

〈話者 18〉 アババ コボシテシマッテ。

〈話者 19〉 バー オトシタヤ。

〈話者 22〉 ババババ ミズコボシテシマッタヤ。

〈話者 28〉 ババ コボシタヨ。

〈話者 32〉 バー ヤッター。

〈話者 33〉 バーバー ヤッテシマッタ。

〈話者 43〉 バツ コボレテシマッタ。

〈話者 48〉 バーバババ マゲテシマッタヤ。／バー ワレデシマッター。

〈話者 52〉 バー ヤッチマッタナー。

〈話者 74〉 バー ヌレタベッチャヤ。／アバババ ワレテシマッタ。マジカヨ。

(1-2) 心情描写文

次に、心情を描写する例文は次のようなものである。目の前で生起した事態そのものではなく、その事態のために残念に思ったことや驚いたことなどを描写している。

〈話者 1〉 バーバー イタマスィーゴトシタヤ。／バババババ イタマスィーゴトシタヤ。

〈話者 16〉 ババババ ナント ビックラコイタヤ。／バーバーバーバー コレ エライコトシテシマッタナー。

〈話者 23〉 バー タシマケ°ダ。

以上の状況描写文を概観すると、基本的に次のような文型がとられていることがわかる。

「バ」＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

文末に位置する終助詞の「ヤ」は、ある種のマイナスの心情を訴えかける形式のようであり、「バ」＋ヤ、の組み合わせで、驚きを伴った感嘆表現を作り上げていると考えられる。

(2) 評価表明文

続いて、何らかの評価を表明する文も観察される。以下のように、もったいない、恐ろしい、危ない、申し訳ないといった評価の判断が示されている。

〈話者 2〉 バーバババ ナント モッテーネーコト。／バーババ ナント モッテーネーコタ。

〈話者 13〉 バツ オッカネコト。／バツ アブネコト。

〈話者 16〉 ババ ヨグ キタコト。

〈話者 38〉 バー モーシワケナイコト。

これらの評価表明文に特徴的なのは、次の文型である。

「バ」＋ ～コト。

東北に多い「コト」止めの感嘆表現はこの地域でも使用されており、その冒頭に驚きの「バ」が配置されることで、驚きの感嘆表現が形成されている。

(3) 非難表明文

非難表明文には、上で見た状況描写文や評価表明文に疑問詞が加わったものと、疑問詞文のものがある。

(3-1) 状況描写文・評価表明文+疑問詞

状況描写文や評価表明文に疑問詞が加わったものというのは、次に挙げるような文である。疑問詞といっても、具体的には、「ナンダベ」が多く、ほかに「ナンダイ」「ナントヤ」などが回答されている。これらは疑問詞が感動詞的に使用されたものと言える。

〈話者 2〉 バッ ナンダベ オラ タマゲタヤ。／バー ナンダベ ヒト バガニスイタ。／バーババ ナンツーコト シタンダベ。ミライン ボッコレテシマッタカ。

〈話者 11〉 ババババ ナンダバー キーツケタラ イーノニ。／アレ バーバーバー ナンダイ コノクサ トンナイデ。

〈話者 16〉 ババババ ナンダベ イギナリ コエカケテ。ビククラコイタコト。

〈話者 19〉 バーバー ナントヤー ソンナコトカタッテ。／バーバー ソンナコトユッテ。 コマンデネーノ。

〈話者 27〉 ババババ ナンダバー アブネゴド。／ババー ナンダベ コワレテシマッタヤー。これらの文型は次のように示される。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～コト。

また、〈話者 11〉〈話者 16〉〈話者 19〉の発話に見られる「テ」止めの文型も特徴的である。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シテ。

(3-2) 疑問詞文

非難表明文には、疑問詞を中核として文を構成する疑問詞文もある。いわゆる疑問文の体裁をとるが、実質、相手への非難表明として機能する。この例はかなりの数が得られた。対応する共通語で4つに分けて示す。

「何だ」

〈話者 2〉 バー ナンダベ。

〈話者 4〉 バーバババ ナンダベヤ。

〈話者 5〉 ババババ ツァッ(舌打ち) ナンダベ。

〈話者 22〉 バヤバヤバヤバヤ オメサン ナンダベ。

〈話者 27〉 バッ ナンダベ。／ババババババ ナンダビヤー。

〈話者 38〉 バッ ナンダベ。

「何をするんだ」

〈話者 18〉 バッ ナニスンダベ。／バッ コノヒト ナニスンダベ。

〈話者 48〉 バッ ナニスンノー。

〈話者 51〉 ババババ ナンツコトスنداベ。

「何をしたんだ」「どうしたんだ」「何をやってんだ」

〈話者 12〉 バー ナントシタベヤ。／ババババ オイ ナントシタベヤ。

〈話者 13〉 バババババ コマッタコトシタヤー。ナントシタコッタベ コマッタヤー。／アラー
ババババ コマッタヤ ナントシタコッタベ。

〈話者 51〉 ババババ ナニシタベ。

〈話者 53〉 アッ ババババ ナントシタベ。

〈話者 61〉 バツ ナニヤッテンダ。

〈話者 69〉 アババババ ナニヤッテンダベ。

これらの文型を、代表的な疑問形式を選んで表示すれば、次のようになる。

「バ」＋ {ナンダベ／ナニスنداベ／ナントシタベ}。

冒頭で「バ」と驚き、すぐさま疑問形式で相手への非難を表明するパターンである。

(4) 困惑表明文

困惑した気持ちを表現するものである。これも疑問詞文である。具体的には「どうしよう」にあたる「ドースuppe」「ナゾスuppe」などが使用される。

〈話者 16〉 ババババ ナゾシタライエーベ。／バーバーバ コイズ ナゾシタライーベナ。／バーバー ドースuppeネー。／バーバーバー コレ エライコトスタヤー。ナゾ スベヤー。

〈話者 28〉 バー ドースuppe。

〈話者 30〉 バツ ナゾスuppe。／アッ バツ ナゾスuppe。／バー ナゾスuppeヤ。

〈話者 39〉 ババババ ドーシヨー。

この文型を、ナゾスuppeを例として示せば次のようになる。

「バ」＋ ナゾスuppe。

これは、「バ」と驚いたあと、すぐに困惑を表現するパターンと言える。

(5) まとめ

このほか、

〈話者 8〉 バーバー ナントナント。

〈話者 49〉 バツ ソンナニ。

と、驚き呆れる文や、

〈話者 27〉 バババババ ナンダベヤ アンダダッタノスカ。

〈話者 32〉 バツ ナン オメガ。

と、確認・安堵する文などが得られたが、詳しい整理は省略する。

以上、今回の調査結果から観察された「バ」の文的特徴について述べた。まとめの意味で、文の

種類と代表的な文型を掲げれば次のとおりである。

(1) 状況描写文（事態描写文・心情描写文）

→「バ」＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

(2) 評価表明文 →「バ」＋ ～コト。

(3) 非難表明文

(3-1) 状況描写文・評価表明文＋疑問詞

→「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シタ・シテシマッタ（＋ヤ）。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～コト。

「バ」＋ ナンダベ ＋ ～シテ。

(3-2) 疑問詞文 →「バ」＋ {ナンダベ／ナニスンダベ／ナントシタベ}。

(4) 困惑表明文 →「バ」＋ ナゾスッペ。

今回の調査は質問場面も限られているため、以上の整理は「バ」が用いられるさまざまな文のうちの一部を紹介したにとどまる可能性がある。ただ、「バ」という驚きの感動詞が導く文であるだけに、全体に感情表出を主体としたものが中心となるということとは言えそうである。

6. おわりに

以上、2006 年度気仙沼市調査における感動詞「バ」について、意味や形態、文的特徴といった観点から整理してきた。今回の結果は、あくまでも設定した 3 つの場面における「バ」の使用についての回答を中心にまとめたものであり、感動詞としての全体像を記述することができたわけではない。しかし、共通語であれば多くの言葉を費やすことでしか表現できない内容を、感動詞「バ」ひとつを巧みに操ることで表す方言のユニークさについて汲み取っていただけたのではないかと思う。

今後の課題としては、より詳細な各地の用法の記述を行うとともに、地理的展開や歴史の変遷を明らかにし、アバ系感動詞の全体像を描き出していきたい。

注

1 これらの点については、これまで次の口頭発表で論じてきた。

澤村美幸（2008.3.1）「アバ系感動詞の分布と歴史」（基盤研究(B)「現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究」（友定賢治代表）宮島ワークショップ）

澤村美幸（2010.6.12）「方言による古典語の再解釈－アバ系感動詞を中心に－」（第 7 回蜷池言語研究所公開研究発表会）

澤村美幸（2010.10.30）「感動詞の地域差と歴史－アバ系感動詞を例として－」（広島方言研究会）

あいさつ表現

中 西 太 郎

1 調査の目的

出会い時のあいさつ表現の機能のひとつとして、敬語のような、待遇的關係を示す働きがある。例えば、朝、「おはよう」と声をかける相手より「おっす」「おう」「よう」と声をかける相手のほうが親しい相手だということは、容易に知れる。しかし、従来の方言資料・辞書の類の記述は、このような待遇的關係を示す働きを念頭においた記述として十分ではない。例えば、あいさつ言葉の俚言形「オハヨーゴザリス」などの特徴的な表現の記述は見られても、それを家族に言うのか、疎遠な同年代に言うのか、といった待遇的観点での使い分けは知るべくもない。同じ相手に対しても、敬体を用いるか、常体を用いるかといった傾向は地域によって異なる。さらに、例えば、親しい相手には「オハヨー」、疎遠な相手には「オハヨーゴザイマス」と、敬語形式の使い分けにだけ気を付けてさえいれば良いというわけではない。冒頭の例では、同じ常体として括られるものでも、「オハヨー」ではなく、まさしく「オッス」などの表現が相手への待遇的關係把握を示す表現として適切なのである。つまり、あいさつの特徴は、「オハヨー」:「オハヨーゴザイマス」のように、敬語形式の使い分けだけではなく、「オハヨー」:「オー」のように表現内容の差なども、自然な運用に関与している点にあると言える。まして、各地には「コンニチワマダゴワシタ（今日はまだでございました）」などのような地域特有の表現内容のバリエーションがあることが知られており、共通語とは異なる使い分けの実態を持つ可能性がある。その意味でも、自然な運用を期した時の難解さは予測できる。そこで、日本語のあいさつ表現を待遇的観点から記述し、運用に資する資料を整備することが筆者の研究の目的の一つである。

本稿では、南三陸地方の地域別・世代別・場面別の使用実態の特徴を報告する。対象話者については、2世代（高年層・若年層）に及ぶ。これは使用実態の世代差を明らかにするとともに、あいさつ表現使用実態の変化の方向性の考察をも可能にする。よって、記述の中に読み取れる、あいさつ表現変化の方向に関する知見についても合わせて指摘する。

なお、場面については、朝の出会い時のあいさつ表現を扱う。

2 調査地域の特徴

あいさつ表現の使用実態の地域差に加え、待遇的場面ごとの差を捉えた研究は少なく、当該地域もその例に漏れない。そのような状況において、地理的広がりについては、国立国語研究所編(2006)『方言文法全国地図』（以降 GAJ と略）の調査結果が、待遇的場面差については大橋(1997)や本堂(1997)（いずれも方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊』所収）の記述が、当該地域ないし

その周辺の地域の貴重な記述として挙げられる。

まず、GAJ349 図における調査地域の分布を図 1 に示す。朝、近所の目上の人に道で会ったときのあいさつを尋ねた結果である。当調査とは、遠野、釜石、大船渡、気仙沼、志津川の 5 地点が重なっている。

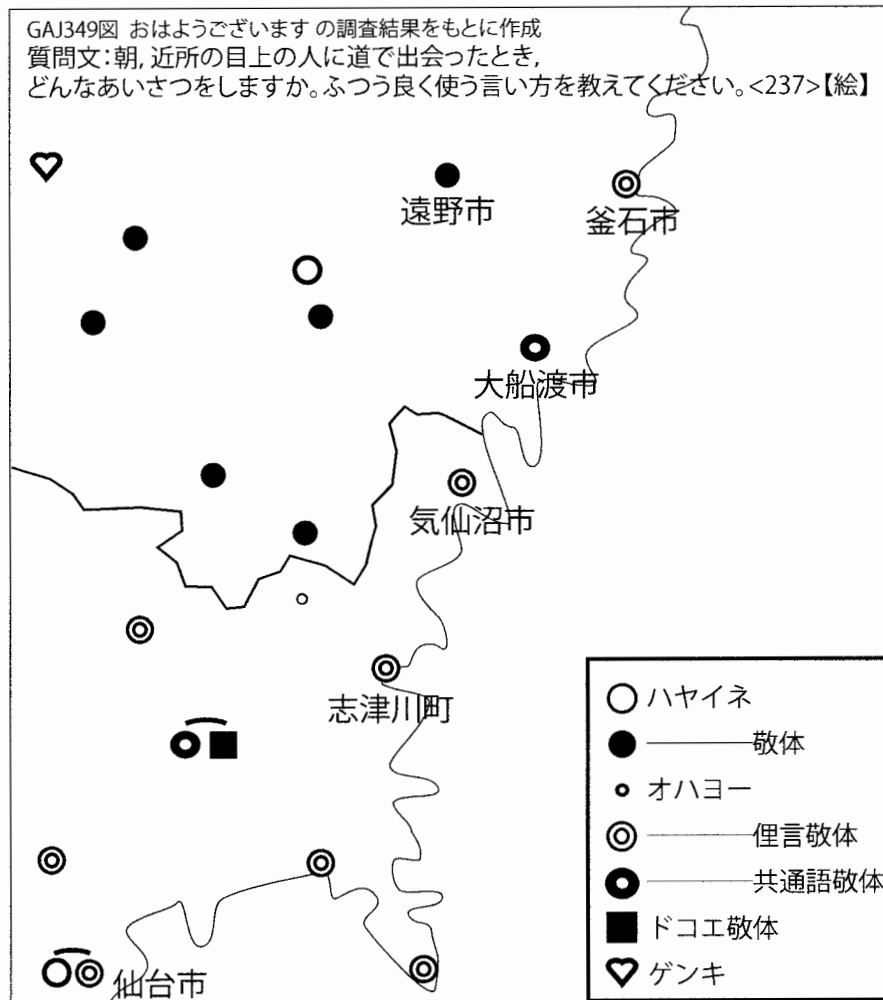


図 1. GAJ349 図における調査地域とその周辺の分布

調査地域の南三陸地方は、岩手県南部方言地域の沿岸部から宮城県の北部海岸部方言の地域にあたる。図 1 を見ると、GAJ の調査が行われた 1980 年前後の様子では、岩手県南部方言地域でも、南三陸地方以外の内陸部にあたる地域には「ハイネ」類（ハイネ常体：○、ハイネ敬体：●、凡例に対応する具体例は次頁に掲載）などが窺える。だが、当調査の対象地域にあたる岩手県南部から宮城県北部の沿岸部には、主に「オハヨー」類(◎●)が分布している。この点から判断すると、概ね定型的表現使用地域だと言ってよいだろう。ただし、GAJ の結果はこの場面に関するものだけであり、例えば同年代に対してなど、他の待遇的場面で、同じように定型的な表現が行われるかどうかや、その使用実態に世代差やより細かい地域差があるかは分からない。

次に、当該地域近辺の代表地点、宮城県宮城郡利府町森郷方言や、岩手県盛岡市方言の待遇表現を記述する中で、あいさつの待遇的場面ごとの使い分けを記述した大橋氏や本堂氏の調査結果を参照する。それによると、盛岡市では「オハヨーゴザンス」と「オハヨーガンス」と「オハヨー」が、相手によって使い分けられている様が窺える。こういった使い分けが盛岡以外の周辺地域でも行われているのであれば、特定の場面のあいさつ表現の内容（盛岡の場合「オハヨー」）と、その地域で行われる敬語形式の待遇的性格を踏まえることで、容易に待遇的側面での使用実態の予測が可能になると言える。ところが一方、利府町では、最も敬意を払うべき相手には、「オハヨーゴザリス／オハエガス」のような「オハヨー」の俚言敬体＋呼称詞（「コーチャーセンセー」など）で呼び掛けるというあいさつが見られる。そして、見知らぬ相手や、顔見知りでも、年上の場合には「あまり声をかけない」とされる。これは、単純な敬語形式の足し引きで自然な運用につながらないことを示唆している。ゆえに、GAJの一場面による把握だけでは、運用を念頭にした記述として十分ではないと捉えられる。当該地域の記述を要する所以である。

3 言語地図化に際しての処理と具体例

調査は、「朝、道端で、【対等よりやや目上の人】に会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？」という質問文で行った。そして、待遇的場面による差を把握するため【 】の部分で[最も目上の人（以降「最上」と略）／対等よりやや目上の人（以降「やや上」と略）／同年代の親しい人（以降「同親」と略）／顔見知り程度の同年代の知人（以降「同疎」と略）／目下のもの（以降「目下」と略）／未知の相手（以降「未知」と略）]など、人物を変えて順に質問した。

本稿では、このようにして得られた調査結果を言語地図によって提示する。地理的広がりをつえやすくし、南三陸地方内に使用実態の地域差がないか、検証可能な形で提示するためである。

次に、回答の採用方針、記号化の際の分類方針等、地図化の手続きを述べていく。

地図化にあたって、話者が複数名いる地点では、在住歴のもっとも長い1名を選び、その回答を反映させた。なお、誘導で得られた回答、付問で得られた回答、話者が質問場面とは違う状況を想定していた回答などは、自然な回答とみなさず、記号化の対象としなかった。例えば、回答に際して話者が「皆」など、調査文の対象となる相手以外に、他の属性の相手を含む可能性のあるものとして答えた回答、いわば「不特定多数の相手」への表現として捉えられる回答は扱わない、といったものである。

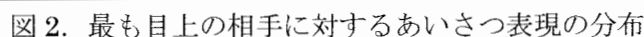
記号化は、待遇的価値に関わると目される要素を重視し、表現内容の差異と敬語形式の差異を重視して行った。ムード・テンスの分化にあたる表現（「ゲンキカ」／「ゲンキダツタカ」）等は、待遇的価値に関わらない限り、等価表現として統一した。また、話者の回答で「天気の話もするなあ」等との情報があっても、具体的発話の例がない場合は、記号化の対象と見なさなかった。表現内容は、その共通性がわかるよう表現内容別に「目覚めの早さ」や「行先尋ね」のような大分類を設け、最終的に、後述のように各分類に記号を割り当てた。

大分類	代表形式	具体例
目覚めの早さ		
○	ハヤイネ	キョーワハヤイナヤ／ハエーナー／ハヤカッター／ハヤイネー
●	敬体	ハエーナムス／オハヤガス
◦	オハヨー	オハヨー
◎	俚言敬体	オハヨーガンス／オハヨーゴザリス／オハヨーゴザリヤス／オハヨーゴザンス
⦿	共通語敬体	オハヨーゴザイマス／ドモオハヨーゴザイマス
天気		
✳	天気	キョーアメフリダネー／アツクナリソーダネ
✳	敬体	キョーワテンキガイデスネー／キョーワイーテンキダナンス
行先尋ね		
□	ドコエ	ドッツノホー／ドゴサイグンダベ／ドゴサイグベー／ドサイグンダイ
■	敬体	ドゴサイグノッス／ドチラサネス／イマカラドコニクトコデスカ
様子伺い		
◇	ナニシテイルカ	イマナニヤッテンノヤ／ナニシテタ／キョーナニスル
◆	敬体	キョーナニシニキタンデスカ／キョーワナンノシゴトデスカ
調子伺い		
♥	ゲンキ？	キョーモゲンキデネ／チョーシワ／ゲンキカ／ダイジョブダ
♥	敬体	カワリナイスカー／キョーノカラダノチョーシワドーナスカ／ゲンチッスカ
再会		
☾	オヒサシプリ	シバラグダッタネ／シバラクプリダネ
☾	敬体	オヒサシプリデシタ／シバラクデシタ
慰労・謝意		
✚	オツカレサマ	ゴクローサンダネ
😊	一生懸命	イツモオカセギダゴド
実質的な内容を持つ表現		
◡	実質的表現	ソロソロアガンネェ／ユーベネラレネガッタネ
⬇	敬体	ツリコスカ／イヤイヤコノアイダゴチソーニナリマシテ
呼びかけ類		
△	呼びかけ	オー／オーイ／オッス／チース／ドモ／ホーイ／ヨー
▲	名前	名前を呼ぶ
その他		
☆	コンニチワ	コンニヅワ
動作		
✕	お辞儀など	会釈／頭を下げる
☺	手を振るなど	手を振る／手を上げる
何もしない ✕		
無回答 N 該当する相手がいない、などの理由		

プロットするにあたって、複数の構成要素から表現が成り立つものや、複数語形の回答は並列して地図に表した。

例. オー、ゲンキカ = △♥

4.1 最も目上の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴



まず分布を見て、過去の調査結果との比較で気づくことは、得られた表現の種類の数が全体的に多いということである。この点については、質問文の違いによる影響と見る配慮が必要である。本稿の質問文と先行研究の質問文は、“朝、道端で”という点は概ね変わらない。だが、その後に続く質問文で、GAJ の質問と『方言資料叢刊』の質問では、「どんな“あいさつ”をしますか／どのように挨拶しますか」という尋ね方をしている。それに対し当調査では、「何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか」という尋ね方をしている。前者は、あいさつ言葉の典型を引き出すような質問だと言え、後者は、自然な言語行動を引き出すような質問だと言える。筆者の目的は運用を視野に入れた記述であるため、このような自然な言語行動を引き出すような調査質問文が目的に適っているといえる。ただし、GAJ・『方言資料叢刊』の調査と当調査が、全く質の異なるものを取り出してきたかといえば、そうではない。当調査の結果にも、GAJ 調査の質問で典型として引き出された「オハヨー」類が窺えることから、当調査の質問が、GAJ 調査の質問を包括するような性格の質問だと言えるまでである。

— 377 —

形「オハヨーゴザイマス」(●)も多いが(14 地点)、「オハヨーゴザリス」などの俚言形(◎)も盛んにおこなわれているのが見て取れる(16 地点)。具体的に得られた俚言形は、以下の通り。

オハガンス、オハヤスー、オハヨガンス、オハヨゴザリス、オハヨーザイマース、オハヨーガス、オハヨーガンス、オハヨーゴザリス、オハヨーゴザリヤス、オハヨーゴザリヤシタ、オハヨーゴザンス

俚言形が根強く使用されていると判断できる。宮城県の北西部の小牛田から山形県の北東部新庄をつなぐ陸羽東線沿線地域のあいさつ表現の使用実態をグロットグラムによって調査した中西(2011c)では、同じ高年層の最も目上の相手に出会った時の場面で、俚言形を用いるのが 22 地点中わずか 3 地点であり、それに比べると、この南三陸地方での俚言形の使用比率の高さが分かる。

また、気仙沼市周辺に「ドコエ」と尋ねる表現(□■)がまとまっており(4 地点)、注目に値する。これらは、全国的なあいさつの表現分布から看取される通時的変遷過程(三井 2007 他)、

(1)a)イーテンキダ類、ドコエイクカ類、デカケルカ類> b)ハヤイネ類> c)オハヨー類

に照らし合わせると、(1)a の古態と目される表現にあたる。加えて、洞泉には「ハエーナムス」という、通時的変遷過程では(1)b に属する、「オハヨー」の前身とされる「ハヤイネ」類(●)の表現が見られる。これらを考え合わせれば、南三陸地方の最も目上に対する場面では、定型的表現である「オハヨー」類を用いながらも、一部の地域であいさつ表現使用実態の古態の特徴を留めている可能性が考えられる。ただしこの点は、他場面の分布の様子と合わせ総合的に判断する必要がある。注目すべき点を以下にまとめる。

- ・ GAJ349 図の分布に比して用いられる表現のバリエーションが多い。
(常体・敬体の異なりも含めて 14 種)
- ・ 「オハヨー」共通語敬体が多く、ほぼ全域に分布(14 地点)。
- ・ 「オハヨー」俚言敬体が多く、ほぼ全域に分布(16 地点)。
- ・ 気仙沼周辺に「ドコエ」等、非定型表現が相対的に多い。

4.2 やや目上の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

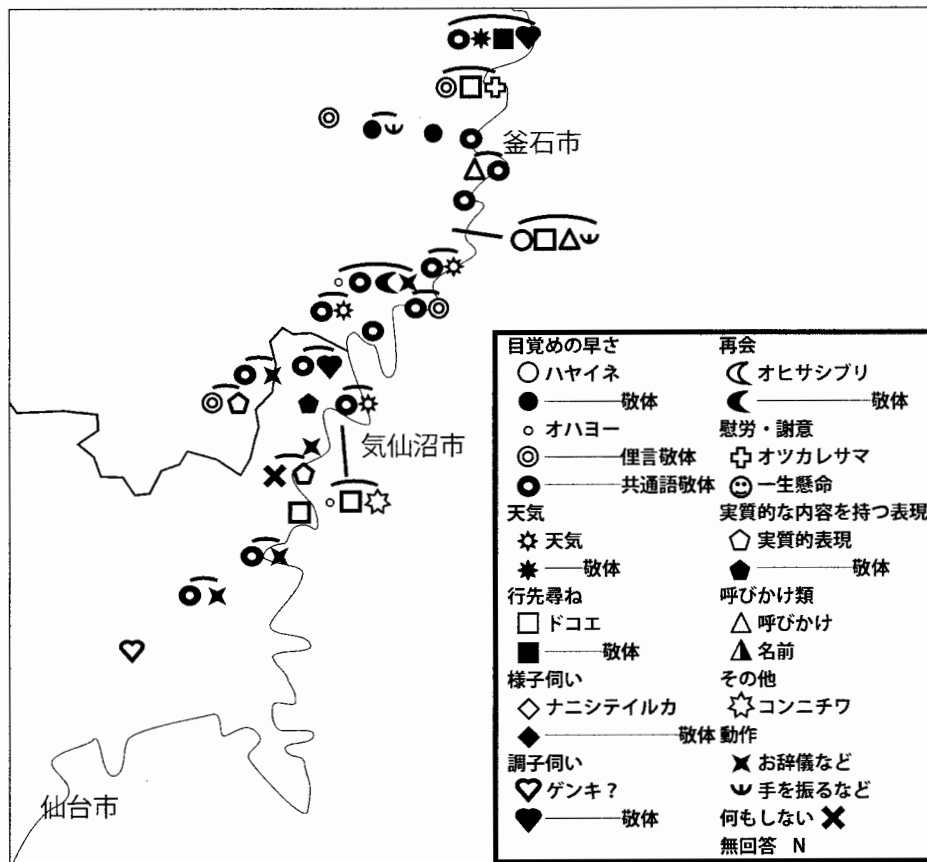


図 3. やや目上の相手に対するあいさつ表現の分布

図 3 は朝、やや目上の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

特徴的なのは、前節の最も目上の相手に対する分布に比べて、「オハヨー」俚言敬体が少なくなっていることである（最上：16 地点、やや上：4 地点）。その形態も「オハヨーガス、オハヨーガンズ、オハヨーゴザンス」の 3 種に限られる。最も目上の相手に比して、やや目上の相手で「オハヨー」俚言敬体が少なくなるという点は、陸羽東線沿線地域の傾向と一致する（陸羽東線最上：4/22 地点、やや上：2/22 地点）。「オハヨー」俚言敬体の待遇価値が高いという意識は、これらの地域に共通する傾向と読める。一方、「オハヨー」共通語敬体は、気仙沼市以北の海岸沿いに目立って分布する（14 地点）。その使用比率は、最も目上の相手へ用いる割合と変わらない（最上＝やや上：14 地点）。当該地域で「オハヨー」共通語敬体は、「オハヨー」俚言敬体に比べ、少なくとも最も目上からやや目上まで、広く用いることができる待遇価の表現として意識されていると言える。

また、気仙沼市の周辺や釜石市の周辺に、天気を話題にする(☆※)表現や、「ドコエ」と聞く行先尋ねの表現、「ユーベネラレネガッタネ」など、実質的内容(◻◆)を話す表現が併せて少なからず見られる（「ドコエ」類：5 地点、「実質的表現」類：3 地点）。「ハヤイネ」類(○●)も最も目上よりも数を増やしている（最上：1 地点、やや上：3 地点）。先の、最も目上の相手への表現の分布から分かる使用実態と同じで、一部の地域で、あいさつ表現使用実態の古態の可能性がある特徴を示して

いると考えられる。このような非定型表現の使用率は、最も目上の相手への場面に比して高い（最上：12 地点、やや上：15 地点）。

なお、常体・敬体の使い分けという点では、やや目上の相手でも、「ドゴサイグ」のように常体で声をかけるといふ地点が目立つ。「オハヨー」類に関しても、「オハヨー」常体(○)がやや目上に対して用いられている点が興味深い(2 地点)。常体形の使用率という点では、陸羽東線沿線地域に比して、南三陸地方の方が若干高く（南三陸：11/26 地点、陸羽東線：8/22 地点）、あいさつ表現における敬語使用への寛容さもこの地域の特徴としてよいかもしれない。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・「オハヨー」共通語敬体が多く、ほぼ全域に分布。(14 地点)。
- ・「オハヨー」俚言敬体が最も目上の相手に比して少ない(4 地点)。
- ・最も目上に比して非定型表現を使用する地域が若干多い(「ドコエ」類：5 地点、「実質的表現」類：3 地点、「ハヤイネ」類：3 地点等)。
- ・常体形の使用が多い(11/26 地点)。

4.3 顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布の特徴

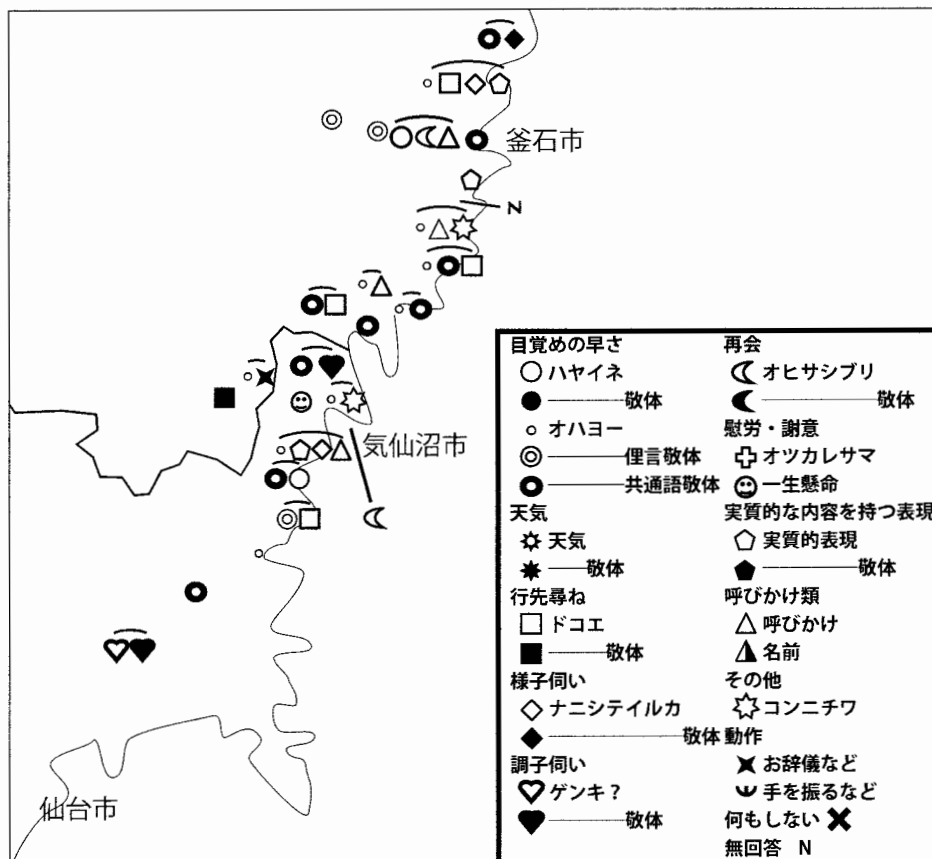


図 4. 顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布

図4は朝、顔見知り程度の同年代の知人に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

これまでの2場面比べ、全体的に、まとまった分布を示すものが少ない。最も数の多い「オハヨー」常体、「オハヨー」敬体でも、ともに9地点である。それに次いで行先尋ね（常体：4地点、敬体：1地点）、以下様々な表現が見られる。また、常体・敬体の使い分けという点では、例えば「オハヨー」などは、同一表現内容で敬体と常体の分布がほぼ半々であり、あいさつ表現上でどう待遇すべきかばらつきがあることが窺える。特に、越喜来、綾里で、「オハヨー」常体と敬体の2形態が表れている様が象徴しているように、当該地域では、顔見知り程度の人に対する対応の仕方は定まり切っていない可能性が窺える。なお、ここで現れる「オハヨー」俚言敬体は「オハガンス、オハヨーゴザリス、オハヨーゴザンス」の3種である。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・全体としてまとまった分布を示すものが少ない。
- ・非定型表現のバリエーションが多い(10種)。

4.4 親しい同年代に対するあいさつ表現の分布の特徴

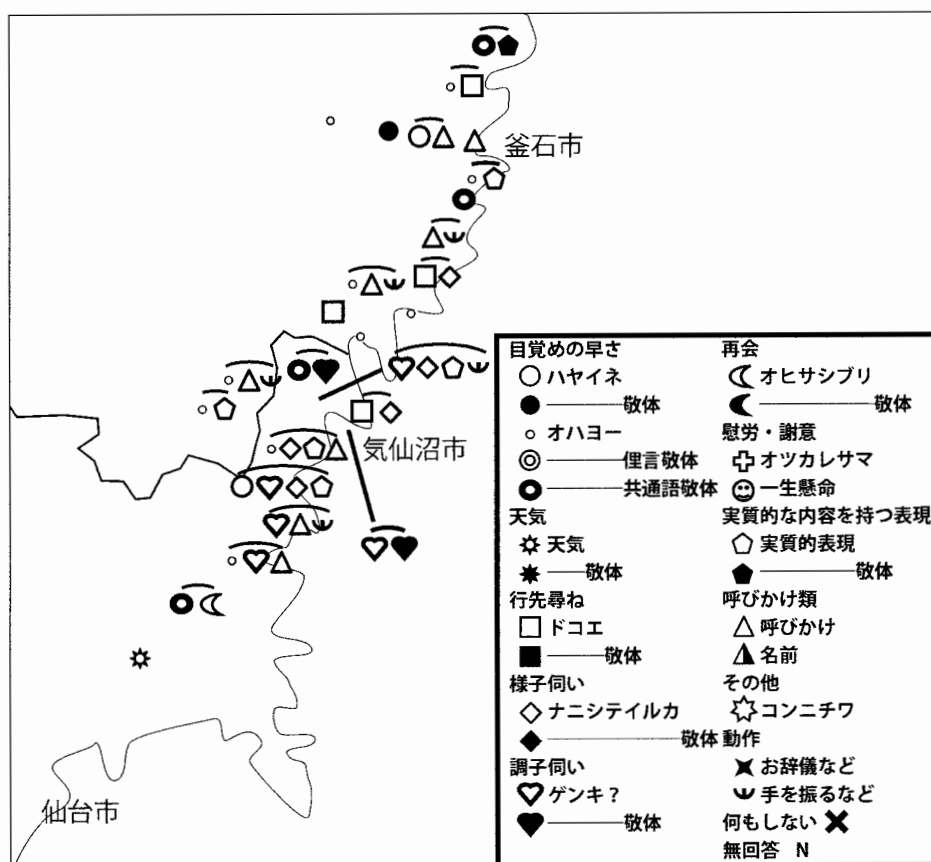


図5. 親しい同年代に対するあいさつ表現の分布

図5は朝、親しい同年代に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

「オハヨー」常体で、簡潔に済ませることが多いようである(10地点)。しかし、より注目すべき点は「オハヨ〜」類を用いない地点の多さである。「オハヨー」類がない地点は12地点存在する。これは、陸羽東線沿線地域の「オハヨー」類がない地点に比べてはるかに多い(陸羽東線:3/22地点)。つまり、親しい同年代に対して「オハヨー」類の表現が浸透しているか否かの点で、2地域には顕著な差が見られるのである。

また、場面間で比較しても、行先尋ねや様子伺い、調子伺いなどの非定型表現が、それぞれある程度多く窺える。特に気仙沼市周辺には「ゲンキカー」と尋ねる調子伺い(♡♡)や「コンバンドーダ、ノムカ」といったように実質的な内容を持つ表現が多い。なお、調子伺いの表現は、他場面まで見ても、この同年代の親しい相手への場面における気仙沼市周辺の分布が、まとまった分布として際立っている。その意味で、南三陸地方の中での地域的特徴と認めてよいだろう。

そして、気仙沼市周辺の非定型表現を交わす地点の中には、「オハヨー」類を併用していない地点もわずかながら見られる点も注目に値する。なぜなら、ここにあいさつ表現の使用実態の複雑さが窺えるからである。先に見たように、最も目上や、やや目上の相手の場面では、非定型表現が用いられているとしても、ほぼ「オハヨー」類(特に敬体)を併用するという使用実態が見られた。その様子から、例えば親しい同年代の相手には、「オハヨー」の常体さえ用いれば、適切なあいさつ表現の運用が可能になるという解釈が予見されるだろう。だが、実際には、図5の場面の分布中には「オハヨー」を併用していない地点もある。すなわち、そういった地点では、例えば、最も目上・やや目上=オハヨーゴザイマス/親しい同年代=ゲンキカのように表現内容を変えて声をかけることが適切なのだと考えられる。すなわち、あいさつ表現の待遇的使い分けに、表現内容への配慮が積極的に関与すると解釈できるのである。これは、南三陸地方の中に、多数とは言えないものの、大橋(1997)の結果からも示唆されるような、単純な敬語形式の足し引きでは自然な運用につながらない地点があることを意味している。このような事実からも、あいさつ表現使用実態の記述は、待遇的側面で単一の場面では十分ではないということが示唆される。

最後に、地域的偏りは少ないが、「オー」「オッス」「ヨー」など、呼びかけの表現(△)も、8地点と広く、一定数分布していることも指摘しておく。これは、陸羽東線沿線地域や、秋田県・青森県調査の同場面でも一定の数が認められ、親しい同年代などの気安い相手に対して通底して用いられる表現と言えるかもしれない。

注目すべき点を以下にまとめる。

- ・気仙沼周辺に非定型表現がやや多い(「ドコエ」類:2地点、「ナニシテイルカ」類:3地点、「ゲンキ?」類:6地点、「実質的表現」類4地点)。
- ・「オハヨー」類はほぼ全域に広がるが、気仙沼周辺に分布が少ない。
- ・呼びかけの表現がやや多い(8地点)。

4.5 目下の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

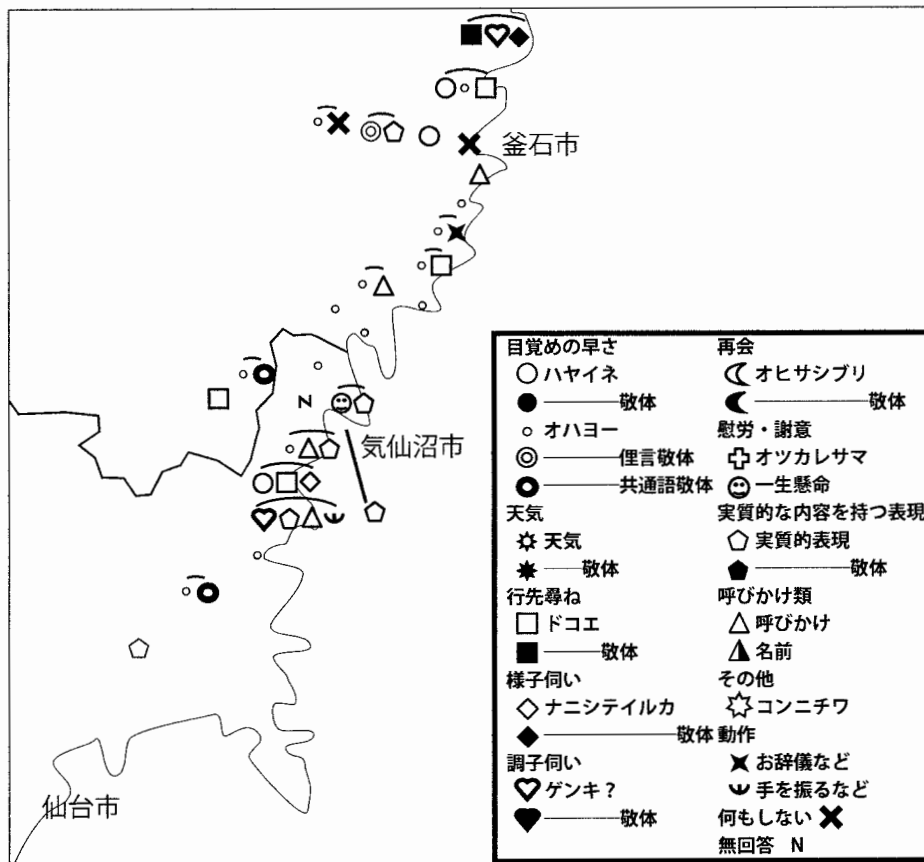


図 6. 目下の相手に対するあいさつ表現の分布

図 6 は朝、目下の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

こちらは、親しい同年代への表現以上に「オハヨー」常体の分布が顕著である（14 地点）。しかも、唐丹、綾里、小友、矢作、鹿折、志津川は「オハヨー」常体のみであり、簡素な声掛けで済ますることがわかる。また、簡素という点では、例えば、千厩の「ドゴサイグノ」というのも、表現内容こそ違うが 1 要素で簡素と言える。同様に、吉浜の「(ちょっと頭を下げて) オハヨー」というのも実質的な発話は 1 要素となる。このように、簡略な発話を交わすと判断できる地点を列挙すると、遠野、洞泉、平田、大島、千厩、折壁、柳津、前谷地も加わり、14 地点となる。目下への声かけは、比較的簡素に済みます様子が分かる。

また、気仙沼周辺に分布が目立つ実質的表現では「オメ イマ ナニ プガツ ヤッテンダ (お前今何部活やっているんだ)」や「オマエ〜ノ ムスコ ダッタ ナー。オヤジ ナニ シテル。」と極めて気安く声をかけている様子がうかがえる。

さらに「何もしない」が 2 地点見られるが「(かけないでいて自然に声をかけてもらうことになる。)」という補足から、相手が声をかけてくるのを待つ、目下から声をかけるのが普通という意識があることもわかる。この点については、筆者が以前に行った出会いの言語行動の使用実態調査（調査地は仙台、詳細は中西 2005 他掲載）の結果と比べると重要な意味を持つ。24 時間の出会い時の

言語行動を、逐一具に記録した出合いの言語行動の使用実態では、年代に関わらず、被調査者が積極的に自分から声をかけるという声かけ順の実態が得られた。つまり、目下の相手に対しても、こちらから声をかけるという意識を持っていたということである。この差は、個人差、あるいは意識を問うた当調査と実態を問うた言語行動調査の、行動意識と使用実態のずれという可能性も考えられるが、一方で、声かけの先後についての規範の地域差を反映したものという可能性も考えられる。そうだとすれば、適切なあいさつ表現の運用に関わる待遇的要素として、声かけの先後という点にも注目する必要があるかもしれない。こういった点の解明も、今後求められるあいさつ表現研究の課題と言える。

- ・「オハヨー」常体が多く、ほぼ全域に分布（14 地点）。
- ・発話要素が少ない簡素な声かけを行う地点が多い（実質 1 発話要素：14 地点）。

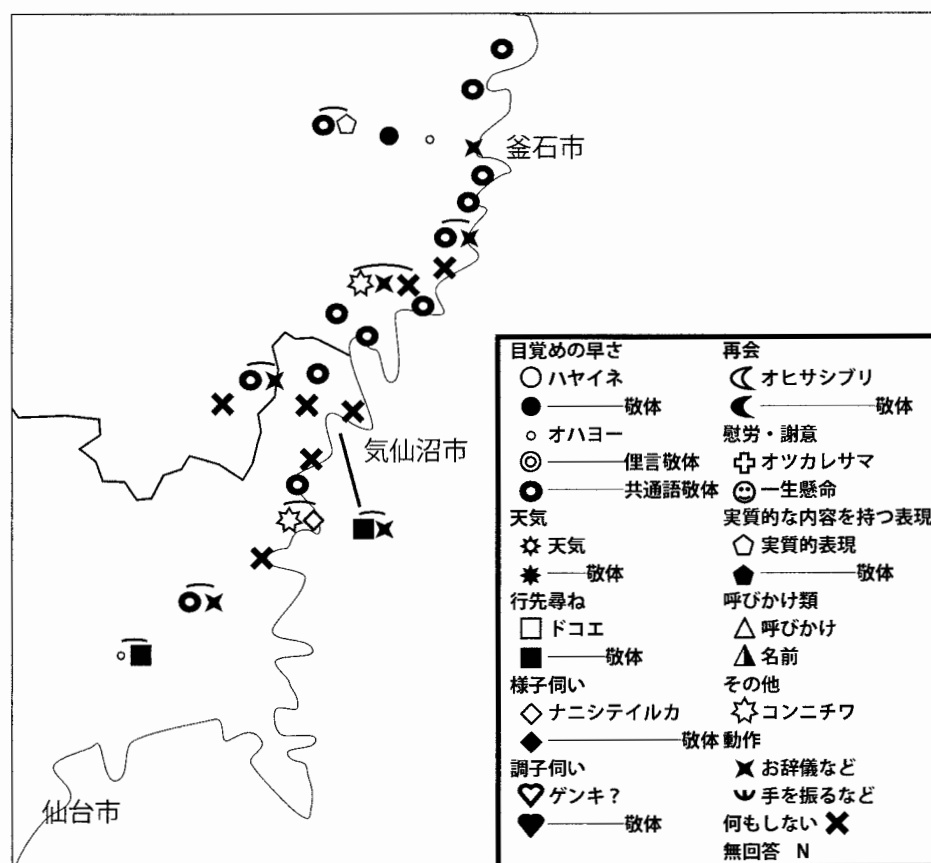


図7は朝、未知の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

較的声をかけないような向きも見える。また、歌津に「コンヌヅワ（こんにちは）」(☆)が表れている点が興味深い。昼のあいさつと考えられる「コンニチワ」が、こうして朝の場面で見られるのは、一見、被調査者が調査場面の解釈を誤って答えているかのように見えるが、調査時の様子を踏まえるとその可能性は少ない。その使用の背景には、「コンニチワ」の昼の表現としての性格よりも、「疎」の相手への距離感を示すという待遇的性格を重視したということが考えられる。同じく「疎」の相手と捉えられる図4の場面においても「コンニチワ」が見られることがそれを裏付けている。このように、あいさつ表現の使用実態を記述する際には、あるあいさつ表現は、典型的な場面に用いられるばかりでなく、その待遇的性格を示すことに重心を置くなどして、非典型的な場面でも現われ得るという事実を見過ごしてはならない。本来、“相手の来し方が早い”様子を指して用いられていた目覚めの早さの表現が、現在、漠然と朝の出会い時に用いられる「オハヨー」類につながっていったように、非典型的な場面での用法を介して中心的機能を変化させることは考えられる（中西2008a）。その際、重要なのはその背景にある使用の要因を捉えることである。そのためにも、先入観を持たずに正確な使用実態を捉える必要がある。

また、「何もしない」(✕)や「オハヨー」共通語敬体の単体回答に象徴されるように、未知の相手へは、既知の相手ほど積極的に声をかけず、声をかけるとしたら、定型的なあいさつ一言で済ませるという傾向が窺える。

- ・「オハヨー」共通語敬体が多く、ほぼ全域に分布（13 地点）。
- ・非定型表現はほとんど用いない。
- ・気仙沼周辺では「何もしない」が多く分布（7 地点）。

4.7 南三陸地方高年層のあいさつ表現の使用パターン

以上、本節では、南三陸地方の高年層の使用実態を分布の面から見てきた。なお、場面毎の使用実態を通観した結果、南三陸地方の中に、全場面に渡って特有の使用実態を示す地域は見られなかったことから、当該地域の使用実態のまとめにあたっては、南三陸地方全体を総合したものを提示する。当該地域の使い分けの実態は表1のようにまとめられる。

表1. 南三陸地方・高年層のあいさつ表現の使い分け

相手	主なバリエーション
最も目上	オハヨー俚言敬体、オハヨー共通語敬体
やや目上	オハヨー共通語敬体
顔見知り程度の同年代	オハヨー共通語敬体、オハヨー常体
親しい同年代	オハヨー常体、調子伺い常体、 実質的表現常体、呼びかけ類
目下のもの	オハヨー常体
未知の相手	オハヨー共通語敬体、何もしない

特に注目すべき点は、同年代の親しい相手に対して、定型的な表現である「オハヨー」類を用い

ない地点の多さである。そういった地域では、「ゲンキカー」と尋ねる調子伺いや、「コンバンドーダ、ノムカ」といったように実質的な内容を交わすことが多いということが分かった。

これまで、これらの地域では、GAJ349 図においては「オハヨー」類に覆われ、『方言資料叢刊』の代表地点における使い分けの実態でも、「オハヨー」の使い分けが示されていた。そこから、さも「オハヨー」常体と「オハヨー」敬体の組み合わせで、地域のあいさつが充足しているように感じさせられてきた。しかし、当調査の調査結果により、同じ県内でも、地域が変われば、使用実態も異なり、必ずしも「オハヨー」類だけで地域の出会い時の声かけが充足しているわけではないことが明らかになったと言える。

5 南三陸地方若年層のあいさつ表現の分布

本節では、第一に、気仙沼を中心とした近隣地域までの、若年層の朝の出会いのあいさつ表現の使用実態を明らかにする。また、若年層の使用実態を明らかにすることで、当該地域のあいさつ表現の変化の方向についての知見を得ることも、付帯して解明すべき問題である。

特に、後者の問題意識については、次に述べるような点の解明に重心が置かれる。

前節まで行った南三陸地方の高年層における朝の出会いのあいさつ表現の使用実態では、「オハヨーゴザリス」等の俚言形のあいさつ表現が最も目上の相手に顕著に用いられ、俚言形によって待遇的使い分けを行っている可能性も窺うことができた。それでは、当該地域の他の世代は、このような使用実態の特徴を保持しているのかといった疑問が浮かんでくる。近年急激に進行する共通語化の流れで、同地域でも若年層は方言形を話すことができないといった現状が各地に存在する。仮に当該地域のあいさつ表現においても共通語化が進んでいるとすれば、「オハヨーゴザリス」という俚言形に代わるような表現を用いているのか、あるいは最も目上とやや目上に同じ表現を用いるというように使い分けの使用実態そのものが変わっているのかという点が、興味深い問題と言える。

このような目的で、本節では、気仙沼を中心とした近隣地域までの、若年層の朝の出会いのあいさつ表現の使用実態を明らかにする。なお、若年層については、気仙沼市を中心にして、高年層よりも狭域を調査地域に定めたため、まず具体的な調査地点を以下に掲げる。

調査地点：大船渡、小友、矢作、唐桑、気仙沼、千厩、折壁、大谷海岸、本吉、歌津、志津川、柳津（計 12 地点、若年層の調査地点のうち、鹿折はあいさつ調査項目が欠落しているため、以降で地図上にはプロットしない。）

5.1 最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布の特徴

若年層の調査結果の分布の特徴を待遇的場面ごとに概観すると、いくつかの場面の分布が、極めて似たパターンを示すものとして括られることが分かった。そこで、まずは似たパターンとして一括りにできる、最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に対する表現の分布を次頁に示す。

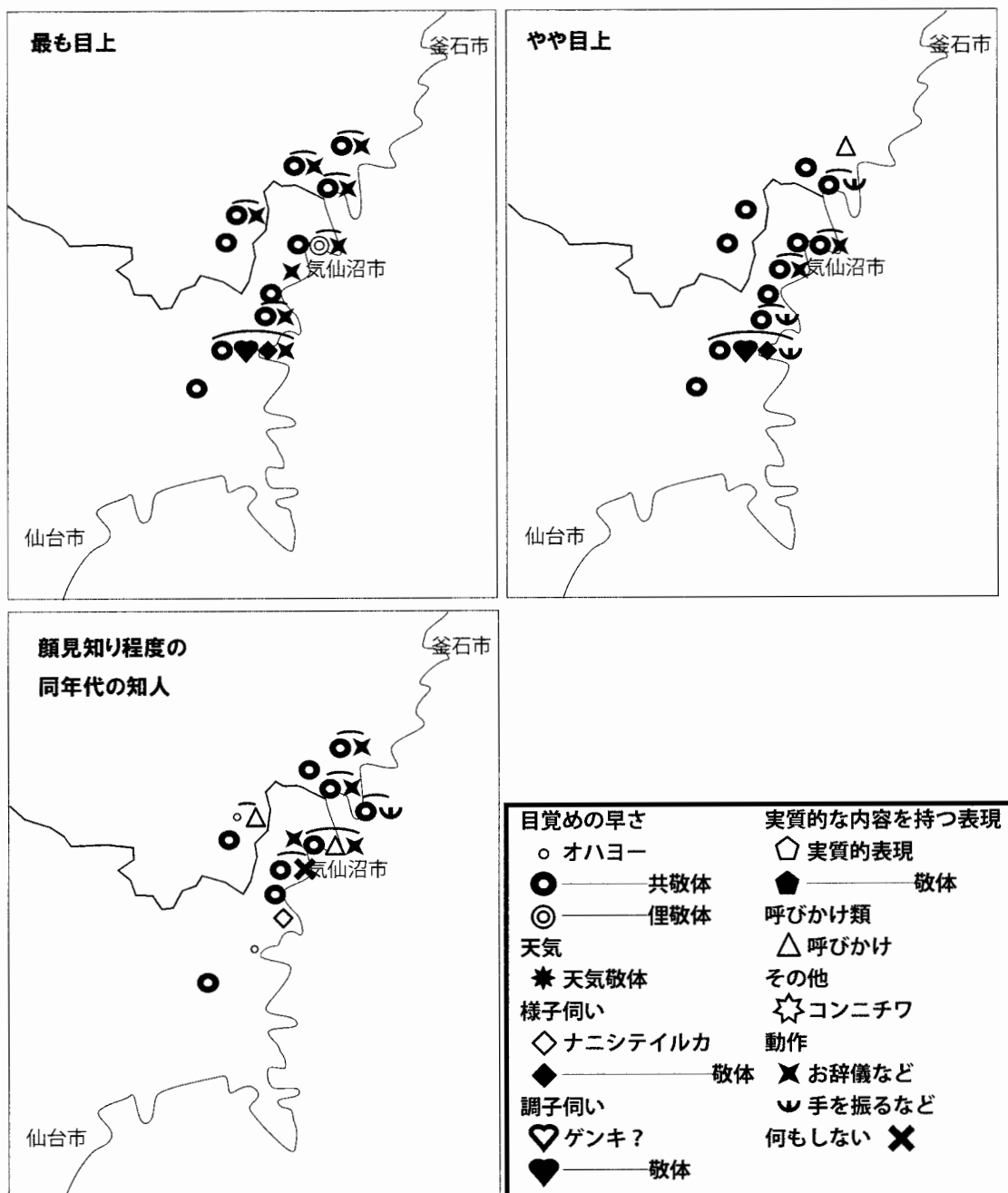


図 8. 最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に対するあいさつ表現の分布

図 8 はそれぞれ、南三陸地方の若年層話者が、朝、最も目上・やや目上・顔見知り程度の同年代の知人に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。左上図が最も目上、右上図がやや目上、左下図が顔見知り程度の同年代の知人に対するものである。

これらの相手に対する対応の仕方はほぼ一様で、「オハヨー」共通語敬体、あるいはそれに動作としての「お辞儀」(✕)を併用する、とまとめられる。表現バリエーションの種類も高年層に比べると極めて少なく、定型的なあいさつを交わすことが多いと判断できる。顔見知り程度の同年代の知人に対しては「オハヨー」常体を用いることもあるが、全体からすると極めて少数である。

5.2 親しい同年代・目下のものに対するあいさつ表現の分布の特徴

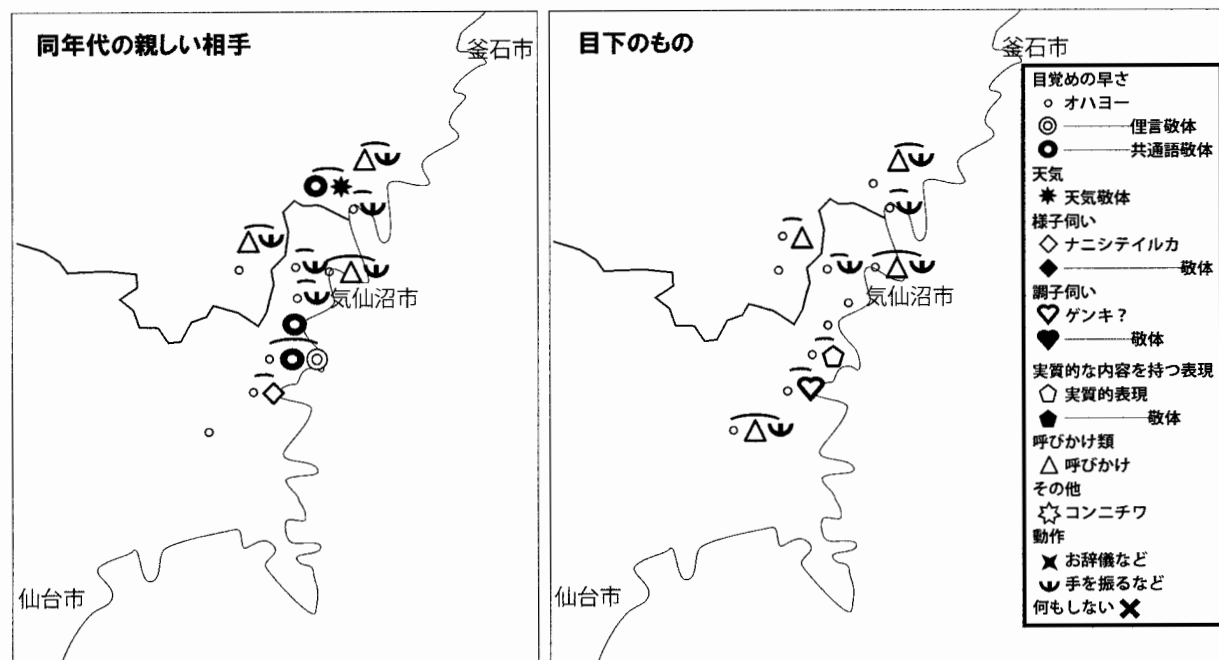


図 9. 親しい同年代・目下の相手に対するあいさつ表現の分布

図 9 はそれぞれ、南三陸地方の若年層話者が、朝、親しい同年代・目下の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。左図が親しい同年代、右図が目下の相手に対するものである。

ほぼ「オハヨー」常体が浸透している（同親：8 地点、目下：11 地点）。ただし、一部では「呼びかけ」の「オー」「オッス」「ウィッス」などが行われる。動作に関しては、これらの相手には「手を振るなど」(☺)が主流である。高年層では親しい同年代に対して様々な表現を用いていたが、若年層では表現数も少なく、「オハヨー」常体などの定型的なあいさつ言葉で済ませるようである。また、高年層では、親しい同年代や目下に、「ゲンキカー」と尋ねる調子伺いや、「コンバンドーダ、ノムカ」といったように実質的な内容を交わす表現が見られたが、若年層においてはそういった表現も影をひそめ、定型的なあいさつ表現の交換に終始するようである。

5.3 未知の相手に対するあいさつ表現の分布の特徴

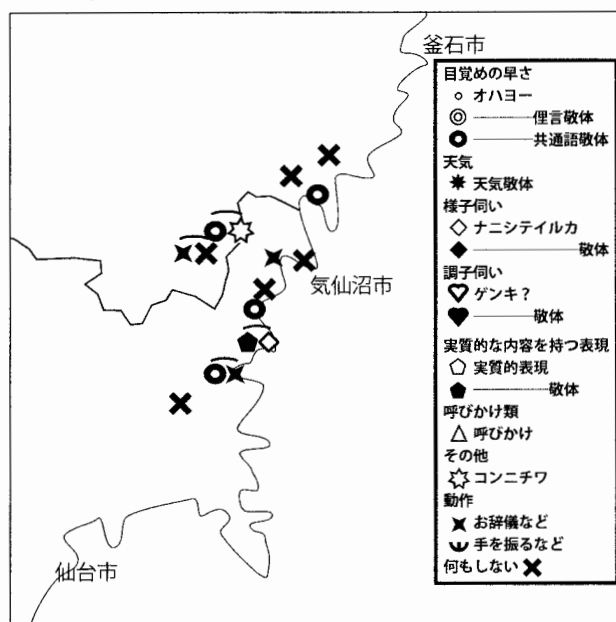


図 10. 未知の相手に対するあいさつ表現の分布

図 10 は、南三陸地方の若年層話者が、朝、未知の相手に出会った時のあいさつ表現の使用実態と分布を示した地図である。

「何もしない」、「オハヨー」共通語敬体、あるいは「会釈」程度で対応していることがわかる。非定型表現を回答した歌津についても“(疑いつつ)「ツリコスカ(釣りですか)」”、“(疑いつつ)「ナニシテルノ」というものであり、未知の相手に対して決して好意的に声をかけるというわけではないということがわかる。

5.4 南三陸地方若年層のあいさつ表現の使用パターン

以上明らかにしてきた分布の特徴から若年層の使用実態については、以下のようにまとめられる。

表 2. 南三陸地方・若年層のあいさつ表現の使い分け

	主なバリエーション
最も目上	オハヨー共通語敬体、お辞儀
やや目上	
顔見知り程度の同年代	
親しい同年代	オハヨー常体、呼びかけ類、手を振るなど
目下のもの	
未知の相手	オハヨー共通語敬体、お辞儀など、何もしない

若年層は、ほぼ「オハヨー」類の使い分けに移行していると分析できる。高年層とは異なり、同年代の親しい相手にすら、「オハヨー」常体が浸透している。また、使い分けに関しても、大きく「オハヨー」共通語の表現に、敬体を付けるかそれとも常体で接するかといった、極めて単純な 2 段階程度の認識になっていることが窺える。高年層に比べ、調子伺いや実質的内容を持つ表現などの分布が少ないが、これらはそのやりとりを通して、後続する会話への展開を持ち得る表現と捉えられ、そういった表現が少ないという点に、声かけが簡素だということが読み取れる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、待遇的観点からのあいさつ表現の記述の一事例として、南三陸地方のあいさつ表現の使用実態を明らかにすることを目的としてきた。

高年層、若年層それぞれに各待遇的場面の使用実態を洗い出し、その特徴を記述した。高年層に関しては、以下のように使用実態の特徴をまとめることができる。

- ・最も目上の相手に対しては「オハヨー」俚言敬体が顕著に用いられる。
- ・やや目上の相手に対しては「オハヨー」共通語敬体が用いられる。
- ・同年代の親しい相手には「オハヨー」類よりも調子伺いの表現、実質的内容から始まる表現、呼びかけ類が盛んに行われている。

特に注目すべき点は、同年代の親しい相手に対して、定型的な表現である「オハヨー」類を用いない地域の多さである。そういった地域では、「ゲンキカー」と尋ねる調子伺いや、「コンバンドーダ、ノムカ」といったように、実質的な内容を交わすことが多いということである。つまり、南三陸地方の高年層については、「オハヨー」類だけで地域の声かけが充足しているわけではないことが明らかになったと言える。

一方、同地方の若年層のあいさつの使用実態の検討からは、次のような使い分けの特徴を得た。

- ・最も目上、やや目上、顔見知り程度の知人に対しては、すべて「オハヨー」共通語敬体、ないしお辞儀という、共通のパターンが用いられる。
- ・同年代の親しい相手、目下のものには「オハヨー」常体、呼びかけ類、手を振るなど、共通のパターンが用いられる。

このように南三陸地方の若年層については「オハヨー」類の常体・敬体の使い分けでほぼ地域の声かけが充足している、との見込みが得られた。また、副次的に明らかになった、使用実態の年代差から窺える変化の動態について述べると、南三陸地方では、若年層の方が「オハヨー」という表現内容への一極化が進んでいると言え、その意味で、定型化が進行していると捉えてよいと思われる。あいさつ表現の待遇的使い分けに関しても、高年層が保持していた、最も目上に対して顕著に用いられるような「オハヨーゴザリス」などの俚言形に代わる表現は見られない。

この年代差の傾向は、筆者のこれまでの研究に照らし合わせると、興味深い結果と言える。筆者のこれまでの研究で、少なくとも近年のあいさつ表現の変化には、同一表現を多場面に渡って汎用的に用いるような志向性の変化と、待遇的使い分けの意識に応じて、場面に応じた適切な表現を用いるような志向性の変化が観察されたからである（中西 2011a）。例えば、共通語では、近年の若者のあいさつ表現において、待遇的使い分けの側面を重視して変化する事例が窺える（中西 2008b）。そういったあいさつ表現変化の動向を受け、当該地域のあいさつ表現の使用実態を省みると、南三陸地方の気仙沼市周辺の地域は、高年層から若年層にかけて、前者の志向性の変化を遂げていると推測される。このような変化の志向性から位置づけられる地域の特徴もあいさつ表現研究にとって重要な視点と言える。

最後に今後の展望と課題について述べる。

本稿での考察により、一見「オハヨー」類で地域のあいさつが充足しているように窺われる地域でも、待遇的場面の差ごとに使用実態を見れば、必ずしも「オハヨー」類などの定型的な表現だけ

で地域の声かけが充足しているわけではないということが提言された。この傾向は、当然他地域にも当てはまる可能性がある。つまり、使用実態の記述が十分でない非定型表現使用地域の記述に加えて、南三陸地方以外の他の定形的表現使用地域でも、待遇的場面の差ごとに、その地域の使用実態を記述する必要があることを示唆している。

また、本稿では、世代差については、高年層・若年層という2世代による大きな括りでの使用実態の差を把握するにとどまった。しかし、自然な運用に利する待遇的場面の差ごとの記述資料の完成を目指すという意味では、より詳細な使用実態の世代差を把握することが求められる。よって、本稿で得られたような世代ごとの使用実態の差があることを踏まえて、どれくらいの世代から、「オハヨー」類のような定型的表現による使い分けに移行していると言えるのか、その点について記述・検討を行うことも今後求められる。

文 献

- 大橋純一(1997)「宮城県宮城郡利府町森郷方言の待遇表現」方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊第7巻 方言の待遇表現』,広島大学教育学部
- 国立国語研究所(2006)『方言文法全国地図第6集』,国立印刷局
- 齋藤孝滋・森節子・工藤香寿美(2001)「『方言資料叢刊』を用いた全国挨拶行動の言語行動学的・方言学的研究」『玉藻』37,フェリス女学院大学国文学会
- 真田信治(1981)「あいさつ言葉の地域差」文化庁編『ことばシリーズ14 あいさつと言葉』,大蔵省印刷局
- 瀧川美穂(1998)「待遇表現」加藤正信・遠藤仁編『宮城県中新田町方言の研究』,東北大学国語学研究室
- 徳川宗賢(1978)『日本人の方言』,筑摩書房
- 中西太郎(2005)「出会いの言語行動と親疎意識」『言語科学論集』9,東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 中西太郎(2007)「あいさつ表現における待遇関係把握—社会的属性差の観点から」『言語科学論集』11,東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 中西太郎(2008a)「あいさつ言葉の定型化をめぐる—「おはよう」を事例とした定型化の検証」『国語学研究』47,「国語学研究」刊行会
- 中西太郎(2008b)「あいさつ」における言語運用上の待遇関係把握『社会言語科学』11・1,社会言語科学会
- 中西太郎(2009)「東北地方のあいさつ表現の分布形成過程—朝の出会い時の表現を中心に—」『東北文化研究室紀要』51,東北大学大学院文学研究科東北文化研究室
- 中西太郎(2011a)『待遇的観点から見た日本語あいさつ表現の研究』,東北大学大学院文学研究科博士学位論文

- 中西太郎(2011b)「朝のあいさつ表現の変遷—南九州地方の非定型表現使用地域に注目して—」『国語学研究』50,「国語学研究」刊行会
- 中西太郎(2011c)「あいさつ表現」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』,東北大学国語学研究室
- 中西太郎(2011d)「「あいさつ表現の使用実態の地域差—朝の出会い時を中心に—」『日本方言研究会研究発表会発表原稿集 第93回』,日本方言研究会
- 中西太郎(2011e)「待遇的観点から見たあいさつ表現の使用実態の地域差—青森県・秋田県の朝の出会いの場面を対象に—」『文化』75・1・2,東北大学文学会
- 中西太郎・田附敏尚・内間早俊(2009)「秋田県の言語調査報告」『東北文化研究室紀要』50,東北大学大学院文学研究科東北文化研究室
- 藤原与一(1992)『続昭和(→平成)日本語方言の総合的研究第三卷あいさつことばの世界』,武蔵野書院
- 本堂寛(1997)「岩手県盛岡市方言の待遇表現」方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊第7巻 方言の待遇表現』,広島大学教育学部
- 三井はるみ(2007)「おはようございます、こんばんは」『月刊言語』35・12,大修館書店
- 柳田国男(1946)『毎日の言葉』,創元社

付 記 言語地図作成にあたっては、国立国語研究所による言語地図作成用プログラム（プラグイン）を利用した。

寝かせつけ場面を中心とした育児の言語行動

椎 名 渉 子

1 はじめに

本章は、特定の言語行動場面において用いられる表現を記述するものである。そのなかでも、今回は育児場面における言語行動を取り上げたい。筆者が以前より研究対象としてきた子守歌の詞章に現れる子どもに就寝を促す表現と、育児という実際の言語行動における表現との間には何か地理的関連性があるのかといった疑問を持ち、このような場面を取り上げるに至った。子守歌の詞章に存在し、調査対象である2つの表現の定義は以下の通りである。

- (A) おどし表現 : 「ハヤクネナイト モーコ クツツォ(早く寝ないと化け物が来るぞ)」など
子守の就寝の要求・命令に従わなかった場合のおどしや罰を示す表現。つまり、寝なかったら悪い結果になることをあらわす。具体的には、子どもの恐れる化物や動物が、子どもに害を及ぼす動作主となる内容が多い。
- (B) 甘やかし表現 : 「オカシアゲルカラ ハヤク ネロ (お菓子あげるから早く寝ろ)」など
子守の就寝の要求・命令に従った場合の褒美を示す表現。つまり、寝たら良い結果になることをあらわす。具体的には、菓子や玩具など子どもの喜ぶ・身近なものを与えたり、良い場所へ連れて行くという宣言をする内容が多い。

さて、(A)おどし表現と(B)甘やかし表現の出現数や表現内容の地域差については、先に、宮城県・山形県の内陸部を対象にした『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』において、2006年度気仙沼市方言調査・2007年度南三陸方言調査の結果と陸羽東線調査の結果とを比較した。前者を「沿岸」地域として、後者を「内陸」地域としてみると、「表現が固定化してバリエーションの少ない内陸」と、「表現が多様で複雑な構造を持つ沿岸」といった各地域の傾向の違いが認められた。

さて、本章では、この「沿岸」地域を取り上げ詳細に分析する。具体的には、子どもを寝かせつける場面（以下、就寝場面とする）と外出時に子どもが泣いたり騒いだりする行動を統制する場面（以下、外出場面とする）の2つの場面において得られたおどし表現・甘やかし表現を世代別に分類し、場面差と世代差を考慮しながら分析する。つまり、おどし表現・甘やかし表現を対象として、子どもの行動を統制する育児者の言語行動についての考察ということになる。このような、子どもの行動を統制する表現についての研究は、東ほか(1981)が挙げられる。東ほか(1981)では、一定場面における母親の子どもに対する言語行動を、「しつけ方略」としていくつかのパターンに分類している。そのなかでも、本章で取り扱うおどし表現が東(1981)でいうところの「説得・暗示」、甘や

かし表現が「代償」にほぼ相当し、これらを含む「しつけ方略」の日米比較を試みている。このように、おどし表現・甘やかし表現は、発達心理学等の分野においても育児の言語行動の一つとして認知されているといえる。本章では、こうした言語行動の語彙や語法といった表現内容の詳細を、一地域を対象として言語学的視点から取り上げる。

2 調査概要

本章では、以下の調査によって得られた結果をもとに、子どもを寝かせる際の言語行動を記述・分析する。各調査の調査概要は以下の通りである。

●2006 年度気仙沼市方言調査（面接調査）

気仙沼市における多人数面接調査。回答語形

●2007 年度南三陸地方方言調査（面接調査）

本稿では、調査地域内の地理的分布は特に問題にしない。

両調査をあわせて、調査対象表現数は以下の通りである。

- ・おどし表現：寝かせつけ場面（就寝場面）88，外出の場面（外出場面）149【計 237】
- ・甘やかし表現：就寝場面 52，外出場面 84【計 136】

3 調査の質問文

調査における質問文を以下に記載する。話者には、昔の体験を回想しながら回答してもらった。その際、インフォーマントの使用語・理解語の別は4章以降の回答例示の際【リ】印(理解語)と記述するが、本稿では、使用語・理解語の別については深く取り上げず、参考情報に留めることとした。今回は、表現の量的・質的な分析に重きを置き、できるだけ多くのデータを用いて地域的傾向を掴むことが先決だと考えたからである。実際に、両調査において若年層話者の回答の中には、両親や家族から聞いた理解語の回答も少数見られるが、このような場合も、全て当該地域の表現であると捉え、同質のデータとして扱った。調査時の質問文を以下に記す。

3. 1 場面設定文と質問文について

上の調査文のうち、質問1と質問3の前の枠内の文章は、場面設定を説明する文である。質問を行う前に読み上げ、話者に状況を理解し想定してもらいながら調査を進めた。

質問1・2の場面設定文の読み上げにおいては、具体的な状況説明は加えず、「子どもに言うことを聞かせようとする場面」という表現に留めたうえで、おどし表現・甘やかし表現について質問をした。場面設定について何か説明を求められた場合、「例えば、バスで移動中の車内を想像してください」や「歩道（公道）を歩いているときを想像してください」といったように公共交通機関や公

道の利用時など、公的場面を想起してもらえるような補足説明を行った。また、質問3・4は寝かせつけ場面であることを明示して質問をした。

3. 2 調査時における具体例の取り入れ方

このような調査の質問文は、質問内容の性質上、インフォーマントからすばやく回答を得ることが容易ではない。過去の使用状況も含めた回答を求めるため、インフォーマントの記憶の検索を伴う。よって、適宜、具体例を挙げながら進めていく必要があった。表1の調査文では、各質問のあとに具体例を記載した。これは面接調査時に、これらの具体例をインフォーマントに分かりやすく説明しながら調査を進めるためである。調査時間の関係上、できるだけ速やかに話者に場面設定を理解してもらう意図がある。

※たとえば、だだをこねてなかなか言う事を聞かない4・5歳くらいの子どもに、言う事を聞かせようとする場面を想像してください。

1. 子どもに言う事を聞かせようとするときに、何か子どもを怖がらせておどかすような表現を使ったこと／聞いたことがありますか？

(例:「言う事聞かないと、モー(お化け)来っつお」「静かにしないと人さらいがくるよ」など)

2. 子どもに言う事を聞かせようとするときに、「褒美をやるから言う事を聞いて」というように、子どもにとって良いものを約束するような表現を使ったこと／聞いたことはありますか？

(例:「いい子にしたら、お祭りに連れてくよ」「〇〇あげるから静かにしなさい」など)

※今度はあなたが子どもを寝かせようとしているとします。なかなか寝ない4・5歳くらいの子どもを寝かせようとする場面を想像してください。

3. 寝ない子どもを寝かせようとするときに、何かおどすような文句を言って子供を怖がらせるような表現を使ったこと／聞いたことはありますか？

(例:「いつまでも寝ねえと、モー(お化け)来っつお」など)

4. では逆に、寝ない子どもを寝かせようとするときに、子どもに「褒美をやるから早く寝ろ」というように、子どもにとって良いものを約束するような表現を使ったこと／聞いたことがありますか？

(例:「〇〇をあげるから早く寝ろ」「寝れば〇〇に連れて行くよ」など)

<表1 2006・2007年度 気仙沼・南三陸調査の調査文>

4 おどし表現

4. 1 外出・就寝両場面におけるおどし表現

まず、外出・就寝両場面において、どのようなおどし表現が現れるのだろうか。子どもをおどす動作主別に分類して、結果をグラフ2に示した。また、表2にはグラフ2に示した割合の具体的な数値を示した。外出・就寝の両場面を合わせて237の回答を得た。

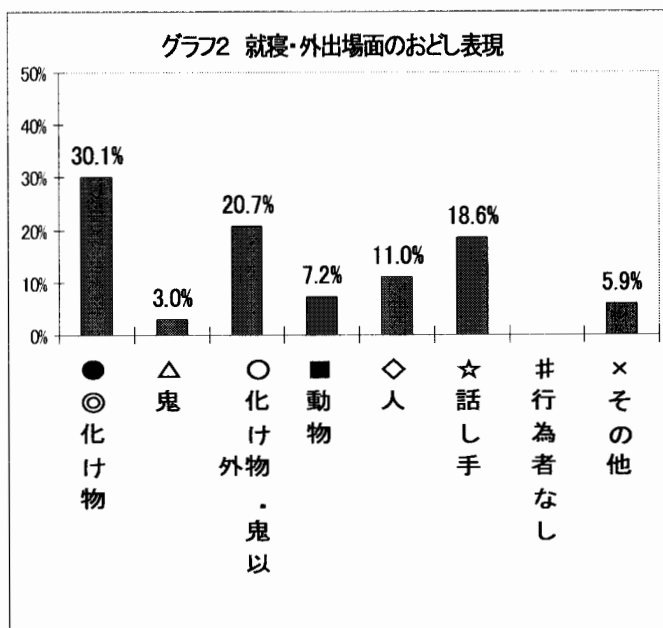


表2 就寝・外出場面のおどし表現 ()=N

●◎化け物	30.1%(72)
△鬼	3%(7)
○化け物・鬼以外	20.7%(49)
■動物	7.2%(17)
◇人	11%(26)
☆話し手	18.6%(44)
#行為者なし	3.4%(8)
×その他(要求・命令表現/けなしことば)	5.9%(14)
計	100%(237)

まずは、おどし表現の構造について説明する。たとえば、「ハヤクネナイト モー クツォ (早く寝ないとお化けが来るぞ)」を例にすると、その構造は、

仮定条件表現 + [述部 : A名詞 (動作主) + B動詞 (罰の与え方)]

となる。このようなおどし表現は、子守歌詞章においても多く用いられている。A名詞 (動作主) には、子どもに害を及ぼす動作主が当てられ、B動詞によってその動作主が子どもに及ぼす行動内容、つまり寝ない罰を与える方法が表現される。

ただし、「ネネート ソト ダスゾ (寝ないと外に出すぞ)」のように、子どもに罰を与える動作主が話し手自身の場合は、A名詞は省略される。また、仮定条件表現部分も省略されることが多い。

本調査の回答では、回答者数は少ないものの仮定条件表現を含む回答も得られたが、回答文例にはこの部分は記載していない。グラフ2には、このA名詞 (動作主) を種類別にして割合を出した。その結果、●◎化け物、△鬼、○化け物・鬼以外の恐ろしいもの、■動物、◇人、☆話し手、#行為者なし、×その他というように分類した。(●◎化け物に関しては、4. 1. 1において、さらに●モー系と◎オバケ系に二分した。)

この分類に関しては、椎名（2011）においても比較対象地域として当該地域の調査結果を示したが、本稿では寝かせつけに限らず外出場面における回答も分析対象に含んでいる。そのため、取り上げる回答例も椎名（2011）となるべく重複しないよう注意した。4. 1. 1以降の各節内にある〔バリエーション〕には**A名詞（動作主）**部分のみを取り出した。同回答が2つ以上の場合は（ ）内に回答数を示した。また、〔回答文例〕の（ ）内には、必要に応じて共通語訳を付し、世代（高：高年層、中：中年層、若：若・少年層）の別と性別を記した。また、若年層の回答においてはその表現を聞いたことがあるという場合は、理解語として【リ】と記した。

以下、類別に例を挙げながら見ていく。

4. 1. 1 ●◎化け物

両場面で最も割合が高かったのは●◎化け物 30.1%という結果になった。●◎化け物は、●モー系と◎オバケ系とに区別した。高年層の中では、●モーが多く見られた。

回答では、●モーのバリエーションが多く、「アンモ」や「アモー」といったものは高年層に目立った。一方、◎オバケは、「オバケ」か「バケモノ」の2種のみでバリエーションは少ないが全世代に用いられている。

〔バリエーション〕●モー系：モー（12）、アンモ（3）、モーコ（4）、モッコ（2）、モンコ（2）、
アンモッコ、アンモーコ、アモジャー、アモー、ガガンコ

◎オバケ系：オバケ（40）、バケモノ（4）、

〔回答文例〕 1. アンモッコ クル（アンモッコが来る／高・女）
2. モー クツォ（モーが来るぞ／高・男ほか多数）

4. 1. 2 △鬼

「鬼」は全体のうち最も少なく、語形の変種もない。総回答数は7であるが、全て若年層についての回答であった。中年層以上は用いない結果となった。

〔回答文例〕 1. オニ クル（若・女） 2. オニガ クル（若・男）

4. 1. 3 ○化け物・鬼以外の語形

ここには、化け物と鬼の語形以外の恐ろしいもの、異界のものなどを含めた。化け物と鬼以外の様々な恐ろしさを意味するものを含めたため、回答数もバリエーションも多い。回答を大別すると、仏・雷・異界のものといった3種に分けられる。

また、動作主だけではなく、表現の述部にもバリエーションが見られた。たとえば、「ゴロゴロサマ ナルゾ（雷が鳴るぞ）」といった述部もあれば、〔回答文例〕1.の「へそを持っていられる」にあるように、複合動詞の受身形を用い、「ナル（鳴る）」よりも具体性・臨場性のある表現も見られた。子守歌詞章のおどし表現においては、子に恐怖を与える存在としては「モー」・「オバケ」など

の●◎化け物系が優勢だったが、本調査では神仏や雷などのバリエーションも多数見られた。また、「カゼノサブロー」は、インフォーマント（高・女）の聞いた昔話に登場する妖怪の一種であり、東北地方の昔話等に登場する。たとえば、福島の『相馬方言考』（1930）には、妖怪に加えて風の神という記述もある。

[バリエーション]

神仏：ゴンゲンサマ（2）、ノノサマ、カマガミサマ、シシマイ、

雷：ゴロゴロ（2）、ゴロゴロサン、ライサマ（2）、オレサマ（4）、オリヤサマ

異界物：ザスキワラス（座敷童子）、ヒトサライ（3）、ユーレー（幽霊）、ヤマンバ、
ナマハゲ（2）、コワイコワイ、オカネノ（おっかないの）

その他：カゼノサブロー、フルヤノムリ

[回答文例] 1. ゴロゴロサンニ ヘソ モッテガレル（雷にへそを持っていかれる／若・女【リ】）
2. ノノサマ ミテルゾ（高・女）

4. 1. 4 ■動物

■動物では、クマ以外はネズミやキツネといった小動物が回答に見られた。なかでも、「ネズミ」と「キツネ」は、多くの昔話や東北地方の子守歌詞章のおどし表現にも見られ、子どもにとって身近な存在の動物であるといえる。子守歌詞章では「寝ないと鼠に引かれるぞ」や「狐にさらわれる」のように、「引かれる」や「さらわれる」などの述部が見られたが、本調査の回答では「居る（回答文例2）」や「来た（回答文例3）」という動詞が用いられていた。また、クマについては「熊に食わせる」という使役が使われていた（回答文例1）。

[バリエーション] ネズミ、キツネ、サル、クマ（3）、トリ、フクロウ（梟）（2）

[回答文例] 1. クマサ カセツゾ（熊に食わせるぞ／高・男）
2. ソコニ キツネガ イル（高・女）
3. ネズミ キタ（高・女）

4. 1. 5 ◇人

ここでは、警察・役人といった権威のある存在が登場した。「ダンポ」は、東北地方では階級の高い家の主人や警察・役人を意味する方言と認識されている。インフォーマントの内省によると、とくに気仙沼地方では「警察」の意味で用いられていた。これらは、中年層（50代）以下には使用が見られないため、高年層に特有の表現といえる。また、表現の述部は回答文例に示したように「クル（来る）」だけではなく「ツレテイカレルゾ（連れて行かれるぞ）」も見られた。

〔バリエーション〕 ダンボ（８）、ダンボサン、オマワリサン（２）、ジュンサ（巡査）、オッカナイ
オッチャン

〔回答文例〕 １．ダンボサマ クルゾ（警察が来るぞ／高・男）
２．ダンボサンニ ツレテイカレルゾ（高・男）

4. 1. 5 ☆話し手

話し手が動作主となって子どもに罰を行う意志を見せる表現は、多く見られた。整理すると、「子どもの場所の移動」、「話し手の聞き手に害を及ぼす行為」、「話し手の聞き手に対する行為の拒否（否定形）」の内容が見られた。〔バリエーション〕には、聞き手の移動場所と、行為（共通語訳）を抜き出した。回答文例をみてもわかるように、男性の回答が目立った。

〔バリエーション〕 聞き手の移動：クラ（蔵）、ソーコ（倉庫）、ヤマ（山）、カワ（川）、ソト（外）、
モノオキ（物置）、ナンド（納戸）、オシイレ（押入れ）

話し手の行為：殴る、告げ口する、げんこつする、叩く

話し手の行為（否定形）：買わない、連れて行かない、（家に）入れない
（おやつを）あげない

〔回答文例〕

聞き手の移動：１．クラニ イレルヨ（蔵に入れるよ／若・男【リ】）
２．オシイレニ シマウゾ（押入れにしまおうぞ／高・男）
３．ヤマサ ナゲッカラ（山に捨てるから／高・男）

話し手の行為：１．ブンナグッゾー（ぶん殴るぞ／高・男）
２．ユーコトサ キカナイト タタクゾー（言うことを聞かないと叩くぞ／
高・男）
３．オシリペンペン スルヨー（おしりぺんぺんするよ／高・女）

行為の拒否（否定形）：１．イエニ イレナイヨ（家に入れないよ／若・女）
２．ナニモ カッテケンネゾ（何も買ってやらないぞ／高・男）

4. 1. 6 #行為者なし

〔回答文例〕に挙げた例以外にも少数見られた。こうした、動作主を明示しない言い回しは、得体の知れないものを聞き手に想像させ怖がらせるといった意図を含むのか、話し手と聞き手が同一の動作主を想像するような情報の共有が前提にあるのかといったことは不明である。

〔回答文例〕 １．ショージガラ ミデッゾ（障子から見てるぞ／高・男）
２．（しっかり目をつぶらないと）メー ミエナクナンダゾー（高・男）

3. ヨフカシ スルト ヘソ トリニクツヅ (夜更かしするとヘソ取りに来るぞ／若・男【リ】)

4. 1. 7 ×その他

ここでは、先に述べたおどし・甘やかし表現の文構造に相当しない、その他の文・表現を分類した。グラフ2でも14%を占め、雑多な内容が含まれている。おどし表現を用いていない、思い浮かばない場合や、第2回答を採用した。そのうち、回答文例をいくつか記載する。主に命令・禁止表現、悪態語に近いもの、当為表現や性向語など様々な形態の表現が見られる。

〔回答文例〕

1. ネネド オーキク ナンネーゾ (寝ないと大きくなならないぞ／若・男【リ】)
2. ネネーゴタ ネネーゴタ コノガキメ (寝ないこと 寝ないこた このがきめ／高・男)
3. コノワラス イツマデモ ヨヒカリダ (この子はいつまでもよひかりだ／高・女)
4. ダラスケ (ばかもの／高・男)
5. オダツナヨ (調子にのるなよ／若・女)
6. コリヤ コノ (こら、この／中・男)
7. シズカニシロ (中・女)
8. キギヘンカ (聞きなさい／中・男)
9. ネンコダカラネ ロ (寝るんだから寝ろ／高・男)
10. サッサト ネライン (さっさと寝なさい／中・男)

4. 2 外出・就寝それぞれの場面におけるおどし表現

では、次に、4. 1で見てきたおどし表現の動作主の割合について、場面別・世代別に分類しグラフ3に示した。表3には、グラフ3の詳細な表現数と割合を記した。場面とは、先に述べた「寝かせつけ場面 (就寝場面)」と「外出の場面 (外出場面)」をさす。グラフ3をみると、どの世代も●◎化け物は、外出場面より就寝場面のほうが上回っている。ただ、高年層・中年層までは就寝場面と外出場面とで●◎化け物の出現率に大きな差がないが、若・少年層をみると、外出場面のほうが就寝場面よりも●◎化け物の出現率に差が目立つ。さらに若・少年層の外出場面では、少数ずつではあるものの、どの世代よりも様々な類が現れているため、表現が多様であると捉えられよう。このように、子をおどす際の表現では高年層より若年層のばらつきが目立つということは、若年層のほうが事態の捉え方に個人差があるからではないか。さらに、若年層では、外出場面と就寝場面という場面間における動作主の違いも大きい。このことから、同じおどし表現を用いる場合でも、若い世代ほど場面や状況によって表現を言い分けているのではないかと推測できる。

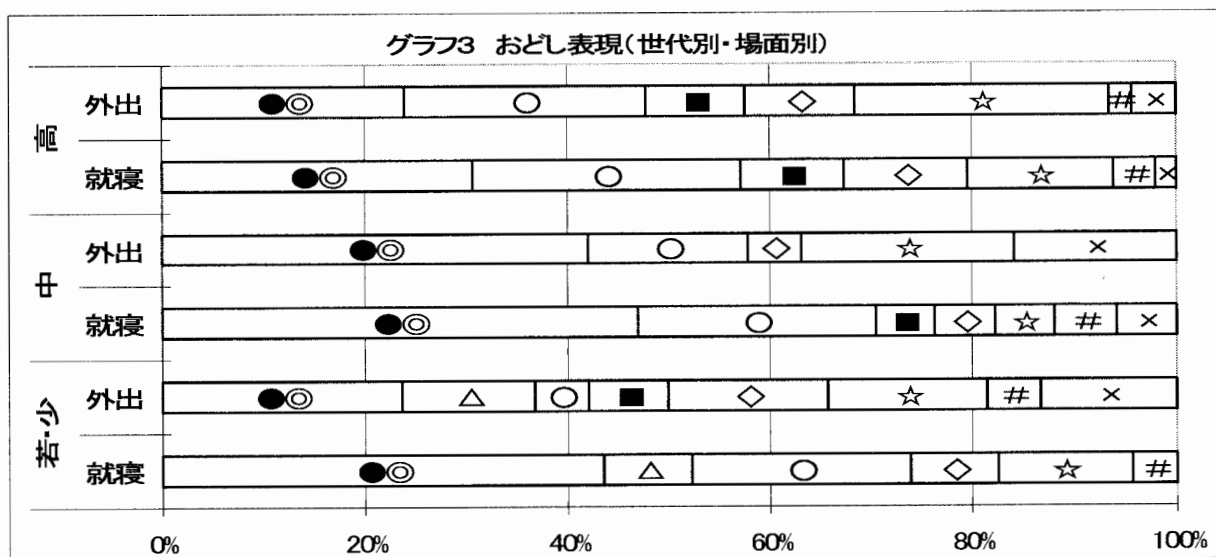


表3 おどし表現(世代別・場面別)

	高		中		若・少	
	就寝	外出	就寝	外出	就寝	外出
●◎化け物	30%(15)	23.9%(22)	53.3%(8)	42.1%(8)	43.5%(10)	23.7%(9)
△鬼	0%(0)	0%(0)	0%(0)	0%(0)	8.7%(2)	13.2%(5)
○化け物・鬼以外	26%(13)	23.9%(22)	26.7%(4)	15.8%(3)	21.7%(5)	5.3%(2)
■動物	10%(5)	9.8%(9)	0%(0)	0%(0)	0%(0)	7.9%(3)
◇人	12%(6)	10.9%(10)	6.7%(1)	5.3%(1)	8.7%(2)	15.8%(6)
☆話し手が動作主	14%(7)	25%(23)	6.7%(1)	21.1%(4)	13.1%(3)	15.9%(6)
井行為者なし	4%(2)	2.2%(2)	6.7%(1)	0%(0)	4.3%(1)	5.3%(2)
×その他(要求・命令表現/けなしことば)	2%(1)	4.3%(4)	6.7%(1)	15.8%(3)	0%(0)	13.2%(5)
計	100%(50)	100%(92)	100%(15)	100%(19)	100%(23)	100%(38)

() = N

5 甘やかし表現

5. 1 外出・就寝両場面におけるおどし表現

では、甘やかし表現についてはどうだろうか。おどし表現は子どもに罰を与える動作主の語彙に焦点を当てたが、甘やかし表現では、子どもに与える褒美の品物や行く場所といった目的格にあたる名詞を取り上げる。たとえば、「イーコニシテルト ナニカ カッテヤッツォ (いい子にしていると何か買ってあげるぞ)」という甘やかし表現は、

仮定条件表現 + [述部 : A名詞・目的語(褒美の品) + B動詞(褒美の与え方)]

という構造になる。調査回答では、回答者数は少ないものの、こうした仮定条件表現を含む回答も得られたが、回答文例にこの部分は記載していない。分析対象となるのは、上の例に挙げた「ナニカ」に相当する部分である。グラフ4には、このA目的語(褒美の品)を種類別にして割合を出した。また、表4にはグラフ4の具体的な数値を示した。両場面を合わせて136の回答を得た。

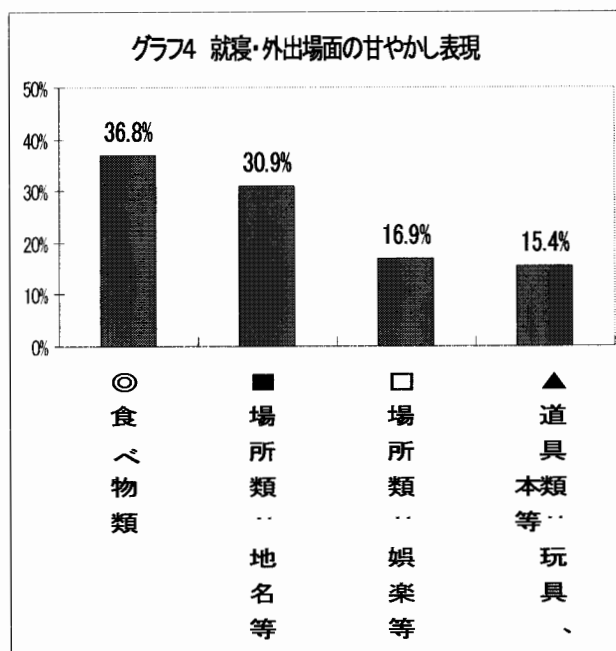


表4 外出・就寝場面の甘やかし表現 ()=N

	計
◎食べ物類	36.8%(50)
■場所類：町(地名等)	15.4%(21)
□場所類：娯楽(公園・動物園等)	16.9%(23)
▲道具類(本・おもちゃ・お金等)	30.9%(42)
計	100%(136)

褒美の品として割合が高いのは食べ物類と道具類であった。◎食べ物類は36.8%と非常に多い。そして、娯楽の場所を褒美の品に掲げることも若い世代では多く見られた。

甘やかし表現には、◎食べ物、■場所：地名、□場所（娯楽）、▲道具の4つに大別した。

5. 1. 1 ◎食べ物

比較的多くの回答を得たが、「ご飯」のバリエーションとして、「ウマッコ」や「マンマ」「マ」といった幼児語が見られた。さらに、菓子系のバリエーションは多いが、そのまま「オカシ」と用いているものが大半であった。[回答例文] 1にあるように、述部は「ケッカラ（くれるから）」の方言語形が最も多く、若年層間でも見られた。

[バリエーション] ウンマコ、ウマッコ、ゴハン、マ（ご飯）、マンマ（3）、オイシーモノ、オカシ（26）、アメッコ（アメ）（5）、オヤツ（4）、アイスクリーム（2）、ケーキ、チョコレート、センベー、ジュース

[回答例文] 1. ウマッコ ケッカラ（ウマッコやるから／高・男）
2. アイスクリーム カッテヤッカラ（高・男）

5. 1. 2 ▲道具

子どもが喜ぶものとして、玩具・小遣いなどが多く、どれも高年層話者に見られた。高年層のインフォーマントが子どもへの言語行動を想定する際、最も現在から近い記憶として係との交流を想起する場合が多い。このことから、祖父母が係に与えるものの代表として、品物や小遣いなどを買い与える機会も多いからなのかもしれない。しかし、「デカレンジャー」のような固有名詞は多く

は出てこなかった。とくに固有名詞を用いず、「オモチャ」・「イーモン」と簡潔に示す言い方が子どもへの褒美の表現として定着し、定型化しているのかもしれない。一方、金銭に関する語は多様であった。

〔バリエーション〕 ダチンコ（駄賃）（４）、オカネ（２）、ゼンコ（銭）、イーモノ／イーモン（良い物）オモチャ、デカレンジャー、ホン（本）（２）、ニンギョー（人形）、

〔回答例文〕 １．オモチャ カッテヤル（高・男）

２．ゼンコ ケッカラ （お小遣いあげるから／中・男【リ】）

５．１．３ □場所（遊び・娯楽施設など）

ここには、広い意味で娯楽と捉えられるものを全て含めた。なかには、「〇〇へ行く」などの娯楽の場所だけではなく、〔回答例文〕１にあるような話し手の行為（「～シテヤル」）も娯楽に関する行為としてここに含めた。また、具体的行為や場所を明示しない「ドッカ ツレテク」や、「アソビニツレテク」などもここに含めた。この表現は若年層話者に多く見られ、高年層話者にはあまりみられなかった。若年層の場合、屋外や娯楽施設に出向く機会も多いという生活形態が反映されているのだろうか。

〔バリエーション〕 ドッカ、アソブ、オマツリ、バイク、サンボ、カタグルマ、ゲームセンター、ドーブツエン（動物園）、ウミ（３）、コーエン（公園）、カイモノ（買物）

〔回答例文〕 １．アトデ バイク ノセッカラ（高・男）

２．カタグルマ シテヤルカラ（高・男）

５．１．４ ■場所（町名・市街地・固有名詞など）

固有名詞は、仙台や東京といった都市部の名前が出てきた。ほかに、大型ショッピングセンターの「ジャスコ」なども回答に上がった。そして、地名や駅名など人口密度の高い市街地・中心地のことを「マチ」と総称する場合も見られた。「トーキョー」と「マチ」は、いずれも高年層話者の回答である。

〔バリエーション〕 ジャスコ（３）、センダイ、トーキョー（東京）

〔回答例文〕 １．マヂサ ツレデグ（高・女）

２．トーキョーサツレテク（高・男）

５．２ 外出・就寝それぞれの場面における甘やかし表現

つぎに就寝・育児それぞれの場面を見る。５．１で見てきた褒美の品の割合について、場面別・世代別に分類し、**グラフ５**に示した。**表５**には、**グラフ５**の詳細な表現数と割合を記した。

どの世代においても◎食べ物が多いが、とくに中年層において就寝の場面で用いることが多い。また、■場所：地名は若い世代ほど割合が高い結果となった。そのなかでも、□場所：娯楽は、若年層の就寝場面での使用率が高い。就寝場面での使用率が高いということは、娯楽施設は翌日などに向かう場所として話題していると考えられる。

そして、▲道具は、高年層のとくに就寝場面に目立ち、反対に若年層の就寝場面には現れない結果となった。これらの結果には、それぞれの世代の生活形態が関係していると考えられる。若年層世代の甘やかし表現の使用者の立場で多いのは子どもにとっての「親」である。また、高年層世代の甘やかし表現の使用者の立場は子どもにとっての「祖父母」である。就寝場面と一口にいっても、高年層と若年層とでは就寝の時間帯、つまり子どもを寝かせつける時間帯が異なる可能性がある。要するに、高年層世代が孫の世話をして寝かせつける場合の時間帯は、夜ではない可能性が高いということだ。そうすると、必然的に翌日の予定や向かう場所といった話題は出てこない可能性もあると考えられる。このような生活形態・家族内の立場が育児の言語行動に影響し、それが世代差として現れ出る可能性が高いということが明らかになった。

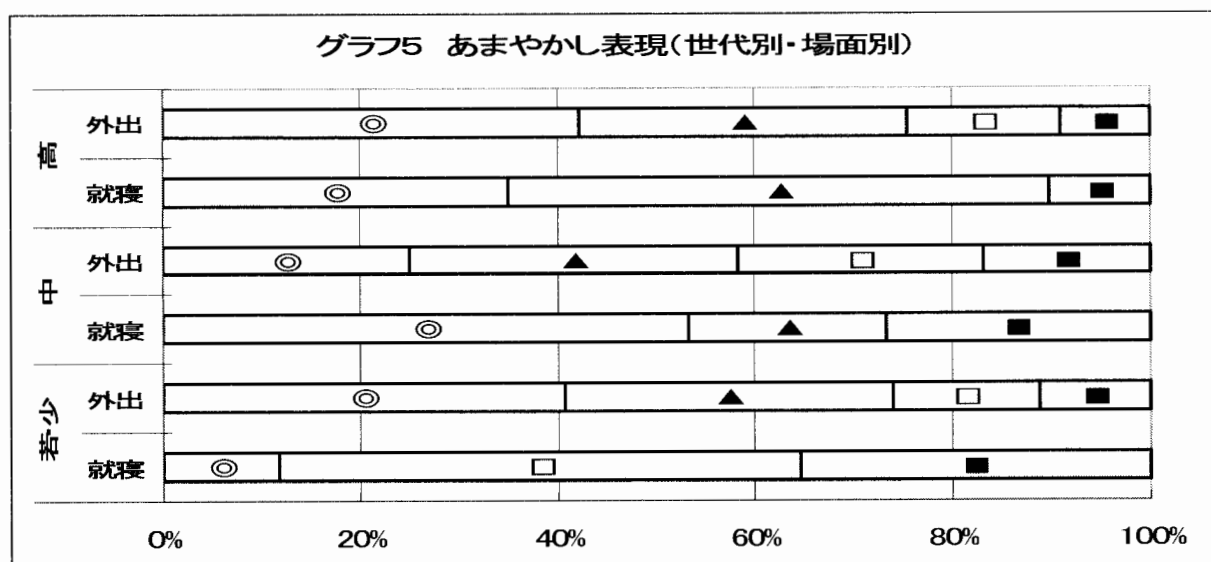


表5 甘やかし表現(世代別・場面別)

()=N

	高		中		若・少	
	就寝	外出	就寝	外出	就寝	外出
◎食べ物類(まんま・お菓子等)	35%(7)	42.2%(19)	53.3%(8)	25%(3)	11.8%(2)	40.7%(11)
▲道具類(本・おもちゃ・お金等)	55%(11)	33.3%(15)	20%(3)	33.3%(4)	0%(0)	33.3%(9)
□場所類：娯楽(公園・動物園等)	0%(0)	15.6%(7)	0%(0)	25%(3)	52.9%(9)	14.8%(4)
■場所類：町(東京・気仙沼等)	10%(2)	8.8%(4)	26.7%(4)	16.7%(2)	35.3%(6)	11.1%(3)
計	100%(20)	100%(45)	100%(15)	100%(12)	100%(17)	100%(27)

6 まとめ

ここまでの世代別・場面別の観点から、分かったことをまとめる。

【おどし表現】

〈育児の言語行動にみられるおどし表現〉

- ・ ●モ一系の語形がとくに多い。古い形態が残っている。
- ・ 話し手が動作主になる表現も多く、とくに高年層男性に使用が目立つ。

〈世代別・場面別からみた動作主の出現割合〉

- ・ ●◎化け物は世代別、場面別ともに出現割合が高い。
- ・ 高年層・中年層までは●◎化け物だけでなく、○化け物・鬼以外の割合が半数以上を占めている。
- ・ 若年層では●◎化け物以外の動作主も多く、また、二つの場面に用いられる動作主の傾向に差があるため、場面によって言い訳を行っている場合があると捉えられる。

【甘やかし表現】

〈育児の言語行動にみられるおどし表現〉

- ・ ◎食べ物ではとくに「オカシ」が多く、バリエーションも多い。
- ・ 場所類のなかでも、「マチ」や「トーキョー」といった地名は高年層話者に見られ、具体的施設を取り上げた娯楽は若年層に見られた。

〈世代別・場面別からみた動作主の出現割合〉

- ・ ◎食べ物は世代別・場面別ともに出現割合が高い。
- ・ ▲道具は高年層に使用率が高く、就寝場面においても見られる。
- ・ ■口場所は、若年層に目立つ。とくに就寝場面では割合が高い。

今回は、育児場面の言語行動の記述に留まり、子守歌詞章におけるおどし表現・甘やかし表現の分析までは行えなかった。今後の課題としたい。また、4. 1. 7で述べた「×その他」の表現についても考察を深めなければならないだろう。

文 献

東洋(1981)『母親の態度・行動と子どもの知的発達:日米比較研究』東京大学出版会

池上嘉彦(1979)「『呪い』としての子守唄」『月刊言語』8-12(大修館書店)

椎名渉子(2011)「寝かせつけの言語行動」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室

西尾純二(2009)「再検討・日本語行動の地域性」『月刊言語』38-4(大修館書店)

新妻三男(1930)『相馬方言考 改訂版』相馬郷土研究会

[付録]

調査票

『気仙沼市方言調査票（多人数面接調査）』（2006 年度）	407
『気仙沼市方言調査票（アンケート）』（2006 年度）	432
『南三陸地方方言調査票』（2007 年度）	443

気仙沼市方言調査票

〔多人数面接調査〕

ふりがな		Info. No.
お名前	様	

データ使用許可確認欄	
今回ご教示いただいた内容は、学術的な目的のために、個人の特定できない状態で使用させていただきますことを、ご了承ください。	アンケート 依頼
OK	OK

東北大学文学部国語学研究室

2006

＜伝統的方言語彙＞

○調査上の注意点

- ・ 方言語形（太字で示した語形）は、必ず聞くこと。
- ・ 記入方法は次の通り。「現在も使う」場合は○、「聞いたことはあるが、使用しない」場合は㊶（理解語）、「使わない、聞いたことがない」場合は×を、番号、または語形に記す。
- ・ その他の語形、インフォーマントによる情報などは積極的に下線部に記入すること。
- ・ なお、【唾】項目の「スタズ・スタギ」、【唾】・【痰】項目の「タンパギ・タンパゲ」、【粃殻】項目の「ヌカ・ヌガ」について尋ねる時は、「○○○や○○○とはおっしゃいませんか？」のように聞くこと。

○調査手順

- ・ 「質問」→「回答記入」
- ・ 共通語形のみ回答…「全ての方言語形（太字）」について、使用の有無を確認する。
→「使用する」と回答→「○を記入」。
→「使用しない」と回答→「聞いたことがあるか」を確認→「×、または㊶を記入」。
- ・ 共通語形と方言語形、または方言語形のみ回答…「残りの方言語形（太字）の語形」を尋ねる。

【唾】切手を貼るときなどペロツとなめたりすることがありますが、そのとき口から出る水のようなものを何と言いますか。

1. スタズ・スタギ 2. タンペ 3. スタンペ 4. ネッペ 5. タンパギ・タンパゲ 6. ツバ 7. ダエキ 8. ヨダレ

【痰】では、風邪を引いたときなど、のどに何かどろどろした固まりのようなものが引っかかることがありますか、それを何と言いますか。

1. タンペ 2. タンコ 3. ネッペ 4. タンパギ・タンパゲ 5. タン

【粃殻】米の粃を脱穀して、殻を取ったものは玄米ですが、その玄米にしたときに残る殻のことを何と言いますか。卵やりんごを箱詰めにするときに使ったり、枕の中に入っていたりします。

1. ヌカ・ヌガ 2. モミガラ 3. モミヌカ・モミヌガ 4. モミ 5. 実物（粃殻）を知らない
6. N.R

【糠】では、玄米を精米して白米にしたときに出るかすのことは何と言いますか。例えば、漬物を漬けるときや床を磨くときに使います。

1. コヌカ 2. サクズ 3. ヌカ・ヌガ 4. コメヌカ 5. カス 6. 実物(糠)を知らない
7. N.R

【雷】夏の午後などに、黒い雲の中でピカッと光って音のすることがありますが、これを何が鳴っていると言いますか。

1. オカダチ 2. オレサマ 3. オナリ 4. ゴロゴロサン 5. カミナリ 6. カミナリサン

【タ立】では、夏の午後、急に暗くくもって一時的に激しく降り、しばらくたって止む雨のことを何と言いますか。

1. オカダチアメ 2. オレサマアメ 3. ユーダチ 4. ニワカアメ 5. ライウ
-

＜新しい方言語彙・三陸地方特有語彙＞

○調査上の注意点・質問手順は「伝統的方言語彙」に準じる。

話者自身が家族・友人とくつろいだ場面で使う語形、ということでお答えいただく。

【ジャス】主に子供が運動するときに着る服を何と言いますか。 気づかれつつある方言

1. ジャス 2. ジャージ 3. トレーニングウェア 4. トレパン
5. ウンドーギ 6. その他 ()

→＜ジャスが出なかったら＞ ジャスとは言いませんか。

1. 現在も使う 2. 昔は使った 3. 聞いたことはあるが使用しない
4. 使ったことも聞いたこともない

→＜ジャスが出たら＞ もしお友達と一緒に全国放送のテレビに出演されてお話しになるとしたら、なんと言いますか。

1. ジャス 2. ジャージ 3. トレーニングウェア 4. トレパン
5. ウンドーギ 6. その他 ()

【ページワン】 トランプ遊びで「ページワン」というのがありますね。 気づかない方言

(知っていたら質問を続ける) 最後の一枚を出すときのかけ声を何と言いますか。

1. ノームサイ 2. ノーサイ 3. アガリ 4. ストップ 5. ノールサイ
6. その他 () 7. かけ声はない 8. 遊びを知らない

【オスパテ】 酒の肴（お酒を飲むときのつまみ）のことを「オシバテ」「オスパデ」などと言うそうですが、なんと言いますか。

語形 ()

使用状況 1. 現在も使う 2. 昔は使った 3. 聞いたことはあるが使用しない
4. 使ったことも聞いたこともない

→＜「使用状況」が1～3の場合＞

諸説ある語源

語源（なぜそういう風に言うのか）をご存じでしたら教えていただけませんか。

1. 回答あり（調査時間の都合上メモ程度で可。後で武田が録音で確認）

＜終助詞ゴダ・格助詞ドゴ＞

○調査の目的

- ・終助詞ゴダについて、その接続のあり方・文意との関係・構文との関係を明らかにする。
- ・格助詞ドゴについて、前接名詞の性質・共起する述語用言の性質を明らかにする。

○調査上の注意点

(0) ～ (4) の調査文は「終助詞ゴダ・調査文提示用シート」で提示する。

○記入上の注意点

- ・話者から得られた回答を○で囲む。

記入例 [言う／言わない]

- ・ただし、話者が強く迷った後で回答が得られた場合には(?)を付す。

記入例 [言う／言わない] (?)

- ・「自分自身は言わないが、そういう言い方をする人もいる」といった回答が得られた場合は、「言わない」を○で囲んだ上で㊦と付す。

記入例 [言う／言わない] ㊦

1. 感嘆の終助詞ゴダ (ゴド)

質問文 何かとても値段の高い品物を見て「ずいぶん高いゴダァ」とか「高いゴドォ」などと言うことがあるかと思いますが、～ゴダァと～ゴドォのどちらを使いますか。

(0) ①ゴダァ ②ゴドォ ※以下はここで回答された語形を用いて質問を進める。

質問文 それでは、その「ゴダァ／ゴドォ」を次のように使うかどうか教えてください。

- (1) ①この部屋、ずいぶん静かだゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]
 ②この部屋、ずいぶん静かなゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]
 (2) ①ずいぶん厚い本だゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]
 ②ずいぶん厚い本なゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]
 (3) [とても暑い日に独り言で] 冷たいもの、飲みたいゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]

質問文 旅行先でとてもきれいな川を見たとき。そのときに次のような言い方をしますか。

- (4) ①きれいだゴダァ (ゴドォ) ※きれいなゴダァ (ゴドォ) でもかまわない [言う／言わない]
 ②きれいな川だゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]
 ③川がきれいだゴダァ (ゴドォ) ※川がきれいなゴダァ (ゴドォ) でもかまわない [言う／言わない]
 ④きれいな川があるゴダァ (ゴドォ) [言う／言わない]

2. 対象の格助詞ドゴ

質問文 「太郎をここに連れて来てくれ」という意味で「太郎ドゴここに連れて来てくれ」といった言い方をすることがあるかと思いますが、このドゴを次のように使うかどうか教えてください。

- (6) [飼い犬が行方不明になった] うちの犬ドゴ 探してきて。…………… [言う／言わない]
(7) [飼い犬が行方不明になった] うちの犬ドゴ 知らないか?…………… [言う／言わない]
(8) [今度犬を飼うことになった] どこかで犬ドゴ 探してきて。…………… [言う／言わない]
(9) まんじゅうドゴ 買ってきて。…………… [言う／言わない]
(10) グラウンドを走っている犬ドゴ 見えるか?…………… [言う／言わない]

〈 条件表現 〉

○調査上の注意点

- ・使用する語形に○を付すこと。また、他形式を使用する場合、その他の情報については余白に記入すること。
- ・**太字ゴシック体** については確認の必要な語形である。〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕のいずれかに○を付すこと。但し、調査員の語形提示によって「言う」と回答がなされた場合は「⊕」（誘導語形）と記入すること。
- ・予想語形について、全て確認する必要はない。但し、よく言う（出てきた）順番はなるべく付記すること。

(1) 今夜8時までに来れば、間に合う。

1. コーバ〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. クレバ、3. コレバ、4. クッド、5. キタラ
6. 他形式の場合→

(2) 春が来れば、花が咲く。

1. コーバ〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. クレバ、3. コレバ、4. クッド、5. キタラ
6. 他形式の場合→

(3) 来るなら、早く来い。

1. **クルゴッタラ**〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. **クッドギ**〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
3. クンダラ、4. クルンダラ、5. クンダレバ、6. クンナラ、7. クルナラ
8. 他形式の場合→

(4) 雨なら、今日の試合は中止だ。

1. **アメダゴッタラ**〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. **アメダラ**〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
 ※2.「言う」場合→「アメダラバ」のように「バ」は必要か。
 [要／不要／どちらでもよい]
3. アメナラ、4. アメダッタラ
5. 他形式の場合→

(5) 値段が高ければ、誰も買わない。

1. **タゲーバ／タゲアバ／タガイバ**
 [言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない]
 ※1.「言う」場合→ 上記3つのうち、どれに音が近いか、○を付すこと。
2. タガケレバ、3. タガケリヤー、4. タゲード、5. タガイド、6. タガガッタラ
7. 他形式の場合→

＜可能表現、テンス・アスペクト類＞

場面：家族や親しい友人などとくだけた場面で話すときの言い方をお聞きください。

調査法：「※1」の語形が回答されない場合は使用の有無を確認し、使用する場合は㊦とお書き添えください。

記入法：回答語形の番号を○で囲んでください。語中語尾の力行音・タ行音は濁音で示しましたので、清音は近似語形への加筆でお知らせください。回答語形がない場合は下線部分などにお書きください。その他、付帯情報は余白にお書きください。

＜状況可能・否定＞

「便箋がないので今は手紙を書くことができないよ」と言うとき、「書くことができない」のところをどのように言いますか。注意：～デキナイは採用しない。

- ※1. カガレネ 2. カゲネ
3. カガレナイ 4. カゲナイ 5. _____

＜状況可能・肯定＞（GAJ4-181）

「便箋を用意したので今度は手紙を書くことができるよ」と言うとき、「書くことができる」のところをどのように言いますか。注意：～デキルは採用しない。

- ※1. カグノアイー 2. カゲル
3. カグニイー 4. カガレル 5. _____

＜過去・回想・一人称＞（GAJ4-188 類似）

「昔、私は千葉県の九十九里浜に行ったなあ」と言うとき、「行ったなあ」のところをどのように言いますか。注意：イッタコトアル類は採用しない。

- ※1. イッタッタナー 2. イッタツケナー 3. イッタナー
4. イッタッタツケナー 5. _____

＜継続相・一人称＞

今なにをしているのと聞かれたとき、「私は今、あの人へのお礼状を書いているの」と答えるとき、「書いている」のところをどのように言いますか。注意：「今」の動作を表す語形。

- ※1. カイッタ 2. カイデダ 3. カイデル 4. _____

<反語・未実現> (GAJ5-259)

「そんな大変なこと、誰がやるものか」と言うとき、「やるものか」のところをどのように言いますか。注意：スル類（1. スッケナ・スンダッケナ、2. スッカ、3. スルモンカ）でもよい。

※ 1. ヤルッケナ・ヤッケナ・ヤンダッケナ（～ッケナを確認する）

2. ヤッカ

3. ヤルモンカ

6. _____
(可能表現、テンス・アスペクト類 以上)

＜想起を表す場面に使用する文末形式＞

●調査目的：対話場面で、話し手と聞き手が共に体験した事柄を想起する(思い出す)よう求める際に使用される形式の調査。思い出しの程度は文により異なる。

●調査概要：例文を作成し、文末の部分を含弧でくくる。各例文には状況を設定し、状況を説明しながら例文をインフォーマントに提示し、括弧の中にどのような形式が入るかを答えていただき、その形式を書き留める。例文は共通語的な形式を用いる。

●全体の設定：全ての例文で、聞き手は話し手と同性で小学校から同級生でずっと付き合いがある人、と設定する。くだけた場面での会話を想定する。

また、話し手と聞き手の両方の立場になって答えていただくことになる。

●注意事項：最初に答えていただいた形式を書く。そして、他に何か言い方はありますか、他はどうですか、ともう1度尋ねる。合計2形式を記述すること。インフォーマントから2つ以上の言い方を示された場合は全て書き記す。また何も出てこない場合、1つしか出ない場合等はその旨記すこと。

1. 昔一緒に海に行ったことを思い出話で話す場面です。まず「小さいとき一緒に海にいった」ということを伝えます。次に相手の応答として「うん、一緒にいった」ということを相手の立場に立って話していただきます。そして、最後に「そのときあなたは怪我をして大変だった」と伝えます。

予想語形(よね、よな、じゃない、ベ等)

自分:小さいとき一緒に海に行った()。

相手: うん、行った()。

自分:そのとき(あなた, お前, 君等), けがをして大変だった()。

2. あるテレビ番組を見て、自分も相手も一緒に笑いながら見ていた。その後少し立ってから「さっきのテレビは面白かった」と相手に伝えます。相手も「面白かった」と応答します。お互いに「面白かった」ということを述べ合う場面です。

予想語形 (ね, な, べ, 等)

自分：さっきのテレビ面白かった ()。

相手：うん、面白かった ()。

3. 小学校6年生のときの担任の名前をたずねます。それに対して、<うろ覚えで>確か佐藤先生だと思う、という気持ちで話していただきます。

予想語形(だったっけ(か), かな, べ, 等)

自分：6年生のときの先生の名前 () ?

相手：うーんと、確か佐藤先生 ()。

4. 車で公園を通りかかったときに、相手が公園にいるのが、車から見えました。相手は気づいていませんでした。次の日に、そのことを相手に伝えるという場面です。

予想語形(よね, よな, じゃない, べ等)

昨日公園にいた ()。車から見えたよ。

＜驚きの感動詞＞

○それでは、次に、驚いたときの叫び声について教えてください。

1. ぼんやりと歩いていたら、誰かに急に背中を押されました。そのとき、驚いて何と声を上げますか。例えば、「バツ」とは言いませんか。【驚き】

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

(予想：バツ、アバツ)

b. 言わない → それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

(予想：ワッ)

2. 驚いた拍子に、手に持っていた花瓶を床に落としてしまいました。花瓶は割れませんでした。水がこぼれてみるみる床の上に広がっていきます。そのとき、慌てふためいた感じで、何と声を上げますか。【慌て】

2-1. 例えば、「ババババ」とは言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

(予想：ババババ、アババババ)

b. 言わない

2-2. それでは、そういうときに、「サーサー」とは言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

(予想：サーサー、サーササ)

b. 言わない

2-3. (「ババババ」も「サーサー」も出ない場合)

→ それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

(予想：ワッ、ゲッ、ウソー、ヤベ)

3. それでは、花瓶が割れてしまった場合はどうでしょう。大事にしていた花瓶です。割れた花瓶を見て、がっかりした気持ちで、何と声を上げますか。【落胆】

3-1. 例えば、「ババー」とか、「バーバー」とか言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

(予想：ババー、アバー、バーバー、アーバー)

b. 言わない

3-2. それでは、そういうときに、「サーサー」とは言いませんか。

a. 言う → 実際にどのように言うか、実演してみてください。

(予想：サーサー、サーササ)

b. 言わない

3-3. (「ババババ」も「サーサー」も出ない場合)

→ それでは、そういうときは、どんな声を上げますか。

(予想：ワッ、ゲッ、ウソー、ヤベ)

＜寝かせつけの言語行動＞

目的

子守歌にみられる「おどし」「甘やかし」と、実際の育児場面での言語行動と、共通するものが見出せるのか調査したい。また、①寝かせつける場面に限定する質問だけでなく、②子どもの行動を統制するという場面全般においての子どもへの言語行動についても質問をする。

調査項目

☆では、子どもに言うことを聞かせようとするときに、どんなふうに言うかお聞きします。

※たとえば、だだをこねてなかなか言う事を聞かない4・5歳くらいの子どもの、言う事を聞かせようとする場面を想像してください。

1. 子どもに言う事を聞かせようとするときに、何か子どもを怖がらせておどかすような表現を使ったこと／聞いたことがありますか？

例：「言う事聞かないと、モー(お化け)来っつお」「静かにしないと人さらいがくるよ」

2. 子どもに言う事を聞かせようとするときに、「褒美をやるから言う事を聞いて」というように、子どもにとって良いものを約束するような表現を使ったこと／聞いたことはありますか？

例：「いい子にしたら、お祭りに連れてくよ」「〇〇あげるから静かにしなさい」など

※今度はあなたが子どもを寝かせようとしているとします。なかなか寝ない4・5歳くらいの子どもの寝かせようとする場面を想像してください。(①の場面)

3. 寝ない子どもを寝かせようとするときに、何かおどすような文句を言って子供を怖がらせるような表現を使ったこと／聞いたことはありますか？

例：「いつまでも寝ねえと、モー(お化け)来っつお」など

4. では逆に、寝ない子どもを寝かせようとするときに、子どもに「褒美をやるから早く寝ろ」というように、子どもにとって良いものを約束するような表現を使ったこと／聞いたことがありますか？

例：「〇〇をあげるから早く寝ろ」「寝れば〇〇に連れて行くよ」

5. 実際の子育てのなかで、言うことを聞かない子どもを大人しく静かにさせる場合に、「寝ないとお化けが来るから(早く寝なさい)」というようにおどす表現と、「いい子だから(静かにしなさい)」「寝たらお菓子をあげるから(早く寝なさい)」というように甘やかす表現とでは、どちらが子どもにとってより効果的だと思うか。(どちらかに○)

・甘やかす表現

・おどす表現

〈 音 韻 調 査 〉

注意事項

1. 質問の際、調査者の方から先に問題の語を発音してはならない。意図した語がどうしても得られないときは文字を示し発音を求めてもよいが、その場合は㊦の印を付す。
2. くつろいだ場での発音であることをよく理解してもらう。改まった発音の印象が強い場合は改めて場面を提示・確認し、「自然な調子でもう一度…」などのように促す。
3. 各項目とも最低2回ずつ発音してもらう。声の重なりや不自然な発音があった場合は再度発音を求める。
4. 発音の内省は“ある・聞く(当地で)・ない”の三択で尋ねいずれかに○を付す。「ある」という回答がなされ、なおかつその段階で問題とする発音が得られていない場合は、必ず話者本人にその発音を行ってもらう(最低2回)。
5. 音声は 欄(内省を問う箇所は 上)にIPAで記入する。ただし録音が確実にあれば調査の進行状況に応じてカタカナ表記でも構わない。

お声の調子、発音を聞かせていただきます。なぞなぞのような形でおうかがいしますので、その言葉を発音してみていただけますか。仲のよい古くからのお知り合いやご家族の方とくつろいでお話しになるつもりでお願いします。

1. 口からハーッとほくものを何と言いますか。

息

2. 電車が止まるところを何と言いますか。

駅

3. 秋になる果物で、二十世紀とか豊水。りんごではなくて…。

梨

4. 畑になるへたのついた紫色の野菜を何と言いますか。きゅうりではなくて…。

茄子

5. 低いの反対は何ですか。

高い

→くだけで言う場合、「高い」が「タケー(タゲー)」となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

6. 太いの反対は何ですか。

細い

→くだけで言う場合、「細い」が「ホセー」となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

7. 戸をこうする（動作）ことを何と言いますか。閉めるの反対。

開ける

→くだけで言う場合、「開ける」が「アゲル」のように濁った発音になることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

8. 手をこうする（動作）ことを何と言いますか。

挙げる

9. 日の丸や国旗のことを何と言いますか。～を振る…。

旗

→くだけで言う場合、「旗」が「ハダ」のように濁った発音になることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

10. 人間の皮膚のことを何と言いますか。～が荒れる。餅～…。

肌

→くだけで言う場合、「肌」が「ハダ」のように鼻にかかった発音になることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

11. 醤油やお酒につかわれますが、一升の次は何と言いますか？

二升

→/ニショー/となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

12. 昔のお米の単位ですが、一俵の次は何と言いますか？

二俵

→/ニショー/となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

13. <弁別の確認>

先にうかがった、11と12は、文字で書くと違いますが、<場面設定において>区別しておっしゃいますか、それとも同じようにおっしゃいますか？地域や人によっても違うようですが、ご自身ではいかがでしょうか？

(区別しない ・ 区別する)

14. 一昨日、昨日、その次の日は何と言いますか？

今日

→/チョー/となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

15. 胃袋の下についている細長い内臓を何と言いますか？

腸

→/チョー/となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

16. ＜弁別の確認＞

先にうかがった、14と15は、文字で書くと違いますが、＜場面設定において＞区別しておっしゃいますか、それとも同じようにおっしゃいますか？地域や人によっても違うようですが、ご自身ではいかがでしょうか？

(区別しない ・ 区別する)

17. 読み上げ調査

<<次の語を読み上げてもらってください。欠落がないように願います>>

場面設定は「地元出身の親しい友人と、くつろいで、お茶のみ話をするときに、読み上げる感じ」でお願いします。＜回数は各1回です＞。

北 下 草 力 人 下 草 力 人 北 草 力 人 北 下
草 力 人 北 下

聞く 服 吹く 口 靴 服 吹く 口 靴 聞く 吹く 口 靴 聞く 服
口 靴 聞く 服 吹く

節 獅子 岸 櫛 煤 獅子 岸 櫛 煤 節 岸 櫛 煤 節 獅子
櫛 煤 節 獅子 岸

足 腰 石 押す 梨 腰 石 押す 梨 足 石 押す 梨 足 腰
押す 梨 足 腰 石

18. 読み上げ調査

<<次の語を読み上げてもらってください。欠落がないように願います>>

場面設定は「地元出身の親しい友人と、くつろいで、お茶のみ話をするときに、読み上げる感じ」でお願いします。＜回数は各1回です＞。

今日 習字 三脚 二尺 中学 二俵 腸 ヒューズ 三着 二百 休学 二升
ヒューズ 三着 習字 腸 二尺 今日 二俵 中学 二升 三脚 二百 休学

<アクセント調査票>

☆これから気仙沼のことばの調子についておたずねします。次ぎのことばを気仙沼の発音で読んでください。たとえば、「肩 痛い」は「カダ イデ」のように。（「そのようには発音しない」と言われたら、「ふだん話すときの発音をお願いします」と指示する）

- | | |
|----------|----|
| ① 血 出た。 | チ |
| ② 戸 閉める。 | ト |
| ③ 木 切る。 | キ |
| ④ 手 洗う。 | テ |
| ⑤ 風 吹く。 | カゼ |
| ⑥ 酒 飲む。 | サケ |
| ⑦ 石 投げる。 | イシ |
| ⑧ 胸 痛い。 | ムネ |
| ⑨ 足 痛い。 | アシ |
| ⑩ 犬 いる。 | イヌ |
| ⑪ 糸 長い。 | イト |
| ⑫ 稲 実る。 | イネ |

- ⑬ 海 見える。 ウミ
- かず
- ⑭ 数 かぞえる。 カズ
- ⑮ 肩 痛い。 カタ
- ⑯ 秋 来た。 アキ
- ⑰ 汗 出た。 アセ
- ⑱ 窓 開ける。 マド
- ⑲ 猿 いる。 サル
- ⑳ 桜 咲いた。 サクラ
- ① 煙 見える。 ケムリ
- ② 頭 痛い。 アタマ
- ③ 鏡 見る。 カガミ
- ④ 刀 ある。 カタナ
- ほとけ
- ⑤ 仏 おがむ。 ホトケ
- ⑥ 男 いる。 オトコ
- うちわ
- ⑦ 団扇 ある。 ウチワ
- はさみ
- ⑧ 鋏 買う。 ハサミ

- ⑨ 朝日 出る。 アサヒ
- きゅうり
- ⑩ 胡瓜 食べる。 キューリ
- ⑪ 心 広い。 ココロ
- ⑫ 姿 見える。 スガタ
- ⑬ 涙 出る。 ナミダ
- ⑭ 枕 高い。 マクラ
- ⑮ 油 さす。 アブラ
- ⑯ 柱 立てる。 ハシラ
- ⑰ 紅葉 見る。 モミジ
- ⑱ 兎 飼う。 ウサギ
- ⑲ 狐 いる。 キツネ
- すずめ
- ⑳ 雀 いる。 スズメ
- ① 背中 痛い。 セナカ
- ねずみ
- ② 鼠 いる。 ネズミ
- ③ みみず いる。 ミミズ
- いちご
- ④ 苺 食べる。 イチゴ

- ⑤ 薬 飲む。 クスリ
くじら
- ⑥ 鯨 とる。 クジラ
たより
- ⑦ 便り ある。 タヨリ
うしろ
- ⑧ 後ろ 向く。 ウシロ
- ⑨ 卵 食べる。 タマゴ

☆それでは、今度は、次の文を自然な調子で読んでみてください。

- ① 血が出た。 チガ
- ② 戸を閉める。 トオ
- ③ 木を切る。 キオ
- ④ 手を洗う。 テオ
- ⑤ 風を吹く。 カゼガ
- ⑥ 酒を飲む。 サケオ
- ⑦ 石を投げる。 イシオ
- ⑧ 胸が痛い。 ムネガ

- | | |
|-----------|------|
| ⑨ 足が痛い。 | アシガ |
| ⑩ 犬がいる。 | イヌガ |
| ⑪ 糸が長い。 | イトガ |
| ⑫ 稲が実る。 | イネガ |
| ⑬ 海が見える。 | ウミガ |
| かず | |
| ⑭ 数をかぞえる。 | カズオ |
| ⑮ 肩が痛い。 | カタガ |
| ⑯ 秋が来た。 | アキガ |
| ⑰ 汗が出た。 | アセガ |
| ⑱ 窓を開ける。 | マドオ |
| ⑲ 猿がいる。 | サルガ |
| ⑳ 桜が咲いた。 | サクラガ |
| ① 煙が見える。 | ケムリガ |
| ② 頭が痛い。 | アタマガ |
| ③ 鏡を見る。 | カガミオ |
| ④ 刀がある。 | カタナガ |

- ほとけ
⑤ 仏をおがむ。 ホトケオ
- ⑥ 男がいる。 オトコガ
- うちわ
⑦ 団扇であおぐ。 ウチワデ
- はさみ
⑧ 鋏を買う。 ハサミオ
- ⑨ 朝日が出る。 アサヒガ
- きゅうり
⑩ 胡瓜を食べる。 キューリオ
- ⑪ 心が広い。 ココロガ
- ⑫ 姿が見える。 スガタガ
- ⑬ 涙が出る。 ナミダガ
- ⑭ 枕が高い。 マクラガ
- ⑮ 油をさす。 アブラオ
- ⑯ 柱を立てる。 ハンラオ
- ⑰ 紅葉を見る。 モミジオ
- ⑱ 兎を飼う。 ウサギオ
- ⑲ 狐がいる。 キツネガ
- すずめ
⑳ 雀がいる。 スズメガ

- | | |
|-----------|------|
| ① 背中が痛い。 | セナカガ |
| ねずみ | |
| ② 鼠 がいる。 | ネズミガ |
| ③ みみずがいる。 | ミミズガ |
| いちご | |
| ④ 苺 を食べる。 | イチゴオ |
| ⑤ 薬を飲む。 | クスリオ |
| くじら | |
| ⑥ 鯨 をとる。 | クジラオ |
| たより | |
| ⑦ 便りがある。 | タヨリガ |
| うしろ | |
| ⑧ 後ろを向く。 | ウシロオ |
| ⑨ 卵を食べる。 | タマゴオ |

2006 年

気仙沼市方言調査票

〔アンケート〕

*このたびは私どもの調査にご協力いただきましてありがとうございます。
お手数ですが、下にお名前をお書きください。

ふりがな お名前	
-------------	--

この調査は学術的な目的のみに使わせていただくもので、
個人毎の回答内容や、プライバシーに関する事柄は一切
公表いたしません。記入が済んだアンケートにつきまし
ては、お手数ですが、三つ折の上ピンクの封筒に入れ、
9月末までに、研究室へご返送下さい。

なお、アンケートに関しましてご不明の点がございまし
たら、恐れ入りますが、東北大学文学部国語学研究室
(電話022-795-5988) まで、お願いいたします。

東北大学文学部国語学研究室

2006

◇アンケートにご協力くださり、ありがとうございます。

以下の質問にお答えください。

気仙沼には「急なこと」をあらわすことばがたくさんあるようです。ここでは、そういうことばについて、あなた自身の使い方をお聞きます。

これから挙げる質問文の「急に」の部分と言いかえのできることばを、それぞれの選択肢のなかから、すべて選んで、記号に○をつけてください。

聞いたことがあっても、自分は言わないというものには、何も印をつけないでください。また、どれも言わないし聞いたこともないという場合は、「シ. どれも使わない」に○をつけてください。

1. 予定があるのに、前日になって急に仕事を頼まれた。

「急に そんなこと言われても困るよ。」

ア. ぼっと イ. ぼっぼり ウ. ぼっぼら エ. びらっと オ. びらり

カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり

サ. ずらり シ. どれも使わない

2. 急に思い立って、ともだちの家に遊びにきたので、おみやげを持ってこなかった。

「急に 来たものだから、手ぶらで来ちゃったよ。」

ア. ぼっと イ. ぼっぼり ウ. ぼっぼら エ. びらっと オ. びらり

カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり

サ. ずらり シ. どれも使わない

3. 道を教えるとき、曲がり道があることを伝える。

「そこで急に 道が曲がっているから、そこを道なりに行くんだ。」

ア. ぼっと イ. ぼっぼり ウ. ぼっぼら エ. びらっと オ. びらり

カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり

サ. ずらり シ. どれも使わない

4. 前を歩いていた人が、急に道を曲がっていったことを伝える。
「それで、その人 急 に 道を右に曲がっていったんだよ。」

ア. ぽっと イ. ぽっぽり ウ. ぽっぽら エ. びらっと オ. びらり
カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり
サ. ずらり シ. どれも使わない

5. 用事があったのだが、突然その用事がなくなってしまった。
「今度の日曜、急に予定がなくなって、暇になったよ。」

ア. ぽっと イ. ぽっぽり ウ. ぽっぽら エ. びらっと オ. びらり

カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり

サ. ずらり シ. どれも使わない

6. 自転車もしくは自動車に乗っているとき、強風で目の前に新聞紙が飛んできた。
「新聞紙が 急 に 飛んできて、びっくりしたよ。」

ア. ぽっと イ. ぽっぽり ウ. ぽっぽら エ. びらっと オ. びらり

カ. ぐいら キ. ぐえら ク. げあら ケ. げあり コ. げらり

サ. ずらり シ. どれも使わない

気仙沼では「シャテー」という方言を使うことがあるようです。その「シャテー」について、あなた自身の使い方をお聞きします。当てはまるものを選んで○をつけてください。

1. 「年下のきょうだい」のことを、「シャデー」、あるいは「シャデ」、「シャデッコ」などと言いますか？または、そのように言うのを聞いたことがありますか？

ア. 言う → 次のページへ。

イ. 言わないが、聞いたことはある
→ 誰が使っていましたか？具体的に記入して下さい。〔 〕

ウ. 言わないし、聞いたこともない → 5 ページへ。

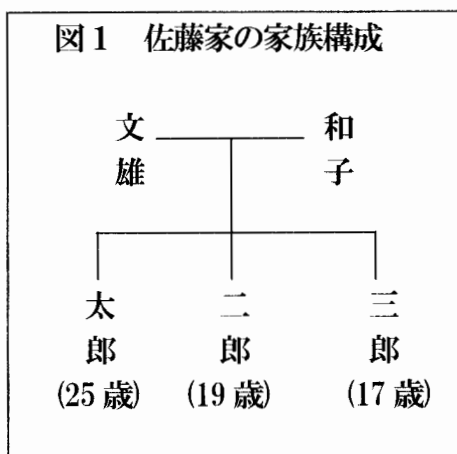
→ 次のページへ。

2. ここからは「ア. 言う」、「イ. 言わないが、聞いたことがある」に○をつけた方にお聞きします。まずは、どんな言い方か、左の例を参考にしてご記入ください。

参考 シャテー、シャデー、シャデ、
シャテコ、シャデコ、シャデッコ

Ⅱ 以下3. と4. の質問の シャテー のところには、2. で回答していただいた語形を当てはめてお考えください。

3. 下の図1は、佐藤家という架空の家の家族構成を示したものです。



文雄は佐藤家の家長、和子は文雄の妻です。文雄と和子の間には、太郎（25歳）、二郎（19歳）、三郎（17歳）の3人の子供がいます。

さて、それでは次のような場面を想像してお答えください。

あなたは佐藤家の隣に住んでいるとします。佐藤家の子供たちについて話題にする場合、次のように言いますか？

〈太郎について〉

a. 太郎は、隣のシャテーだ。 (言う / 言わない)

〈二郎について〉

b. 二郎は、太郎のシャテーだ。 (言う / 言わない)

c. 二郎は、隣のシャテーだ。 (言う / 言わない)

〈三郎について〉

d. 三郎は、太郎のシャテーだ。 (言う / 言わない)

e. 三郎は、二郎のシャテーだ。 (言う / 言わない)

f. 三郎は、隣のシャテーだ。 (言う / 言わない)

〈二郎と三郎について〉

g. 二郎と三郎は、太郎のシャテーだ。 (言う / 言わない)

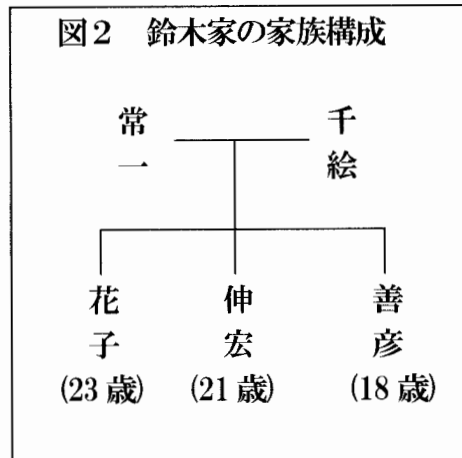
h. 二郎と三郎は、隣のシャテーだ。 (言う / 言わない)

4. 下の図2は、鈴木家という架空の家の家族構成を示したものです。

常一は鈴木家の家長、千絵は常一の妻です。常一と千絵の間には、花子（23歳）、伸宏（21歳）、善彦（18歳）という3人の子供がいますとします。花子は女子、伸宏と善彦は男子です。

さて、それでは次のような場面を想像してお答えください。

あなたは鈴木家の隣に住んでいるとします。鈴木家の子供たちについて話題にする場合、次のように言いますか？



〈伸宏について〉

i. 伸宏は花子のシャテーだ。

(言う / 言わない)

j. 伸宏は隣のシャテーだ。

(言う / 言わない)

〈善彦について〉

k. 善彦は花子のシャテーだ。

(言う / 言わない)

l. 善彦は伸宏のシャテーだ。

(言う / 言わない)

m. 善彦は隣のシャテーだ。

(言う / 言わない)

〈伸宏と善彦について〉

n. 伸宏と善彦は、花子のシャテーだ。

(言う / 言わない)

o. 伸宏と善彦は、隣のシャテーだ。

(言う / 言わない)

5. それでは、3. と4. でシャテーと言う場合について教えてください。

佐藤家において、「シャテー」は、太郎よりも格下である」といった意識はありますか？

(ある / ない / わからない)

同様に、鈴木家において、「シャテー」は、花子よりも格下である」といった意識はありますか？

(ある / ない / わからない)

気仙沼では、「はっきりしゃべれ」と言うところを、「はっきりしゃべろ」ということがあるようです。ここでは、同じように「しゃべろ」などということがあるかどうか、あなた自身の使い方をお聞きます。

当てはまるものを選んで○をつけてください。

1. 「髪が伸びてボサボサだから、髪を切れ」と言うとき、「切れ」の部分を「切^きろ」と言うことがありますか。
ある / ない
2. 「ボールをこっちに蹴れ」と言うとき、「蹴れ」の部分を「蹴^けろ」と言うことがありますか。
ある / ない
3. 「ハンバーグの肉は粘りが出るまでよく練れ」と言うとき、「練れ」の部分を「練^ねろ」と言うことがありますか。
ある / ない
4. 「寒いから早く家の中に入れ」と言うとき、「入れ」の部分を「入^{はい}ろ」もしくは「へえろ」と言うことがありますか。
ある / ない
5. 「もっと速く走れ」と言うとき、「走れ」の部分を「走^{はし}ろ」と言うことがありますか。
ある / ない
6. 「水が飲みたければ蛇口をひねれ」と言うとき、「ひねれ」の部分を「ひねろ」と言うことがありますか。
ある / ない
7. 「もごもご言っていないで、はっきりしゃべれ」と言うとき、「しゃべれ」の部分を「しゃべろ」と言うことがありますか。
ある / ない

8. 「友達を裏切れというのか」と言うとき、「裏切れ」の部分を「裏切^{うらぎ}ろ」と言うことがありますか。

ある / ない

9. 「ゴミは持ち帰れ」と言うとき、「持ち帰れ」の部分を「持ち帰^もろ^{かえ}」もしくは「持^もち^{かえ}えろ」と言うことがありますか。

ある / ない

10. 「波が高くて危ないから陸へ上がれ」と言うとき、「上がれ」の部分を「上^あが^ろ」ということがありますか。

ある / ない

11. 「深くもぐれ」と言うとき、「もぐれ」の部分を「も^もぐ^どろ」ということがありますか。

ある / ない

12. 「さっさと仕事に戻れ」と言うとき、「戻れ」の部分を「戻^{もど}ろ」ということがありますか。

ある / ない

以下のような言い回しはどうか。同じように下線部について、当てはまるものを選んで○をつけてください。

1. 「もう9時だよ。早く起きろ」と言うとき、「起きろ」の部分を「起^おき^ろれ」ということがありますか。

ある / ない

2. 「もう夜遅いから早く寝ろ」と言うとき、「寝ろ」の部分を「寝^ねれ」ということがありますか。

ある / ない

3. 「一緒に帰ろう」と言うとき、「帰ろう」の部分はなんと言いますか。 ふだん使うものすべてに○をつけてください。

ア. かえっぺ (けえっぺ) イ. かえんべ (けえんべ)

ウ. かえるべ (けえるべ) エ. かえろー (けえろー)

オ. その他 ()

私たちの生活の中では“スポーツ”や“サービス”などのカタカナ語がたくさん使われています。ここでは、それらがあなた自身の生活にどれくらいとけ込んでいるかお聞きします。あなたが普段使うことば全てに○をつけてください。他の言い方があれば、その他の（ ）に記入して下さい。

1. 首のまわりに巻いて寒さを防ぐものを何とおっしゃいますか。
ア. 首巻き
イ. 襟巻き
ウ. マフラー
エ. その他（ ）
2. 黒板に書くのに用いる棒状のものを何とおっしゃいますか。
ア. 白墨
イ. 白堊（はくあ）
ウ. チョーク
エ. その他（ ）
3. 映画館や演奏会などに入るときに必要なものを何とおっしゃいますか。
ア. 入場券
イ. 券
ウ. 切符
エ. チケット
オ. その他（ ）
4. あなたのお住まいの地域だと JUSCO(ジャスコ)にある有名なハンバーガー店のことを何とおっしゃいますか。
ア. マクドナルド
イ. マクド
ウ. マック
エ. その他（ ）
5. 海の霧や濃霧のことを何とおっしゃいますか。
ア. 霧
イ. 濃霧
ウ. ガス
エ. その他（ ）
6. 船でいかり（アンカー）をいれるときに「れっごう」とおっしゃいますか。
ア. 言う
イ. 言わないが、聞いたことがある
ウ. 言わないし、聞いたこともない

7. ものすごく速い速度（フルスピード）で船を走らせることについて「ほすぴー」とおっしゃいますか。

ア. 言う

イ. 言わないが、聞いたことがある

ウ. 言わないし、聞いたこともない

ここでは、あなた自身のことばの使い方や、使い方についてのご意見をお聞きます。最も近いものに○をつけてください。

1. あなた自身は、普段の生活で、方言を、どのくらい使っていますか。

ア. よく使う

イ. 時々使う

ウ. どちらとも言えない

エ. あまり使わない

オ. まったく使わない

2. あなたは、可能であれば方言をたくさん使った方がよいと思いますか。

ア. そう思う

イ. ややそう思う

ウ. どちらとも言えない

エ. あまり思わない

オ. まったく思わない

3. あなた自身は、普段の生活で、カタカナ語を、どのくらい使っていますか。

ア. よく使う

イ. 時々使う

ウ. どちらとも言えない

エ. あまり使わない

オ. まったく使わない

4. あなたは、カタカナ語について、できるだけ漢字やひらがなを使って言い換えた方がよいと思いますか。

ア. そう思う

イ. ややそう思う

ウ. どちらとも言えない

エ. あまり思わない

オ. まったく思わない

最後に、人と出会った場面について、あなた自身のご意見や行動をお聞きします。
項目ごとに、いくつかの選択肢を挙げますので、ご自身のお考えに最も近いものに
○をつけてください。

1. 「あいさつ」はひとつのたしなみや礼儀だから、「あいさつ」をするのは大事な
ことだ。

ア. まったくその通りだと思う
イ. だいたいその通りだと思う
ウ. この意見については賛成でも反対でもない
エ. あまりそうは思わない
オ. まったくそうは思わない

2. 人と出会ったとき、自分から相手に進んで声をかける。

ア. 常に声をかける イ. 時々声をかける
ウ. あまり声はかけない エ. まったく声をかけない

3. 知っている人が向こうから歩いてきても、気づかないふりをしてすれ違うことが
ありますか？

ある / ない

4. 立ち話をすることがありますか？

ある / ない

5. これから具体的な場면을いくつか挙げていきます。

あなたご自身は、それぞれの場面で、相手に、どのようなことばをかけたり、
身振りをしたりしますか？

以下の例を参考に、ご自由にお書き下さい。

例. 朝、出かけようと家を出たら、親しい友人にばったり会いました。

（ おはようございます / 会釈 / あるいは何もしない
（おはようござりすともいう。） ）

- ①. 朝起きて、いつものように家族のいる居間へ入って行きました。

（
）

- ②. 朝、出かけようと家を出たら、隣の家の人があまたま居ました。

[]

- ③. 仕事場の近くで、お世話になっている上司にちょうど会いました。

学生の方は以下の質問文でお考えください。

(学校の近くで、お世話になっている先輩にちょうど会いました。)

[]

- ④. 休日、家の近くで、顔見知りのおじいさんが歩いてくるのが見えました。

[]

- ⑤. 休日、遊びに行く約束をしていた親しい友人が、車であなたを迎えに来ました。

学生の方は以下の質問文でお考えください。

(休日、遊びに行く約束をしていた親しい友人が、あなたを迎えに来ました。)

[]

◇ご協力ありがとうございました。

お手数ですが、このアンケート用紙は、三つ折の上、封筒に入れてポストにご投函ください。

調査地点	世代	Info. No.
	高 ・ 若	

南三陸地方 方言調査票

〔面接調査〕

ふりがな	
お名前	
	様

データ使用許可確認欄
<p>今回ご教示いただいた内容は、学術的な目的のために、個人の特特定できない状態で使用させていただきますことを、ご了承ください。</p> <p>○ K</p>

東北大学文学部国語学研究室

2007

＜イキナリ、ナゲル、オチルの用法＞

○目的：共通語と同一の形態を持つ方言「イキナリ」「ナゲル」「オチル」の用法の地域的な違いを見る。

1 イキナリ（a）

「非常に暑いなあ」ということを「イキナリ暑いなあ」と言いますか。

- 01.言う 02.昔は言った 03.言わない

2 ナゲル（a）

では、「ナゲル」という言葉の使い方について伺います。

握っていた手をゆるめ、紙くずを足元のゴミ箱に捨てることを「紙くずをナゲル」と言いますか。

- 01.言う 02.昔は言った 03.言わない

3 ナゲル（b）

ガムや梅干の種を口から直接に捨てる場合はどうですか。「ガムや梅干の種をナゲル」と言いますか。

- 01.言う 02.昔は言った 03.言わない

4 ナゲル（c）

賭け事などで無駄にお金を使うことを「お金をナゲル」と言いますか。

- 01.言う 02.昔は言った 03.言わない

《調査者へ》

次の質問をする際は、次のページの【地域と鉄道】を参考にしてください。

5 オチル（a）

ところで、（調査地域名）には、（鉄道名）がありますよね。（鉄道名）のような汽車が駅に到着して、お客が下車することを、（調査地域名）では、汽車からどうすると言いますか？

※ 回答に困っているようだったら、「オチル」で誘導してください。

予想語形： オチル オヂル オリル ゲシャスル

6 オチル (b)

車から降りることは、車からどうすると言いますか？

※ 回答に困っているようだったら、「オチル」で誘導してください。

予想語形： オチル オヂル オリル ゲシャスル

《調査者へ》

5 オチル (a) と **6 オチル (b)** の両方で、
「オチル」「オヂル」が回答されなかった場合は、ここで調査を終わらせてください。

5 オチル (a) と **6 オチル (b)** の両方か一方で、
「オチル」「オヂル」が回答された場合は、**7 オチル (c)** も質問してください。

7 オチル (b)

階段を降りることも、「階段をオチル」（もしくは「オジル」）と言いますか？

01.言う 02.昔は言った 03.言わない

【参考：地域と鉄道】

遠野・足ヶ瀬・洞泉	釜石線
大槌・船越	山田線
釜石	釜石線・三陸鉄道（南リアス線）
吉浜（平田）・唐丹・吉浜・越喜来（三陸）・綾里	三陸鉄道（南リアス線）
大船渡	三陸鉄道（南リアス線）・大船渡線
千厩・折壁・小友・矢作・鹿折・大島・唐桑	大船渡線
気仙沼	大船渡線・気仙沼線
大谷・本吉・歌津・志津川・柳津・前谷地	気仙沼線

＜ 動 詞 の 活 用 （ 命 令 形 ） ＞

◆調査上の注意点

- ・設問(1)～(8)は、「ある」という回答が得られた場合、レ形(設問(7)(8)はロ形)も使うかどうかの確認をする。
- ・命令形に終助詞が付いた場合でも、その命令形を採用してよい。
- ・設問(9)は、設問(1)～(8)で「ある」かつ「はい」と回答された最初の語形1語について、その意味・用法の違いを尋ねる。ない場合は尋ねなくてよい。
- ・設問(10)は、**太字ゴシック**の語形は確認すること。

◆記入上の注意点

- ・話者から得られた回答を○で囲む。
- ・話者が強く迷った後で回答が得られた場合には(?)を付す。
- ・「自分自身は言わないが、地元で聞くことがある」という回答が得られた場合には、「ない」を○で囲んだ上で㊦を付す。
- ・設問(10)で誘導して出てきた語形には○で囲んだ上で㊧を付す。

次に、誰かに対して命令するとき、例えば「はっきりしゃべれ」ということがあると思いますが、ここではその「しゃべれ」の部分を「しゃべろ」などということがあるかどうか、ご自身の使い方についてお尋ねします。

《う行五段動詞命令形：レ形 → ロ形》

- (1)「もごもご言っていないで、はっきりしゃべれ」と言うとき、「しゃべれ」の部分を「しゃべろ」と言うことがありますか。

ある / ない

└─→ 「しゃべれ」も使いますか。 はい / いいえ

- (2)「ボールをこっちに蹴れ」と言うとき、「蹴れ」の部分を「ケロ」と言うことがありますか。

ある / ない

└─→ 「ケレ」も使いますか。 はい / いいえ

- (3)「水が飲みたければ蛇口をひねれ」と言うとき、「ひねれ」の部分を「ヒネロ」と言うことがありますか。

ある / ない

└─→ 「ヒネレ」も使いますか。 はい / いいえ

- (4)「髪が伸びてボサボサだから、髪を切れ」と言うとき、「切れ」の部分を「キロ」と言うことがありますか。

ある / ない

└─→ 「キレ」も使いますか。 はい / いいえ

- (5) 「リンゴぐらい皮のまま丸ごとかじれ」と言うとき、「かじれ」の部分を「カジロ」と言うことがありますか。

ある / ない

→ 「カジレ」も使いますか。 はい / いいえ

- (6) 「友達を裏切れっていうのか」と言うとき、「裏切れ」の部分を「ウラギロ」と言うことがありますか。

ある / ない

→ 「ウラギレ」も使いますか。 はい / いいえ

では、次のような例文ではどうですか。同じようにお聞きします。

《一段動詞命令形：ロ形 → レ形》

- (7) 「もう9時だよ。早く起きろ」と言うとき、「起きろ」の部分を「オキ(ギ)レ」と言うことがありますか。

ある / ない

→ 「オキ(ギ)ロ」も使いますか。 はい / いいえ

- (8) 「もう夜遅いから早く寝ろ」と言うとき、「寝ろ」の部分を「ネレ」と言うことがありますか。

ある / ない

→ 「ネロ」も使いますか。 はい / いいえ

《レ形とロ形の意味・用法の違い》

- (9) [設問1～8でレ形・ロ形とも使うとされた最初の語について]

_____ (レ形：実際の語形) と _____ (ロ形：実際の語形) では何か違いがありますか。 (「レの方が優しい」「ロは誰に対して使う」など)

[_____]

《意向・勧誘形の形態》

- (10) 「一緒に帰ろう」と言うとき、「帰ろう」の部分はなんと言いますか。

1. カエッペ (ケエッペ)
2. カエンベ (ケエンベ)
3. カエロー (ケエロー)
4. カエルベ (ケエルベ)
5. その他

〈 条件表現 〉

○調査上の注意点

- ・使用する語形に○を付すこと。また、他形式を使用する場合、その他の情報については余白に記入すること。
- ・太字ゴシック体 については確認の必要な語形である。〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕のいずれかに○を付すこと。但し、調査員の語形提示によって「言う」と回答がなされた場合は「ユ」（誘導語形）と記入すること。
- ・予想語形について、全て確認する必要はない。但し、よく言う（出てきた）順番はなるべく付記すること。

(1) 今夜8時までに来れば、間に合う。

1. コーバ〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. クレバ、3. コレバ、4. クッド、5. キタラ
6. 他形式の場合→

(2) 春が来れば、花が咲く。

1. コーバ〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. クレバ、3. コレバ、4. クッド、5. キタラ
6. 他形式の場合→

(3) 来るなら、早く来い。

1. クルゴッタラ〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
2. クッドギ〔言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない〕
3. クンダラ、4. クルンダラ、5. クンダレバ、6. クンナラ、7. クルナラ
8. 他形式の場合→

(4) 雨なら、今日の試合は中止だ。

1. アメダゴツタラ [言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない]

2. アメダラ [言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない]

※2. 「言う」場合→ 「アメダラバ」のように「バ」は必要か。

[要／不要／どちらでもよい]

3. アメナラ、4. アメダツタラ

5. 他形式の場合→

(5) 値段が高ければ、誰も買わない。

1. タゲーバ／タゲァバ／タガイバ

[言う／言わないが聞いたことがある／聞いたことがない]

※1. 「言う」場合→ 上記3つのうち、どれに音が近いか、○を付すこと。

2. タガケレバ、3. タガケリヤー、4. タゲード、5. タガイド、6. タガガツタラ

7. 他形式の場合→

<可能表現、テンス・アスペクト類>

場面：家族や親しい友人などとくだけた場面で話すときの言い方を求めてください。

調査法：調査者が「※」の語形を発音して話者に使用の有無を確認しながら、使用語形を特定してください。できるだけ話者にも語形を発音してもらってください。

記入法：回答語形の番号を○で囲んでください。語形は伝統的方言形で、子音 r の脱落形などは用意しませんでした。語中語尾のカ・タ行音は濁音、連母音ナイは融合形ネで示しました。清音・連母音・r の脱落などは、近似する回答語形への加筆でお知らせください。その他の情報は、下線部分などをお願いします。

I. 「書くことができる、できない」などという場合の言い方についてお聞きします。

(1) 状況可能・否定 (GAJ4-183 類似)

「便箋がないから、今は手紙を書くことができないよ」と言うとき、

「書くことができない(よ)」をどのように言いますか。注意：～デキネ・ヤレネは採用しない。

- | | |
|-----------|--------------|
| ※ 1. カガレネ | 4. カゲネ |
| 2. カガラネ | 5. カゲエネ・カゲーネ |
| 3. カガサラネ | |

他. _____

(2) 状況可能・肯定 (GAJ4-174 類似, 177 類似, 181 類似)

「便箋を用意したから、今度は手紙を書くことができるよ」と言うとき、

「書くことができる(よ)」をどのように言いますか。注意：～デキル・ヤレルは採用しない。

- | | |
|-------------|--------------|
| ※ 1. カグノアイー | 5. カガレル |
| ※ 2. カグニイー | 6. カゲル |
| 3. カガル | 7. カゲエル・カゲール |
| 4. カガサル | |

他. _____

(3) 属性可能・肯定 (GAJ4-181)

「この万年筆はインクがよく出るから、すらすら書くことができるよ」と言うとき、

「書くことができる(よ)」をどのように言いますか。注意：～デキル・ヤレルは採用しない。

- | | |
|-------------|--------------|
| ※ 1. カグノアイー | 5. カガレル |
| ※ 2. カグニイー | 6. カゲル |
| ※ 3. カガル | 7. カゲエル・カゲール |
| ※ 4. カガサル | |

他. _____

Ⅱ. 今度は、昔のことや今のことを言う場合の言い方についてお聞きします。

(4) 過去・回想・一人称 (GAJ4-188 類似)

「そういえば私は昔、九十九里浜に行ったなあ」と言うとき、

「(昔) 行った(なあ)」をどのように言いますか。

注意：何度も行ったのではなく、一回の出来事を懐かしく思い出す場合の言い方を求める。

イッタコトアル類は採用しない。

※1. イッタッタ

※2. イッタツケ

3. イッタッタツケ

4. イッタ

5. イッテアッタ

他. _____

(5) 継続相・一人称

「今なにをしているか？」と聞かれて「私は今、あの人へのお礼状を書いている (よ)」と答えるとき、「(今) 書いている(よ)」をどのように言いますか。

注意：「今」の動作を表す語形。

※1. カイデダ・カイツタ

2. カイデダッタ

3. カイデル

他. _____

(6) 反語・未実現 (GAJ5-259)

「そんな大変なこと、誰がやるものか」と言うとき、

「(誰が) やるものか」をどのように言いますか。

注意：「～ツケナ」の使用を確認。「～ツケノ」「～ツケ」などでもよい。

スル類 (1.スルツケナ・スツケナ・スنداツケナ、2.スッカ、3.スルモンカ) でもよい。

※1. ヤルツケナ・ヤツケナ・ヤンダツケナ

2. ヤッカ

3. ヤルモンカ

他. _____

(可能表現、テンス・アスペクト類 以上)

〈 擬 音 語 ・ 擬 態 語 〉

○目的: 生産的なABラABラ型オノマトペの、南三陸地方における分布を確認する。

○調査の流れ

- ①ABラABラ型オノマトペの存在を確認する。
- ②具体的な語形を求め、対応するABAB型の存在を確認する。
- ③ABラABラ型とABAB型を比較して、意味の違いを確認する。(ラ語尾の意味を確認)
- ④ABラABラ型がどの程度用いられているのか、話者の意識を簡単に確認する。

○設問2・3について

設問2・3では、設問1で例示する「ドギラドギラ」「トボラトボラ」しか出てこない場合があります。

その場合は、「ドギラドギラ」「トボラトボラ」を取り上げて進めていただいて構いません。

○変異形ABラCBラの扱いについて

ABラABラ型オノマトペの変異形と思われるABラCBラ型(ABラCDラ型)が出てくる可能性があります。その場合は、ABラABラという形があるのかを確認してください。もし、ABラABラが出てきたら、ABラABラで進めてください。

ABラABラ型が出てこない場合で、「ラ」を取ったABCB型が存在するときは、ABラCBラ型とABCB型を、設問3で比較してください。

○記入について

「※」のある設問は選択式です。当てはまる回答を、○で囲んでください。

《ABラABラ型オノマトペの存在》

1. 「ドギラドギラ」「トボラトボラ」などのように、「ラ」という音が入って繰り返すような言葉を、このあたりでは使いますか。もしくは聞いたことがありますか。

※ 使う / 聞いたことはあるが使わない / 聞いたこともない

〔その他のABラABラ型の例〕

「ドギラドギラ」「トボラトボラ」で反応がない場合、以下の例を使ってみてください。

「バサラバサラ」「ガダラガダラ」「ゴロラゴロラ」「チピラチピラ」
 「ニグラニグラ」「ニコラニコラ」「バダラバダラ」「ガサラガサラ」
 「チカラチカラ」「ツカラツカラ」「パサラパサラ」「モクラモクラ」

「聞いたこともない」の場合、〈擬音語・擬態語〉は終了です。

次の〈「アバ」系感動詞〉に進んでください。

2. 具体的に、どのような言葉を使いますか。もしくは聞いたことがありますか。
 (少なくとも1つ。「ドギラドギラ」「トボラトボラ」だけでも構いません。)
 また、「ラ」を取って、「A B A B」とは言いますか。

具体的な語形 _____ → 対応するA B A B型 ※ あり / なし

具体的な語形 _____ → 対応するA B A B型 ※ あり / なし

具体的な語形 _____ → 対応するA B A B型 ※ あり / なし

3. (対応するA B A B型を持つA B ラ A B ラ型語形をひとつ選んでください。)
 その「A B ラ A B ラ」という言葉と、「A B A B」という言葉は、どのように違いますか。
 (自由回答)

4. その「A B ラ A B ラ」といった、「ラ」という音が入る、くりかえしの言葉は、この地域ではどのくらいよく使うと思いますか。
 ※ よく使うと思う / 時々使う / たまに使う / よくわからない

＜「アバ」系感動詞＞

○調査上の注意点

- ・「アバ」も「バ」も、全ての項目について、「言う」「言わない」を確認すること。

○記入上の注意点

- ・話者から得られた回答を○で囲み、「言う」場合は、実際に使う語形を言ってもらい、それを記入する。その際、こちらで示した語形と正確に一致しなくとも、類似する形態の場合は、話者の回答通りに記入すること。

例. 2. それでは、「アバー」とお尻を伸ばして言うことはありませんか。

{ 言う → 実際に言ってみてください アーバー
 言わない

- ・話者が、「自分は言わないが、この土地の人がそういう言い方をするのを聞いたことがある」という場合には、「言う」を○で囲み、①と付す。また、聞いたまを実際に言ってもらい、その語形を記入する。

例. { ①言う → 実際に言ってみてください バババババ
 言わない

導入 それでは次に、驚いたときの叫び方についてお聞きします。

0. この地方では、驚いたときに、「アバ」とか、「バツ」とかいった声を上げると聞きますが、ご自身でも、驚いたときそのようにおっしゃいますか？ 言うとしたら、「アバ」と言いますか？それとも「バツ」と言いますか？【基本形の確認（語頭音の有無）】

- ・「アバ」と言う → 「A. アバ類」から順に調査。
- ・「バツ」と言う → 「B. バ類」→ 「A. アバ類」→ 「C. その他類」の順に調査。
- ・両方言う → 「A. アバ類」から順に調査。

※この0. の質問の回答は1. ないし8. にそれぞれ記入。

.....*

A. アバ類

1. 驚いたときに、「アバ」とは言いませんか。【基本形（語頭音あり）】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

2. それでは、「アバー」とお尻を伸ばして言うことはありませんか。【長音化】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
言わない

3. それでは、「アババババ」と「バ」を何回か重ねて言うことはありませんか。【重音化】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
言わない

4. それでは、「アバーレ」とか「アバーラ」とか言いませんか。【指示詞の付加（アレ）】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
言わない

5. それでは、「アバコレ」とか、「アバコラ」とか言いませんか。【指示詞の付加（コレ）】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
言わない

6. それでは、「アバヤ」とは言いませんか。【終助詞の付加】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
言わない

7. それでは、「アバ」ではなくて、「アパ」となることはありませんか。「アパパパパ」とか「アパーレ」とか言いませんか。【b - p 交替】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
言わない

B. バ類

8. それでは、「アバ」ではなく、「バッ」とは言いませんか。【基本形（語頭音なし）】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

9. それでは、「バー」とお尻を伸ばして言うことはありませんか。【長音化】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

10. それでは、「バババババ」と「バ」を何回か重ねて言うことはありませんか。【重音化】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

11. それでは、「バーレ」とか「バーラ」とか言いませんか。【指示詞の付加（アレ）】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

12. それでは、「バッコレ」とか、「バッコラ」とか言いませんか。【指示詞の付加（コレ）】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

13. それでは、「バヤ」とは言いませんか。【終助詞の付加】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
 言わない

14. それでは、「バッ」ではなくて、「パッ」となることはありませんか。「パパパパパ」とか「バッパッパッ」とか言いませんか。【b - p 交替】

{ 言う → 実際に言ってみてください。
{ 言わない

C. その他類

15. 以上の「アバ」とか「パッ」とかいう言い方で、ほかに似たような言い方はありませんでしょうか。思いつくものを挙げてみてください。【類似形態の存在】

＜ 言 語 行 動（ あ い さ つ ）＞

○目的 出会い時の言語行動の地域差を明らかにする。

○質問手順

- ・「質問」→ 「する」 → 「する」に○ → 自由回答問題に進む。
→ 「しない」 → 「しない」に○ → 次の場面の問いに進む。
- ・インフォーマントが「相手」を想定しづらい場合は、[] 内の具体的な相手を呈示する。
- ・自由回答形式の設問は 2つ以上 回答が出たら次に進む。
ひとつしか出ない場合は「他にはありませんか？」と他形式の有無を聞く。

導入これから、いくつかの場面について、あなたご自身がどんなことばをかけたり、行動をするかをお尋ねします。

A. まずは家族と朝会ったときのことをお聞きします。【家族】

- (1) 朝起きて、いつものように家族のいる居間へ入って行きました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？

する
／
しない

どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

B. 次に朝、道端で知っている人に会ったときのことをお聞きします。【既知関係】

- (2) 朝、道端で、最も目上の人に会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？[学生時代の恩師・上司]

する
／
しない

どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

- (3) 朝、道端で、対等よりやや目上の人に会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？[子供の先生]

する
／
しない

どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

- (4) 朝、道端で、同年代の親しい人に会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？ [友人]

する / しない



どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

- (5) 朝、道端で、顔見知り程度の同年代の知人に会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？ [配偶者の友人・近所の人]

する / しない



どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

- (6) 朝、道端で、目下のものに会いました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？ [学生時代の後輩]

する / しない



どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

C. 最後に知らない人と会ったときのことをお聞きます。【未知関係】

- (7) 朝、道端で、見知らぬ人が通りかかりました。あなたご自身は、相手に、何かことばをかける、ないしは身振りをしたりしますか？

する / しない



どのようなことばをかけたり、行動をしますか？思いつくかぎりお教えてください。

＜寝かせつけの言語行動＞

目的

子守歌にみられる「おどし」「甘やかし」と、実際の育児場面での言語行動と、共通するものが見出せるのか調査したい。①寝かせつける場面に限定した質問と、②子どもの行動を統制するという場面全般においての質問を設定した。質問項目は、昨年の気仙沼多人数調査と同様である。

調査項目

☆では、子どもに言うことを聞かせようとするときに、どんなふう言うかお聞きします。

※ たとえば、だだをこねてなかなか言う事を聞かない4・5歳くらいの子どもに、言う事を聞かせようとする場面を想像してください。(②の場面)

1. 子どもに言う事を聞かせようとするときに、何か子どもを怖がらせておどかすような表現を使ったこと／聞いたことがありますか？

例:「言う事聞かないと、モー(お化け)来っつお」「静かにしないと人さらいがくるよ」

2. 子どもに言う事を聞かせようとするときに、「褒美をやるから言う事を聞いて」というように、子どもにとって良いものを約束するような表現を使ったこと／聞いたことはありますか？

例:「いい子にしたら、お祭りに連れてくよ」「〇〇あげるから静かにしなさい」など

※今度はあなたが子どもを寝かせようとしています。なかなか寝ない4・5歳くらいの子どもを寝かせようとする場面を想像してください。(①の場面)

3. 寝ない子どもを寝かせようとするときに、何かおどすような文句を言って子供を怖がらせるような表現を使ったこと／聞いたことはありますか？

例:「いつまでも寝ねえと、モー(お化け)来つつお」など

4. では逆に、寝ない子どもを寝かせようとするときに、子どもに「褒美をやるから早く寝ろ」というように、子どもにとって良いものを約束するような表現を使ったこと／聞いた事がありますか？

例:「〇〇をあげるから早く寝ろ」「寝れば〇〇に連れて行くよ」

5. 実際の育児場面において、言うことを聞かない子どもを大人しく静かにさせる場合に、「寝ないとお化けが来るから(早く寝なさい)」というようにおどす表現と、「いい子だから(静かにしなさい)」「寝たらお菓子をあげるから(早く寝なさい)」というように甘やかす表現とでは、どちらが子どもにとってより効果的だと思うか。(どちらかに○)

・甘やかす表現

・おどす表現

＜外来語の方言(浜言葉)＞

調查目的

2006 年度の方言調査をもとに、専門性の高い外来語の方言（浜言葉）の地理的な使用範囲と語彙の意味変化について、詳しく調べ、記述することを目的とする。

調査上の注意点

- ・ 当てはまるところに○をつけてください。
- ・ 「言わない」と答えた人には、再度「聞いたことはありますか」と聞いてください。
- ・ その言葉が別の意味で使うことはあるかどうか（⇒の部分）についても質問してください。

漁業関連用語について伺います。これから言う言葉について、教えてください。

1. 「レグジー」と言う言葉についてお聞きします。船で錨いかりを入れる時にかけるかけ声で「レグジー」と言いますか。
- ア) 聞いたことがない
イ) 自分では言わないが、聞いたことがある
ウ) 言う
- ⇒ 「捨てる」という意味で、使うことはありますか。
- ある ない
2. 「ホスピー」と言う言葉についてお聞きします。船が全速力で進むことを「ホスピー」と言いますか。
- ア) 聞いたことがない
イ) 自分では言わないが、聞いたことがある
ウ) 言う
- ⇒ 「急ぐ」または「車や自転車などが走る」のどちらかの意味で、使うことはありますか。
- ある ない
3. 「チョッサー」と言う言葉についてお聞きしますが、一等航海士のことを「チョッサー」と言いますか。
- ア) 聞いたことがない
イ) 自分では言わないが、聞いたことがある
ウ) 言う
- ⇒ 「社長」または「店長」のどちらかの意味で、使うことはありますか。
- ある ない

4. 「フライキ」と言う言葉についてお聞きします。漁船の大漁旗のことを「フライキ」と言いますか。

ア) 聞いたことがない

イ) 自分では言わないが、聞いたことがある

ウ) 言う

⇒ 一般的な「旗」または「駅員が携行する赤の手旗」のどちらかの意味で、使うことはありますか。

ある

ない

5. 「ゴスタン」と言う言葉についてお聞きします。船の後部のことを「ゴスタン」と言いますか。

ア) 聞いたことがない

イ) 自分では言わないが、聞いたことがある

ウ) 言う

⇒ 「後進」ないし「交代する」のどちらかの意味で、使うことはありますか。

ある

ない

6. 「ゴーヘイ」と言う言葉についてお聞きします。船の前部のことを「ゴーヘイ」と言いますか。

ア) 聞いたことがない

イ) 自分では言わないが、聞いたことがある

ウ) 言う

⇒ 「前進」の意味で、使うことはありますか。

ある

ない

7. 「アカ」と言う言葉についてお聞きします。船の底に水を溜めておくところの水を「アカ」と言いますか。

ア) 聞いたことがない

イ) 自分では言わないが、聞いたことがある

ウ) 言う

⇒ 「飲料水」の意味で、使うことはありますか。

ある

ない

8. いま、お聞きした言葉の中で、一番外来語らしく思うのはどれですか。

- | | | | |
|---------|---------|----------|---------|
| 1) レッゴー | 2) ホスピー | 3) チョッサー | 4) フライキ |
| 5) ゴスタン | 6) ゴーヘイ | 7) アカ | |

〈音 韻〉

注意事項

1. 家族や友人と話すようなくつろいだ場面での発音を意識してもらう。改まった発音であると感じられた場合は、「自然な調子でもういちど…」などのように促す。
2. 各項目とも最低2回ずつ発音してもらう。声の重なりや不自然な発音があった場合は再度発音を求める。
3. 発音の内省は“ある・聞く・ない”の三択で尋ね、いずれかに○を付す。「ある」という回答がなされ、なおかつその段階で問題とされる発音が得られていない場合には、必ず話者本人にその発音を行ってもらう。

1. 【イとエ】

「息」 口からハァーっと吐くものを何と言いますか？

「駅」 電車が止まる場所を停車場ではなく、他に何と言いますか？

2. 【シとス】

「梨」 秋になる果物で、二十世紀とか豊水の種類があるものを何と言いますか。りんごではなくで・・・。

「茄子」 畑になるへたのついた紫色の野菜を何と言いますか。きゅうりではなくて・・・

3. 【連母音の融合】

「蠅」 ぶーんと飛ぶ虫で残飯などの汚いものにたかるものを何と言いますか？
幼虫は「蛆」と呼ばれます。

「高い」 低いの反対は何ですか？

「塀」 家や敷地の周りにあるかこいを垣根ではなく他に何と言いますか？

「細い」 太いの反対は何ですか？

4. 【口蓋化】

「北」 東の反対は西ですが、南の反対は？

5. 【有声化】

「開ける」 戸をこうする（動作）ことを何と言いますか？閉めるの反対。

「挙げる」 手をこうする（動作）ことを何と言いますか？

「旗」 日の丸や国旗のことを何と言いますか？～を振る…。

「肌」 人間の皮膚のことを何と言いますか？～が荒れる。餅～。

6. 【拍音素】

「学校」 主に子どもが勉強のため通う所を何と言いますか？小〇〇とか中〇〇
などがあります？

「新聞」 毎日のニュースを伝えるもので、朝家庭のポストに入れられるものを
何と言いますか？

7. 【ヒョとショ】

「二升」 時間を数えるときは、一時間、二時間、三時間ですが、醤油やお酒の場
合、一升、その次は？

→／ニヒョー／となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

「二俵」 続いて、昔のお米の単位ですが、一俵の次は何と言いますか？

→／ニショー／となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

今おうかがいした「お酒」と「お米」の数え方は、文字で書くと違いますが、ふだん
は区別しておっしゃいますか、それとも同じようにおっしゃいますか。地域や人によ
ってもちがうようですが、ご自身ではいかがでしょうか。

(区別しない ・ 区別する)

8. 【キョとチョ】

「今日」 ー昨日、昨日、その次の日は何と言いますか。

→ / チョー / となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

「腸」 胃袋の下についている細長い内臓を何と言いますか？

→ / キョー / となることは？

(ある _____ ・ 聞く ・ ない)

今おうかがいした二つは、文字で書くと違いますが、ふだんは区別しておっしゃいますか、それとも同じようにおっしゃいますか。地域や人によってもちがうようですが、ご自身ではいかがでしょうか。

(区別しない ・ 区別する)

<アクセント>

調査のねらい

論点1：北奥式アクセントか、南奥特殊アクセントか（1～9, 14・15）

＝南奥特殊アクセントは、第1音節にのぼり核の語のない体系だが、その現状や北奥式との境界を見出す。

論点2：北奥式地域における、内陸低平調地域か、太平洋沿岸重起伏調地帯か（10～13）

＝北奥式アクセントの無核語は、内陸は低平調、太平洋沿岸部は重起伏調だが、その現状や境界を見出す。

※例文の後は（予想回答実現音調例>>これら以外の回答もあり得る；「/」は各項目の論点による区分）

調査の注意

①調査例文を話者に見せて口上を述べつつ、当該方言に反省的に翻訳して発音していただく方式で行う。

②話者の発音については、調査者が必ず復唱的発音をして話者の確認を得ることを励行する。

③票中の第1基本節部のカタカナは調査時に、話者の回答音声に合わせて修正し、第2基本節部の.....には回答形式を記録しつつ、全文にわたって反省的実現音調を、「線」により記録する。なお、カタカナの斜体（グなど）はカ行音濁音化が、ひらがなは鼻濁音が、それぞれ予想される音だが、必要があれば調査時に修正する。

1 鯨。 鯨も食いたいよ。 (●○○△ ●◎○△ ●●●▲ / ○●○△ ○○○△)

クズィラ クズィラモ.....

2 雀。 雀も飛んでたよ。 (●○○△ ●◎○△ ●●●▲ / ○●○△ ○○○△)

スズメ スズメモ.....

3 鳥。 鳥も飛んでたよ。 (●○○△ ●◎○△ ●●●▲ / ○●○△ ○○○△)

カラス カラスモ.....

4 啄木。 啄木も好きだよ。 (●○○○△ ●◎◎○△ ●●●●▲ / ○●○○△ ○○○○△)

タグボグ タグボグモ.....

5 松茸。 松茸も美味しいよ。 (●○○○△ ●◎◎○△ ●●●●▲ / ○●○○△ ○○○○△)

マズダゲ マズダグモ.....

6 針。 針も折れたよ。 (●○△ ●◎△ ●●▲ / ○●△ ○○△)

ハリハリモ.....

7 跡。 跡もないよ。 (●○△ ●◎△ / ○●△ ○○△)

アド アドモ.....

8 猿。 猿もいたよ。 (●○△ ●◎△ ●●▲ / ○●△ ○○△)

サル サルモ.....

9 陰。 陰も長いよ。 (●○△ ●◎△ / ○●△ ○○△)

カゲ カゲモ.....

== ==

10 魚。 魚も美味しいよ。 (○○○△ / ●●○▲)

サガナ サガナモ.....

11 車。 車も速いよ。 (○○○△ / ●●○▲)

クルマ クルマモ.....

12 水。 水も美味しいよ。 (○○△ / ●○▲)

ミズ ミズモ.....

13 寺。 寺も建ったよ。 (○○△ / ●○▲)

テラ テラモ.....

14 山田。 山田も寒いよ。 (●○○△ ●◎○△ / ○●○△ ○○○△)

ヤマダ ヤマダモ.....

15 大槌。 大槌も寒いよ。 (●○○△ ●◎○△ / ○●○△ ○○○△)

オーツジ オーツジモ.....

アクセント関連音声メモ （調査中に聴き取った範囲で簡潔に報告）

i 音と u 音..... (例：クジラ or クズィラ オーツジ or オーツズィ)

前鼻音..... (例：クズィラ or クッズィラ ミズ or ミッズ)

語中語尾カ行音タ行音の濁音化.....

(例：タクボク or タグボグ マツタケ or マズダゲ オーツチ or オーツジ or オーズィジ)

長音の安定度..... (例：オーツジ or オーズィジ or オズジ)

文化庁委託事業報告書
東日本大震災において危機的な状況が危惧される
方言の実態に関する予備調査研究

2012 年（平成 24 年）3 月 8 日 印刷

2012 年（平成 24 年）3 月 11 日 発行

編者 東北大学方言研究センター
発行所 東北大学大学院文学研究科国語学研究室
〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 TEL 022(795)5987
